

273-40



1200501357642

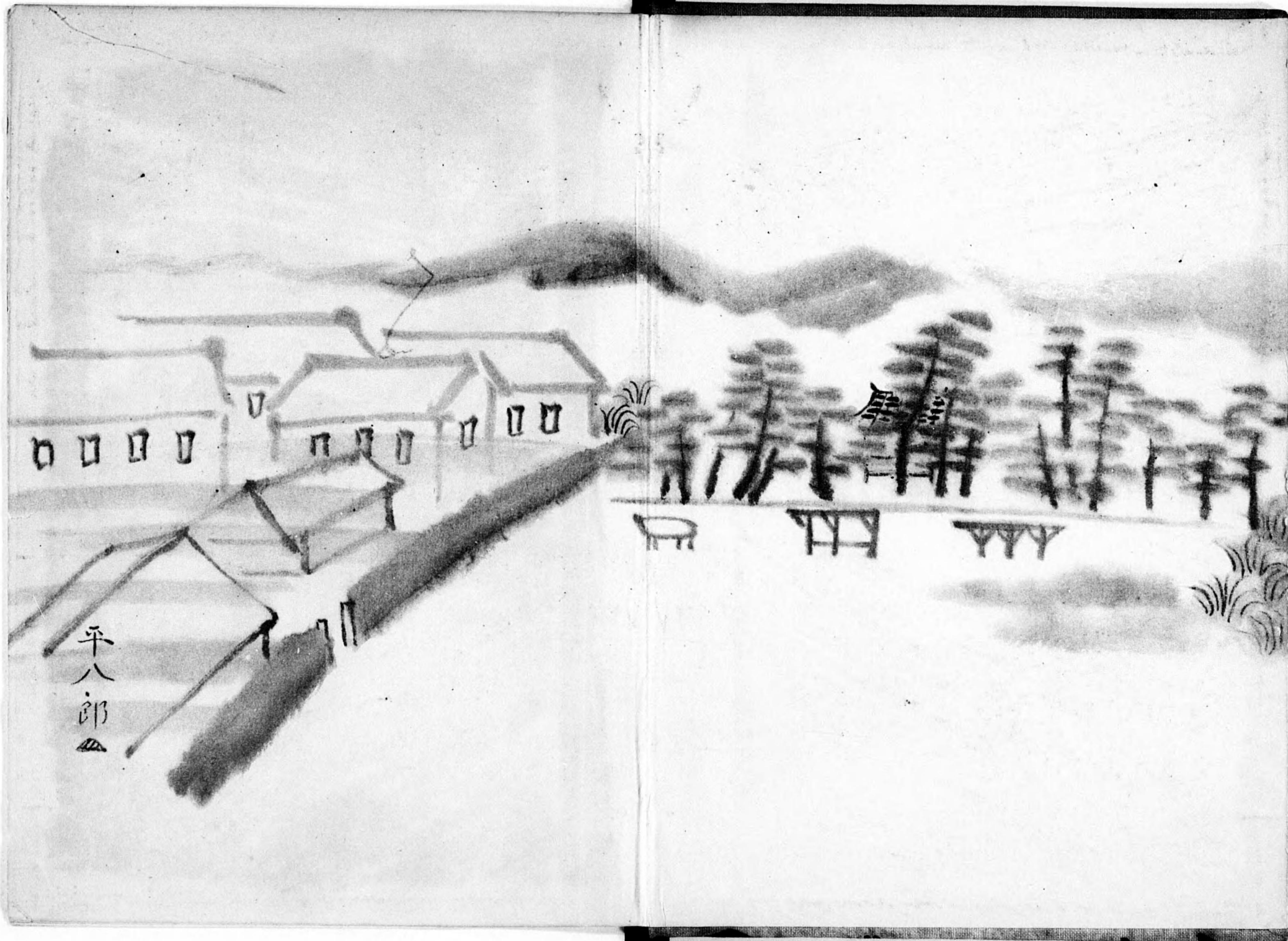
73

40



始





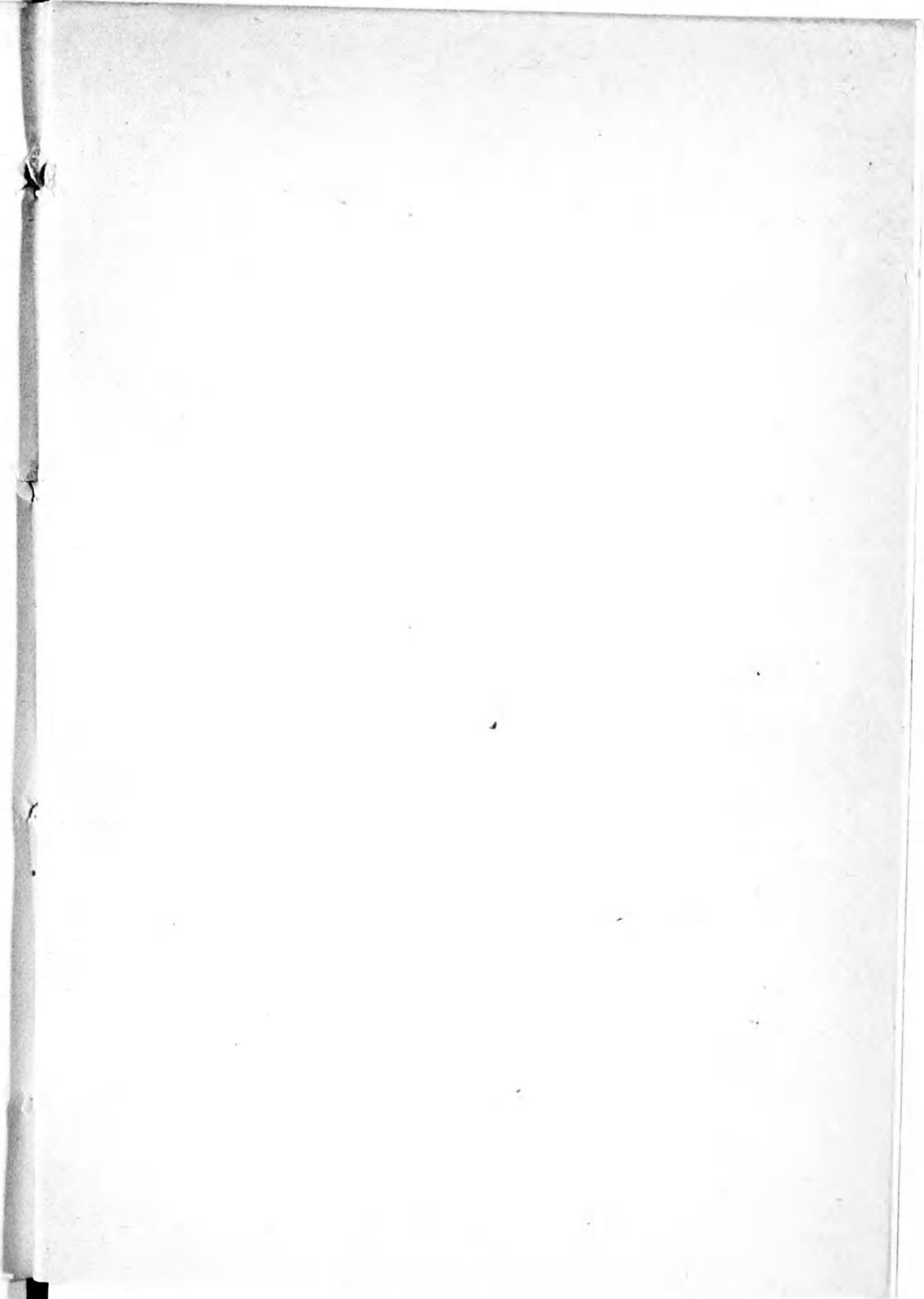
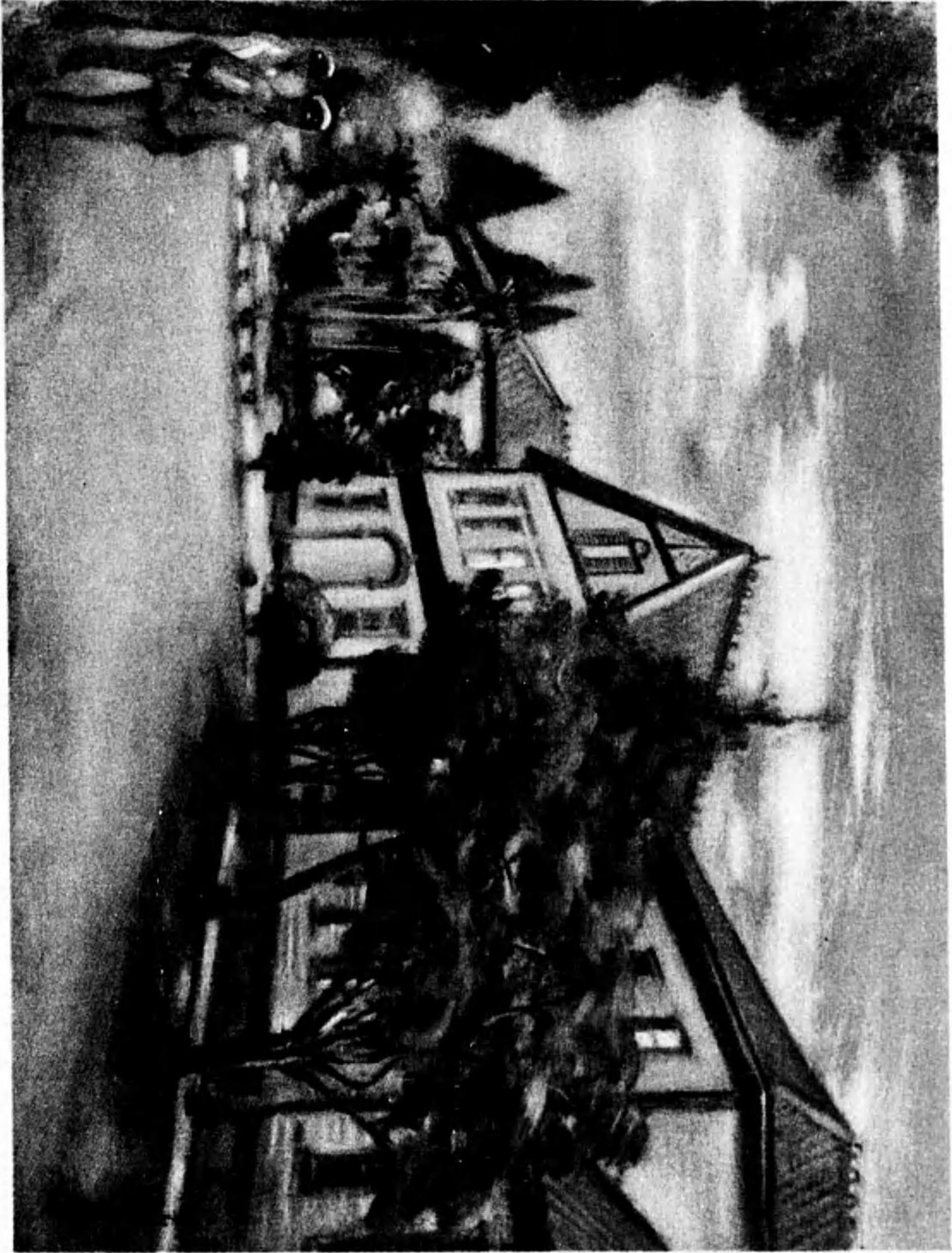
平八郎



創立五十周年

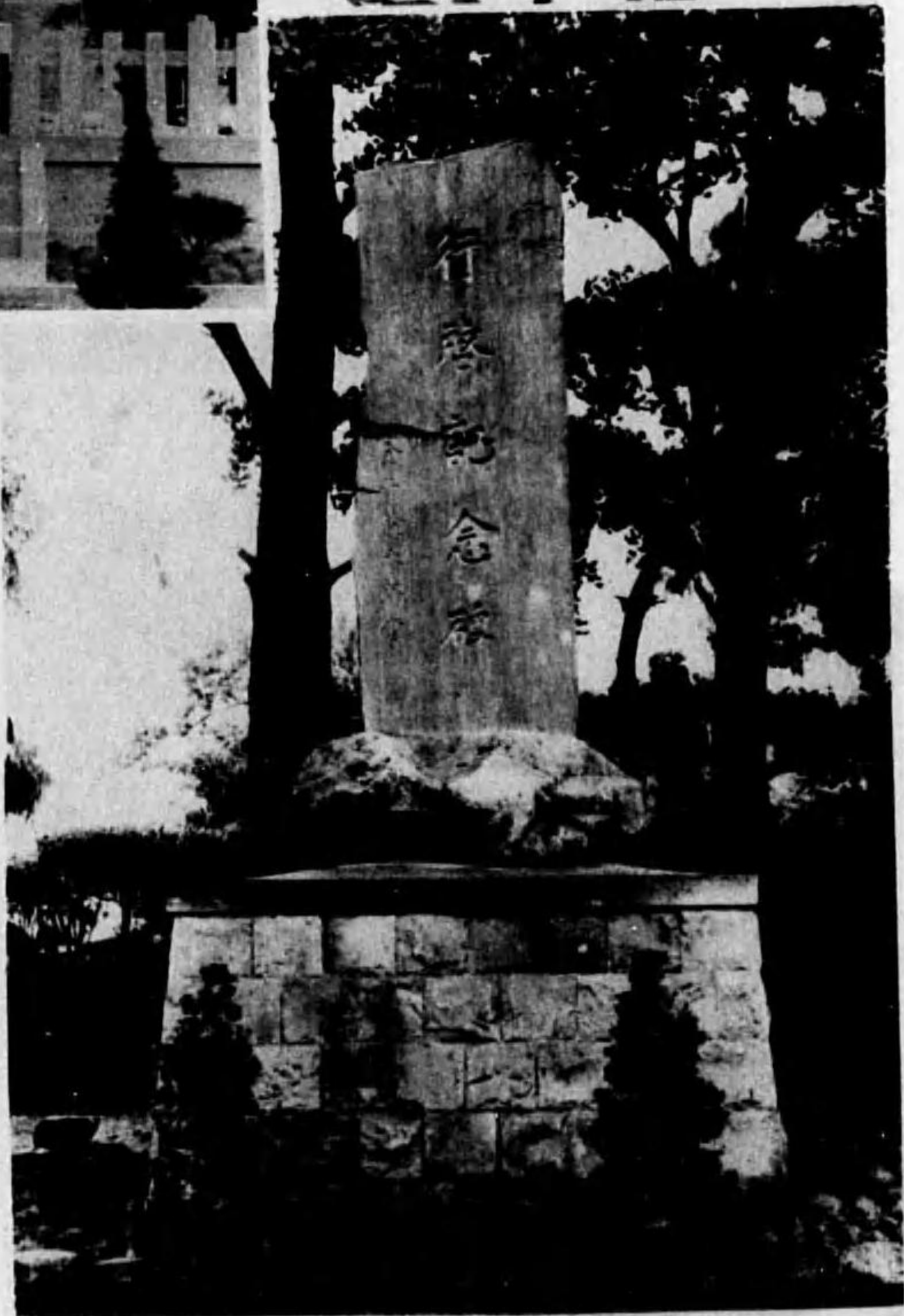
大分縣立大分中學校







奉安殿



行啓記念碑





大分中學校舎全景



荷揚町時代の中大校舎

初代 村上田長先生

二代 鎌田榮吉先生

三代 衣斐鉸太郎先生

四代 伊達行平先生

五代 金子銓太郎先生

六代 武田安之助先生

七代 津田純一先生

八代 安部志摩治先生

(一) 長 校 代 歷



六升 海田安太郎氏

十升 野田勝一氏

八升 安藤志彌氏

四升 田島清平氏

五升 金子義太郎氏

一升 清水田長夫氏

二升 難田榮吉氏

三升 安藤義太郎氏



九代 小野寺精一 先生

十代 柴山槐 先生

十一代 池上庄治 先生

十二代 裏川寅藏 先生

十三代 津田清三 先生

十四代 豊永省三 先生

十五代 富野榮三 先生

十六代 武智啓次 先生

(二) 長 校 代 歷



十四外 豊永香三氏

十五外 富裡榮三氏

十六外 坂曾啓次氏

十二外 真川寛藤氏

十三外 折田壽三氏

式外 小嶋幸壽一氏

十外 柴山對彌氏

十一外 新土圭密彌氏



式念記年周十五立創



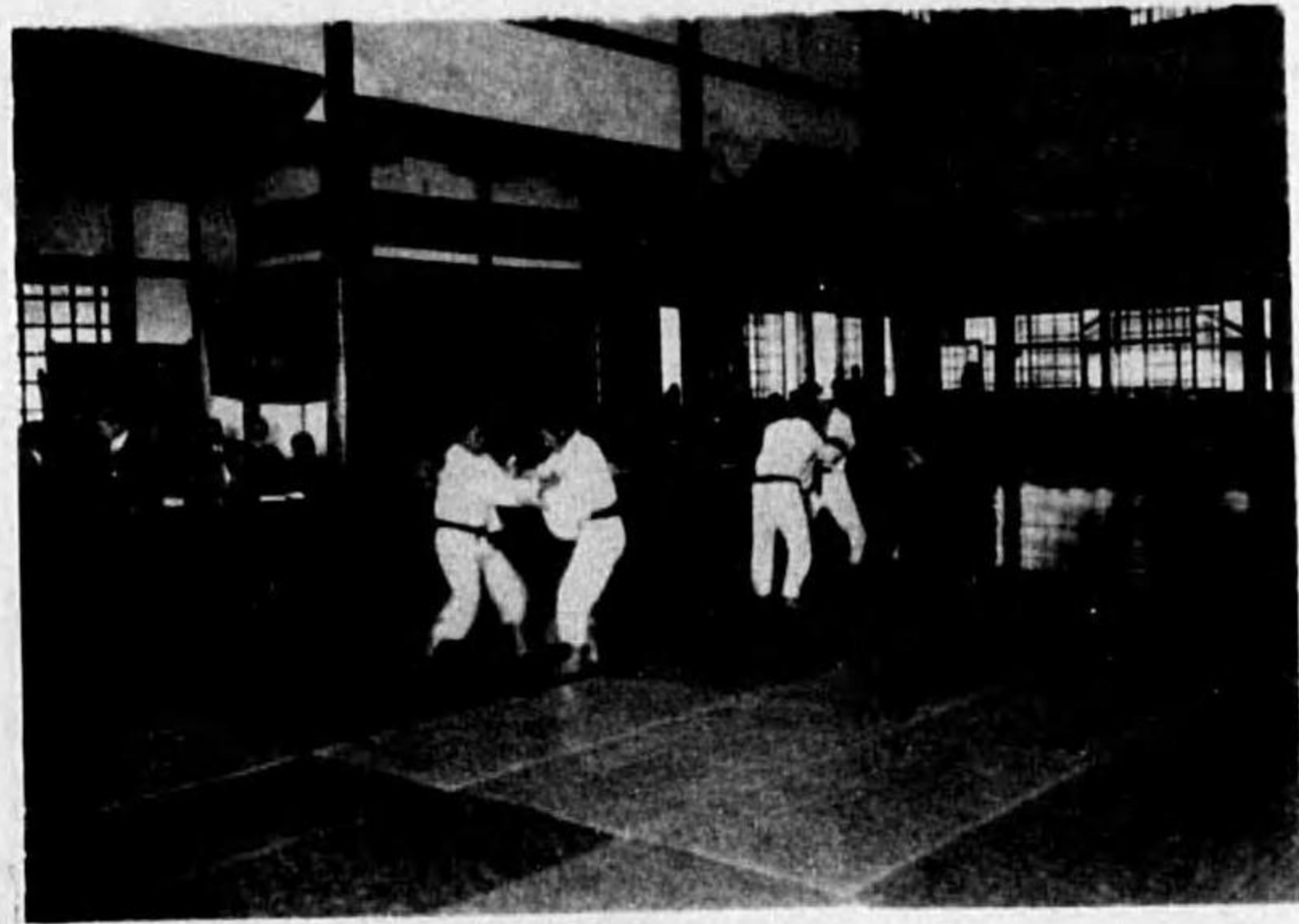
場會賀祝同



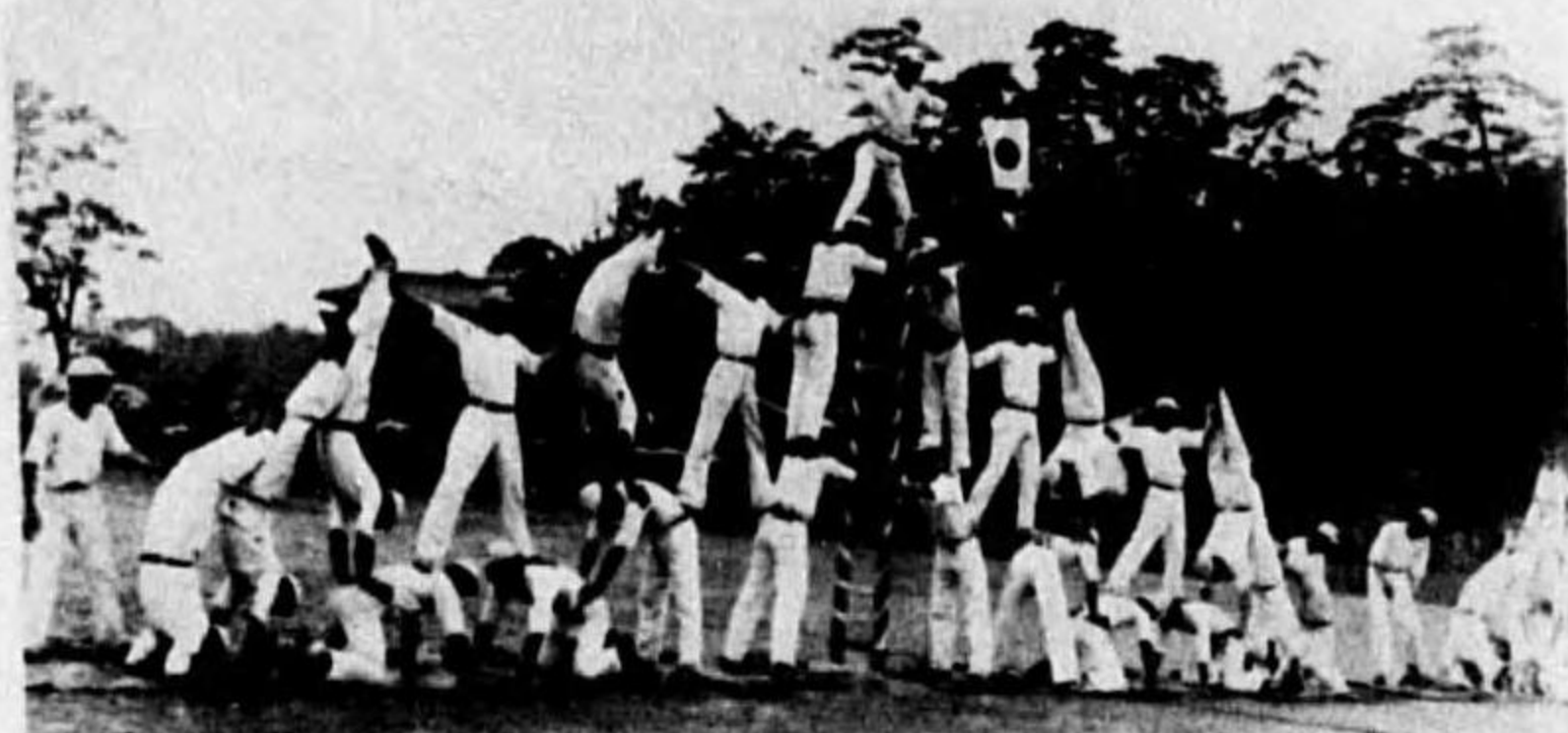
祭靈慰生窓同員職故物



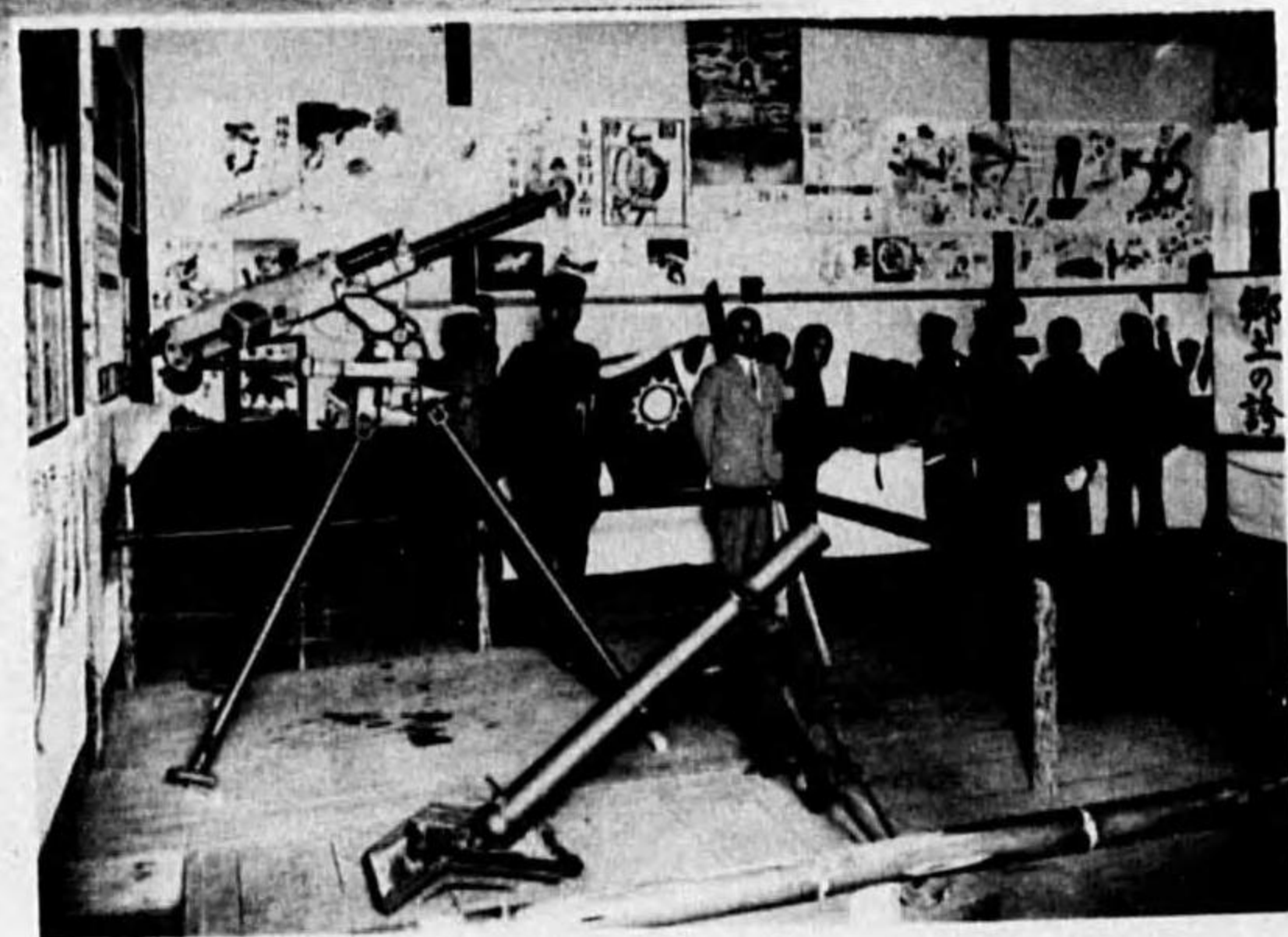
者彰表人備員職續勤



會大道武



會動運



(部一の會覽展念記)室防國



地 理 歷 史 室



理 科 化 學 室

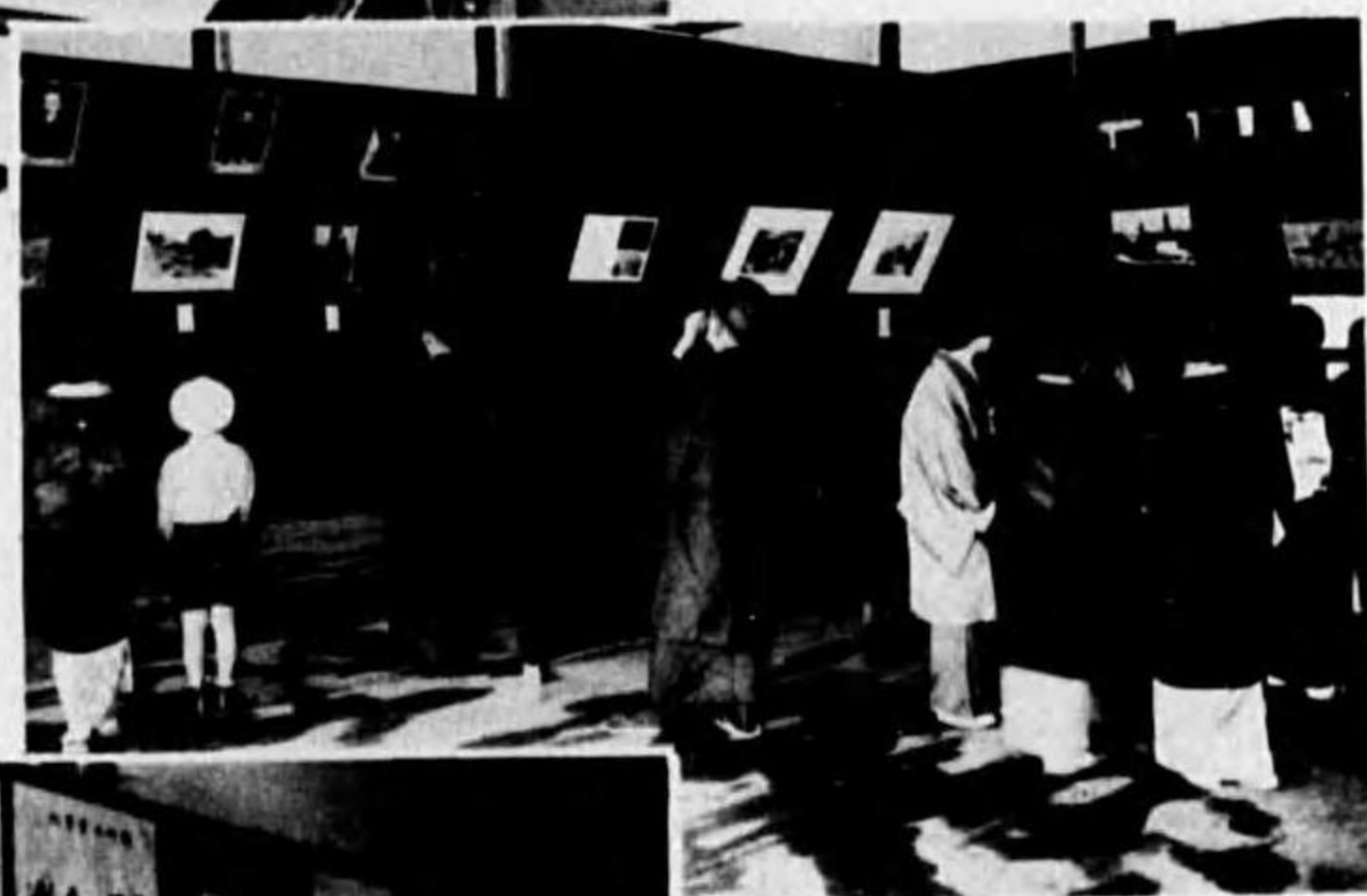


圖 畫 室



習 字 室

273-40

次 目

一、卷 頭 言	(一)
一、大分縣立大分中學校沿革略誌	(一)
一、大分中學校古簡雜抄	(三)
一、創立五十周年記念式	(三)
一、記念講演會	(五)
一、寄 稿	(九)
一、思ひ出五十年	(三)
一、學校を描く	(六)
一、大中の野球史	(六七)
一、陸上競技の展望	(九四)
一、藝 園 雜 抄	(一〇二)
一、學 級 日 誌 (山田小太郎先生手記)	(一三三)
一、碩 田 詞 藻	(一四〇)
一、雁 信 一 箋	(一五九)

## 卷 頭 言

世の常の習慣では早いのは十周年記念から二十五周年三十周年と今までに數回記念式典もやり記念誌の發行も見たことであらう。我大中の行き方は少し異つてゐて五十年にして初めて記念式典を擧げ、従つて初めて創立五十周年を此度上梓したやうな譯である。待望の久しき、且つ今回の式典の意義が深かつた事は、われ人共に認むる所であらう。

今や我校は卒業生を出すこと三千八百三十四名、その社會各方面に活躍してゐる事は洵に素晴しいものがある。然し忌憚なく言へば母校は現在活躍してゐる者よりも何倍かの偉材を輩出してゐる事と思ふ。恰も明治の元勳は凡そ第二流の人物であつて最もすぐれた者は世に合はず時に遇はずして維新の捨石となり了つてゐる如く幾多の俊敏野に埋れて世が世ならばの嘆をのこし、或は廟に起ち或は三軍を叱咤すべかりしを不幸中道にして倒れし者も多々あるであらう。亡き人を憶ふの情を只感傷と言ふ勿れ、我等は亡き人の世に爲すべかりし分を負擔すべきである、か



くて生ある者の責任は一層重き譯である。

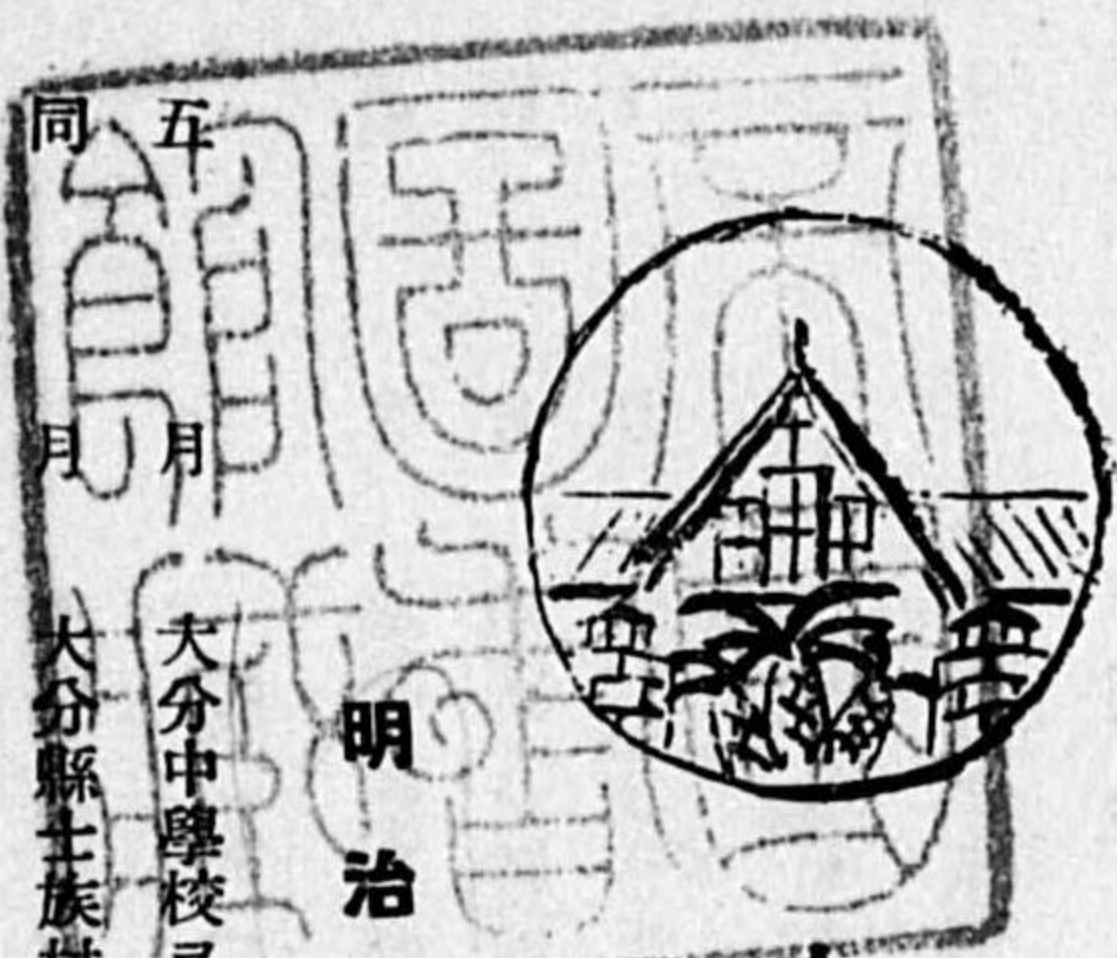
時勢の進運に伴ひ新しいものが舊いものに代るのは天地間を貫いてゐる嚴やかな方則であつて人間の微力はこれをとゞめる術を有たぬ。只人間の情は新しいものを取入れると共に古いものへの強い執着がある。所謂必要なもの——功利的に考へて——だけを残しておくならば空間は廣過ぎる憾みがある。五十周年記念に同窓生の企畫してゐる記念館が出来上れば我等が無限に心牽かれる精神的遺産をこゝに保存し、所謂必要なもの以上の必要なもの、湮滅を防ぐには絶好の場所となるであらう。

本誌を編纂するに當つて最も困難を感じたのは五十年の沿革資料を集むる事であつた。幸ひ縣文書課の特別なる御取計ひと委員の御骨折とによつて略々正確なる記録を得た事は感謝に堪へぬ所である。尙各期の同窓生が貴重なる玉稿を寄せられしに對し深甚の謝意を表すると共に本誌が同窓生各位にとりては各位の記念誌となり在校生には校風發祥の眞意を把握する契機たらん事を切望して巻頭に題する次第である。

武智啓次郎識

# 創立五十周年

## 大分縣立大分中學校沿革略誌



明治十八年

五月 大分中學校ヲ大分郡大分町字荷揚町ニ設置ス。

同月 大分縣土族村上田長校長ニ任セラル。

同月 本校規則ヲ定ム。

六月四日 生徒七十名ノ入學ヲ許可ス。

六月五日 開校式ヲ學グ。

九月 學校長村上田長大分縣尋常師範學校校長兼大分中學校長ニ任セラル。當時ニアリテハ授業料ヲ徴收セズ、教科書ハ盡ク貸與セリ。

九月七日 生徒三十三名入學ヲ許可ス。

明治十九年

四月 學校長村上田長大分縣玖珠郡長ニ轉任ス。  
 九月 和歌山縣士族鎌田榮吉大分中學校長兼一等教諭ニ任セラル。  
 十月 寄宿舎一棟ヲ増築ス。  
 同月 大分縣尋常中學校ト改稱ス。

明治二十年

六月 學校長鎌田榮吉大分縣尋常師範學校長ニ轉任ス。

明治二十一年

三月 高知縣士族衣斐鉸太郎學校長ニ任セラル。  
 四月 兩陛下ノ御眞影ヲ拜戴ス。  
 十二月 大分縣尋常中學校職員制服ヲ定ム。

明治二十二年

七月 第一回卒業生三名ヲ出ス。

明治二十三年

三月 學校長衣斐鉸太郎辭職ス。  
 四月 本校囑託教授川本清一學校長事務代理ヲ命セラル。

六月 生徒五〇名募集ス志願者一二〇名ナリ。  
 七月 廣嶋縣平民伊達行平學校長ニ任セラル。  
 十一月 勅語謄本ヲ拜戴ス。

明治二十五年

六月 生徒一〇〇名募集ス志願者一七六名ナリ。

明治二十六年

五月 學校長伊達行平德島縣尋常中學校ニ轉任シ大分縣尋常師範學校長小野楨一郎學校長事務取扱ヲ命セラル。  
 同月 大分縣士族金子銓太郎學校長ニ任セラル。

明治二十七年

三月 本校分校ヲ下毛郡中津町ニ設置ス。  
 當時ニアリテハ授業料年額四圓ナリ。  
 從前ノ寄宿請負制度ヲ自炊制度ニ改ム。  
 四月 大分郡豐府村字律院ニ新築セシ校舍落成ニ付キ移轉ス。  
 六月 敷地五千六百六十五坪ナリ内六百五十一坪ハ小野吉彦氏ノ寄附ニ屬ス。  
 九月 學校長金子銓太郎陸軍召集ニ應ジ休職トナリ教諭西村謙三學校長事務取扱ヲ命セラル。  
 十月 西村謙三學校長事務取扱ヲ辭シ教諭尾田信直學校長事務取扱ヲ命セラル。

三月 廣嶋縣平民武田安之助學校長ニ任セラル。

生徒一〇〇名募集ス志願者二六八名ナリ。

明治二十九年

一月 大分縣尋常中學校及中津分校々訓ヲ定ム。

生徒一〇〇名募集ス志願者二六五名ナリ。

明治三十年

一月 學校長武田安之助

皇太后陛下御大喪奉送ノタメ京都府ニ派遣セラル。

四月 大分縣大分尋常中學校ト改稱シ中津分校ヲ大分縣中津尋常中學校ト改稱ス。

同 速見郡杵築町ニ大分縣大分尋常中學校杵築分校ヲ北海道郡白杵町ニ同白杵分校ヲ、直入郡竹田町ニ同竹田分校ヲ設置ス。

同 校旗ヲ制定ス。

明治三十一年

三月 生徒控所一棟ヲ増築シ水源涵養ノタメ大分郡豐府村官有山林壹反三畝九步ヲ購入ス

四月 大分郡豐府村官有山林壹反四畝十四步ヲ購入ス。

學校長武田安之助辭職シ教諭印牧順作學校長事務取扱ヲ命セラル。

八月

九月 大分縣土族津田純一學校長ニ任セラル。

銃器庫一棟ヲ建築ス。

明治三十二年

四月 大分縣大分尋常中學校杵築分校同白杵分校同竹田分校孰レモ新築校舍落成ニ付移轉ス。

同 大分縣大分尋常中學校杵築分校、同白杵分校、同竹田分校。

兩陛下ノ御眞影ヲ拜戴ス。

生徒服制ヲ改ム。

青ノ袖章及袴條章ヲ廢シ、帽ニ青色紐三條ヲ卷キ、上衣ダルマ型七ツ釦、黒ノ袖章ヲ入ル、コト、ス。

明治三十三年

三月 大分縣大分尋常中學校杵築分校ヲ大分縣杵築尋常中學校、同白杵分校ヲ大分縣白杵尋常中學校、同竹田分校ヲ大分縣竹田尋常中學校ト改稱ス。

同 本校定員ヲ改定シ五百名トス。

明治三十四年

二月 本校體操場用地二千九百九十坪ヲ購入ス。

九月 本校ヲ大分縣立大分中學校ト改稱ス。

明治三十五年

四月 補習科ヲ設置ス。

當時ニアリテハ授業料管内生八月額一圓、管外生ハ一圓五十錢ナリ。

明治三十六年

本校附屬地ノ隧道及土管敷設工事成ル。

明治三十八年

文部大臣久保田讓臨校セラル。

明治三十九年

學校長津田純一辭職シ教諭都崎發太郎學校長事務取扱ヲ命セラル。  
大分縣立宇佐中學校長安倍志摩治學校長ニ任セラル。

明治四十年

三月 陸軍大臣ヨリ戰利兵器ノ頒布ヲ受ク。  
十一月六日 皇太子殿下行啓アラセラレ御影ヲ賜フ。  
同日 記念ノ松ヲ玄關前右側ニ栽ウ。  
同月十一日 皇太子殿下ノ御影奉拜式ヲ舉行ス。

明治四十一年

四月 本校所在地豊府村ヲ大分町ニ合併シ大分町ト稱ス。  
十月 戊申詔書下リ謄本ヲ頒布セラル。  
當時ニアリテハ授業料月額二圓ナリ。

明治四十四年

四月 本校所在地大分町ニ市制ヲ布キ大分市ト改稱ス。  
十一月 本校舎西側ニ交友會委員事務室圖書閱覽室一棟ヲ交友會基金中ニテ建築シ同時ニ縣有財産ニ寄附ス。

明治四十五年

三月 本校運動場ニ接續スル粟々山百七十八歩ヲ其ノ井戸ト共ニ購入ス。

大正元年

九月 學校長安倍志摩治  
明治天皇御大喪奉送ノタメ東京市ニ派遣セラル。

大正四年

四月 從來ノ生徒定員五百名ヲ七百五十名トシ本年ヨリ毎年百五十名ヅ、募集スルコト、ナス。  
十月三十一日 御眞影ヲ下賜セラル。  
十一月六日 皇太子殿下ノ御影ヲ下賜セラル。

大正五年

八月 擊劍道場ヲ本校庭南隅ニ移轉ス。  
十月二十七日 皇后陛下御眞影ヲ下賜セラル。

大正六年

三月 校庭東北隅ニ講堂ヲ新築ス。

同 月

寄宿舎ヲ模様替シ假教室六室ヲ作ル。

大正七年

二 月

學級教室ヲ改造シ化學實驗室ノ設備ヲナス。

四 月

學校長安倍志摩治辭職シ教諭玉木正行學校長事務取扱ヲ命セラル。

六 月

小野寺精一郎學校長ニ補セラル。

大正八年

十 二 月

學校長小野寺精一郎大分縣立白杵中學校長ニ補セラレ大分縣立杵築中學校長柴山槐郎學校長ニ補セラル。

大正九年

三 月

補習科ヲ廢止ス。

民有地四反四畝八歩ヲ借入レ運動場ヲ擴張ス。

擴張工事中粒銀ヲ藏シタル素焼ノ壺ヲ發掘セリ。

十一月十四日

皇太子殿下行啓アラセラル。

大正十年

三 月

學校長柴山槐郎樺太中學校長ニ任セラレ大分縣立宇佐中學校長池上庄治郎學校長ニ補セラル。

四 月

從來ノ生徒定員七百五十名ヲ壹千名トシ本年度ヨリ毎年二百名宛募集スルコト、ス。

當時ニアリテハ授業料月額金四圓ナリ。

大正十一年

十 一 月

本校東校庭ニ四教室ヲ有スル校舎壹棟ヲ新築ス。

大正十二年

三 月

學校長池上庄治郎辭職シ大分縣立中津中學校長裏川寅藏學校長ニ補セラル。

四 月

栗々山ヲ崩シテ運動場トラツク外ノ底地ヲ平ニス、其跡ニ校長住宅一棟建築サル。

大正十四年

四 月

陸軍現役將校中等學校服務制度定メラレ將校ノ配屬ヲ受ク。

九 月

假教室二室ヲ撤去シ新ニ四教室ヲ増築ス。

大正十五年

三 月

學校長裏川寅藏宮崎縣立宮崎中學校長ニ補セラレ教諭河野寅藏學校長事務取扱ヲ命セラル。

四 月

本年度ヨリ毎年一學級宛ヲ増加シ二十四學級定員一千二百名トナル。

六 月

香川縣立丸龜中學校長津田清三學校長ニ補セラル。

昭和三年

三 月

寄宿舎ヲ廢ス。

十月十日

御眞影ヲ下賜セラル。

十二月十日

御眞影奉安殿新築落成ス。

昭和四年

四 月

大正十一年以來増築シ來レル教室今年度ニ至リテ十八教室トナル。

同	月	生徒定員一千二百名學級數二十四トナル。
四	月	昭 和 五 年 二十五學級生徒定員壹千二百五十名トナル。
十二月十八日		昭 和 六 年 熊本市帶山練兵場ニ於テ御親閲ヲ賜フ。
七	月	昭 和 七 年 學校長津田清三千葉縣立千葉中校長ニ補セラレ教諭本重且ニ學校長事務取扱ヲ命セラル。
九	月	昭 和 八 年 大分縣立宇佐中學校長豊永省三學校長ニ補セラル。
五	月	昭 和 九 年 學校長豊永省三埼玉縣立浦和高等女學校長ニ補セラレ大分縣立宇佐中學校長富野榮三郎學校長ニ補セラル。
六	月	昭 和 十 年 農林大臣後藤文夫臨校セラル。
十	月	學校長富野榮三郎卒去シ教諭志村二郎學校長事務取扱ヲ命セラル。
三	月	福島縣立白河中學校長武智啓次郎學校長ニ補セラル。
四	月	本年度ヨリ授業料二十錢増額管内生四圓二十錢管外生四圓七十錢ナリ。
六	月	創立五十周年式典ヲ舉グ。

大分中學校校歌

1 オホゾラタカクワ ツキスミテ クモフキスサブー アキカゼニ  
 6 なすことなくテー くちもせは ちかのそせんニー ほぢなるそ

ハルルタカネノフ モトヨリ シロクナカルルユ フガハノ  
 ふるへやふるへけ んだんじ たてやごひくのわ がけんじ

ミヅニツキセヌ ウラミアリ シュンアウシユウー ゴヒクネン  
 ほうびほうすい こしへに まーてるえいゆう たれなるか

- 一、大空高く月澄みて  
雲吹き荒ふ秋風に  
晴るる高嶺の麓より  
白く流るる由布川の  
水に盡きせぬ恨みあり  
春風秋雨五百年
- 二、昔偲へは端なくも  
袖に散り来る露の玉  
あはれ祖先の大友か  
大刀風強く鎮西を  
靡けし城の其趾も  
今は空しく老松の
- 三、嵐にむせぶ聲あえて  
祇園山頭曉に  
迷ふ狹霧の行方をは  
見てこそ偲へその昔  
汝か住める此丘は  
汝か祖先の城趾そや
- 四、汝か住める此國は  
汝か祖先の墳墓そや  
昔なからに照る月を  
如何にとか見る吾健兒  
峨峨たる由布の峰高く  
茫たる豊の海廣し
- 五、之れそ祖先の人人か  
心とあかめし山なるそ  
之れそ祖先の人人か  
心の鏡と見し水そ  
此山此水眺めつつ  
汝か祖先を思へかし
- 六、爲す事なくて朽ちもせは  
地下の祖先に恥なるそ  
奮へや奮へ吾健兒  
立てや千余の吾健兒  
豊山豊水とこしへに  
待てる英雄誰なるか  
待てる豪傑誰なるか



# 大分中學校古簡雜抄

## 明治十八年

六月五日 開校式、校長村上田長  
 六月四日 七十名入學許可  
 八月十九日 本校今般募集ノ生徒入學試験ノ儀來ル二十八日ヨリ  
 三日間施行致候此段及御届候也  
 九月七日 三十三名入學許可  
 當校生徒ニ貸渡有之候書籍ニ就キ見料可取立答ニ相成居候由若見  
 料可取立儀ニ候ハ、右收入高記載之書類暫時御貸渡被下度一見ノ  
 上ハ速ニ返上可申候  
 明治十八年七月十一日  
 學務課長代理 大分中學校校長 村上田長

大分縣六等屬高橋館殿  
 大分縣令 西村亮吉殿  
 大分中學校校長 村上田長

### 表業課間週一 組甲級七第

第一	月曜	第四	坂部	算術	部
第二	火曜	第三	野村	算術	部
第三	水曜	第二	山田	算術	部
第四	木曜	第一	岡崎	算術	部
第五	金曜	同	同	同	同
同	土曜	同	同	同	同
同	日曜	同	同	同	同

本校今般生徒三十五名ヲ限リ(内五名ハ補缺ノタメ募集スルモノ  
 ニツキ學力俊秀ノ者アルトキハ更ニ試験ノ上七級以上ノ補缺ト致  
 スベシ)試験ノ上入學可差許候條志願ノ向ハ本年本縣乙第四十八  
 號達ヲ見得シ來ル明治十九年一月三十一日迄本校宛願書可差出、  
 且同二月八日午前第八時ヨリ試験執行可致ニ付試験用器具ヲ携へ  
 無遅刻出頭スベシ此旨廣告候事  
 但本文運刻シタルモノハ試験ヲナサズ  
 明治十八年 月 日 大分中學校

## 明治十九年

### 門監備入ノ儀ニ付伺

師範學校中學校兩校通用門監ノ儀ハ是迄兩校ノ小使ヲ以テ兼務爲  
 致候處來ル四月一日ヨリ更ニ門監備入兩校兼務生徒出入取締爲致  
 度此段相伺候也  
 但日給十二錢ハ中學校經費ノ内ヨリ支出見込ニ候間添テ上申候  
 也  
 明治十九年三月二十二日  
 師範學校校長 村上田長印  
 兼中學校校長 西村亮吉殿

## 明治二十年

### 定期再試業成績ノ儀ニ付伺

本月十三日付申第百三十五號ヲ以テ御届及置候通前定期試業之際  
 落第セシ者ニ對シ今回定期再試業執行致候處別紙成績表ノ如ク唱  
 歌ノ一科ハ目下教師缺員ニ付不得已缺科ノ儘試業致候ニ付テハ今  
 回ニ限り臨機ノ處分ヲ以テ全科修業ノ者ト同シク來年一月十一日  
 開校式執行之際修業證書授與致度此段相伺候也  
 大分縣尋常中學校校長代理 書記 兒玉鉞夫

明治二十年十二月二十四日  
 大分縣知事 西村亮吉殿

備考 授業時間ハ午前七時ヨリ正午十二時マテトス。但シ本表ノ  
 始業前三十分時間ヲ體操時間トスル七級甲、乙、八級モ亦  
 同ジニ二分シ課業表アリ。敬請四。

### 生徒帽子並ニ帽子記章之儀御伺

本校生徒申合之上各自同種ノ帽子並ニ帽子記章相用度此段願出候  
 ニ付一應取調候處不都合ノ廉モ有之候依而右著用ノ儀聽届可然哉  
 此段相伺候也  
 明治十八年十一月廿一日  
 大分中學校校長 村上田長印

大分縣令 西村亮吉殿  
 大分中學校校長 村上田長印  
 洋銀ニテ如斯

### 生徒遠行之儀伺

今般生徒遠行運動且學術研究ノ爲明日ヨリ往復四日ノ日數ヲ以テ  
 生徒一同直入郡竹田ニ赴キ大野郡沈瀧瀑布ヲ觀同郡犬飼ヲ經テ歸  
 校左記ノ職員教授又ハ監督ノ爲附添出張致度附テハ遠行費トシテ  
 假拂ヲ以テ金拾五圓御下渡相成度別紙往復日割相添へ此段相伺候  
 也  
 明治廿年九月廿七日  
 校長代理 大分縣尋常中學校書記 石黒元一郎印

大分縣知事 西村亮吉殿  
 教授又ハ監督ノ爲出張ノ職員

- 野村 成次郎
- 岡崎 實桃四
- 大矢 傳廣
- 敷田 一吾
- 中川 一郎

### 往復日割

初回九月廿八日 大分ヲ發足シ直入郡竹田ニ着ス里程十一里同所  
 二泊ス  
 次回九月廿九日 竹田出發大野郡野尻瀧ニ着ス里程五里同地岩戸  
 二泊ス  
 三回九月三十日 岩戸出發三重野津市ヲ經犬飼ニ着ス里程六里同  
 所ニ泊ス

四回十月一日 大飼ヨリ大分歸着ス里程九里

入學許可ノ儀ニ付伺

過般生徒募集試業執行之處別紙成績表之通廿三名及第候ニ付來九月十日ヨリ入學差許度且同表中ニ假入ノ二字朱記有之候モノ十九名有之候處何レモ平均得點五十點以上各學科中最低點十八點以上ノ者ニ有之候條各生徒從來ノ履歷及試業ノ成績ニ憑レハ他不合格者同様處分候モ遺憾ノ次第ニ有之依テ此節限リ假ニ入學差許シ成規ノ學科ヲ教授スルノ外右入學試業ニ於テ最低點ナル諸學科ヲ教授シ相當ノ學力ヲ生ズルヲ得セシメ然ル上ニテ更ニ試業ヲ執行シ及第者ニ眞ノ入學生タル資格ヲ與ヘ候條致度入學試業成績表相添此段相伺候也

明治二十年七月十三日

校長代理 大分縣尋常中學校

書記 石黒元 一郎

大分縣知事 西村亮吉殿

定期試業不合格者處置方向

今般定期試業相濟候付テハ昨日中第八十三號伺ニ添ヘ進達致置候成績之通不合格者十一名有之候處右ハ當學期授業ヲ客年十一月中旬ニ相始メ尋テ十二月末成規ヨリ早ク休業シ前後殆ト八十日許ノ休業ニ及ヒ且學科ハ當學期ヨリ新設ノモノナルヲ以テ生徒ガ曾テ憶想セザリシモノヲ俄ニ履修致候様ノ事情モ有之候旁以右不合格者ヲ原級ニ止メル義規則上當然ノ事ニハ候得共前陳之通本校ニ於

テ不得已事情有之ヲ以テ此節限リ特別ニ該不合格者ニ對シ來學期ノ始ニ臨時定期試業ヲ執行シ通常定期試業同様處置致度此段相伺候至急御指令奉仰候也

明治二十年七月八日

校長代理

大分縣尋常中學校書記 石黒元 一郎印

大分縣知事 西村亮吉殿

授業時間改定屆

本校是迄午前七時半始業午後二時終業之處追々暑氣ニ相向ヒ午後ノ課業ハ生徒ノ疲勞ヲ來スコト不尠候付テハ可成早朝ニ繰上ケ授業致度候條明日ヨリ午前六時始業十二時終業ト相改候此段及御屆候也

明治二十年四月二十一日

大分縣尋常中學校長 鎌田榮吉

大分縣知事 西村亮吉殿

廣告案

今般生徒凡三十名募集シ左ノ各學科目ニツキ試驗ノ上入學可差許候條志願ノ者ハ來ル六月二十五日迄願書並履歷書戶籍寫(明治十九年十二月縣令第十九號第十七條書式ニ依ル)可差出且同月廿六日午前九時ヨリ試驗執行可致ニ付試驗用諸器具ヲ携帶シ無遅刻出頭スベシ此旨廣告ス

但學力俊秀ノ者ハ更ニ試驗ノ上相當ノ級ニ編入スルコトアルベ

年 月 日

大分縣尋常中學校

明治二十一年

開校式屆

明後十一日午前第十時開校式執行候條別紙式場順序相添此段及御屆候也

明治二十一年一月九日

大分縣尋常中學校長代理

書記 兒玉鉞夫 印

大分縣知事 西村亮吉殿

生徒募集ノ件

尋常中學校生徒缺員ノ者多分有之臨時三十名ヲ募集致度別紙伺出候ニ付調査スルニ授業上等ニモ差支筋無之認候條御許相成可然歟相伺候也

現在生徒數	九十四人	廿一年七月試驗ニテ昇級
四年生	八人	五年級
三年生	二十人	四年級
二年生	二十人	三年級
一年生	四十六人	二年級
四十六人中ノ落第生	ト三月募集ノ者ト合シ一年生甲組トス	
三十人	廿一年三月 募集假入學	七月ニ試驗ノ上優等ノ者ハ
三十人	同七月募集	二年生ニ編入ス
		一年生乙組トス

現今寄宿生五十二名、外ニ五十名差支ナシ

今般生徒臨時三十名募集シ左ノ各學科目ニツキ試驗ノ上入學可差許候條志願ノ者ハ來三月七日迄本校へ願書並履歷書戶籍寫可差出且同月十三日午前九時ヨリ試驗執行可致ニ付試驗用諸器具ヲ携帶シ無遅刻出頭スベシ此旨廣告ス

但學力俊秀ノ者有之トキハ更ニ試驗ノ上相當級ニ編入スルコトアルベシ

明治二十一年二月

大分縣尋常中學校

試驗科目

- 一 讀 方 漢字交リ文
- 一 作 文 漢字交リ文日用書牘文
- 一 習 字
- 一 算 術 比例算迄
- 一 地 理 日本地理附外國地理ノ概略
- 一 史 日本歷史
- 一 理 科 博物及理化學等ノ近易ナルモノ
- 一 圖 畫
- 一 體 格 檢 査

帽子記章並服改正ノ儀ニ付開申

本校生徒申合セ之上各自同種之帽子記章並服別紙圖面ノ通同一ニ漸次改正致度旨申出候ニ付此段開申仕置候也

明治二十一年二月廿五日



大分縣尋常中學校長代理

書記 兒玉 敏 夫 印

大分縣知事 西村亮吉殿  
記章櫻花ニ中ヲ入ル 代 七 錢  
冬服 黒牛毛羅紗背廣五ツ釦 代貳圓貳拾錢位  
夏服 白小倉織 代壹圓參拾錢位

修業證書授與式伺

本校生徒定期試業相濟候ニ付テハ別紙成績表之通ニ有之候條明後  
三十日午前九時及第生徒へ修業證書授與致度此段相伺候也  
明治廿一年六月二十八日

大分縣尋常中學校長 衣斐 敏 太郎  
大分縣知事 西村亮吉殿

大分縣尋常中學校規程

生徒心得

- 本校生徒タルモノハ居常左ノ諸項ヲ恪守スベシ
- 一、長上ヲ尊敬シ同朋ヲ親愛スヘキ事
- 一、定時ヲ守リ定位ヲ保チ勵精修學スヘキコト
- 一、身體居室ヲ清潔ニシ眠食勞逸ヲ適度ニシ務メテ精神ヲ快活ナラシムヘキコト
- 一、諸規則令達等ヲ遵守スルハ勿論渾テ師長ノ指導スルトコロニ恭順スヘキコト

教場規則

- 第一項 教場ニ於テハ渾テ教師ノ指揮ニ從ヒ暴止務メテ靜肅ナルヘシ
- 第二項 號鐘ヲ聞テハ速ニ教場ニ入り退場ノトキハ教師ノ立ツヲ待チ順次之ニ從フヘシ
- 第三項 教師講室ニ臨マバ一同起立シ敬禮スベシ業終リ席ヲ去ルトキモ亦同シ
- 第四項 教師ノ許可ヲ待タズシテ發言シ或ハ互ニ問答スルコトヲ禁ス
- 第五項 發言スルトキハ必ス起立スヘシ
- 第六項 授業中教師ノ許可ヲ得スシテ席ヲ離ル、コトヲ禁ス
- 第七項 課業ノ外教場ニ出入スルコトヲ禁ス
- 第八項 教師ノ許可ナクシテ黒板ニ塗抹シ其他教場裝置ノ書籍器械等ヲ使用スルコトヲ禁ス
- 第九項 洋服若クハ筒袖衣着袴ニアラサレバ教場ニ入ルコトヲ許サス、但病氣等ノタメ本文服裝ヲナス能ハサルトキハ其旨取締ニ届出ベシ

通學規則

- 第一項 上校中ハ言語動作ヲ慎ミ諸事取締ノ指揮ニ從フヘシ
- 第二項 始業時限前上校シ課業終レハ歸宅スヘシ
- 第三項 携帶ノ圖書器具辨當帽傘ノ類ハ所定ノ場所ニ整置スベシ
- 第四項 猥リニ寄宿舎ニ出入シ或ハ舎外ヨリ寄宿生ニ交談スベカラズ

第五項 病氣若クハ不得已事故アリテ開課スルトキハ始業前ニ其旨校長ニ届出ヘシ

罰則

- 第一項 凡ソ生徒ノ規則ニ違背スルモノハ之ヲ處罰ス
- 第二項 罰ハ戒飭留置禁足退校ノ四トス
- 第三項 戒飭ハ校長之ヲ戒飭ス留置ハ課業後二時間以内學校ニ留メ職員ノ指定スル席ニツキ謹慎セシム禁足ハ職員ノ指定スル席ニツキ謹慎セシム許可ヲ得ルニアラサレバ校外ハ勿論室外ニ出ツルヲ禁ス退校ハ學籍ヲ除シ本校生徒タルノ資格ヲ失ハシム但シ戒飭退校ハ一般生徒ニ科シ留置ハ通學生ニ禁足ハ寄宿生ニ限リ之ヲ科スルモノトス
- 第四項 規則ニ違背シタルモノハ其情狀ニヨリ之ヲ戒飭シ或ハ一月以上三週日以内ノ留置若クハ禁足ニ處シ其ノ數回罰セラレ悔悟ノ徴ナキ者或ハ他生徒ヲ教唆シ或ハ風儀ヲ紊ル等凡テ學校ノ風教ヲ害スル者ハ退校ニ處ス
- 第五項 學校ノ物品ヲ毀損又ハ亡失スル者ハ其ノ原品ヲ償還セシメテ且之ヲ罰シ或ハ現品ノ償還ニ止メ或ハ處罰ニ止ムルコトアルベシ。

寄宿舎規則

- 第一項 舍内ニアリテハ言語動作ヲ慎ミ晨起就寢喫飯外出歸舎運動等渾テ時々達示スルトコロ時限ヲ嚴守スベシ
- 第二項 居室ハ取締ノ指定スルトコロニ從フベシ
- 第三項 平素服裝ヲ正シクシ洋服若クハ着袴タルヘシ但毎朝盥嗽ヲ終ル迄ト晚餐後ハ必スシモ本文ノ服裝ヲ要セス
- 第四項 毎朝室内ヲ掃除シ且毎土曜日放課後ヨリ周密ノ掃除ヲナスヘシ
- 第五項 豫定時限ノ外猥リニ各室相互ノ往來ヲナスヘカラス
- 第六項 放歌吟詩及高聲ノ音讀等凡テ喧噪ノ舉動アルヘカラス
- 第七項 金錢衣服等互ニ貸借スヘカラス
- 第八項 室内ニテハ湯水茶菓ノ外飲食スヘカラス
- 第九項 猥リニ小説稗史繪入新聞ノ類ヲ閱讀シ又ハ碁將棋骨牌等ノ遊戯ヲナスヘカラス
- 第十項 各室障子ノ破レアルトキハ室内ノ生徒之ヲ繕フヘシ
- 第十一項 戸障子壁等ハ勿論凡テ校有私有ノ器具ニ樂書ヲナスヘカラス
- 第十二項 衣服類ハ常ニ押入ニ書籍類ハ常ニ書厨ニ收メ置クヘシ但シ自己着席ノ節書籍類ハ本文ノ限ニアラス
- 第十三項 硯一式、インキ壺二個、筆立、水入、文鎮ノ外猥ニ物品ヲ机上ニ排置スヘカラス
- 第十四項 但自己着席ノ節ハ本文ノ限リニアラス
- 第十四項 敷物ハ座布團毛布段通ノ外之ヲ用フルヲ許サズ
- 第十五項 茶器其他雜品ハ使用畢レバ直ニ押入ニ收メ置クヘシ
- 第十六項 室前ニハ生徒一名ニ付履物一足ノ外排置スルヲ許サズ

- 其排置法ハ踵ヲ室間ニ附ケ置クベシ
- 第十七項 帽子ハ帽子懸ニ懸ケ手中ハ手巾懸ニ懸ケ置クベシ
- 第十八項 就寢ノ節ハ火鉢類ヲ室外ニ出シ置クベシ
- 第十九項 就寢時限後ハ燈火ヲ滅シ談話ヲナスベカラズ
  - 但シ病氣等ノタメ消燈シ難キトキハ取締ノ差圖ヲ受クベシ
- 第二十項 石炭油ハ火止ノ外之ヲ使用スヘカラズ
- 第二十一項 小使部屋並所湯沸揚等ニ立入り或ハ私ニ小使ヲ使役スヘカラズ
- 第二十二項 學校ノ器物又ハ庭内ノ樹木類ヲ毀損シ若クハ亡失セシトキハ直ニ取締ニ届出検査ヲ受クベシ
- 第二十三項 來訪者アルトキハ應接所ニ於テ面接シ舍内ニ誘引スヘカラズ
  - 但シ病氣ノ節ハ取締ニ申出テ其ノ差圖ヲ受クベシ
- 第二十四項 自修時間ニハ猥リニ室外ニ出ツベカラズ
- 第二十五項 自修時間ニハ一切發音スヘカラズ
- 第二十六項 教師病氣事故等ニテ臨時缺席ノ節ハ其ノ時間中自修室内ニテ自修スベシ
- 第二十七項 運動時間ニハ隨意遊戯スルヲ得ト雖モ其ノ危險ニ涉ルガタメニ禁止セラレタルトキハ直ニ之ニ従フベシ
- 第二十八項 入浴ノ節ハ雜踏喧嘩ナラサルヤウ注意スベシ
- 第二十九項 食事時間ニハ鐘ヲ聞キ速カニ食堂ニ赴クヘシ若時間ニ後レタルトキハ取締ニ申出テ差圖ヲ受クベシ
  - 但シ晚餐ノ鐘ヲ聞クトキハ人員調査ヲ受クルタメ先ツ調査場ニ赴キ室號ノ順次ニ整列スベシ

- 第三十項 食堂ニ赴キ着席シタル節ハ取締若クハ其代理者ヨリ喫飯ノ號令ヲナスヲ待テ喫飯スベシ
- 第三十一項 食堂ニ於テハ殊ニ靜肅ヲ旨トシ賄方ニ對スル用事ハ渾テ其掛ニ申述フベシ
- 第三十二項 食堂ニ於テハ取締ノ指圖ヲ以テ臨時居席ヲ交替セシムルコトアルモ生徒自己ノ勝手ヲ以テ居席ヲ混亂スベカラズ
- 第三十三項 自己ノ都合ニヨリ食事ヲナサ、ルトキハ少クトモ二時間前ニ食堂ノ名札ヲ撤去シ押印簿ニ押印スヘシ
  - 但シ食事ヲナサ、ルモ本文ノ手續ヲ欠クトキハ其食費ヲ辨償スヘキモノトス
- 第三十四項 外出時間又ハ許可ヲ得テ臨時外出スルトキハ通門鑑札ヲ受取り門監ニ示シ置キ歸校ノ節返納スベシ
- 第三十五項 病氣ニヨリ受診ノタメ臨時外出セント欲スルトキハ取締ニ願出テ願書通テ受診標ヲ受取り診察ノ記入ヲ受ケ歸舍ノ節取締ニ差出スベシ
- 第三十六項 要用アリテ臨時外出セント欲スルトキハ取締ニ願出テ願書通テ受取リ歸舍ノ節取締ニ差出スヘシ
- 第三十七項 外出ノタメ闕課シ若クハ午後七時ヲ過クヘキトキハ取締ニ願出シ校長ニ願出ツベシ願書二通尤本願ハ時宜ニ依リ取締限リ假リニ認可スルコトアルベシ
- 第三十八項 外出中急病ニ罹ルカ又ハ不得已事故アリテ歸舍時限ニ後レタルトキハ保證人ヨリ其事由ヲ詳記シタル保證書ヲ得テ歸舍ノ上取締ニ差出スベシ
  - 但シ急病ニ罹ル分ハ醫師ノ診斷書ヲ添フベシ

第三十九項 何等ノ事由アルニ係ラス一課タリトモ闕席シタルトキハ當日外出ヲ許サズ

- 第四十項 病氣ノタメ早臥晏起ヲナストキハ取締ニ届出ツベシ
- 第四十一項 病氣ニテ闕課スルトキハ直ニ病症ヲ明記シ取締ヲ經テ校長ニ届出ヘシ其二日以土ニ及フトキハ日々之ヲ届出第四日ニ至リ尙快癒セサルトキハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ一週日以内引籠届書ヲ取締ヲ經テ校長ニ差出スベシ期滿テ尙快癒セサントキハ前例ニヨリ一週日毎ニ差出スベシ
- 第四十二項 凡ソ疾病ニ罹ル者ハ直ニ病室ニ入ラシム其病狀ニヨリ看護ヲ要スルトキハ取締ニ申出テ差圖ヲ受クヘシ
  - 但患者食事ハ病室ニ於テスルモ妨ケナシ此ノ場合ニアリテハ其旨賄方ヘ通知スヘシ
- 第四十三項 病狀ニヨリ本人ノ情願ヲ以テ病院ニ入り又ハ本校ノ都合ニテ下宿歸郷セシメタルトキハ二週日毎ニ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ病狀ヲ申告スベシ
- 第四十四項 親族疾病ニ罹ルカ又ハ不得已事故アリテ歸郷セント欲スルトキハ保證人連署ノ願書ヲ取締ヲ經テ校長ニ差出スベシ
  - 尤親族疾病ニ罹リタル分ハ醫師ノ診斷書ヲ添フベシ
- 第四十五項 凡ソ願届書類ハ取締ニ差出シ又ハ取締ヲ經由スヘシ

**部室長ノ儀ニ付伺**

本校生徒管理上便宜ノ爲生徒中部長並室長ヲ置キ其進退ハ渾テ學校長限リ取扱候様致度別紙心得書相添ヘ此段相伺候也  
但シ部長ハ生徒ヲ分テ若干部トナシ每部ニ一員ヲ置キ室長ハ每

**明治二十二年**

**生徒修學旅行之儀ニ付伺**

本校生徒修學旅行トシテ三月六日ヨリ八日迄日數三日間速見郡杵築村ヘ遠行相致度就テハ其監督トシテ教職員ノ中數名附添出張爲致度依テ別紙付添員人名及日割書相添ヘ此段相伺候也  
明治廿二年二月廿五日

大分縣尋常中學校長 衣斐 鈇 太郎  
大分縣知事 西村 亮 吉殿

**附 添 人**

- 校長 衣斐 鈇 太郎
- 校 長 衣斐 鈇 太郎
- 教 師 中 川 一 郎
- 教 師 鈴 木 重 尙
- 教 師 石 井 辰 彦
- 書記兼取締 矢野 龜 太郎

室ニ一員ヲ置ク見込ニ候  
明治二十一年一月十日

大分縣尋常中學校長代理 書記 兒 玉 鈇 夫 印  
大分縣知事 西村 亮 吉殿  
部長並室長心得

- 一、部長ハ職員ノ指揮ヲ受ケ部内ノ秩序ヲ保持スルコトヲ助ク
- 一、室長ハ職員ノ指揮ヲ受ケ室内ノ秩序ヲ保持スルコトヲ助ク



同 十五日 温見村發直入郡玉來村著泊  
 同 十六日 玉來村ヲ發シ熊本縣阿蘇郡坂梨村へ著泊  
 同 十七日 坂梨村ヲ發シ阿蘇山へ登リ下リテ同郡宮地村へ著泊  
 同 十八日 宮地村ヲ發シ直入郡菅生村へ著泊  
 同 十九日 菅生村ヲ發シ竹田町へ著泊  
 同 二十日 竹田町ヲ發シ大分郡野津原村へ著泊  
 同 二十一日 野津原ヲ發シ歸校

修學旅行費豫算

一金三十七圓二十二錢

內 譯

金六圓七十二錢

金二十二圓五十錢

金四 圓

金四 圓

金四 圓

金四 圓

分

修學旅行ノ儀ニ付伺

本校生徒修學旅行トシテ本月十四日ヨリ同二十一日迄日數八日間直入郡及熊本縣阿蘇郡地方へ旅行爲致其監督トシテ教職員數名附添出張爲致度仍テ別紙附添人名及修學旅行目的書並ニ日割書等相添へ此

段相伺候

明治二十三年十一月十日

大分縣尋常中學校長

伊 達 行 平

大分縣知事

西村亮吉殿

修學旅行附添人名

伊 達 行 平

藤 島 猪 之 助

數 田 傳 吉

中 川 一 郎

石 井 辰 彦

泥 谷 則 吉

矢 野 龜 太 郎

修學旅行 目的

本校生徒兵式體操實地演習ノ目的ヲ以テ直入郡及熊本縣阿蘇郡地方へ旅行致シ行々所在ノ實地ニツキ礦植物採集地文歴史實景寫生ノ諸科ヲ研究シ猶直入郡竹田町近傍適當ノ場所ニ於テ發火演習ヲナスヲ以テ目的トス。尤モ發火演習地所轄警察署へハ別ニ届出可申候也

銃並附屬品買入レノ儀ニ付伺

一 エンヒール銃四十挺 此代價金八十三圓二十錢一個ニ付二圓八錢替

一 朋覽並雷管入レ共四十個 此代價金三十六圓一個ニ付九十錢替

一金百十九圓二十錢

右者本校兵式體操教授用トシテ備品費ノ内器械費豫算ノ内ヨリ買

入申度依テ積書相添へ此段相伺候也

明治二十三年七月二十六日

大分縣尋常中學校長

伊 達 行 平

大分縣知事

西村亮吉殿

書籍買入ノ儀ニ付伺

一金二百一十一圓十錢

右金員ヲ以テ別紙明細書ノ通教科書並參考書二十三年度書籍豫算費ノ内ヨリ買入度尤モ參考書ノ儀ハ何レモ教授上ニ相用フヘキ必要書ニ有之候此段相伺候也

明治二十三年八月十八日

大分縣尋常中學校長

伊 達 行 平

大分縣知事

西村亮吉殿

書籍購入明細書

一 スチュワート物理書

九 部 五年生用

此代金二十二圓五十錢 一部ニ付金二圓五十錢

一 ロスニュー化學書

二十部 四年用

此代金四十圓 一部ニ付金二圓

一 實用農業編

十五部 四五年生用

此代金二十三圓五十五錢 一部ニツキ金一圓五十七錢

一 富士谷孝雄グーキ地文學

四十部 三四年生用

此代金六十圓 一部ニ付金一圓五十錢

一 スウイントン萬國史

五十一部 二五年生用

此代金八十六圓七十錢 一部ニツキ金一圓七十錢

一 和 文 軌 範

二十部 二年生以上用

此代金二十圓 一部ニ付一圓

一 菊池大藏著初等幾何學

四十三部 二三四年生用

此代金三十四圓四十錢 一部ニツキ金八十錢

一 マコーレー文集

二十部 五年生用

此代金九圓 一部ニツキ四十五錢

備附品買入レ之儀ニ付伺

一指 揮 刀

四 振

此代價金二十二圓 一振ニ付五圓五十錢

器械新調費豫算ヨリ買入

一 ラ ッ パ

一 個

此代價金四圓五十錢

但時報並兵式用諸器具費豫算ヨリ買入

右入用ニ付二十三年度豫算費ヨリ買入申度依テ見積書相添へ此段相伺候也

明治二十三年九月二日

大分縣尋常中學校長

伊 達 行 平

大分縣知事

西村亮吉殿

入學許可ノ儀ニ付伺

本年四月四日付中第二七號ヲ以テ本校第一年生五十名募集之儀伺済

今般入學試驗執行致候處志願者百廿名ノ内合格者三十八名別紙成績表ノ通り有之候ニ付來ル九月十一日ヨリ入學許可致候様仕度此段相

伺候也

明治三十三年七月十六日

大分縣尋常中學校長 伊達 行平  
大分縣知事 西村亮吉殿

外國教師借家料支給方ノ儀ニ付伺

本校履教師英國人ジョージ・ブライオン儀本月廿七日到著致候處本人借家料支給方ニツキ疑岐相生候條左ニ相伺候  
一外國教師借家料ノ儀ハ豫算金額則チ拾貳圓ヲ外國教師へ直ニ支給致可然哉

一外國教師借家料ハ八月分金額即十二圓ヲ支給スベキヤ將又本人到著日ヨリ日割ヲ以テ支給致可然哉  
右之廉々相伺候條至急何分ノ御指揮相仰候也

明治二十三年八月三十日

大分縣立尋常中學校長 伊達 行平  
西村亮吉殿

卒業並修業證書授與式ノ儀ニツキ伺

本校生徒卒業並定期試験相済別紙成績表之通ニ候條明八日午前第九時卒業者及及第生徒へ證書授與致度此段相伺候也

明治二十三年七月七日

大分縣尋常中學校 事務取扱 川本 清一  
大分縣知事 西村亮吉殿

自明治二十二年九月 第五年生修學成績表  
至同 二十三年七月

學定臨	體操	總點	平均	及落	舊席順	姓	名
九〇	九三	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六
九二	九二	九一三	九一・三	卒	三	工藤	猪六

十名卒業セリ。

臨試ト定期試トハ朱書シアリ。

明治二十五年

擊劍道具買入ノ儀ニ付伺

一擊劍道具 代價金五十圓 一人前金五圓ツ、  
本校生徒ノ氣質ヲ鍛練シ柔弱ノ習慣ヲ除カンタメ自今本校ニ於テ體操科中ノ隨意科トシテ擊劍ノ一科ヲ相設度就テハ本年度校費ノ殘額内ヨリ前記ノ物品ヲ買入致度尤モ本年度ハ備品消耗品等豫算額ヨリ廉價ヲ以テ購求致候物多々有之隨テ校費全體ノ上ニハ數多ノ餘金ヲ生スル見込ニ有之候仍テ別紙校費支出計算書相添へ此段相伺候也

明治二十五年三月十日

大分縣尋常中學校長 伊達 行平  
大分縣知事 岩崎小二郎殿

唧筒購入之儀伺

一噴水力凡十四間、木製唧筒フングルス製水管六十尺付一挺長三尺巾二尺深一尺五寸  
但特別堅固製ヲ以テ代價三十二圓  
右ハ本校防火用トシテ備置度候處當地方ニ於テハ該器製造人無之候ニ付大阪市東區川部唧筒製者所へ注文致シ隨意契約ヲ以テ購入致度別紙支拂明細書相添此段相伺候也

明治廿五年十一月廿四日

大分縣尋常中學校長 伊達 行平  
大分縣知事 岩崎小二郎殿

明治二十八年

寄宿舎内ニ暖室用火鉢備付ノ義ニ付伺

本校ハ市街ヲ距ル事遠ク殊ニ丘上ニシテ舊大分町ノ校舎トハ寒暖大ニ其度ヲ異ニシ朝夕夜間等ハ別シテ寒氣甚敷寄宿舎ニアリテハ學科ノ自習モ難出來程ニ有之候ニ付嚴寒中暖室ノ爲メ舎内各室ニ一個宛大火鉢ノ備付ヲ致度此段御伺候也

明治二十八年一月十四日

大分縣尋常中學校長事務取扱 尾田 信直  
大分縣知事 山田爲暉殿  
土管据込修繕之儀ニ付伺  
一金五拾八圓四錢壹厘 本校用水路土管埋込修繕費額

本校寄宿舎浴場用水クリノ山ノ井戸ハ元來水量多ク其實亦佳其加フルニ先般井戸屋形等修繕ヲ加へ候以來ハ使用上頗ル都合ヨク相成候處通水管ニ屢々障礙ヲ生ジ之方爲往々水ヲ運搬セサルヲ得ザルニ至ル因テ精々工夫ヲ凝シ候得共付管ニテハ寒中内部水結流出ノ水量非常ニ少ク相成且ツ平常ハ其他ノ障礙ヲ生シ易クシテ到底風呂ニ用フル程ノ水量ヲ得ルコト困難ニ有之候ニ付付管ハ矢張り從前ノ如ク祇園山ヨリ水ヲ引キ盤嗽用ニ致シ置キ今般更ニ土管ヲ埋込ミクリノ山井戸ヨリ風呂水ヲ取ル事ニ致度然ルニ本年度修繕費目ニハ餘裕無之候ニ付第一目俸給中ヨリ流用競争入札ヲ以テ修理致度仍テ別紙俸給支拂明細書並設計書相添此段御伺候也

明治二十八年三月十一日

大分縣尋常中學校長事務取扱 尾田 信直  
大分縣知事 山田爲暉殿

裏門新設ノ儀伺

一 裏門一ヶ所新設費  
本校ニ於テハ正門ノ外西南ニ裏門一ヶ所所有之候得共尙物品及荷物運ヒ込ミ且ツ生徒運動遊戯ノ際甚ダ不便ヲ感シ候ニ付東南隅ハ兵式運動場ニ裏門一ヶ所隨意契約ヲ以テ本年度臨時部第四款教育費第二項尋常中學校費ノ内ニテ新築致度仍テ別紙見積書設計書並臨時部第四款第二項支出明細書相添へ此段相伺候也

明治二十八年七月十八日

大分縣尋常中學校長 武田安之助

大分縣知事 山田爲喧殿

明治二十九年

授業時間改正之儀御届

本校授業時間ハ是迄午前第九時始業午後第三時終業之處來ル十三日(月曜日)ヨリ午前第八時始業午後第二時終業致候ニ付此段及御届候也

但月曜水曜之兩日ハ午前第八時始業午後第三時終業致候也

明治二十九年四月十日

大分縣尋常中學校長 武田安之助

大分縣知事 山田爲喧殿

卒業延期伺

來六月一日卒業スベキ本校生徒二十七名中既ニ徵兵猶豫ノ手續ヲ了ヘテ尙高等ナル學校ニ入學スルノ志望ヲ懷クモノ多シ然ルニ高等ナル學校中高等師範學校ヲ除外ハ皆入學期九月ニシテ七月十日前後ニ於テ入學試験ヲ行フテ通常トス故ニ本校本年ノ卒業生ハ六月一日ヨリ七月十日ニ至ル間ハ一時徵兵猶豫ノ事故消滅シ此間ニ於テ徵兵検査ヲ受ケ抽籤ノ手續ヲ終ヘザルベカラズ但一旦當籤スルモ入營期日ニ先テ高等ノ學校ニ入學スレバ再ビ猶豫ノ典ニ預ルコトヲ得ベシト雖近年各縣中學卒業生ニシテ高等ノ修學ヲ望ムモノノ數ハ遙ニ高

等學校ノ募集人員ニ超過スルヲ以テ競争入學試験ノ其果ヲ必スベカラズ若シ入學試験ニ及第スルコト能ハザル時ハ己ムヲ得ズ三年兵ト成リテ入營シ勢ヒ前途修學ノ希望ヲ退ムルノ不幸ニ陷ラシメ若シクハ一年志願兵ト爲リテ豫備將校タルベキノ恩典ニ浴セシムルコト能ハザルハ單リ卒業生自己ノ不幸ノミナラズ實ニ本校ノ不幸ナレバ前陳ノ事故アル者ニ限リ六月一日ノ卒業ヲ延期シ一ニ學科ノ復習ヲ課シテ本校ニ籍ヲ止メ徵兵期限經過ノ後ニ於テ卒業證書ヲ授與センコトヲ切望ス此ノ如キ便宜上ノ取扱ハ四月ヲ以テ學年ノ始ト爲セル中學ニ於テハ多ク行フ所ノモノニ候

明治二十九年五月十九日

大分縣尋常中學校長 武田安之助

六月一日卒業證書ノ授與ヲ延期スベキ人名表

入學志望	原籍	氏名	年	齡
第五高等學校	北海道釧路島國	島 瀧 隆 三	明治十年一月	生
第三部醫科	松前郡福山町		十九年五月	月
同	大分縣宇佐郡	桐 田 繁	同	八年十月
同	明 治 村		二十年八月	月
同	大分縣北海部郡	阿 部 龜 彦	同	八年九月
同	大分縣北海部郡	後 藤 貫 一	同	九年五月
同	大分縣大野郡	小 野 英 彦	同	九年三月
同	大分縣大野郡	三 重 重 村	同	九年九月
同	大分縣速見郡	麻 生 克 己	同	九年九月
同	大分縣速見郡	日 出 町	同	九年九月
同	大分縣北海部郡	長 屋 政 勝	同	九年四月
同	大分縣北海部郡	白 杵 村	同	九年四月
同	大分縣北海部郡	町	同	九年四月

來六月一日卒業スベキ貴校生徒二十七名中學校ノ復習ヲ要スルモノ數名ヲ限リ其ノ卒業ヲ延期スル件ハ左記ノ通相見込候條御承知相成度此段及御回答候也

明治二十九年五月二十九日

横山參事官

武田校長殿

一 生徒ノ卒業ハ學年ノ終ニ於テ判定スベキ規定ニシテ同學年ノ生徒中數名ヲ限リ其卒業ヲ延期スルハ別ニ明文モナク規定外ノコトナレバシ然ルニ生徒ヲ卒業セシムルハ校長ノ權限ニ屬スルモノナレバ校長ニ於テ猶ホ學科ノ復習ヲナシタル上ニアラザレバ卒業セシメ難キモノト認ムル以上ハ之ガ卒業ヲ數月延期スルモ止ムテ得ザル次第ナルベシ  
一 徵兵令第二十三條第一項(學校生徒)該當者ヲ徵集スルノ手續ハ同第二十五條届出ニ依テ更ニ開始スルモノナレバ學業上ノ必要アリテ在校セシムルモノハ事故止ミタルモノニアラズ從テ徵集猶豫ニ屬スベキモノト認ム。

明治三十年

大分尋常中學校新募生撰抜試験ノ件

大分尋常中學校長ヨリ該校及杵築外二分校第一學年生徒募集ニ付撰抜試験施行廣告案別紙ノ通り届出候處杵築外二分校ニ於テハ撰抜試験ヲ施行セザル旨ニ候得共竹田分校ハ百二十五名ニシテ僅々五名ノ超過ニハ候得共縣會議決ノ人員ヲ超過シ且ツ右定員外ノ入學ヲ許可致候様相成候而テ中津及宇佐中學本分校ニモ希望有之哉モ難圖候ニ

付竹田分校ニ於テハ撰抜試験施行候様相成度相見込候。右案ヲ以テ内務部長ヨリ照會可然哉相伺候也

明治三十年四月十三日

本校並各分校入學出願者數

- 一、本校入學出願セシ者 二百三十五名
- 一、杵築分校同上 九十七名
- 一、白杵分校同上 百二十名
- 一、竹田分校同上 百二十五名
- 計 五百七十七名

杵分第八號 修學旅行之儀ニ付伺

常備艦隊松島鎮遠扶桑高雄ノ四艦來十五六日ノ比別府港(碇泊)趣昨十一日付内三戸第八六一號ヲ以テ内務部長ヨリ御通牒相成候ニ就テハ縦覽ノ爲メ三日間本校修學旅行致度就テハ書記大河内嘉一(一)準備ノタメ出張被命候様致度別紙經費見積書相添ヘ此段相伺候也

明治三十年五月十二日

杵築分校勤務

大分尋常中學校教諭 松澤辰三郎

大分縣知事 松本重遠殿

內參學第一二八四號

本月二十三日發兌豊洲新報第一千九百四十號雜報欄内ニ中學校生徒及職員ニ關スル記事有之貴校職員生徒ニ於テ萬一右ニ類スル事實モ有之候ハ管理上大ニ注意ヲ要スベキモノト見込候條今一層御取締

相成度依命此段及御照會候也

明治三十年七月二十八日

内務部長

大分尋常中學校長宛

中第百四號

七月廿八日付内參學第一二八四號ヲ以テ豊州新報雜報中「中學校生徒及職員ニ關スル記事」中ニ就キ本校職員生徒ニ於テ萬一右ニ類スル事實モ有之候ヘバ管理上大ニ注意ヲ要スベキモノト御見込相成爾後一層取締リ可申旨依命御照會ノ趣テ承致候、右記事ノ生徒ニ關スル件トハ夜中松茶神社ノ邊ヲ徘徊シ或ハ氷水店ニ出入スル云々ニ過ギズ現時本校生徒ニシテ大分町ニ下宿スル者並ビニ自宅ヨリ通學スルモノハ二百餘名ノ多キニ至リ候、然ラバ其中ニハ水店ニ出入スルモノアラシ冷風ニ乘シテ散歩スルモノモアラシ是強チ咎ムベキニアラズ而シテ尙本校ノ制帽ヲ戴キテ中學生徒タルノ本分ヲ忘ル、モノニハアラズ然レドモ本校生徒ニシテ惡習慣ヲ有スルモノ全然是レナシトセズ從來ノ例ニ徴スルニ年齢長シテ初メテ本校ニ入學スル青年中ニハ入學ノ前既ニ多少ノ惡習慣アル者アリ本校在學中ト雖モ素行修マラズ數回本校ノ訓誡ヲ受ケテ尙改悛ノ實ナク往々ニシテ本校ノ體面ヲ汚スガ如キ行爲アルモノモ亦少ナカラサルベシ。此輩ハ或ヒハ停學或ヒハ退學ヲ命ジテ惡習慣ノ他良生徒ニ傳播スルヲ防ギタル事アルハ貴官ノ迅ニ御了知ニ相成候事ト信候。又豊州新報ノ記スルガ如ク學校風紀ハ廢頽シテ救フベカラズ等ノ事ハ事實無根ニシテ風紀ハ漸次振起致居候傾向アリ。抑モ一學校ノ校風全校生徒ノ品性ハ一朝ニシテ改ムベキモノニハアラズ一旦校風ヲ振起セントセバ一定ノ方針ヲ

定メ數年ヲ期シテ之レガ實行ノ舉ゲザルヲ得ズ。本校ハ數年來之レガ實行ヲ計リ今僅カニ校風ノ基礎ヲ立ントシテ未ダ確立スルノ運ニ至ラズ然レドモ新報ノ記スルガ如ク風紀日々ニ廢ルガ如キハ無根ノ構言ナリト斷言スベク又教員ニ關シテハ豊州新報ニ記載シアルガ如キ事實モ無之今日教育社會ノ有様ハ教員ノ數乏シキガ爲メ各府縣競フテ之レガ優待ヲナシツ、アルガ故ニ奈リ俸給ニ離ル、チ氣遣ヒ人ノ勤心ヲ求ムル事ヲナサシヤ。一同誠意生徒ノ訓育ニ勉メツ、有之次第ニテ教員ガ學校ニ對シ又生徒ガ教員ニ對シ不快ノ念ヲ抱キ居ルガ事決シテ之無候條各様御承知被下度此段及御回答候也

明治三十年七月三十日

大分縣大分尋常中學校長 武田安之助

大分縣書記官 有田義資殿

明治三十一年

本校ニ於テハ自今每學期末及學年末ノ試験ヲ施行スルコトニ致度就テハ本縣尋常中學校規則ノ御改正ヲ要スル義ニ候ヘドモ當分本校限リ試験規則及同細則ヲ假定シ施行スルヤウ致度ニ付右様御含置被下度仍テ該規則書一部及御送付候也

大分尋常中學校 津田 純一

内務部長大分縣書記官 有田義資殿

試業規則

- 一、試業ヲ分チテ學期試業學年試業ノ二種トス
二、學年試業ハ每學年ノ終ニ之ヲ行ヒ其ノ學年間ニ履修セシメシ學業

- ノ成績ヲ調査スル資ニ供ス
三、學期試業ハ每學期ノ終ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ學期間ニ履修セシメシ學業ノ成績ヲ調査スル資ニ供ス
四、生徒ノ學業ハ各學科ニ應シ平素適宜ノ方法ニヨリ之ヲ考察シ教授ト成績調査トノ參考ニ供ス
五、學科ニ依リテハ別ニ試業ヲ行ハズシテ日課ノ優劣動情ニヨリ學期末學業成績又ハ學年末學業ノ成績ヲ定ムルヲ得
六、一學年間授業日數ノ三分ノ二以上缺席セルモノハ學年試業ヲ受クルヲ得ズ
七、學年試業ニ缺課セシモノハ更ニ其ノ試業ヲ受クルコトヲ得ズ。但病氣等已ムテ得ザル事故アリタル實證顯著ナル時ハ平素ノ學力品行等ヲ考ヘ次學年ノ始ニ於テ特ニ試業ヲ行フコトアルベシ。
八、試業ノ成績ヲ公表スルニハ總テ甲乙丙丁戊ノ五等ニ分ツモノトス
九、二回引續キ落第セルモノハ之ヲ除名スルコトアルベシ。
十、此ノ規則ヲ施行スルタメ別ニ試業細則ヲ定ム

試業細則

- 一、學期試業ハ第一學期第二學期ノ終ニ於テ豫定ノ時間割ニヨリ之ヲ行フモノトス
二、學年試業ハ每學年ノ終リニ於テ豫定ノ時間割ニヨリ第三學期試業ヲ併施スルモノトス
三、學年試業ハ第三學期試業ヲ行フトモニ其學年間ニ修習セシメタル學業ノ熟否ヲ調査スルモノトス。
四、通常點ノ調査法ハ每學年ノ始ニ於テ教師ハ各受持學科ニツキ適宜

之ヲ定メ校長ノ認可ヲ受クルモノトス

五、左ノ學科ハ試業ヲ省クコトヲ得

但シ適合ニヨリテハ此ノ外ノ學科ニアリテモ校長ノ認可ヲ經テ之ヲ省クコトヲ得
圖書 自在畫、習字、體操、作文

六、試業得點ハ總テ萬點ヲ以テ定點トス。

七、學期末學業成績調査ハ學期試業ニ於ケル各學科ノ成績ト通常點トヲ參考シテ之ヲ定ム。

八、學年試業ニ於ケル各學科ノ成績ハ學期試業ノ例ニ倣ウテ之ヲ定メ假リニ第三學期分ノ成績トス

九、學年末學業成績表ノ調製ハ各學科トモニ第三學期分ノ成績ヲ二倍シ第一第二兩學期分ノ成績ヲ加ヘ四除シテ得タル數ニヨリ之ヲ定ム。

但中途入學者ハ入學セシ學期以後ノ成績ニヨリテ之ヲ定ム

十、止ムテ得ザル事情ニヨリ學期試業ニ缺席セルモノハ各學科トモ前學期又ハ後學期ノ試業得點ノ二分ノ一ヲ與フルモノトス

但該學期間ノ通常點ヲ與ヘ得ラル、場合ハ之ヲ參考ス

十一、學年試業ニ於テ及落第ヲ判定スルニハ左ノ規定ニ係ル。
諸課目評點平均數 學年評點六十未滿ノ課目數

Table with 2 columns: 課目數 (Number of subjects) and 評點 (Score). Rows include '六十以上' (60 or more), '一課目五十以上' (one subject 50 or more), '四十以上' (40 or more), '五十未滿' (50 or less), and '學年試業點或ハ學期評點平均六十以上ナルトキハ及' (when annual exam score or semester average is 60 or more).

同 同 四十未滿 落  
 同 二課目五十以上 一及  
 同 四十以上 落  
 同 三課目五十以上 落  
 六十未滿 一 落

最下點四十以上之二次グモ  
 ノ五十以上ニシテ二課目共  
 ニ學業點或ハ學期評點  
 平均六十以上ナル時ハ及  
 學年評點六十未滿ノ課目ノ  
 數履修セル總課目ノ半數或  
 ハ半數以下ニシテ該科目ノ  
 學年試業點或ハ學期評點五  
 均六十以上ナルトキハ及

十二、倫理科ニ於テ學術ヲ五十點トシ品行ヲ五十點トシテ採點ス  
 但シ品行ハ學科ノ勤惰處罰ノ輕重其他平素ノ行狀等ニヨリ審議  
 査定スルモノトス。

十三、試業規則第八條ニヨリ學科ノ成績學業ノ品評ニ等差ヲ付スルニ  
 ハ總テ左ノ標準ニ依ル

- 九十點以上ヲ甲
- 八十點以上ヲ乙
- 七十點以上ヲ丙
- 六十點以上ヲ丁
- 六十點以下ヲ戊

此ノ規則ハ本學年ノ第二學期ヨリ實施スルモノトス。  
 但シ本學年第一學期末調査ハ之ヲ省ク。

明治三十三年

別紙十二名品行方正學術優等ナルニヨリ特待生ヲ命ジ候條此段及報  
 告候也

明治三十三年四月六日

大分縣知事 鈴木定直殿

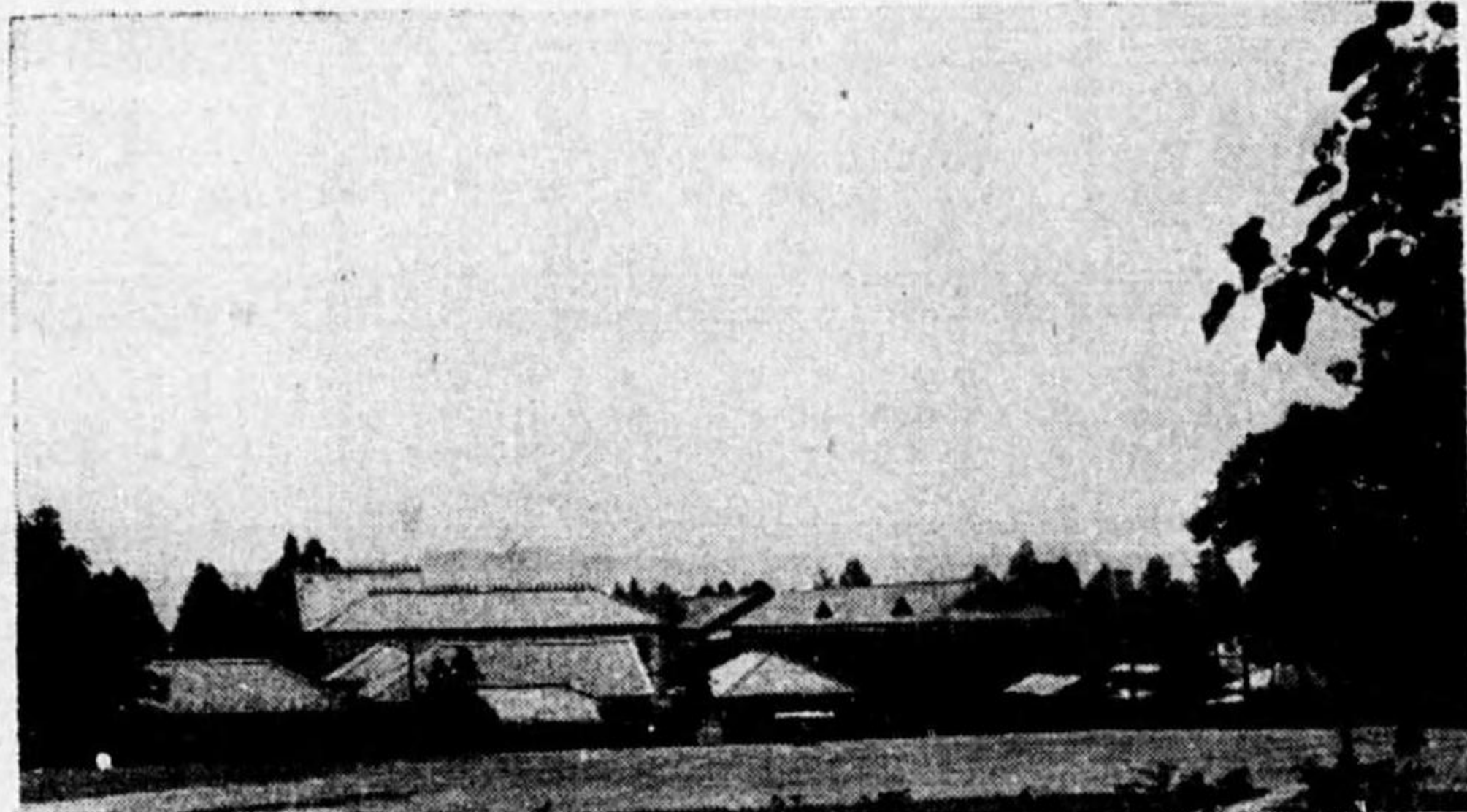
津田 純一

特待生人名

- |       |        |
|-------|--------|
| 五年生   | 佐藤 庄太郎 |
| 市丸 純一 |        |
| 加來 惟義 |        |
| 鳥養 雪夫 |        |
| 高村 悅藏 |        |
| 後藤 文夫 |        |
| 吉雄 平  |        |
| 佐々木 文 |        |
| 宇佐美 力 |        |
| 後藤 廣三 |        |
| 原 梅   |        |
| 若林 大夫 |        |
| 以上十二名 |        |

記念式典行事日程

- 六月一日【土】 記念式 (講堂) 午前十時  
 表彰式  
 祝賀宴會 (天幕) 正午  
 展覽會 (南館) 自午前九時向三日間  
 至午後四時
- 六月二日【日】 物故職員慰靈祭 (講堂) 午前十時  
 同窓會總會 (同右) 午前十一時  
 講演會 (教育會館) 午後一時  
 中等學校辯論大會 (同右) 午後六時
- 六月三日【月】 陸上競技大會 (本校々庭) 自午前八時  
 至午後四時
- 六月四日【火】 武道大會 (武德殿) 自午前八時  
 至午後四時





大分中學校創立五十周年記念歌

教諭 外山利雄作歌  
岡本利明作曲

1 オンノフータバ ミドリモエ オホイタカハ タマヒタス  
2 しつじつのーのり むねにーしめ ごうけんのいき いくえたつ  
3 キンメイノーカネ タカチーリチ ユウフウコ、ニ カホルトギ

コソセイ キウニ カガマケル タカキ リサウノ マナヒヤ ニ  
はなのしちしの えれのーご と やまご ころの わかうど に  
フカニツ ホンノ サキカケト フンフ キタヘシ ヒトゴセ

ア、カ ウ エ イ ノ ゴ デ フ ネ ン  
あ、か う え い の ご ぢ ふ ね ン  
ア、カ ウ エ イ ノ ゴ ぢ ふ ネ ン

- 一、祇園の嫩葉 緑萌え
- 大分の川 玉涵す
- この聖丘に 輝ける
- 高き理想の 學び舎に
- あゝ光榮の 五十年
- 二、實實の教訓 胸に占め
- 剛健の意氣 い蹴る立つ
- 花の散章の それのごと
- 大和心の 若人に
- あゝ光榮の 五十年
- 三、黎明の鐘 高鳴りて
- 雄風こゝに 薫るとき
- わが日本の 魁と
- 文武鍛へし 人五千
- あゝ光榮の 五十年

記念式次第

- 一、敬 來 生徒、職員、同窓生着席
  - 一、開 式 之 禮
  - 一、國 歌 合 唱
  - 一、勅 語 捧 讀
  - 一、學 校 長 式 辭
  - 一、知 事 告 辭
  - 一、文 部 大 臣 祝 辭
  - 一、來 賓 祝 辭
  - 一、同 窓 生 總 代 祝 辭
  - 一、在 校 生 總 代 祝 辭
  - 一、祝 電 披 露
  - 一、勤 績 職 員 表 彰
  - 一、校 歌 合 唱
  - 一、記 念 歌 合 唱
  - 一、閉 式 之 禮
  - 一、敬 禮
- 1、表彰状並記念品贈呈  
2、被表彰者總代謝辭

記 念 式

聖丘上野ヶ丘緑林に輝く白壁の校舎、今日新しく祇園山の青嵐に淨められてこゝに迎へる開校五十周年の記念日。

春風秋風五十年この學園に育つた同窓三千八百、現に學べるもの一千二百、等しく迎へる今日の盛儀、過去半世紀に於ける芷蘭郁青の功を稱へ將來永遠に薫るべき蕙菊涵蓄の源流に壽を捧ぐべく來賓父兄また欣々然として相會し相誦ふのである。

峨々たる由布の峯高きは我等の理想、茫たる豊の海廣きは我等の雅懐今や社會に翹翔する濟々の多士、將來鵬翼を張らんとする彬々たる青矜の子、其の誇りとするは校の傳統

- 一、聖訓を奉體し孝以て父母に事へ忠以て君國に報い臣子の道を盡すべし
- 二、禮以て師長に事へ信以て朋友に交り智を研き業を勵み生徒の自分を全うすべし
- 三、法令校規を恪守し氣節を尙び廉恥を重んじ體力を健かにし勇武を養ひ以て風紀を正しうすべし

登山豊水生傑士と嗚呼と大友の城趾に立つて遙かに神宮寺浦を眺めるとき一世の豪傑宗麟が鎮西に頌を唱へた當時の雄圖を想ふ。若き學徒の歌ふ「爲すこと無くて朽ちもせば地下の祖先に恥なるぞ」とはこゝに學ぶもの、抱負であり決心である。

新時代の新英雄果して誰なるか。今日の佳き日に當つて期待するところ亦大なるものがある。

## 式 辭

本日茲に本校創立五十周年記念式を舉行するに方り長官閣下を首め多數來賓父兄同窓生各位の御臨席を得ましたことは洵に光榮として深く感謝するところであります。顧みまするに本校の創立は明治十八年五月大分中學校を大分町宇荷揚町に設置されましたに邦り、爾來大分縣尋常中學校大分縣大分尋常中學校大分縣立大分中學校と改稱され、明治二十七年に地を豊府村宇律院に相して現在の舊校舎の新築移轉を見、生徒の數も漸次累加して昭和五年新校舎の落成と共に二十五學級定員一千二百五十名となりましたのであります。時勢の變遷に伴ひ或は分校の設置獨立、寄宿舎の存廢、校地の擴張等、校内外の施設經營にも幾多の推移を重ねましたが終始進展向上の一路を辿りつゝ、今日に及んだのであります。此の間明治四十年十一月六日大正九年十一月十四日の再度に亘り長くも皇太子殿下の御臺臨を得ましたことは本校史上特筆すべき光榮でありまして、職を本校に奉ずる者の恐懼感激に堪へない所でございます。斯の如く傳統に輝き歴史を誇る本校もその當初には卒業生僅に三名に過ぎなかつたのであります。今や毎年二百名を出しその總數三千八百三十四名に達し、社會の各方面に活躍して居りますこと偏にこれ聖代の惠澤に基くものであります。一方本校教學の精神を發揮した結果に外ならぬのであります。今や我國内外の情勢は一日の儉安を赦さぬ現狀であります。人材を要すること今日より急なるは無いと信じます。五十年前を回顧すると共に本日の記念式を出發點として將來に伸び行く力を養成する決心覺悟が大切であると存じます。縁に映ゆる上野丘に學ぶ者絶えず清新潑刺の氣象をもつて勉學に體育に一層奮勵し、圓滿なる人格を完成し以て此の記念式を意義あらしめんことを切望して止まぬ次第であります。終に臨んで同窓生各位が今回の式典に進んで御参加下され尙記念事業を計畫されてゐますことは深く感謝致す次第でございます。

是を以て式辭と致します。

昭和十年六月一日

大分縣立大分中學校長 武 智 啓 次 郎



## 告 辭

大分縣立大分中學校創立五十周年記念の盛典を舉行せられるに方り聊か所懐を述ぶることを得るは最も欣幸とする所なり。惟ふに本校の前身たる大分中學校は本縣高等普通教育の濫觴にして遠く明治十八年五月大分郡大分町荷揚町に創設せられ當時は生徒數僅々七十名を算するのみなりしが、時勢の推移に伴ふ向學心の勃興と歴代學校當局者精勵の成果とは相俟つて入學生徒數逐年増加し其後校舎の移轉學校組織の變更又は校名の改稱等幾多の變遷を経て以て今日に至る星霜を閲する實に五十年の久しきに亘れり。其間特に明治四十年十一月長くも

大正天皇東宮に在せしとき臺臨の光榮に浴し、更に大正九年十一月

今上天皇陛下東宮に在せしとき畏くも臺臨の榮を賜はりたるは眞に本校沿革史上燦として無上の光輝を放つ所なり。

而して内は克く健全なる校風を樹立して校運日に揚り、外は卒業生を出すこと實に三千八百三十有餘名の多數に達し幾多國家有用の人材を出すに至りたるは是れ本校の榮譽なるのみならず又以て國家の一大慶事なりと謂ふべし。

本校は今や此の光輝ある榮譽を荷ひて風光に富める古府内城址に屹立し遙かに雄大なる由布鶴見の巔峰に對し近く洋々たる豊後灘に臨み豪壯豁達の氣自ら湧き教育諸般の施設經營亦最も宜しきに適ひて實績彌々舉り眞に理想の學園たり。

顧るに皇國の情勢は内外共に重大なる時局に直面し學國振張時艱の匡救打開を策するに於て専ら國民教育を振興して國本を培養し國家有爲の人材を養成すること最緊要なるの秋に當り、本校茲に創立五十周年を迎へ校友一致團結して記念の式典を舉

げ榮ある本校の歴史を追想すると共に將來一段の隆盛を期せんとするは寔に重大なる意義の存するものあるを信ず。希くは本校職員並生徒諸子深く思を我が國現下の情勢に致し光輝ある本校の歴史に鑑みると共に本校責務の重大なるを自覺し益々修養研鑽に努め協心戮力校風の發揚と校運の隆盛とを圖り以て國家社會の期待に副はれんことを。一言以て告辭とす。

昭和十年六月一日

大分縣知事正五位勳四等 田 口 易 之

## 祝 辭

大分縣立大分中學校は、茲に創立五十周年を迎へ本日之が記念の式典を舉行せらるゝことは、邦家の爲慶賀の至りでありま。本校は明治十八年創立せられ縣下中學校の半數は本校より分岐獨立せるものにして、實に本縣高等普通教育の濫觴とも謂ふべく又常に其の中軸たるの重責に膺り、然も著々として其の成績を挙げ今日に迫んで居るのであります。其の間大正天皇の東宮に在せしとき、畏くも臺臨の光榮に浴し、聖上陛下東宮に在せしとき、畏くも臺臨の光榮に浴せしことは、永く本校の歴史に輝くものであります。

今や本校數千の卒業生は公私各方面に互り、縣の内外に活躍し校運愈々隆盛を致せるは、洵に盛なりと謂ふべきであります。今や國家興隆の氣運益々開くとは謂へ内外多事多難にして、材を要し士を求むること極めて急なるの秋、本日の盛儀を機とし職員各位生徒諸子は本校既往の歴史に鑑み、各自其の業に勤み一致協力以て校風の發揚に力め國運の進展に寄與せられむことを切望する次第であります。

昭和十年六月一日

文部大臣 松 田 源 治

## 祝 辭

若葉風薫る本日大分中學校開校五十周年記念の盛典を舉行せらる。

顧るに本校は明治十八年の創立にして當時本縣唯一の中學校亦本縣最高の學府として好學に燃ゆる青年子弟は悉く笈を負て志を遠く此の由緒ある學舎に求む。爾來年を閱すること五十年校運は駁々乎として盛大に赴き今や卒業生を出すことに實に三千八百有餘人の多きに及ぶ。卒業生中には廟堂の高きにありて國政に參劃せるものを始とし政治産業經濟に美術學藝軍務に幾多の人才輩出し、社會の第一線に在りて盛んに經綸を行ひ、我が國運の進展に、二豊文化の向上に多大なる貢獻を齎しつゝあることは寔に偉大なる業績と謂ふべし。

本日茲に開校五十周年を迎ふるに方り學校竝に卒業生諸士は是等先輩の偉業を紹述し益々本校の隆盛を期せんとして意義深き各種の記念行事を舉行せられ且又數萬圓の巨資を投じて記念會館の建設を企圖し着々進捗を見つゝありと聞く。

是れ實に卒業生諸士の熱誠なる母校愛の賜にして本校將來の發展又期して大に待つべきものあり寔に慶賀に堪へざるなり、今や希望に燃ゆる一千二百の大中健兒は全校を擧げて喜びの色に包まれ上野ヶ丘の聖地を圍む樹林は新緑愈々濃かに恰も洋々たる本校の前途を祝福し校運の隆昌を象徴するものゝ如し。

冀くは職を本校に奉ずる職員各位は和衷協同を基調として日夜研鑽子弟の教養薰化に全幅の努力を捧げられ學を本校に受くる生徒諸子は夙夜勉勵若草が新緑に萌えて生々發展するの意を以て常に向上の一路を辿り光輝ある先輩の遺芳を繼承し以て邦家有用の材たらんことを不肖本日此の盛典に列し感激の情極りなし敢へて所懐を述べて祝辭とす。

昭和十年六月一日

大分縣會議長 朝 吹 龜 三  
大分市長

## 祝 辭

新緑菁々として其の色正に滴らむとする時茲に本日を下して大分中學校は創立五拾周年記念の盛典を舉行せらるる寔に慶賞に堪へず。惟ふに五十の春秋は之を天地の悠久に比すれば恰も石火の一瞬に過ぎずと雖も人に在りては知命に當り時代に於ては半世紀にして必ずしも短しと斷すべからず。況んや我國に於ける過去の半世紀は實に之れ皇威發揚國運伸暢前古未曾有の盛觀を呈したる一新時期にして歐米諸國が數百年を要して齎來せる文化を倏ちにして凌駕したるに於てをや。

案するに大分中學校の創立は明治十八年にして當時我國は人口も未だ四千萬に充たす既に學制は頒布せられしと雖も痒序の設備完からず、特に中學校は漸く一府縣一中學校主義の實現を見たるのみにて大分中學校第一回卒業生僅に參名を數ふるに依りても當時の状況を察知するに難からず。然るに國運と共に教育熱の向上著しく爾來卒業生を出す事四十七回其の數三千八百有餘名現在生徒亦千二百名の多きに到る誠に今昔の感を深うせざるを得ざるなり。今や當中學卒業生諸彦は普く各方面に驥足を展し或は廟堂の柱石として政務を變理せられ或は政界に在りて輿論を正導し將た陸海軍の將士となりて帷幄に列し學界に入りては先人未發の眞理を開き財界の王者として克く金融を統理し其他廣く一般商工界に農村に國家の中堅として自力更生の途に努力専念せられ己がじ、独自の性能を發揮して報國の一路に邁進せられつゝあり豈嬉ばしき限りならずや。是偏に歴代校長に其の人を得たると全職員恒に和衷戮力以て育英の大理想に向つて精進せられたる結果並に學友間の淬礪研鑽加ふるに同窓生相互誘掖の資に外ならず。

現下我國は内外共に多端にして上下一致盛に經綸を行ふべき秋にして人材の必要今日より急なるはなし。今上野が丘新蔭濃かなる西山城址にイみ遠く千波を疊む神宮寺浦を望み遙に由布鶴見の英峯秀嶺を仰ぐ時油然として宗麟の雄圖を偲び人物育成道場として恵まれたる當中學校の前途を益々祝福して已まざるものなり。聊か蕪辭を陳べ謹んで本日の盛典を祝す。

昭和十年六月一日

大分高等商業學校長 添 野 信

## 祝 辭

新緑滴り南風薫る初夏の本日大分中學校は創立滿五十周年記念の式典を擧げられ過去を追想し校運の隆昌を祝福せられます事誠に御目出度い次第であると存じます。

顧みますれば本校は明治十八年五月市内荷揚町に創立せられ明治二十七年上野が丘の現校地に移轉年を閱する事正に五十年卒業生は三千八百餘名の多數に上り現在生徒數は千二百餘名を算し實に全國有數の中學校であります。承る所に依りますと卒業生中官界には現内務大臣後藤文夫氏を始め多くの政治家を、陸海軍には伊藤砲兵監外將校百數十名を、學界には藤波赤十字病院長外數十名の醫學博士、牧、鳥潟、谷口三工學博士を、その他實業家藝術家等多數の名士を出して居られるさうで恐らく全國では是程の人材の輩出してゐる中學校は稀であらうと考へられます。是は全く本校の健實なる教育方針と、大友氏の城址にして土地高燥遠く市中の塵寰を離れ岷々たる由布の嶺を仰ぎ茫洋たる豊の海を眺め眞に學園としてふさはしい環境の中に學ぶことの出来る結果であると信じます。

本校の生徒諸君は斯かる光輝ある歴史を有し斯かる立派な學舎に學ぶ事の出来る幸福を感謝すると共に之等先輩の功業に倣

ひ大なる理想を抱いて修養研鑽に努められ度いものがあります。御承知の如く現時の我が帝國は内外の狀勢多事を極め其の責務愈々重大を加へつゝありまして國民は戮力協心此の國難を克服すべき秋であります。將來國民の中堅たるべき諸君は一層奮起し母校今日の名譽を益々發揚すると共に日本精神を高調し國運を鑿肩に荷うて立つの氣概を養はれんことを切望して止まない次第であります。茲に聊か所懐と希望とを述べて祝辭と致します。

昭和十年六月一日

縣下中等學校長代表

大分縣師範學校長 池 上 弘

## 祝 詞

茲に大分中學校創立五十周年記念の式典に列し、縣下の小學校長を代表致しまして、祝詞を述べますことは私の最も欣ばしく感ずる所であります。

偕て私は今回帝國教育會總會出席のため上京し序に約一週間ばかり帝都の學事視察をなし、昨夜歸つて來たのでありますが、滯京中、内藤總務部長其他二三の方と大分縣人會招待の歡迎會にも出席し又個別的に訪問する要件もあつて本縣出身の多數の名士先輩の方にお目にかゝる機會を得たのでありますが、その大部分は大分出身の方でありました。而して是等の方々、官界に軍部に、或は實業界に教育界に、或は又藝術界等各方面に亘り皆其の第一線に立つて國家のために活動されて居りますことは實に目覺ましいものがあります。

此の時、私は今更の様に、光輝ある五十年の歴史を有する大分中學校が、我が大分縣民の文化を進め、國家有爲の人材を輩出して居ります其の功績は、眞に偉大なるものゝあることを考へさせられたのであります。

私は復、更に考へました。此の大分中學校の傳統的に優秀な成績に、近年は特に一段の進境を示しまして、入學試験中最難關とせられて居ります陸士または海兵の入學試験に合格する者、毎年十指を屈するの多數に上り、全國中學校中その第一二位を争つて居るといふことではありますが、これ元より素質の然らしむるところもありませうが、其の最大因をなすものは、五十年間に培れたる大中魂の校風と、後進學徒の思慕憧憬の的となる同窓先輩の活模範乃至實物教育と、現在教職員各位の一致協力、御努力との三拍子揃つた總和の力が、今日の精華をもたらしたのであらうと思ひます。

而して、今回御校が五十周年を記念せられる諸行事や、同窓會員の母校のために、多額の金員を醸出して會館を建設せられる等の美學は、大分中學校の光輝ある歴史と校風とに、更に一段の光彩と盤石の力とを添へることを確信し、眞に慶祝に堪えません。

吾々は、かゝる光輝ある歴史と校風とを有する學校に多くの教へ子を送つて居りますことを此の上もない名譽とし且つ深く感謝して居るのであります。

希くば此の五十周年の記念を一劃期として一層の御發展を期せられん事を、所感の一端を述べて御祝詞に代へた次第であります。(筆記)

昭和十年六月一日

大分縣小學校長總代

大分市金池尋常小學校長 加 崎 爲 五 郎

## 祝 辭

本日我が母校たる大分中學校創立五十周年記念式を舉行せられ其盛儀に列することを得たるは予の最も欣幸とする所なり。願ふに本校は明治十八年の設立に係り爾來幾多の變遷を経て校運益盛に卒業生を出すこと既に幾千人、有爲の材を成して社會樞要の地位に立てる者亦幾人なるを知らず。或は廟堂の柱石となりて經綸の業に膺り、或は國家の干城となりて閭閻の責に任じ、或は學術界の木鐸となりて文運隆興の先聲を爲し、或は實業界の重鎮となりて海外發展の好況を開き、其の國家に貢獻する所將に測られざらんとす何ぞ其れ盛なるや。是れ固より各自の奮勵努力に由る所なりと雖も抑亦本校教育の效果に販せずんばならず、本日此の式典に臨みて滿腔の祝意を表する所以の者豈啻本校のためのみならんや。

頭を回らせば四十餘年の昔吾が始めて教を本校に受くるや新築移轉後年月を経ること未だ幾何ならず巍然たる學堂は上野の高陵に峙ち後は蒼々たる靈山を控へ前は決々たる菌海を望み形勝の美、機構の精海内比類なきの偉觀にして本校に學ぶ者の大に誇とする所なりき。年少客氣揚々として濶歩せし當時の情況は今尙記憶に新なるものあり。後業を大學に畢へ身を教職に委ぬること幾春秋大正八年十二月に叨に乏を本校長に承く、歴代校長の遺烈は學校の面目を一新せしめ往昔僅に百數十名を算せし生徒は千百堂に溢れて増築の校舍は四邊に延び纔に萌芽を發せし園庭の樹木は鬱蒼として天空を蔽ひ舊時の状態は復認むるを得ざりしなり、在職一年有半當時の欽快は吾が終生忘るゝ能はざる所なり。

嗚呼懐かしき母校は今茲に五十回の記念日を迎へぬ。歲月は氣品を養ひ歴史は光彩を添ふ。彼の英國イートン校の名を得る所以の者は創立以來長年月に亘りて醸し成せる特殊の校風に在り、知らず識らずの間に學徒を感化する校風の威力に在り、本校五十年の歴史は亦已に剛健實實なる校風を養ひ得たり。向上進取の典型を築き成せり獨りイートン校をして聲名を擅にせしめんや。且夫五十年は人生知命の時なり過去五十年の經歷は將來更に一大進展を約するに足れり、本校の使命重且大なりと謂

ふべし。職員各位並に生徒諸子固より深く期する所あらん、是れ吾が刮目して待つ所以の者なり。敢て微衷を陳べて祝詞となす。

昭和十年六月一日

廣島女子専門學校長 柴 山 槐 郎

## 祝 辭

本校式典を舉るに際し席末に列したることを光榮とす。惟ふに創立當時は國家草創の際なりしも拘はらず、維新の皇猷は智識を世界に求め大に皇基を振起するに在りしを以て、政府は教育を尊重し外には留學生を派遣し内には各種の學校を設立し、就中學校は國民中堅の養成を目的としき。本校當事者は能く此の聖旨を奉戴して同心同力國家を双肩に擔ふの氣節を有し民心の啓發國運の隆昌に對しては萬難を排して事に従へり。爾來當事者は創業の精神に率由し更に時勢の進運に調和し夙夜匪懈美美なる學風を樹立し専心力を竭したり。今日幾百千の人材を輩出して多士濟々の諺を爲す所以は此等諸君子の賜なり。深甚なる敬意を表す。

熟方今の世態人情を觀て之を古今の史乘に鑑みるに凡そ國家興隆の際には駭々たる文明の進歩を來たし時を経ると共に人事は次第に複雑となり負擔は益増加し動もすれば創業の目的方針を逸するに至るものなり。具さに云へば國富の増進は閑暇を生し奢侈遊惰の風を醸し遂には劣悪なる娛樂に耽りて又産業を事とせざるに至り、或は温情拘すへき主従關係は一變して權利の主張を以て相争ふの醜態を演し、或は交通頻擊の結果外國の風俗習慣及思想波及し來りて國民の風俗習慣道德を薄弱ならしめ、其結果社會の平和を破壊し國家の團結を弛頹するに至るものなり。かゝる時代に在りては國民は選擇の能力自制心乃至犧牲心

一言すれば道徳的信念を以て内心を統一するに非されは國命を維持すること能はざるへし。而して我國目下の状態之に類似することはなきか頗る憂慮に堪へず。然れども世界の文明は次第に西漸して其の第一を誇れる米國の文明は今や其の東部を去りて西部に轉せりと稱するものあり。我國の前途は徒に悲觀すへきものにあらず。吾人は文明の中心が一轉して東洋に來らんことを祈願するものなり。則ち時勢の推移する所を洞察して自己の思想を堅實にし民心の統一を計ることを以て中心目的と爲し苟も國家の進運を沮害する要素は其の外より來ると内に在るとを問はず悉く之を排斥して善美なる我が國特有の文明を建設せざるへからず。

茲に創立五十周年を機として新生面を開き今後一層の自覺ある職分を盡さんことを誓はれ勤績職員諸君に對しては記念品を贈り物故職員同窓生諸氏に對しては慰靈祭を行はる。願るに目下徒に口耳の學問に走りて精神修養を閑却せんとする時に當り、本校に於て報恩謝徳先賢に則りて校運を新にせんとすることは感激に堪へず。仍て蕪辭を陳して祝辭とす。

昭和十年六月一日

正五位勳四等 父兄總代 原 安 馬

## 祝 辭

遙かに蒼碧の豊後灣を望む時雄渾の氣爲めに動き大分川の悠々たる流に臨む時清淨の氣湧く。この上野ヶ丘に建てる學園大分中學が本日創立五十周年の式典をあぐるに至つた事は寔に慶祝の至りに堪へませぬ。希望に輝く紅顔の若人達が環境に恵れた此處に集り心身の練磨と學業の研鑽人格の完成に努め春風秋雨五十年の歲月を経たのである。

この長い間上野の杜から多數の健兒が巢立し今や三千數百の人材を輩出し社會に活躍し居る事を想ふ時言ひ知れぬ矜りを感じ

せずには居られぬ。大分中學は多年本縣中等教育界の最高峰を以て自任し従て本校の入學は獨り少年の憧れのみでなく父兄として大なる伐りであつた。大友の偉業と霸氣を稽へ質實剛健の氣魄を培ひ學に勵み眞摯澁刺の校風を樹てた事が大分中學の特色であり傳統的の強い力であつた。

輝く校史五十年の記念日を迎へて私共は祇園山頭に満ちあふれた歡びの雰圍氣にしたると共にこの祝典を契機として逾本校の使命を達成すべく明日の表徴を奏する事に勉めねばなりません。更に教職員各位が克く助け熱誠その職務に竭されんことを冀ひ校運の隆昌を祈るものであります。

昭和十年六月一日

近畿大中舊友會

## 祝 辭

本日大分中學校創立五十周年記念の盛大なる祝典舉行せらるゝに當り不肖同窓生中最故參の一人たる故を以て、席末に列なれることを得こゝに祝辭を述べる機會を與へられましたことは無上の光榮と致す所でございます。私共が笈を負うて郷關を出で事實策ではなくて、振分荷物を肩にかけ、合羽代りに赤毛布をまとうて草鞋脚絆の足ごしらへも甲斐々々しく、十里二十里の山坂を越へ前途に何等かの夢を描きながら、この中學——縣下唯一の中學であつた大分縣尋常中學校に入學したのは、昨日の事の様さまざざと目前にちらついて居ますのに、半世紀の歲月は容赦なく過去り今日端なくも五十周年をむかへることになりましたのは、今昔を俯仰して感慨寔に道ふべからざる者があるのでございます。

本校創立以前縣下各地にも町村組合立の小規模の中學校設立せられ、中にも日田の教英中學の如きは、宜園の流風遺韻尙存

する者あつてか其成績頗る見るべき者があつて、故井上準之助氏、故陸軍中將吉田平太郎氏、故奉天總領事加藤本四郎氏（後大分中學に入る）の如き知名の士を出して居ります。併し是等中學の多くは設備も不十分教師も整つて居なかつた處に、大分に比較的完全な縣立中學校が出来たので、各地の中學校は前後皆廢校となり、全縣下の俊毫は大なり小なり所謂青雲の志を抱いて翕然として本校の門に殺到したのであります。

かく申せば本校が開校當初から盛大を極めた様にも聞えませうが、それは量の問題では無くて質に於て比較的優れた者が多く集つたと申すに過ぎぬので、生徒数の如きは、私の入學した明治廿二年の秋に於て新入學者一年四十餘名、二年十三名、それに在來の上級生を加へて五學級百三十名餘に過ぎなかつた様に記憶して居ります。卒業生の如きも、その年七月始めて三名を出した様な有様でありました。然るに五十年後の今日に於ては、在校生廿五學級一千一百六十名、卒業生を出すこと四十七回三千八百三十四名、この外會て在學し中途轉退學した人々を合算すれば、恐らくは右の數字に倍徒する者があるであらう。

此等同窓の人々の内には、現に廟堂に立つて經綸を行つて居らるゝ人もあり、政界に軍界に經濟界にそも／＼宗教藝術の世に現代社會機構のあらゆる斷面に於てその樞軸に近く活動しつゝある有名無名の士は抑も幾何あるでございませう。寔に蕙蘭階に茂り桃李門に滿つるの感深いものがあります。これ偏に歴代校長及び諸先生の徳化善導と諸先輩の培ひたる剛健質實敢爲進取の校風の然らしむる所と堅く信じて疑はないのでございませう。私共は今日の慶すべき日に於て一たび既往現在の諸先生諸先輩及びその背後に儼存するこの國家社會の鴻恩に想を致し、更に報本反始の念を新にしたいと思ふのであります。

翻つて意ふに五十年の歲月は人間一代より云へば殆んどその大部分を蔽ふべき長い時間でありませうが、學校の生命より申さば、今青年期に入つたばかりの元氣潑刺たる時代であらねばなりませぬ。我大日本帝國は建國二千六百年と云ふ悠遠なる歴史を有つて居るのでありますが、その生命は太陽の永遠に新しい如く新しいのでございませう。我大分中學校も當に斯の如くあらねばなりませぬ。事實又彼のウエリントン將軍をして「ウォーターロー戰捷の眞因實に茲に在り」と嗟嘆せしめたイトンの

五百年ハローの三百六十年に比べても本校正に青年であります。寧ろ少年であります。少年の明朗純眞な氣分と生々活潑な意氣とを以て日々に新にし日々に進み將來百のウエリントン百のグラッドストーン否それ等をも駕御すべき日本魂大中魂を具備せる幾多の人材を打鑄開成し、邦家生民の爲に活躍せしむべきであります。

この意味に於て我が大分中學校が創立五十年の記念すべき日を轉機として、更に新しき生命に燃え、一大飛躍の第一歩を進められむことを職員諸先生及び生徒諸子に向つて切望して已まない者でございませう。今日の上き日の盛典に列なるの悦に堪へず聊か感想と希望とを述べて祝辭に代へる次第でございます。

昭和十年六月一日

大分中學校同窓生總代 今 村 孝 次

## 祝 詞

新緑滴る潑刺の初夏の頃、多數貴賓名士各位の御來臨を忝く致しまして、本校創立五十周年の記念祝典を挙げられました事は、現在學を本校に學ぶ私共にとりまして誠に千載一遇、光榮これに過ぐるものがありません。

思ふに私共の學び舎、上野ヶ丘は地位高燥遠く由布、鶴見の秀麗を仰ぎ、清流玉を轉ずる大分川に臨み氣宇誠に高敞、俗塵を高く踏んで修學に最も好箇な形勝の地を占めて居ります。

昔から「環境は人を作る」と言はれて居ります。豊山秀で、豊水清き處必ずや傑士を生じまして五十年の歲月は政治に、軍事に、實業に、社會幾多の方面に卓越の人士を送つて、赫々たる國家の進運に寄與する處、洵に多大なるもので御座います。かくの如き名譽、かくの如き榮譽を偲び、無言の校舎を仰ぐ時、私共、本校生徒は感激に胸の高鳴るのを覺えます。



回想致しますと、五十年の輝しい歴史は事教養の任に當られた代々諸先生の薫育の賜でありますは、勿論の事幾多の艱難と荊棘の道をふみ分けて築き上げられた先輩諸名士の有難き、足跡の集積であると存じます。

吾々は新らしく崇敬の念に襟を正し負荷重大の責務を痛感致しまして益々奮闘し、御期待に副はん事を覺悟して居ます。昭和十年六月一日傳統に輝やく本校に學び光榮ある記念日に際し、今日の感懐を永久に忘れず前進の關門に邁進致したいと存じます。

在校生一同に代りまして一言以て祝詞と致します。

在校生總代 神田慶也

### 祝電

- 創立五十周年記念ノ盛典ヲ祝ス
  - 盛典ヲ祝ス
  - 御盛典ヲ祝シ校運ノ御隆昌ヲ祈ル
  - 御盛典ヲ祝ス
  - 御盛典ヲ祝ス
  - 五十周年紀念式典ヲ祝ス
  - 御盛典ヲ祝ス
  - 今日ノ御盛典ヲ祝シ校運ノ御隆昌ヲ祈ル
- 第五高等學校長 十時彌
  - 松山高等學校長 金子幹太
  - 山口高等商業學校長 岡本一郎
  - 鹿兒島高等農林學校長 草野嶽男
  - 宮崎高等農林學校長 松岡忠一
  - 福岡市修徳館中學校長 古賀毅
  - 熊本縣立中學濟々峯々長 佐々木榮太
  - 長崎中學校長 春日重泰

- 御盛典ヲ祝ス
- 遙カニ御盛典ヲ祝ス
- 五十周年ヲ祝ス
- 祝意ヲ表ス
- 記念祭ヲ祝ス
- 創立五十周年ヲ祝ス
- 遙カニ五十周年ノ盛典ヲ壽グ
- 御盛典ヲ祝ス
- 盛會ヲ祝ス
- 創立五十周年ノ盛典ヲ賀ス
- 五十周年ノ御盛典ヲ祝ス
- 五十周年ノ御盛典ヲ祝ス
- 御盛典ヲ祝ス
- 五十年ヲ祝ス
- 謹デ創立五十周年記念式ノ御盛典ヲ祝ス
- 御盛典ヲ祝ス
- 御盛典ヲ祝ス
- 今日ノ盛典ヲ祝シ益々校運ノ發展ヲ祈ル
- 御盛典ヲ祝ス

- 長州實科高等女學校長 佐藤瀧二郎
- 國民精神文化研究所々員 小野正康
- 杵築中學校 多村知常
- 佐賀關 丹羽貫誠
- 蒲江町 御手洗信夫
- 三省堂社員 衣笠一夫
- 東京 帝國書院
- 第一回校長遺族中津醫師會長 中津新聞社
- 第五代校長 村上和造
- 第十三代校長千葉中學校長 金子銓太郎
- 第十五代富野校長未亡人 津田清三
- 舊職員東京農博 富野夕カ
- 佐賀市 今關常次郎
- 高松市 鶴崎清氣
- 高松市 都崎發太郎
- 中津市 屋形治作
- 白杵中學校 渡邊正雄
- 釜山商業學校長 宇都宮益治
- 長崎縣立平戸高等女學校長 庫瀬正雄

創立五十周年記念式典ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝ス  
 校運ノ隆昌ヲ祈ル  
 御盛典ヲ祝ス  
 五十周年ヲ祝ス  
 五十周年ヲ祝ス  
 式典ヲ祝ス  
 記念式ノ盛典ヲ祝シ母校ノ御隆昌ヲ祈ル  
 謹ミテ五十周年記念祭ノ盛典ヲ祝ス  
 盛典ヲ祝ス  
 母校創立五十周年ヲ祝シ堅實ナル發展ヲ祈ル  
 本日母校五十周年記念式ヲ舉行セラル、ニ當リ遙カニ祝意ヲ表シ尙將來ノ發展ヲ祈ル  
 九期 東京東邦電力 常務取締役 竹岡湯一  
 九期 東京鐵道病院 外科醫博 阿部資夫  
 九期 東京山手急行 參典 津末良介  
 十期 大野郡上井田村 森環

舊職員 神戸神港中學校 伊藤勝次  
 同 日高等女學校長 森山儀市  
 同 長崎中學校 井口秀夫  
 同 高松市 青井常太郎  
 同 濱松師範 杉村盛茂  
 同 大阪府立生野中學校 吉田浩  
 同 千葉中學校 安田裕  
 舊配屬將校東京市 小林中佐  
 一期 札幌市北海電 專務取締役 櫻井久我治  
 四期 東京工博 牧彦七  
 七期 東京醫師 高橋文六  
 八期 京大教授醫博 鳥潟陽三  
 九期 東京東邦電力 常務取締役 竹岡湯一  
 九期 東京鐵道病院 外科醫博 阿部資夫  
 九期 東京山手急行 參典 津末良介  
 十期 大野郡上井田村 森環

光リ輝ク事蹟ヲ回顧シ衷心ヨリ祝意ヲ表ス  
 五十周年記念ヲ祝ス  
 遙カニ創立記念式ヲ祝ス  
 盛會ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝ス  
 貴校五十周年記念式ヲ祝ス  
 遙カニ祝意ヲ表ス  
 五十周年式ノ盛典ヲ祝ス  
 母校創立五十周年記念式ヲ舉行セラル誠ニ慶賀ニ堪ヘズ遙ニ祝意ヲ表ス  
 御盛典ヲ祝シ母校ノ隆盛ヲ祈ル  
 五十周年記念ヲ壽グ  
 本日ノ盛典ヲ祝ス  
 五十周年ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝ス  
 謹デ母校五十周年ノ御盛典ヲ祝ス  
 光輝アル五十周年記念ノ盛典ヲ祝ス  
 記念日ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝ス

十期 東京日銀理事 司城元義  
 十期 新潟中學校長 梅田三郎  
 十期 成興醫師 井上通  
 十二期 農林省技師農博 渡邊全  
 十二期 三重町 多田隆  
 十二期 高田町長縣會議員 伊藤謙作  
 十二期 海軍機關大佐 村上秀彦  
 在東京十二期卒業生一同

十三期 內務大臣 後藤文夫  
 十三期 長崎師範 高江幸彦  
 十三期 竹田津町神職 須磨長信  
 十四期 大阪泉尾高女 牧牛尾  
 十四期 鯛生村 西名見作  
 十四期 鹿兒島川內 足立馬  
 十四期 稅務署長 三ヶ尻長三郎  
 滿洲普蘭店 村谷平十郎  
 別府市醫師 宇都宮文四郎  
 東京辯護士 佐々木文平

五十周年御盛典ヲ祝ス  
創立五十周年記念式ヲ祝ス

開校半世紀人材雲ノ如ク燦々タリ母校、茲ニ稽首シ敬ミテ盛典ヲ壽グ

十六期 高知病院長 佐藤忠士  
廿期 東京芝浦製作所 技師 二宮弦

廿期 在東京專修大學 教授 衛藤幹太郎

廿期 內務屬 河井益夫

廿期 教育家 窪田隆造

廿期 實業家 草野忠右衛門

廿期 王子電鐵技師長 重野定之

廿期 出版業 宿利重一

廿期 出版業 波多野乾一

廿期 洋書家 權藤種男

廿期 辯護士 井澤省一

廿期 海軍々令部付大佐 永松勝

廿期 ラヂオ器製作所主 三ヶ尻喜六

廿期 實業家 森吉之助

廿期 鹿兒島高農教授 山口於兔彦

廿一期 京都畫家 福田平八郎

廿四期 宇ノ島製糸工場長 甲斐肇

御盛典ヲ祝ス

遙ニ母校五十年ノ盛儀ヲ祝ス

開校五十年ノ盛典ヲ祝ス

創立五十周年ヲ祝シ益々母校ノ隆昌ヲ祈ル

謹テ五十周年ヲ祝シ併テ益々御隆昌ヲ祈ル

期待セル今日ノ盛典ニ病ニテ參列シ得ザルヲ遺憾トス

五十周年盛典ヲ祝ス

遙カニ創立五十周年記念日ヲ祝ス

盛典ヲ祝ス

御盛典ヲ祝ス

開校五十周年ヲ祝ス

盛典ヲ祝ス

五十周年ノ盛典ヲ祝ス

老松ノ愈々榮ユル御土地哉

祝五十周年記念

祝創立五十周年記念

廿四期 宮崎縣學務部長 加藤初夫

廿五期 大分工業 津下英臣

廿五期 滿洲金光教會 稻津博見

廿六期 大分新聞社長 大津征夫

廿八期 陸軍大尉 野崎吉太郎

廿九期 京都武專教授 三ヶ尻浩

廿九期 福岡九水本社內 佐藤規佐雄

卅期 大阪朝日新聞 波多野享

卅期 小倉通信部主任 菅吉男

卅三期 別府市米屋旅館 玄川弘水

卅五期 四日市高女 御手洗武夫

卅八期 千葉中學 安東本治

四十二期 南好仁 木田伊太郎

四十四期 安達 安達林

四十七期 福岡高等學校 三瀬眞作

池邊麒一郎

開校五十周年ヲ祝ス  
 御盛典ヲ祝シ母校ノ發展ヲ祈ル  
 創立五十周年ヲ祝ス  
 母校創立五十周年を祝シ益々校運ノ隆盛ヲ祈ル  
 謹テ五十周年ヲ祝フ

中山 龜三郎  
 五高 大中會  
 大連 同窓會  
 奉天 支部  
 臺灣 大中會  
 杵築 阿南

### 勤 績 表 彰

次いで十年以上勤績の舊現職員並に傭人に對して表彰が行はれた。多年本校教育に盡瘁せられ本校半百年の校運を築き上げられた功績に對して感恩報徳の誼を重ねたのである。被表彰者總代村上主一氏感激の中に謝辭を述べられた。

### 勤 績 職 員 氏 名

在 職 期 間	勤 績 年 數	職 名	擔 任 學 科	現 住 所	氏 名
自明治二十六年九月 至同三十七年十月	十 年	教 諭	英 語	東京市芝區二本榎西町二	山田 小三郎
自明治卅五年四月 至同四十五年三月	十 年	囑 託 授	劍 道	大分市南新地	中 尾 直 勝
自明治卅五年三月 至大正六年三月	十 四年	教 諭	數 學	長崎鎮西學院中學部	村 上 主 一

### 現 職 員

自明治卅五年十二月 至大正五年四月	十四 年	同	物 理、化 學	別 府 市 田ノ湯	村 田 顯 久
自明治卅六年四月 至大正五年四月	十 三 年	同	圖 畫	大 分 市 新 櫻 町	松 本 弘
自昭和卅四年六月 至昭和卅四年四月	廿 五 年	書 記	歷 史	大 分 市 南 新 町	國 田 熊 彦
自明治四十七年五月 至大正七年七月	十 年	教 諭	圖 畫	大 分 郡 植 田 村	安 藤 速 水
自大正十五年三月 至同十五年三月	十 三 年	同	圖 畫	大 分 市 船 頭 町	山 下 鐵 之 輔
明治三十九年十二月 同 四十二年四月	二十 八 年	教 授 囑 託	柔 道	大 分 市 長 池 町	田 口 淺 吉
大正三年三月 同 八年十月	二十 一 年	書 記	修 身、公 民	大 分 郡 東 植 田 村	安 東 照 榮
同 八年十月 同 九年六月	十五 年	教 諭	教 練	大 分 市 長 濱 町	後 藤 柳 太 郎
同 九年六月 同 十年四月	十五 年	同	體 操、劍 道	大 分 市 天 神 町	藤 原 豊 彦
同 十年四月 同 十一年二月	十四 年	同	博 物	大 分 郡 戶 次 町	後 藤 武 實
同 十一年二月	十三 年	同	體 操、地 理	大 分 市 船 頭 町	河 野 行 雄



て往時を語る舊友は十數年二十數年ぶりに會つたといふものが少くなかつたゞけ談笑盡くるを知らぬといふ有様、一同記念撮影をして階上の宴會場に着席したのが六時四十分、發起人を代表して藤本忍一郎氏が立つて

「大分中學創立五十周年といふ洵にお目出度い式典に際しこの意義深い大懇親會を開くことは御同慶にたへませぬ。特に遠路を懸々御來客下さった方も少くないだけ學校當局や我々世話人として感謝の外ありません。百周年の祝典には我々は出席出來ぬだけこの五十年式典の大懇親會こそ一生一代の記念すべきものであり、大に歡樂され舊交を温められん事を切望いたします」

と開宴の挨拶を述べ、これに對して來賓を代表して出田新氏立ち頗る慇懃に「本日母校五十周年記念式に參列し欣懼措く能はざるものがあるのに今またかゝる盛宴に御招待をうけ寔に光榮の至りであります。幸に今日まで生きながらへて居ればこそこの席に列することができたと母校に古く關係してゐた私共は感慨無量のもがあります。潜越ながら御招待をうけました一同に代り厚く御禮申上げます」との謝辭を述べ更に第一回の同窓として綾井忠彦氏立ち「六十五年の老軀が今日母校創立五十周年の式典に參列する事ができた事を思ふと自分目出度いものはないと喜んでゐるのである、今日十六七歳の少年學生の顔を見た時、この四倍にも達する年齢の自分を顧みると全く光陰矢の如く年少時代の追憶深きものがあります。自分の大中在學時代は寄宿會費一ヶ月僅かに一圓七十錢であつた。大分中學こそ日本一だといふ折紙をつげられたものである」と思出多い追憶談を試み、飲み且つ談じ村上圭一、村田顯久兩先生の如き教へ子の同窓が次々と押かけ健康を祝する杯を交はすため欣々然として昔の先生に還り最後の二三人まで居残られた程である。かくて和氣場に溢るゝ大懇親宴も九時半すぎ大盛會裡に散會した。當日の出席者は次の通り(次第不同)

來賓(恩師)

- 村上圭一 國田熊彦 河野寅藏 出田新 江島文吾 村田顯久
- 柴山槐耶 松本弘 山下鐵之輔 安東速水 裏川寅藏 池上庄次郎
- 武智啓次郎

現在職員(同窓生)

- |                 |                   |                   |       |        |
|-----------------|-------------------|-------------------|-------|--------|
| 安東 燦榮           | 志村 二郎             | 縣 五六              | 得丸 武彦 | 除田 長次郎 |
| 同窓生             |                   |                   |       |        |
| 三好 一 (陸軍中將)     | 小幡 山麓 (水電重役)      | 玉置 琢磨 (大分農銀總務部長)  |       |        |
| 河村 觀三 (信用組合理事長) | 清水 政七 (大分合同不動産常務) | 綾井 忠彦 (會社重役)      |       |        |
| 池邊 爲喜 (大分無盡常務)  | 高橋 貞雄 (實業)        | 水野 和一郎 (土木請負業)    |       |        |
| 藤田 豊三郎 (寫真業)    | 桑原 儀太郎 (醫學博士)     | 清水 茂馬 (會社員)       |       |        |
| 桑 敏馬 (醫師)       | 麻生 成太郎 (實業)       | 後藤 久馬一 (辯護士)      |       |        |
| 首藤 幸人 (醫師)      | 武石 揆一郎 (銀行重役)     | 宮崎 清光 (實業)        |       |        |
| 後藤 喜三郎 (醫學博士)   | 大津 留重 (陸軍少將主計監)   | 後藤 平吾 (實業)        |       |        |
| 角 久 (醫師)        | 今山 茂 (醫師)         | 後藤 三郎 (銀行重役)      |       |        |
| 田吹 敏夫 (醫學士)     | 後藤 幸士 (村長)        | 山口 龍吉 (耶馬鐵重役)     |       |        |
| 平尾 光藏 (銀行重役)    | 牛嶋 政美 (郵便局長)      | 藤本 恕一郎 (會社囑託)     |       |        |
| 太田 守 (醫師)       | 工藤 磨 (醫師)         | 小川 直熙 (中學校長)      |       |        |
| 麻生 修 (村長、酒造業)   | 矢野 忠一 (第一生命社員)    | 寺司 薰平 (縣蠶糸組合長)    |       |        |
| 安部 猛 (實業)       | 上内 恒三郎 (元臺灣檢察官長)  | 小野 義夫 (ラサ礪鑛會社社長)  |       |        |
| 佐藤 定雄 (大阪毎日新聞社) | 小野 次郎 (縣社榎根津彦社々司) | 川上 隆正 (大分市會議員)    |       |        |
| 今村 孝次 (昭和女學校長)  | 和氣 康貞 (農工銀行員)     | 守田 六男 (舊姓出田、農業技師) |       |        |
| 安部 百老 (小學校長)    | 佐藤 庄太郎 (法學士、辯護士)  | 生野 正史 (醫師)        |       |        |
| 安東 多嘉喜 (農學士)    | 井上 明 (醫師)         | 曾根崎 財平 (航空兵大佐)    |       |        |

- |                  |                  |               |
|------------------|------------------|---------------|
| 宮崎 直 (元女學校長)     | 村井長吾 (商 業)       | 日隈 新 (醫 師)    |
| 野崎正誼 (醫 學 士)     | 有永義孝 (醫 學 士)     | 首藤幸夫 (大分市收入役) |
| 立川甚平 (醫 學 士)     | 小野真一 (生命保險業)     | 加藤一臣 (保險會社員)  |
| 渡邊善朝 (醫 師)       | 小林建喜 (元鐵道技師)     | 織部正己 (醫 師)    |
| 山上猛虎 (會社重役)      | 河村萬平 (齒科醫師)      | 野内重五郎 (銀行支配人) |
| 得丸駒生 (醫 師)       | 松山真男 (銀行支店長)     | 嶋田一郎 (會社重役)   |
| 柚須金郎 (株 式 業)     | 甲斐百千 (戸次町長)      | 山本俊一 (實 業)    |
| 挾間 直 (縣會議員)      | 上田俊士 (岩田女學校)     | 草津周三 (齒科醫師)   |
| 富米野 實 (元通信技師)    | 牧 照藏 (畫 家)       | 山下 郁 (醫 師)    |
| 山下卓二 (商船大分支店支配人) | 生野廿一 (齒科醫師)      | 美濃春生 (米 穀 商)  |
| 衛藤又彦 (大分日日新聞社)   | 加藤 久 (豊州新報副社長)   | 竹内岩雄 (醫 師)    |
| 近藤 昇 (辯 護 士)     | 家近定男 (大分トラック會社員) | 二宮輝彦 (醫 學 博士) |
| 栗林景英 (醫 學 士)     |                  |               |

### 物故職員同窓生慰靈祭

(六月二日 講堂にて)

五十年の歳月の間、哀くも我等は六百六十八柱の職員同窓生を失つた。或は本校開發に身を以つて當られた教職員或は功成つて天壽を全ふし又は鴻鵠の志空しく夭折した同窓生は、今日母校にその遺族その後輩に迎へられて注連結び渡し御幣立てし壯嚴なる齋場に幽魂髣髴として天降りし給ふ。齋主佐藤大在住吉神社々司副齋主神朝見八幡神社々司以下六人。祭主學校長。

式後直會を遺族に呈した。

### 式 次 第

- 一、開 式 の 辭
  - 一、修 禱
  - 一、降 神
  - 一、祭 詞 奏 上
  - 一、祭 文 奏 上
  - 一、玉 申 奉 奠
  - 一、昇 神
  - 一、閉 式 の 辭
- 祭主・同窓生總代・生徒總代
- 齋主・祭主・舊職員遺族總代・同窓生遺族總代・同窓生總代・生徒總代

### 齋 主 祭 詞

上野丘此の學舎を假の齋場と蔽ひ清めて五百枝真榊に由布取垂れて神籬立林して暫の間招奉り坐奉る元教職村上田長大人命を始め六十四柱命並に元學友白根次信主命を始め六七十柱命等の英靈の御前に、同窓生今は住吉神社神職佐藤馨劣くも齋主仕奉りて謹み敬ひも白さく。

曩に明治の大御代に學制を定め捉て給ひて學業を勤め勵ましめ給ひしより、日に異に進み行く時世の流の任に今は奥山の荊棘が下磯崎の藻草の間にも種々の學校の競ひ建ちて、其道の程程に學業を修むる若人の天の益人彌澤に成り増さる行くこそ天地の榮ゆる御代

の印と實に喜ばしき事になむ。

熱らに思へば吾大分中學校はしも去に明治十八年と云ふ年に創めて大分町荷揚町に建設らへ、程も無く同二十七年に緑濃き朝風清き甘き處と此の上野丘に移りて朝に夕に教育の業に勤み努めて有りしが、長しや明治四十年及大正九年には云巻くも恐き日嗣皇子命の鶴駕を迎奉りし事は言はむ術無き光榮なりかし。故歴代の校長を始め教職等は尊き聖勅の任に最も懇ろに教導き許々多の生徒等は校訓に従ひて忠に貞かに勤み勵みにし程に學校の基礎は千引の岩の動く事なく、勉て業卒へては國の爲め社會の爲めに功勤しく其身を捧げ道の隨に其の力を盡して吾大分中學の雄々しき名は四極山高崎の山の彌高く芳ばしき譽は大分の河の流の盡くる事なく、年月は小車の廻り廻りて茲に五十周年の祝典を擧げ併せて今日は故き心を温めて互に過し年の物語爲はやと同窓の集會をも執行はむとす。然は有れど此の記念の式典を擧げ集會を開くに附けても年まねく此の學校に教鞭を執り給ひ或は業卒へ或は業半途にして空しく身退給ひし汝命等と此の喜びを分ち得ざるこそ最も口惜しき極になむあな悲しきかも。

あはれ汝命達が顯世に坐し、時はとありけりかくありけりと或は春雨のそぼ降る窓により或は秋風寂しき庭を眺めてはなごかと思ひ出で偲び奉らさらむ。斯く偲び奉るに依りて緣故ある人等入組の同心に相談りて汝命達が清き赤き心以て立て給へる名譽を慕ひ直き正しき行爲以て殘し給へる功績を稱へつゝ伊加泥神靈を慰め奉らむと、御食は高杯に盛高成し御酒は壺の腹滿て並へて海河山野種々の物を供へ奉らくを、平けく安けく聞食し彌次に參出で玉串捧て拜奉らくを阿奈面白かしと相受承ひ給ひて、末長く先遠く此の學校を守護り給ひ安め給ひ教師生徒等に至るまで相睦みて學業を究めしめ給ひ進ましめ給ひ同窓學友等には朝日に匂ふ大和心の眞心に國の爲君の御爲に力の限りを盡さしめ給へやや汝六百七十六柱命の幸靈奇靈はやと白す。

## 祭 文

春逝いて綠陰濃やかなる處場を蔽ひ壇を淨めて恭しく時差の奠を捧げ大分縣立大分中學校長武智啓次郎謹みて物故教職員同窓生の英靈を祭る。憶ふに諸士や來つて本校に薫化に従はれしと就きて研鑽に勵められしと齊しくこれ皇國の基楨本校の淑哲にして振古の偉

業卓拔の鴻業期して俟つべかりしを、昊天無情假すに天壽を以つてせず不幸中道にして殞れ衆芳備難きの雄才も施すに由なく千歳恨を幽界に止め後人をして思慕恨々悲歎痛惜に堪へざらしむ。

もし夫れ在校中天折せる逸少に至りては哀矜惻々感慨特に深し。

然りと雖も諸士か薫化と琢磨の跡とは凝つて本校教學の精神となり流風長へに餘韻を垂れ瀟乎として今に存し後進子弟を矜式す。本校今日の隆昌も諸士か冥護の賜たらすんはあらず。茲に創立五十周年の式典を擧ぐるに際し遺族を請し同窓生相會し諸士在天の英靈を慰む庶くは來り響けよ。

昭和十年六月二日

大分縣立大分中學校長 武 智 啓 次 郎

## 祭 文

夢秋綠風に香しき昭和十年六月二日母校五十周年記念慰靈祭に臨み初代校長村上田長先生始め物故教職員同窓六六八名の英靈に白す。想ふに各位或ひは職を本校に奉じ一意育英の業に従ひ或は亦業を本校に受けて邦家百年の進運に寄す。

功なつて天壽を全くせし之士不幸有爲の材を抱きていたづらに夭折中途に薨れしの人、年に長幼あり時に前後あれども齊しく之れ師弟同窓因縁亦淺しとせず。上野丘上花年々に同じく人は歳々に同じからず。時に各位の計報に神を驚かし宵燈夜雨懷舊の懐に不堪りしものそれ幾そ度ぞ。春秋のたづらに回りに懐しの人すでになく八尺の嘆いつた亦止むべき。

花匂ふ春の朝月澄み渡る秋の夕祇園山頭袂を連ね文机を並べて相共に敬ひ親みし各位、今は幽明境を異にして光榮を此の盛儀に相見相語らふの道もなし。變らぬ空を仰ぎて此の喜び誰れと共に別つべき。されど此れ天の歴數人か以て如何ともしがたしされど各位の英靈必らずや母校永久の盛事に照鑒あらんことを信じて止まず。吾等同窓も亦微力以て各位が遺志をのべ校運進展と邦家に寄與する處あらむとす。



今茲に母校五十周年記念大祝典をあげ重ねて各位の英魂を慰めんとし各位往年修練研學の思ひ出深き緑りの地此の樓を假り齋場となし遠近の同窓參會して追悼慰靈諸氏の遺風を偲ぶ。涙亦新にして言すでになし。不肯同窓生を代表し恭しく各位の靈を祭る。各位幸ひに隆鑾來りて饗けよ。

昭和十年六月二日

陸軍中將從三位勳二等功五級

三

好

一

## 祭文

夢秋綠彌々濃き初夏の昨日、私共は光輝ある創立五十周年記念日を迎へ、盛大な式典に參列するの光榮に浴しました。此處に改めて祭場を設け心を清めまして物故諸先生、並びに同窓、先輩六百餘名の御靈に對し心からの祭詞を捧げます。

回想致しますれば今度此様な光榮の祝典を上げる事の出來ますのも！此如き光輝に満ちくりました大中五十年の歴史を造る事の出來ました事も！此れ一重に物故諸先生、先輩に同窓皆様方の生前の御指導と御努力の賜だと存じて居ります。今日此の盛時に皆様方の親しく逍遙され吟哦された、この聖丘に往時を追憶し、過去を偲びます時、逝く春を惜しむの情は更に哀愁の切なるを感じます。然しながら地下に安らかな眠につかれておられる皆様方の御靈も屹度喜んで下さつてゐる事と存じます。私共は皆様方の生前の御教訓を身にして向後愈々智徳を研磨し、皆様方の残して下さいました榮ある大中五十年の歴史に鑑み益々奮勵勉勵致したいと存じます。

私共は在天の諸靈が永久に大中の進運をみそなはれ、お守を賜ることを確信致します。

謹みて哀悼の意を表し、幽明境を異にはしますものゝ、此のよき日皆様と共に在る事を喜びます。

在校生一同にかはりまして慰の詞と致します。

昭和十年六月二日

生徒總代 上原利夫

## 記念講演會

六月二日 於縣教育會館

## 開會之辭

校長 武智啓次郎

今回母校創立五十周年記念式典を舉行するに際しまして同窓生のうち各方面の代表的な方々に御講演會の講師を御依頼致しました所、御多用中御繰り合せ御快諾下さいまして誠に有難う存じます後藤内務大臣にも是非御歸國の上二場の御講演を御願ひ致したのであります。政務御多端の爲已むを得ぬ次第で誠に遺憾であるとの趣旨の御懇篤なる電報が藤本理事宛に参つて居ります。開會に當り皆様の御來聽を謝すると共に講師の方々に厚く御禮を申す次第でございます。





## 自然に遵へ

陸軍中將

三

好

一

皆さんは私の講題を見て豫想外に思はれるだらう。學校長と竹田でお會ひしたときに何か専門の話を開かせてくれと言ふ事であつたが、考へて見ると私の専門については雑誌や新聞或ひは書物に澤山表はれて諸君がすでに御承知の事が多いのである。加ふるに今から三年前に現職を退いて最近の情勢とか國防上の極最近の情勢ならびに此等に對する對策等に關しては甚だ明確を缺いてゐるのであるから止めにして、私が六十年の生活に於て經驗した人の心掛くべき最大の要件と、今日に到つて漸く感得した事柄を話して多少なりとも皆さんのお役に立てばむしろ専門的なお話しをするより遙かに利益だと思つたからこの題を撰んだのです。今日は時間の關係上省略して述べるから徹底はゆくまいと思ふ。其處は後で善く御研究なり皆さんの俊敏な頭腦で御解釋になる事を希望します。

皆さん氣象上から言ふと晴の日はあり雨の日や或ひは風の吹く日がある。五風十雨と言ふ事は誠に情を得た事柄であるが去年の如く早魃の時もあるし、甚だしい降雨の歳もある。特別な悪い天氣に出會つて悪い結果にならぬ様に準備して置かねばならぬ。水は高きより低きに向つて流れてゐる。高い處から低い處に水を引く事は容易であり此れに反すれば特別な施設が要りむつかしくなる。亦人間について言ふならば目覺めて起きてゐる位何等かの運動をする。腹が減れば喰ひ度くなる。此等は人が生存して行くための要件であるが萬一その一つが缺けて眠らぬとか食事を攝らないとか言ふ事になれば生命を保つ事は出来ないだらう。又犬とか猫とかは陸上に棲むし、魚は水中にすむ。此れは自然であつて此等を飼養し様と思へば空氣中に或ひは

水中にそれ〴〵適當の場所に置かねばならない。自然と言ふものは天が與へておるところの規範である。人は自然に遵はねばならない。私は何故に遵はねばならないかを少し検討して見様と思ふ。

人が病ひにかゝつたときに薬など飲まずに自然に従つたらよいだらうか。それは適當な薬を飲んだ方がよいのだ。然し何のために飲むかと言ふ事を一步進めて考へて見れば自然に治癒する勢を助長し妨害するものを除く爲めに飲むのである。

病ひを除却する勢が自然に起る事がその目的なのである。例へば小さな瘡かさは自然になほる。然し大きな瘡かさは仕方がない。そこで或ひは薬とか手術とかによつて此れを助長するのである。どうしても自然の力を無視する事は出来ないのである。

かく考ふれば病氣なるものは自然の力を利用して治癒する事を知るのでせう。電氣療法とか指壓療法とか灸の療法等世界に廣く流行してゐるが今いつた方面を考慮した結果であらう。然し藥物の効用を無視してはいけないのだ兩々相まつてゆくのがよいと思ふ。

次に健康の増進といふ事は自然の儘にしておいてよいだらうか。特別な運動といふものは大體に害があると思ふ。近頃は學生の中にスポーツの流行が盛んなものであるが、はたして現今學生の健康素質が良好な状態を來たしてゐると言ふべきであらうか。現に徴兵検査の結果は年々にその低下を示し軍當局は憂慮してゐるのが現状である。

即ち健康増進には自然の運動が一番よい。自然に人々は色々な部分を働かせる様に出來てゐるのだ。唯心を用ひて働かせればそれで一番善いと言ふ事になる。最近のラヂオ體操は此の理にもとづき至極結構な事である。唯これが持續し得るや否やといふ事によつてちがふのみ。一般の人々が體得する事の出來ないのは永續性如何によるだけである。一日十分十五分の繼續は人を立派な體格に仕上げてくれるものである。私は中學の一、二年の時には整列の終りの方におつたが幼年學校に入つて一層自分の體格の貧弱な事を知つて此れではいけないと。朝一時間前に起きてよく機械體操をやつたものである。面白くないから續かぬ。そこで友人に頼んで一詣に運動して貰ひ兎に角三年の頃には今日と大差のない状態にまでなる事が出來た。

若い者と言ふものは一旦その考を抱き忘る事がなかつたなれば如何様にも體質の改良が出来るものと確信したのであり

ます。また、太陽の恵など言はずもなである。すべて自然に従ふ事が大切なのである。農家の作物はその土地その自然の傾向に合致したものを作らなければいけない。特殊なものを作るにはどうしても無理が出来て永續しがたい。その努力が永續しかねるのである。

晝は明るく夜は暗い。暗い夜に寝るそれが所謂自然なれば人は燈火などつけなくて寝ればよいではないかと言ふ議論になる。誠にその通りである。その方が身體の爲めにもよいのである。而し必要があれば夜に仕事もち越さなければならぬ。夜仕事をするには暗くはいかぬから燈火をつける事になる。此れは自然の道行きなのである。然し大體に於て休息するのが夜なのであるから働きを連夜持續さす事は自然の理にもとり悪い結果を招来するのである。

自然は宇宙の理法の表現であり自然程萬物生々發育のものはない。であるから自然に従ふといふ事は人の道なのだ。孔子も「天の命此れを性といふ。性に從ふ此れを道と謂ふ。道をおさむる此れを教と謂ふ也」とあります。性は本性、本性に從ふのは人たるの道であり道をおさめて行くのが教へであると言ふのであるが孔子すらすでに如斯。然し此れに反する説がある詮じつめて見るとどういふ説である。

(一) 人の欲望には——ほしい。食ひ度い。など自然に生じてくるそれなれば自然に従ふといふのであるからそれでよいか？と。

この説ももつともな説であるが但し或程度迄從つて良いが亦適當量の攝取はよいけれども限りなき欲望は身をそこねてしまふ。凡そ欲しいといふ欲望は人々を働かせ進歩向上の原動力になるのであつて佛説では欲が邪惡の根本とされてゐるがこれは間違ひであると思ふ。正しい方法によつて欲望を満たすといふ點に着目して行く事が結構なのだ。然らばその程度は如何。人類が長い〜期間に自らその程度を知り、不明な幼少年の時期に於ては母親の指導によつてその程度分量なるものを感知するのである。其處で人類の欲望は自然に生じ、そして自然に從ふ事はその方法と程度の適切なれば善いのだといふ事がわかりでせう。雨が降れば傘をさして出る唯自然の事柄である。決して自然を征服するわけでもなく自然に従ふのみである。人々は

自分の目的にかなふ様に自然の環境を改良して行かねばならない。それが人としての特質であらう。決して自然の環境を改良するのではなく利用するのである。かくの如く自然に従ふ事については疑ひの餘地はないのであつて自然に従ふといふ事はとりもなほさず自然本來の性質を明らかにする事なのだ。そうであるならば自然の性質として數へらるべき重要な要項は何々であらう。

一、自然には無理がない事である。例へば人が身體を働かす場合倒立よりも歩いて行く方が自然で無理がないでせう。

晝夜の點についても晝の方が萬事無理が行かないのである。

二、自然は純眞であつて一點の飾りがない事が第二番目の特質だ。第一の無理があれば長續きしないであらうし飾りがあれば本性を没却し實質に合致しないといふ事になり又不自然になるのです。

三、自然は中庸である。中庸の語については先哲すでに此れが必要を述べ諸子亦此れを知る。或人が非常に成功し非常にうらやまれる幸福を得てゐる様なものがあるとす。然しそう認められる程幸福が満ち〜ておつて結構なりと斷定は出来ないものである。一方がよければ一方が悪く不幸だと考へるのは人が色々とその氣持でふりかへつて見ると出てくるものだ。他人の菜汁で他處目にはちよつと幸不幸はわからない。十中八九の人々は大體かくの如きものだ。總ての人々は平均して見るとほぼ同一状態にある事を知るだらう。だから初めから餘り幸福な様にも見えす亦不幸もない平々凡々といふ少し當らぬが平穩に生活してゐるといふ事が結局最後の幸福者と呼ばれてよい様に思はれる。氣候でも夏の暑さがあるかと思ふと冬の酷いさむさがある。春秋暖和なときが一番しのぎよいのはあたりまへである。物は一方に偏すると出来ない。さればこそ中庸を得た處が一番人に利用されるのである。

人間も智、徳、體の三者の備はつて完全な人間になる、ところが往々にして智育の方面にのみ考へを向けて徳育や體育に缺くために或ひは人格的不具者となり、或ひは病弱、國家の役に立たぬ様になるのである。人はこの三者いづれに偏しても行かない。

一つのもがあり、そして其處に此の自然の形がある。その自然に従ひこの自然を利用して行けば凡そ間違なくやつて行けるであらう。

四、それから亦自然の現象として因果應報といふ事がある。此れは自然の現象である。主として佛教の方で言ふのだけ儒教の方でも「積善の家に餘慶あり」とか「天網恢々疎にして漏さず」とか同一の意味を言つてゐる。結局は同じである。故に大聖人は異口同音に唱かれてゐるのである。佛説で善因善果といふ様に未生の世、死後の世に迄言及されてゐるが吾々はよくこの理を感ずべきであらう。此れは原則であつて一、二の例外はあらうが實際に於て肉體的な應報はなくても心の悩みとして十中八九の因果律を見つかる事が出来るだらう。

以上の如く各種各様の問題は自然に違ふべき見地からその正否を判断する事が出来るのである。例へば私達には忠孝信義の徳目がある。忠や孝やこれらはすべて我國に於ける最高最上の道德である。現今には所謂新道德なるものを生じてこれだけばいかないと迄言ふ人々がある。孝などについても親が子を勝手に生み育てるのは當然であつて恩など感ずべきものでないと言ふ者があるが非常な間違ひではないか。

自然に心中に起り来る情。此れを忠と言ふ。萬一起らないといふ様な者は特別な性質をもつた不具者であらう。心の中には生ずるがその自然に起り来る情を抑へつけて理窟を以て詭辯し空論をする輩なのである。孝にしてもその通りだ。これが自然の情なのである。或ひは亦共產主義などについて考へて見ると人が一心になつて働く。働くだけの勞益を得。得れば長年月には蓄積して金の所有を見ることはあたり前であり自然の事である。この主義も今日では内容を異にしてしまつてゐる。純粹の主義は形をかへてしまつて居る。帝制時代の壓制に對する報復の一手段につかはれたのだ。

社會改良についてはどうだらう。改良は教育によつてこそ自然に到達するより外に途はない。日支關係にしても滿洲國獨立によつて兩國の感情はかなり尖つてゐる。親交が厚いとか何とかいつてもそれは表面のみだ。自然の運行といふ見地より見れば日本をうらむのが當然だらう。然しこうなつた現状から言へば獨立までした滿洲の權益をむざ／＼手離す事などは到底出来

かねる。支那をしてあきらめさせる。即ちやむを得ずとさせるべく方法を講ずるのが目下の自然の成り行きである。

國防と財政は日本にとつて重大問題である。國防如何に完全なりとも金がなければ屈服亦止むを得ずと人は言ふ。而し貧乏でも戸締りをしない家はまあなからう。盜らるべき何物もなくつても戸締りをするのが自然である。國防と財政、その中庸を辿る事によつて完全の域に近からんとするものである。

要するに人は適當な道を歩んで行かうといふならば「自然に遵へ」の言葉を強調する。自然に遵へと言つたからとて世の所謂本能主義や享樂主義と混同してはいかない。自然の大道に則つて各自が正しく中庸の道を歩む事これが人の一番大切なことであると確信します。長い間清聴された事を感謝します。



五十年前の大分中學校  
鎌田榮吉先生の校長時代

綾井忠彦

(伊東俊藏收)

私はこれまで講演などを致したことはないであります。又致す様な資格もないのでありますが、自ら求めて此講演の前坐位は勤めるのが私の義務でないかと思ひましたのは、此大中五十年記念會には、東京では三四年前から其準備を始め、鎌田先生の發案で、大舉西下、一週間計り別府に滞在、大講演會を開かうと云ふ計畫のあつたのが、鎌田先生突然の薨去により、是が水泡に歸したのでセメテ鎌田先生の御遺志でもお傳へ致したいと思つたからであります。鎌田先生がドウシテ大中會及大

中其ものにかく迄深き興味を持つ様になられたか。其経緯を御断し致しますと……。

東京に大中同窓會の出来ましたのは三十四年前の昔で、牧彦七博士等の發起、其會員は重に卒業生のみでありましたのが、七八年前草野忠右衛門君等の世話人たりし頃、半途退學生をも入れることとなり其頃から會名も大中舊友會となりました。私共は其時始めて招集せられ出席致して見ますと、誠に朗らかな集りで「貴様は最古参であるから創業時代の思出断でもやれ」とせつかれるので、初代校長村上田長先生の人格極めて崇高なりし事、第二の校長鎌田榮吉先生の更に又偉大なりし事、其當時の文部大臣森有禮卿が巡視して此學校を日本一の中學校と褒められし事、等々の思出断を致しますと、大部分の人には前文部大臣の鎌田サンが大中の校長だつたと云ふ断は初耳だつたので、此次ぎの會には是非共其鎌田先生を引き出さうぢやないか、貴様も世話人となり其役目を勤めると云ふので、無理に世話人に加へられたのであります。

其れから六ヶ月を経由し彌々大會の日取と場所が定まつてから先生を訪れ來意を告げると先生非常に喜び「萬難を排して伺はわう、其日は生憎聖徳太子の記念會に出席の約束になつてゐるが其方は代理に讀ませて貰ふのであるから大中の方に参いらう。私の大分時代は年少氣鋭、生涯中最面白く活動したので思出が深い、時にウエインライトと云ふ米人を知つてゐるか」と聞かれるので動三等か動四を持つてゐるドクター・エス・エイチですかと尋ねると、アノ米人は私よりも偉らぬ男で最初私が大中に招いた人だと云ふので、今度は草野君と共に此先生を訪れると、更に一層喜ばれ夫婦打揃つて來られたのです。其晩は非常の盛會で兩先生から在校時代の最面白き懷舊談があり、ソレからと云ふものは毎回此兩先生は殆ど如何なる場所にも必ずお出で下だされたもので、此五十年前には三四年前から尤甚大の興味を持たれ鎌田先生の御發案で兩先生は申すに及ばず、二三の友人をも誘引し、久留島武彦君等と共に大學して西下し大講演をやり記念會を最意義あるものとしたいと云ふ計畫のあつたのが不幸先生の急病、御薨去によりダメになりましたので、セメテ皆様に鎌田先生の御遺志の一部分丈でも御傳へ致したいと思つたのであります。久留島君が以心傳心西下されたのは誠に嬉しい。ソコで本講演は本職の同君に譲ることとし私は只其前哨を勤めるのであります。私が演題を「五十年前の大分中學」と致しましたのは昨年末學校から出た文献を熟讀します

と其當時の學生の事は申すに及ばず恩師の御名前さへ其大部分が全く忘却されて居るので、せめて私どもの生存中に其思ひ出を申し上げ口碑に代へるのも一つの義務ではなからうかと感じた爲であります。

扱五十年前と申しますと明治十八年で、一世紀の半分であります。是を六倍接き合せて溯りますと家康時代に達し、五十一二倍致しますと神武天皇時代にも達するのでありますから、見様によりては随分永い昔です。忘れられる事も無理とは思ひませんが、六十五歳になる中老の私共から十五六歳前後の中學時代を顧みますと、過去五十年の光陰は瞬く間に過ぎ去つて居ります。若し其思出をやり初めますとソレからソレと止め切れない程湧き出して、其時代の先生方や學友共の面影が幻しの如く眼前にちらつき始め、果ては試験問題迄も思出すのです。人生五十年の中コドモとオトナの境目即ち中學時代の思出程楽しいものが有り得ませうか。

ソコで先づ其時代の一般文化を回顧しますと、鐵道は京濱間二十哩有つただけ、汽車はまだオカ蒸氣と呼ばれた時代、電信局だけは西南戦争のお蔭で大分だけには有りましたが臼杵にはありませんでした。電話などはまだ出來て居ない頃、況や電燈に於ておやで、灯し火はアンドンとカンテラと石油ランプ、自轉車などは無論ありませんでしたが人力車は有りました。是が唯一の交通機關で鶴崎から大分迄五錢位でしたが我々には乗れませんでした——ホントに。

私の入校致したのは開校後約半年、明治十八年の暮だと思ひますが間もなく上級に編入されましたので少々僭越ながら第一期生と申して居りますが厳密に申しますとまだ約六ヶ月の先輩があります。元勸銀重役安倍(仲町)午正君や元檢事正吉良(吉田)辰次郎君等が其れで別府の武田綾太郎君や平山茂八郎君などもソウだと思ひますが、遺憾乍ら後者は昨年末の名簿には載っておりません。

扱私は臼杵の生れ、入學試験を受けますには二三の友人と山越し八里を徒歩で大分に参り竹町邊の宿屋に泊まつたのであります。隣室には竹田から十一里歩いて來たと云ふ三四人の受験者が居りました。所が受験當日此等竹田の連中が朝の三時頃から起きて騒ぐので、一體何事が起つたのかと訊いて見ますと、今蒸汽船と云ふものが來たさうだから駄足でカンタン迄見に

行くのチャとの事、而も其船は私ども白杵人にはモ一珍しくもない宇和島通ひの二百噸位のものであつたので吹き出したのであります。入校後此等の連中をからかう場合は「蒸汽の笛が聞こゆるがケフは行かぬのか」なぞやつたものです。當時文化の程度はコンナものでした。イヤ文化とは此頃の言葉で其頃は文明開化と申しておりました。

其頃白杵から大分の中學に入ると業山にも之を遊學と云ひ、友人からは羨まれ親類のものからは餞別などを澤山貰つたものであります。今の人が聞いたら吹き出すでせうが、親友の中には漢文で「伊東儀藏君(私の舊名)の大分に遊學するを送るの序」なんて云ふものを書いて来てマヂメに之を読むと云う始末、コチラも感激して「男子志を立て郷關を出づ學若し成らずんば死すとも還らず」なんかの詩を高吟し意氣揚々家を出る、出發に際し父からは「内は金が有り餘つてお前に學問をさせるのでなく、無いからさせるのチャ」と云ふ論法「中學に入り小學時代より成績が下がつたら學費は送らぬから歸つて肥タゴを擔ぐちゃ」と云ふ、肥タゴを擔ぎたくなくば勉強しろとのナゾであつたが、母は私を途中迄見送りながら「オトウサンはあんな事を云ふが、學校で人並に出来れば澤山チャ、ドンナ事があらうとも尿勉強はしてくれな」とホロリと涙を落としました。此涙と此誠めは私の終世忘れぬ所で、大分でも東京でも外國でも體だを傷める様な尿勉強はしなかつたです。幼少時代から餘り強くない私が七八十名の同期生中今日迄生存して大中五十年祭の盛儀に参列し得たのは一つは天運でもあらうが私は之を母チャ人の賜ものと思つております。

學校の展覽會に寄贈致しました五十年前の全校生徒の寫眞も實は母が私の試験答案等と共に數十年間深く篋底に藏してあつたのを私の亡妻が之を貰ひ受け更に私方の佛壇の底に入れてあつたのであります。之を見ますと其人々の面貌と姓名とが新らしく記憶に浮き上りますのみならず。其服装から五十年前の風俗がよくわかります。即ち悉く羽織、袴で私の着物は一切母の手織手縫のもの許り、其頃まだ紡績絲と云ふものがなく綿絲も皆母がヨナベに手車で紡いだものです。又メリヤスと云ふものもなく今日のワイシャツ同様の襦袢も足袋も皆母の手製、足袋には紐がついておりました。但し履物丈は殆ど全部靴で學校の玄關には靴の外昇降を禁ずとある大きな表札がありました。靴は兩側にゴムを入れた短靴で多くは跣足の儘つきこみ、底に

鳴り皮を入れギューギュー鳴らして喜んだものです。髪は御覽の通り此節のモボ同様長く延ばして之を分けたものです。併し油は知りませんでした。制服制帽の出来ましたのは兵式體操の始まつた時十九年の夏ではなかつたでせうが、帽子は獨逸帽、マ一クは略今のものに近いと思ひますが、制服は覺えて居りません。値段は割合に高く二圓七十錢?と二圓四十錢?の二種あり、私共は安い方を作つたのでした。

生徒は一回生と二回生と三回生何れも年齢と學力に非常な差違がありましたためか、十九年の夏秋かに試験で組を作り直したと思ひますが、其一級は所謂多士儕々たるものでした。殊に俊才として記憶致して居りますのは白杵の安倍(仲町)牛生(元勸銀重役—生存)、北野貞一、西郷富藏、大在の姫野直次郎、大分の春山象雄、(皆早世)、竹田の吉良(吉田)辰次郎(健在)杵築の矢野道生、中野省吾、友成才次郎(皆天)鶴崎の松尾樹(子之八)(淺野同族重役健在)中津方面の藍原策治(早世)、跡田直一(名岐電鐵社長)、別府の武田綾太郎(健在)、三佐の櫻井久我治(北海水雷專務健在)、宇佐の池田卯吉、日田の江田重人、森の加藤本四郎(元仁川總領事皆早世)等の諸士、就中最後の加藤本四郎氏に至りては異彩を放つた偉材でありました。

勉強家を以て有名であつたのは白杵の橋本定吾、杵築の八坂半六、白根次信(皆早世)、大分の井上長太郎(慶應教授)、大島翼(三菱造船)、三重の成田惟忠、鶴崎の川上貫一(師範(轉職)、國東方面の熊野御堂幸一(醫師健在)速見の阿南虎彌等の諸氏で元氣發洩何時も朗かであつたのは白杵の平川長一(千代田生命)、高橋貞雄(健在)、國東方面の松原惟一、大分の井川源太郎、竹田の谷岩彦、土佐の桑原榮八郎兄弟、佐伯の一瀬儀一郎(早)等の諸氏で、其他今猶最よく、其風采面貌性情等を記憶し愛慕の情に堪へざるは白杵の河野芳太郎、安東十郎、稻葉武熊、寺井武五郎、村瀬龜三郎、杵築の山本歸一、丹生の渡邊銀次郎、別府の山田時太、竹田の大岩松次郎、西脇源次郎、豊前方面の後藤甚作、秋山源太郎、大分の工藤猪鹿、杉浦熊雄、藤田豊三郎、日田の衛藤菟平、鶴崎の木村平想、大在の森與三郎等の諸氏であります。其多くは消息不明誠に遺憾千萬であります。

擬入學當時の校長は前にも申せし如く村上田長先生と云ふ福徳圓滿の老學者で誠に善い方でした。教頭は野村成次郎先生で物理(ステューワルト)、化學(ロスコ)、生理(カッセル)と唱歌を教へて下さいました。唱歌は始めは琴で、後オルガンに變

はりましたが、歌はこの節幼稚園で教ゆる「春は花見、三好野、芳野」と云ふやうなものから、「春の彌生の曙に」などと讚美歌其儘の節などをやらせられました。私は唱歌が極端に下手で百點中三十四五點でしたが櫻井君などは誠に上手でした。數學は阪部祐吉先生と云ふ頭の誠にイイ方教科書はユウクリツドの幾何、トドハンターの代數、(其頃にはまだ點算とも云ひました)等々、英語は秋山政篤先生、教科書はウエブスターのスペリング、ウイルスンのリーダ、クワツケンボスの小文典、パーリ萬國史等で發音は随分變則でしたが親切な篤學者でした。後中川一郎先生が来て讀本はナシユヌルとなり、習字はロングマンズからスペンスイーリアンに變はりました。

最も盛んだつたのは漢學で教師は合志林藏先生と、學校の表札を書いた宇都宮健哉先生併に書記を兼ねた書家の石黒元一郎先生で用書は大學、論語、近古史談等で時々日本外史、文章軌範、史記の刺客列傳などの白文訓點をやらせられましたが、生徒には入學以前に九ツの年から漢詩を習ひ二三千句も作つたと云ふ阿倍牛生君や論語の古註に精進して居つた松尾樹君などが盛んに先生を苛むるので誠に賑かなものでした。例之は先生が會子日々に三タビ我身を省みると訓むとそれは三ツモテでなくてはいかぬとか先生が夷狄だも之れ君あり諸夏のなきが如くならずと讀むと其れは夷狄の君あるは諸夏のなきに如かずの管ですなどとやるので果ては先生がオコリ出した事もあります。其頃の學生は大抵日本外史の外史子曰くや前後赤壁の賦位は暗誦して居つたものです。

圖畫は大矢廣先生と云ふ若い親切な人、地理と和文は山田寺法元先生と云ふ人で室鳩巢の駿臺雜話などを教へてくれました。兵式體操の教師に岡崎實桃四先生といふ軍人がありまして「我は官軍、我敵は」とか「一里半也、一里半」などの軍歌を歌ひながら遠足などに連れていつてくれました。私どもの在學中はベイスボールとかフットボールとかテニスとか云ふスポーツは何にもまだありません。剣道や柔術もなく唯一の楽しみ兎狩位のものでありました。

私共が忘るゝ事の出来ない先生の功德は土佐人であつたため、其發音が明瞭で何時も親切にジとチ及ズとツの發音區別などを教へてくれましたことです。是は東京で餘り區別しないから平生の會話に利用することはなかりしも其後私は英人から英語

を習う時、非常な役に立ちました。即ち英語のJ又Gの正しき發音は東京又は大分のジエイ又はジイ即萬國音符の長いゼツドにあらずして土佐人のチエイ及ヂイ即Dの音を含めるDZHたることを知り誠に嬉しかつたです。チャパンの發音は安い様で仲々ムツカシイ、日本人で此Jを全く正しく發音し得る人は誠に少くないのであります。

閑話休題、明治十九年の夏、暑中休暇から歸校しますと上記の村上名校長が既にお退きになり、其跡に福澤先生の一の弟子鎌田榮吉先生が來らるゝと云ふ噂の出た時は一喜一憂、生徒間にもかなり大きなセンセーションを起したのであります。最も驚きました事は新校長の

月給は舊校長の二倍以上で百圓と云ふのを聞いた時であります。今でこそ百圓何んでもありませんが、其頃の百圓はタイシタもので、私の記憶によると其頃寄宿舎の食費壹圓、七拾錢、鶏卵一個參四厘、大分別府※



鎌田榮吉先生肖像  
井忠彦氏寄贈

※一流ハタゴヤの宿泊料一泊拾七八錢、總ての物價が今日の十分の一乃至十二分の一、購買力から計算致しますと先生の月給は今日の千圓乃至千貳百圓位に相當するのであります。更に驚きましたことは此新校長は私どもの豫想の如く五十以上の髯ムシヤでなく所謂五陵の貴公子然たる紅顔の美青年、おん年僅かに二十八殆んどドノ先生よりもお若かつたのであります。

同君は先生が大分に到着の當日、まだ登校もしない前、先生を其旅館に訪問し「私は今少し上の學校に入るため上京したいと思ひ退校願を出しましたがドウシテも許されません。おまけに私の持つてゐる舎長の辭令が縣廳から出るので先づ其方の退任願を出せと云ひますがドウ致しませう」と相談すると、先生直に「自費で修業してゐるものが、退學したいといふに願書が必要と云ふ譯は私にもわからぬ、直ぐ上京しても宜しい、私が許す」と即答されたさうで其晩食堂で此ニュースが放送されると一同皆度膽を抜かれ、新校長はエライゾと云ふ叫が起つたのであります。鎌田先生は晩年迄此事を能く記憶され東京の大中會

でも嘶された事がありました。ところが此新校長は一ヶ月位毎日各教室を見廻るのみでしたが、突然全校生徒を一堂に集め「明日から習字、英語の讀方、會話、書取と修身は自身で受持つ」との御宣言、即ち習字は判紙一枚に四字か五字の手習では實用にならぬからと云ふので巻紙を手に持ち乍ら手紙を書く道を教へられ大に重寶致しました。一つの熟語を二行に分けて書いてはならぬと云ふことも先生から承りました。

併し私どもが最も面白く感じましたのは修身です。従来は只漢學の先生から乾燥無味な御話ばかりでイクラ學而時習之不亦樂乎などと講義されても一向樂まなかつたものが、先生になつてからの修身は三級を一堂に集めた大演説で、私共には最も耳新しい獨立自尊と云ふ個人道德の講義から國民の義務、參政權の問題、國會開設の必要論、時事問題迄も聞かされたのであります。今日アメリカ獨立戰爭をなさるかと思へば明日はフランスの革命談と云ふ式に毎日話題が變はり、フランクリンの自叙傳が出るかと思へば其次ぎはワットの發明苦心談が出ると云ふ有様、生徒に於ては此修身程面白き課業なく、熱のある病人迄も先を争ふて出席する程でありました。殊に先生が品のよいモーニングで手先をチョッキのボケツトにかけながら演壇に立たれた時は全校の生徒が魅せられてしまつて思はず拍手したものです。其頃には既にヒヤ／＼と云ふ喝采の呼言葉がハヤリ始めてをりました。

先生の出す修身の試験問題も揮つておりました。一ツ乞食に物を與ふるの可否如何。一ツ、田舎の小供が見ず知らずの人に洋服でも着てると、お辭儀をするのは善いか、悪いか、此二ツの問題の出た時、私は隣席の加藤本四郎君(當時神童と呼ばれた俊材)と申し合せ、互に正反對の答案を書き、君が百點なら僕がゼロ、僕が滿點なら君が落第、面白いぢやないかと嘶し合つたのですが、不思議にも双方同點となり大笑を致したものです。在學中の出來事で最も面白かつたのは、時の文部大臣森有禮卿の中學校巡視の時でした。従来は縣知事の入來と聞いても校舎の大掃除、道路の修繕など大騒ぎをしたのに、鎌田先生何一つ平生に變りたる事なく、大臣にお辭儀をするに腰さへ碌にかゞめない。恰も友人故舊の如く談笑自若たるにはワレワレ全く膽をつぶしたのであります。特に驚きましたのは先生先導となつて大臣を案内するに南舎の南端、校内最も不淨の場所ま

で隈なく之を見せた上、自ら其戸を開いて内部までも示めされた事でありました。後で先生に向ひ大臣にアンナ所を見せたのは失禮ではなかつたですかと訊いたら、大臣が見たい様であつたから見せた迄だ、幸に諸君が平生自分の説く自尊心なるものを了解して、壁に何等の落書なかりしたため、大臣から日本一の中學校だと賞められ大に面目を施こしたと云つて喜こばれました。

私共が一度先生からヒドク叱られましたのは年中行事の一たる賄征伐をやつた時で、其理由は御飯の分量不足と云ふのであつたが、實際は早く食卓についた手がシヤモジを奪ひ合つて詰め込むので後れて來たものには飯がなかつた爲でした。これは生徒等が人間の行儀を知らず。豚のマネをするからだとしてヒドク叱られました。果せるかな其翌日は修身の時間に西洋食卓行儀二十四則とか云ふものを聞かされました。それから先生は食堂の生徒自營制度を説かれましたがこれ丈は時機尙早とでも申しませぬか實行されませんでした。近來國語の標準化と云ふものが大分問題となり、國語の審査に發音の研究迄も含まれる様になりましたのは誠に慶賀の至りでありませぬが、四十九年前鎌田先生は既に之を大中で實行しようと努めたのであります。即私共が先生をシェンシェイ(SHENSHAI)と呼ぶ毎に一々センセイ(SENSEI)と正したものです。五十年前大分では團子をランゴ、道路をロウロと呼んだもので、是が一番直されました。中津人の私をアタシと云ふのも可なり非難され、宇佐のツをTU、津久見の手をチェも大分笑はれたものです。東京ものゝお火をオシ、東北の越後をイチゴ、お鮎をオススと云ふたりすることの如何に耳障りであるかは御承知の通りであります。縣の代議士などが其演説中政治をシェイジ、政府をシェイフとやるはまだしも、大臣をライジン、机をTUクエ、松田をMATUダなどとやられては折角の名演説も其光彩を失ふのみならず時によりては全く臺なしとなるのです。シカモ御本人には決して之を自覺しないのでありますから寧ろ悲哀です。方言は恕すべし時としては愛嬌あるも發音の誤謬だけは中學時代迄に矯正して置かないと一生の損です。五十年前の鎌田先生は其點に於ても先覺者でありました。

前申しました通り先生が英語の讀方と書取と會話を自ら受持つた事は英語は目のみを以て讀むべきものでなく先づ耳で聞き



口で話すものと云ふ主義を實行せんとする爲めで發音とパンクチュエーションは八釜しいものでした。教科書はリーダーの外、佐藤顯理の會話篇、イムブリーのエテイモロチーでパーリーの一頁などは暗記させられたものです。森文部大臣の巡視せられた時の課題は會話篇中の「行く」と云つたら必ず行くさ、火が降らふとも槍が降らうとも」即「When I say I will go I mean that I will, if rains cats and dogs」とザットと云ふ語の三ツ續く例、即イムブリーから「What is that that that crow has in its mouth?」アノ鳥の口に啣へてるのは何ですかと云ふのをやらせられたのですが、私どもはこんなものを棒讀みした丈で意味が人に解からうとは思はなかつたのです。大臣が解かつたと云はれたと聞き驚きました。それから一般生徒間に發音の研究熱が高まり、學校には一冊しかない子安の英和字彙を引つ張り合つて發音の符牒を研究する様になつたのでした。所が字引にある發音と先生の教へるのは時々違ふので之を詰つて見ると先生はイツデモそれはドチラでも宜しいとかたづけられるので私どもが少々先生を疑ひはじめた頃、私ども二三の生徒が先生と共に市中を散歩して居りますと途中で大分に永く滞在し日本語のウマイ外人の宣教師に邂逅したのでありました。私どもは其時生れて始めて握手の禮と云ふのを見たのです。處が先生は握手と同時にベラベラと一瀉千里愉快さうに物の十分間も續けさまに話し合つたのでありますが、傍聴してゐる私どもにはオイタと云ふ言葉とベツと云ふ言葉以外は皆目解かりませんので、後で、先生に尋ねて見ると「解らぬ筈ぢや佛蘭西語だつたから、佛蘭西語は獨學で英語程に樂でない」と言はるので私どもは茲に始めて先生の英語に百點を與へる事になりました。

處が夫子其自身は御自身の英語を百點とは信じなかつたと見へ、先生の俸給の倍額即貳百圓をオツプアして新聞廣告を通じて茲に今日有名となつたドクターウエインライトと云ふホントの掘出し物を米國ミズリーの一寒村に拾ひ出したのであります。此先生は宣教師を兼ねた醫師で非常な人格者、着任早々荷揚町の學校敷地を市外に移すべきことを動議した第一人者としております。其後先生は關西學院に移り、更に青山學院に轉じ我育英事業に従事すること數十年、親日家と謂はんよりは寧ろ日本人とも云ひたい位で、日米間の複雑なる問題につきては最も活躍せる民間外交の貢獻者です。會つて朝鮮在留の外人宣教師等が我國に對し盛んに惡聲を放つてゐる頃先生單身奮起、歐米を巡遊し、日本治下の鮮人幸福論を絶叫して排日論を打破せ

しは有名な事實、最近又アメリカに於て日本移民の差別廢止の輿論を起こせしも此先生與つて大に力あるのみならず米國艦隊の太平洋演習に對し宗教諸團體を一丸とし公然反對の決議をなし之を大統領につきつけしめしも亦先生等の民間外交によるのであります。此先生日本の徒然草も讀む、發句も作る、常に曰く諸君は私を親日家とかよく御國を知つてると賞めてくださるが其は私が一番最初に日本國中最も風俗人情の勝れた大分縣に來たお蔭と一つは生徒等が會話に於ても作文に於ても最も正直に日本の歴史や文學を教へてくれた賜ものだと。ソウシテ大分縣人を見ると久留島武彦君を知つてゐるか、大島君は翼？柳原浪人直人兄弟は？なぞと四十七八年前の愛弟子の消息を聞いたり、お國で日の出をヒチと訓むは是如何になぞとしやれる、ゲニ此先生丈は日本人以上の日本人、大分縣人以上の大分縣人と申してもよからうと思ひます。是から先きは久留島君の領分とし——私が終りに臨み申し上げたい事は出雲の國では先年既に會つて其中學教師たりし小泉八雲を表彰し、仙臺では最近ライフスナイダ博士を、阿波では又先日無名のポルトガル文士モラエスを表彰致して居ります。ウエインライト博士の殊勳も決して是等の人々に劣るとは思はれません。セメテ記念館の落成祝賀の秋にでも第一校長村上田長先生や校長第二世録田榮吉先生等と共に表彰するの途はありますまいか——長時間失禮。



懷古三十年

小野義夫

私の題は「懷古三十年」と言ふのでありますが第一期生の綾井君が懷古談をされて感興を新たにされました。依つて私は學

生諸君は興味が無いと考へますが端的に明治三十八年學校を卒業して以來私が社會生活の上に直接ぶつゝかつた事柄で今猶解決の出来ない疑問を皆様によつゝけて講演にかえたいと思ひます。

學生諸君は國家の將來を双肩に荷つてゐる方々だから私共の解決出来なかつた疑問を解決するの責任ある人々でありその責任の重且つ大なる事は申す迄もない事です。

私が學校を出ましたのは明治三十八年時將に日露戦争の最中で其の年ポーツマスの平和條約があつたのである。私はその當時でも就職難の時代に早稻田の法科を出て横濱の某商店に席を置いてゐました。各府縣で滿洲の經濟狀態調査のために一縣二名宛派遣される事になつた。私は横濱の店の經歷でこの滿洲利源調査を命ぜられて八年の暮れから九年上半年迄調査をしました。その結果、綿糸布、染色工業等是有望でないといふ報告をするのやむなきに至つたのでした。その間「亞米利加ナキン」とか市場の獨占とか言ふ方面を研究し一方私自身の就職の問題を考へて居りました。私は個人として滿洲と言ふ處は資本家的經營をなし得るか、業務に經驗のある人か或ひは亦無形の戰鬪的威力を持つてゐる様な人でなければ駄目だと思ひました。

そこで第一問題として「日滿經濟を結びつける定見如何」といふ質疑を諸君によつゝける。卑見を言へば私は現在臺灣と朝鮮に企業的な關係があるが過去の我殖民地經營は施設方針はよかつた様だ、然し今日に於ては遺憾の點が少なくないのであります。臺灣などの統治にあたる人即ち政治擔任者の責任と謂ふものは極めて大きなものがある。内地は國力に必要な負擔をしてゐるが、はたして内地と殖民地の兩者は公平にその責任を負擔してゐるであらうか。

戦争の原因は神話時代に於ては美人の獲得とか又は奴隷獲得などにあつたが今日その裏面その實在の根本原因は生活資料の獲得の爲めにのみされるものと思考される。戦争を強者に與へた權利と解するならば！そして三好閣下の仰せられた「自然に從ふの道理から言へば勤勉に努力し、なほ且つ生活資料を獲んとするものが最終の勝利を與へらるべきである。殖民地は搾取するものとは我國は考へてゐない。外國のそれは凡そ似つかぬものではあるが、然し内地の生活を犠牲に供して迄も外地の生活を保證する事は理解が出来ない。滿洲事變の原因は日本人が彼の地で彼等と經濟競争が出来なかつた結果で丁度武士と

町人との争ひの如きものである。武士と「スレッツカラシ」の町人の争ひ、算盤ではまけるおのれ憎き奴とこうなる經濟を全部とられてしまへば元も子もないのである。

經濟と國防との關係。日滿關係については自然の成り行きにまかせるといふ自然主義ではいかない、どうしても保護政策でなくてはならぬと思ふ。例へば私の關係してゐる「ラサ島」の如きものである。甚しい生産物が出るわけではないけれど國防上の見地より保護さるべきものである。日滿經濟ブロック問題についても總ての點について彼等と比敵せねば完成しない。併し實際重工業などについて言つて見ると滿洲のそれが内地を壓してゐるのが現状である。山東あたりからの出稼苦力と内地出の労働者とのポケットを如何にして融合するか？

保護政策可なりとせば之れを如何に解決すべきか。日滿經濟ブロックを如何に實現すべきか對立的な關係ではいかない、少なくとも主従の關係があつて然るべきと考へる此等の疑問を問題として諸君の前に提出する。

日本全國に於ける疲れたる國民を掃の齒ですく様に拾ひ上げこれ等の人々に奮發して貰へば日本内地に於ける總ての問題は消失すると思ふ。

話頭を一轉して労働問題であるが私は明治四十年以來日本に於けるそれを研究した。即ち如何にして労働者を幸福にするか如何にして労働の能率を上げ得るかの問題を研究したのである。私が大正七年外國より歸つた時この問題は著しく進捗してゐた。即ち斷然闘争觀念を以てこの運動をリードしなければならぬと唱へられて來、然も再轉して労働運動の指導者たるべき偉大な人物は次第に居なくなつて來たのだ。國家にも労働者にも資本家にも何れに對しても合理的な正しい方法はないものだらうか。労働問題は決して労働者のみの問題ではなく如何にして國家に迷惑をかけずにやつて行くかといふ問題はすべての人々が考慮しなければならぬ事物と思ふ。労働團體は闘争のみが目的ではないはずだ。例へば英國の労働團體は消費組合がその中心になつてをり、英國人の四分の三はその組合員である。併し日本に於ては農村に於ける購買組合は發達しても都會地に於ては消費組合など發達してゐないではないか。

ロバート・オウエンの如き二宮尊徳先生の如き偉大なる人々は決して鬪争の指揮者のみではなかつた。こんな人が現今の日本に現はれて来たならば總ての幸福になる様に解決してくれるだらうと信じ、かゝる意味のリーダーを要望するのである。次ぎは統制経済の問題であるが、この問題は現今に於ては自由貿易主義の可否如何といふ問題になつてゐる。經濟戰に於ける決戦の勝敗によつて國家の存続に大きな消長のある事を思へばゆるかせには出来ない問題なのである。

歐洲大戰の時に私は金物の販賣にモスコへ出張した事がある。その當時露都に止まつた商店といへば日本の三井とか三菱等の大きな商店のみであつた。このときこれ等の商店が我れ勝ちに値段の下をくだつて無統一に商賣をやつたのである。この時私はこんな事では日本の損失だ。日本商店には一つの統制がなくてはゆかぬと思ひ主張したが誰れも耳を藉さうともしなかつたのであります。ところが革命が起りそうになつて始めて此等大商店の間に統一が出来て高値に出たといふ状態になりました。通觀して見ますと早い話しが戦後事業上に於て日本國民の熱し易くさめ易い性質を遺憾なく發揮してゐるのを見てこの時の事を思ひ私は大きな教訓を得たのであります。

統制經濟といふ事はよい事でありませう。がこれと同時に第三者即ち消費者が損をするといふ事になれば考へものと思ふのです。統制經濟を奈邊に置くか？如何にして國家を益するかの問題が大切なのであります。

以上の三つの大きな問題は私の三十年の疑問であり諸君等若き潑刺たる元氣と精力とを以て研究し解決して戴き度くこの問題を諸君にぶつゝけたわけである。

最後に諸君にお話ししたい事は健康といふ事である。特殊の運動といふものは體育上必らずしも面白くないと思ふ然し精神上の効果はこれ程よいものはないと考へられる。體を鍛へるには體操もよからう、いやそれが一番よい方法である。諸君潑刺たる元氣を以て諸種の問題を研究解決し國家の進運に寄與されん事を切望して壇を降りませう。

### 米國は東洋に對して發言權ありや



久留島 武彦

私の演題はこゝに掲げたものであります。實は私は同窓ではあるが卒業しては居ないので、久留島は五十周年記念の此の講演會に發言權ありやといふことになりさうです。それはさておき、私がアメリカといふ問題を語るについてドクター・ウエンライトに負ふ所が非常に多いのであります。同時に米國へ三四回行つたが、米國を知れば知る程ウエンライトに反く様になつたのを遺憾とするものであります。先程綾井氏のお話のあつた、鎌田先生とウエンライトが今度の記念式に臨むことを心待ちにして居つたといふことに關して、實は私は先生がこゝに見えないことを寧ろ幸としてゐるのです。これから述べようとする講演の内容を聞いたなら恐らく先生は眉をひそめる事だらう。併し最後まで聞いて貰つたら、ウエンライトも必ずや私の手を握つて「マイポニー」と言つてくれるに違ひないと思ふのであります。

近頃アメリカに關する通信ほど癪にさわる問題はない。事苟も日米間に關する問題ほど不愉快なものはない。近くは前月三日から始まつた第十六號想定と云つてる海軍大演習である。今度のは今迄のそれと大いに組織、計畫を異にしてゐる。従來の一年の總ざらへで、艦隊發航の際は行く者も送る者も遊山に行く様な状態であつた。今回は餘程狙ひ所が違ふと見え一名の新聞記者も乗せない、之を送るにも或範圍以内には入れないといふ状態であります。艦隊の隻數も一五七隻とも、或は一三七隻とも言はれてゐる。この想定は大體第一回は眞珠灣防備、第二回はアリューシャン群島に對する奪回戰、第三期戰は布哇より西々北に當るミッドウェイ・アイランドの航空母艦に依る防備である。要之、三期の演習を通じてリング・フォーメイシ

ヨシ即ち輪形陣に少し修正を加へ、配置を改め、之なら大丈夫假想敵國何するものとぞまで實驗せんとするものであつた。私はこの各作戦を見て一つ痛快なことは第二期戦の想定たるアリユーション群島奪回戦である。彼等はアリユーション群島を奪はれたらと考へてゐる、即ち奪はれる覺悟を決めてゐる事は敵ながら天晴である。日本には幸なるかな昔から神風がある。即ち北太平洋には常に西北風がある。これはカナダ方面へ日本から飛行するに誂へ向である。又神潮とも言ふべきか黒潮が犬吠岬からアメリカに向つて流れてゐる。於是某國は此風此潮によりアリユーション群島を取るであらうとの想定になるのである。此時米國の宗教家連は太平洋に對し大演習することは中止するがよいと反對し、今ニューヨークに居るウエンライト氏等が大統領に建言したが、之を振切つて決行された。之に關しスワンソン長官は「米國艦隊は太平洋で子午線百八十度より西に出ない」と宣言したが翌日慌て、之を取消してゐる。乃ちこゝに端なくも暴露したのは彼等が百八十度を超へて行動したといふ事實である。彼等は何が故に東洋に向つてかくも力を入れなくてはならないか。こゝに問題がある。それは政治上、經濟上の問題であるが、要するに生活上の問題である。アメリカがモンロー大統領以來モンロー主義を聲明したのは、政治問題には引きつられまい、經濟上はどこまでもやらうといふのがこの精神である。今日對支政策に付ては經濟關係といふよりも寧ろ政治關係ではないかと思ふ。トリビューンといふ雜誌でウォルター・リツプマンが「アメリカが支那に持つ利権は世界各國が支那にもつ利権の十六分の一に過ぎない。資本關係から言つたら英國が支那への投資額と米國のそれと比較すると英の六分の一に過ぎない。何れにせよ小さいに拘らず何故米國は支那に對し眞剣になつてゐるか」と言つてゐる。

米國の對日對支投資關係は支那に對し一とせば對日三・一六であり、貿易關係は對支一、對日三・〇六となつてゐる。即ち經濟關係は支那より日本に三倍の密接なる關係を有するが故に、日本に對して若しもの事もあれば三倍の得意先を失つて、一の支那をのみ對手にしなければならぬ。然も尙日本にしてかゝる態度に出る理由は何であらうか。

こゝに恐るべき感情問題である。先入主である。米國が獨立戰爭を七年繼續し十三州が英國の羈絆を離れ、やれ嬉しやと思つた時フィラデルフィアの鐘は破れ、金は一文もなくなつてゐた。この獨立戦後資本缺乏の際、米國に囁いた者がある。「支那

人は長生を希ひ快樂に耽る民族で長生藥を要求する。故に朝鮮人蔘を喜ぶ。」と。そこでウエスト・ヴァージニア州の山地に野生の人蔘がある。これが朝鮮人蔘に似てゐるので、どうかとは思ひながらも掘りも掘つたり四十噸を掘り出し、エンプレス・オヴ・チャイナといふ船に積みサミュエル・ショウが船長としてワシントン誕生日の二月廿二日に出帆した。これが廣東に着き賣拂ふと何と十五萬弗、諸經費差引き純利益三萬弗手取となつた。これは當時の米國人に取つては虎の子の三萬弗であり非常な喜び、これから次々に掘つて賣り莫大な利益を占め、支那なるかな支那なるかなの聲となつたのである。これが動機となつて支那と速く交通する爲大陸横斷鐵道の計畫となり、アブラハム・リンカーンの時支那問題は是非早く解決せねばならぬと鐵道完成を急がせた。

この鐵道の横斷中の山の中には毛皮がある。これをアメリカ・インディヤンと、罐詰一ヶ位と交換して巨利を得た。これが文字通り行きがけの駄賃である。又支那歸りの船腹には茶を積んで歸り、行き歸りに儲けた。この米支貿易の途次七十年前に日本を發見したのである。斯様な次第で米國人にとり支那貿易の利益甚大なる事が先入主となり、米國の教世主は支那であるとし、どうしても支那なるものを忘れる事が出来なくなつたのであります。

さて米國は大戦後非常に富んで債權國となつた。世界十二ヶ國に對する債權額百十億弗、併しこれが證文だけで悲しい哉貸した金は取れぬ。貸したが因果借りたが強み、それで今日米國は大不景氣に襲はれて居り、一千萬の失業者もこれがためである。

かゝる時これを救済する者如何と見渡せば、米國の目にとまつたのが昔ながらの支那、戦禍なき支那に投資する事が最も利益と考へたのは認識不足である。これを遮るものは日本の軍部である。支那現在の騷亂は日本の武力のため位に誤解してゐる。それで支那を助けるといふ俠氣が東洋作戦の原因である。軍縮問題に對する米國の眞意は眉唾ものであり、彼の主力艦三萬噸主張の理由はスエズ運河の通航が此三萬噸以上のものは不可能だと云ふにあつて、眞の世界の平和といふことは少しもなしのであります。

然るに米國は實力に於て東洋に發言權があるか。リース提督が一切秘密にして出航したのは如何なる事情であらう。一つはその作戦の秘密を守るといふこともあるが、米國には社會あつて國家なし、大艦隊が出港する時果して戦時人員を満し得たか否かは疑問である。米國人は海軍を嫌ふ、艦に乗れと云へば人道問題だといふ。潜水艦など米國で發明しながら乗り手が無い。米人はあんな狭苦しいもの、中で如何にしてライフをエンジョイする事が出来るかなど、云つてゐる。佛、英の艦隊も同様である。之に反し日本の海軍兵は苦難には自ら進んで當るといふ美しい精神があり、特殊の任務に就けられた者ほど最もその光榮を誇るのである。先年英國で戦艦ケント號を派遣した時、日本軍艦が迎へた際彼等は吃驚した。同一排水量で八吋砲が二門多く搭載されてゐる。軍艦のあらゆる機能が完全に發揮されてゐるのだ。英國の一海軍少佐が思はずも『之こそ本當の軍艦だ、我々の艦はホテル・シツプだ』と洩したさうである。米國軍艦は即ちこのホテル・シツプである。米艦には何れも乗員が定員程乗つてゐない。昨年十割の艦を作ることを決めた時、如何にしてその乗員を充すかといふことが問題であつた。海兵の募集に當りスマートな將校が自動車で乗廻して『君等の若きライフをエンジョイするには須く海軍に投ぜよ』と演説してゐる、日本では想像も出来ぬものである。要之、米海軍の惱みは人を得ない事である。故に實力に於ても、認識に於ても經濟關係に於ても、米國は東洋に發言權ありや。私は有せずと斷言するものであります。

然も尙米國はかゝる態度に出る。然らば何が米國をさうさせるか。それは楠木の蕪人形の謀略である。歐州は日本に米國といふ蕪人形を踊らせる、米國に日本といふ蕪人形を踊らせ、蔭で盛に煽つてゐる。元をたゞせば百十八億の戦債である。歐羅巴が苦しみもがく間に案出した苦肉の策で、漁夫の利を占めんとするものである。日本の世界に擴る國力を費さしめ、アメリカの國力を日本に費さしむるのは日米戦争である。之は兩國の面目にかけて所謂百年戦争であらう。今世界の不景氣なるが故に日本品が賣れるのぞ。本音を吐けば世界は不景氣であれかし。麥酒の本家本元のハンブルグに日本の麥酒が行き、綿布の本場ランカシアに日本の綿布が進出してゐるではないか。ヒトラーは日本の電燈のために宣傳演説までしてくれた、曰く『祖國を愛する者は日本の電燈を使ふな』と。列國の關稅障壁を超へて年々貿易は四十八億、如何に輸出が多くなつたか解るではない

か。その日本の世界各地の地盤を如何にして縮めるか。日米の戦争である。若し日本が戦争の渦中に卷込まれたなら、日本の工業は全部軍需工業となり、日本の商品は世界の市場から影を潜め、列強は經濟的復活を始めるであらう。かくして日本の十年の忍苦の結果は忽ちに亡ぶるであらう。

我々の結論は、日米戦ふ可らず。第一米國は戦ふ實力がないのだ。定員がない、軍艦が出来ぬ、昭和十四年までかゝらねば出来ぬのだ。中堅たる海軍大尉の養成には十年かゝる。問題は今から十年後である。来るなら來いと言ひ得るか勢力回復せる英米提携して、多年の目の上の瘤たる日本に實力攻撃を始めるかは十年後だ。即ち今より十年乃至十數年後は、歐洲諸國が日本に向つて戦はんとする時期である。諸君の活躍するのはその時である。我々は米國を敵とする必要はない。その蔭に操る傀儡師、古狸に注意しなければならぬ。日本の態度としては米國の行動にむきになるより寧ろ、頑是なき少年として之を訓へ、眩惑されて輕舉妄動するな背後の古狸に氣を付けよと誠むべきであります。

## 閉會之辭

安東言論部長

一言講師諸賢に對しまして御挨拶申し上げます。今回大中五十年記念行事の一端として講演會を催ふし各位に講師を御依頼申し上げます。た處幸ひに御快諾を得茲に本日、長時間に亘りまして最も意義深くして時宜を得たる御高話を戴き一般聴衆の方を指導し啓發し奮發興起せしめ異狀の感銘裡に終始し講演會の趣旨を充分に貫徹し得ました事は私共の欣快に堪えない處でございます。茲に諸賢に對し深甚なる感謝の意を表します。次に一般聴衆の方々に於かれましては最も御熱心に御聴取下さいまして講演會をして嚴肅緊張の裏に終るを得ました事を感謝致します之を以て閉會します。

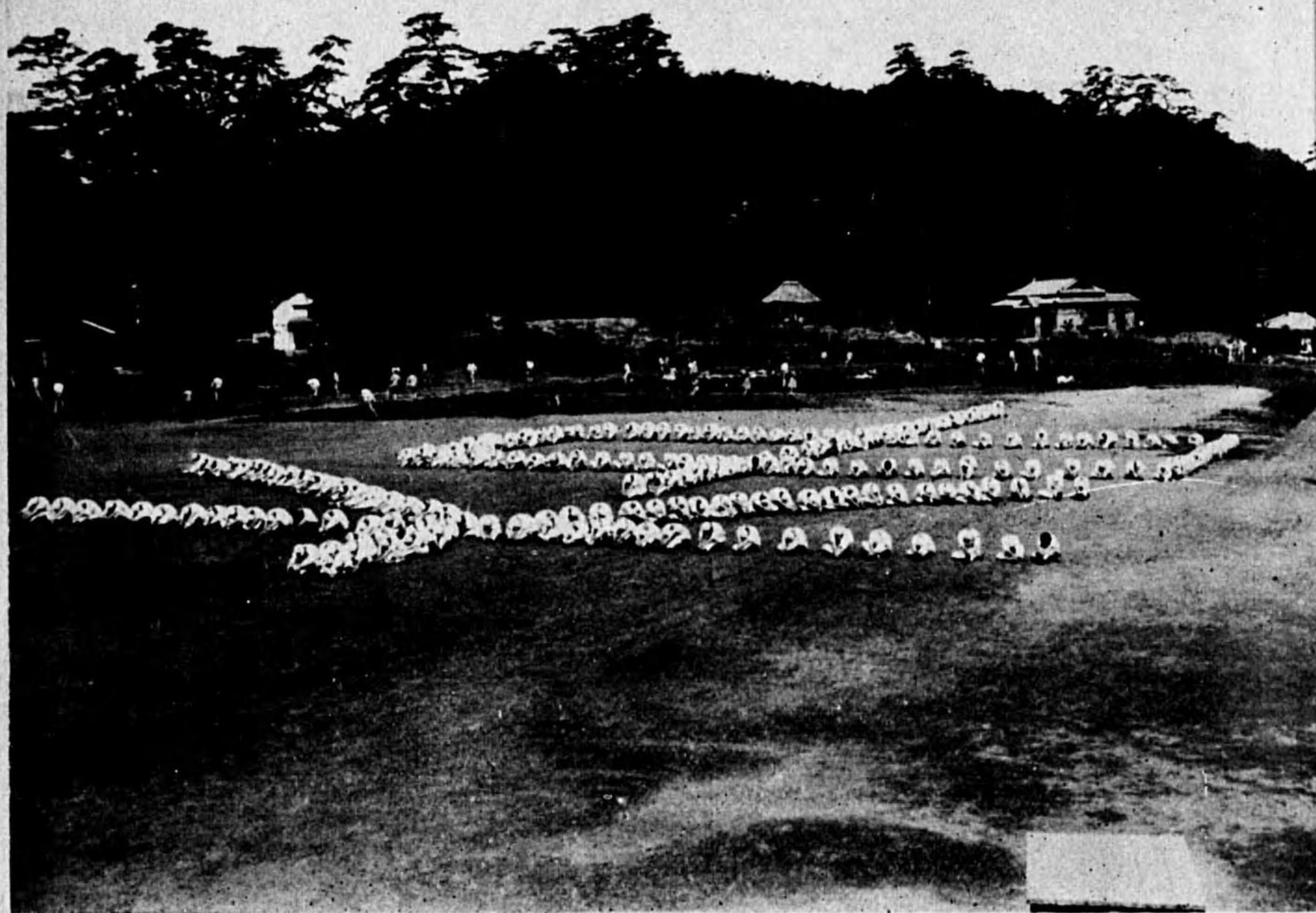
## 中等學校言論大會

祝典を彌が上に記念するため、午後七時より、晝の講演會に引き續き、縣下中等學生言論大會を縣教育會館大講堂に於て開催した。參加學校八、出演辯士十二名、夕闇薄る街路樹の新緑を縫ふて集る聴衆は定刻七時には已に場を壓してその盛況を豫想させた。定刻の振鈴とともに安東部長の開會之辭に大會の幕は切つて落され左記の順序により會は整然と進行した。會場は青年の激烈たる意氣と洋々たる希望と充實した力とに充たされ、各辯士の熱辯は口頭灼熱の火焰を吐いて或は烈々たる忠誠愛國の至情となり、或は深刻なる人生觀となり眞摯なる道德觀となつて、一千數百の傍聴者は感激と興奮の場となり、大拍手の嵐となつて、終始一大緊張裡にプログラムを終り、最後に佐藤教諭の閉會の辭を以つて終幕を告げた。時に午後八時四十分、プログラム左の如し。

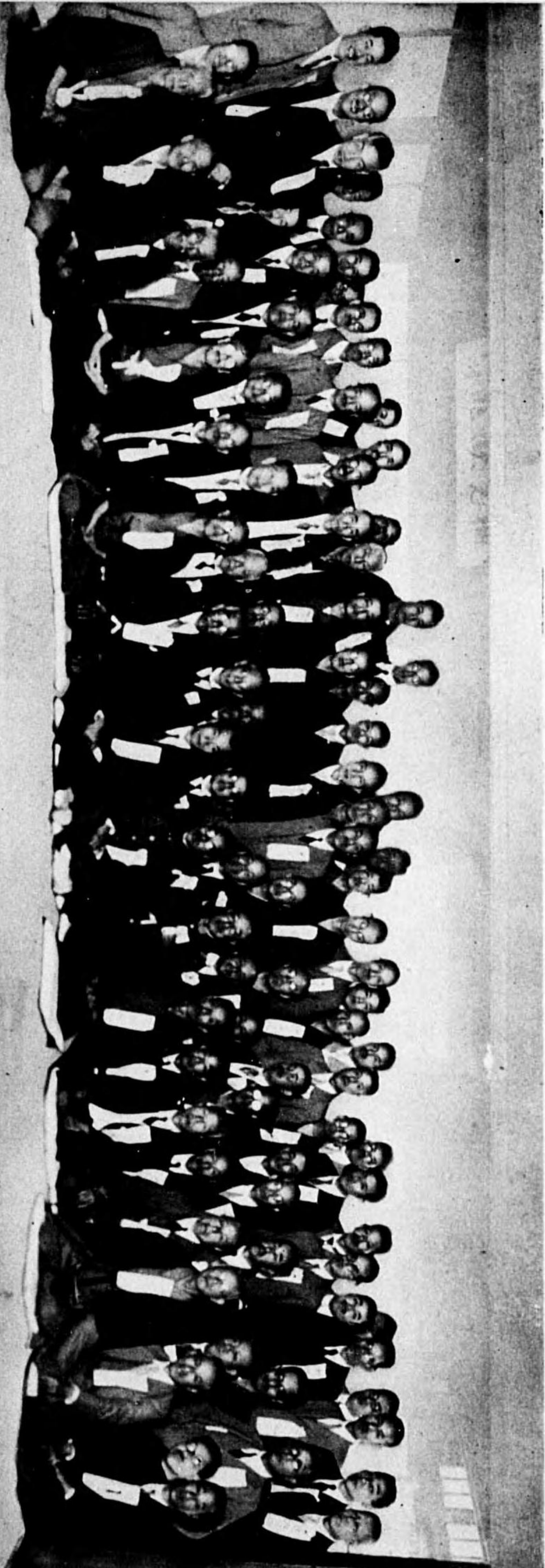
### プログラム

- |                 |              |                |             |
|-----------------|--------------|----------------|-------------|
| 一、開會之辭          | 白杵商業學校 平岡軍平  | 一、バトンを受けて      | 大分盲啞學校 山下 亘 |
| 一、日本商品忍るべし      | 三重農學校 折敷出男一  | 一、理想の雄辯        | 大分工業學校 河野修一 |
| 一、労働は神聖なり       | 白杵中學校 足立親比古  | 一、軍縮問題と國民生活    | 大分商業學校 沼口 勇 |
| 一、一九三六年の危局を前にして | 杵築中學校 加藤柔郎   | 一、生命の火は燃える     | 大分盲啞學校 今崎末廣 |
| 一、楠公の生地を訪れて     | 大分中學校 今永喜久馬  | 一、インスピレーション    | 大分中學校 神田慶也  |
| 一、自己を生かす道       | 大分青年學校 鹽月彦一郎 | 一、滿洲國の認識と移民の覺悟 | 大分師範學校 首藤 新 |
| 一、鞭             |              | 一、閉會之辭         |             |

尙ほ閉會後別室に於て辯士慰勞の茶話會を開き歡談を盡して散會したのは午後九時半過であつた。



山園山と大中運動場



五十周年祝賀懇親會出席者



道路物語

第四期 工學博士 牧 彦 七

はしがき

縣廳前大手通りの舊校舍に、文讀む五年の月日を重ねた身の、何時しか年も杉の戸を、明けて飛び出した後の、丸四十三  
年が其の間、誰やらの歌に見るやうに、

吾は猶夢の名残も覚えけり雨の夕も雲の朝も

何につけ、かにつけ、想ひ出深い母校の、創立五十周年記念誌に、特別寄稿をとの懇命、而かも専攻方面の事柄を、通俗  
的に講話してよとの注意、場合が場合だけに、眞逆無にする譯にも行かず、何くれと思ひ廻らしては見たもの、扱曇さは  
暑し忙し、で、朝の一時間に夜の半時間を繋いでの難行振、其處に凡想を鍊つても飽かず、殊に日常手馴れぬ凡筆の、しど

ろもどろなるは言ふも更なりなど、聊つも詮なし。

余の専門といへば、元とく治水方面であるが、我國道路法の制定に差懸つて俄かの鞍替へ。今は寧ろ此の方が本職だとも許るし、吾も已惚る、始末の、諷といひ、葦といふも、所詮は心の持ちやう一つ物の異名と、高を括つての本題に、筆を走らせて、聊か其の責を塞ぐのみ。但し味噌の味喰臭くないやうにと心掛けはしたもの、果して上味噌の味が出たか否は、覺る人の心に任ずるの外なし。其の他本物語は、源氏、竹取など云ふ、小説類ではなく、歴史の一種であるが、左りとて今日云ふ史學とは大に違ふ。強て其の例證を擧ぐれば、彼の榮華物語、平家物語などいふ、其の物語の類であることを辭つて置く。

一

自動車のまだ普及せぬ以前にありては、町方と村方との間で、民度の差が若干認められぬでもなかつたが、今は則ち然らず、却つてバスの通ふ地方と通はぬ地方とで、里住居の世間相場が違ひ、便と不便、文と野の差別が自ら定まるやうになつて來た。左れば地方で屢々道路改良速成の陳情を見、省營バス運營の請願を聞くのは、一に此の文明の新利器に頼る世人の生活改善の慾求から湧き出た自らなる眞の叫びとも云へる。會て大阪府下での咄であるが、大阪の市中では雨天にも白足袋を穿いて、外を自由に往來が出来るのに、田舎では護謄を穿いても尙追つ付かぬが、都市と地方とで斯くまでの差別待遇を受けねばならぬには、よくく田舎住居の悲哀が感ぜらるゝとて、大に路面改良促進方の陳情があつたと云ふが、尤も至極な次第である。要するに是も亦、自動車と云ふ文明の利器が、突然道路の上に投げ掛けた、社會生活に關する民衆運動の重要問題の一である。

左なきだに、道路が吾人の日常生活と、極めて緊密で全く不離の關係に立つことは、彼の佛國の諺で、物の古い譬へに「道路のやうに古く」と云ふ言葉があるやうに、道路なるものは吾々人類の發生と、其の始原を同じうすると言つてよいもので、

出るにも道路、入るにも道路の利便を假りなければ、我々の生活は一日も之を營むことが出来ぬ。宣化天皇の元年（皇紀一九六）五月の詔に、「食者天下之本也。黄金萬貫不可療飢。白玉千箱何能救冷」とあるやうに、我々が生きんがために其の日く衣食を求むる上に、直ぐ道路の必要を感じて來る關係からして、道路が極めて古くから出來てゐることは充分想像し得る。併し紀元前五萬年を溯る古石器時代、二萬年を溯る新石器時代の、悠久なる人類の歴史を辿つて、此の道路が技術的に發達して來たのは、我々人類の間に文化が大分進んで來た後のことであつて、初めの道路と言へば寧ろ無雜作に、丁度「桃李不言下自成蹊」と言つた風に、或は飲用水の所在地、乃至は食糧品の生産地に往復すると云ふ、足に始まつた人類の交通で、自然と踏み均らされて蹊を成したに過ぎぬ。我國で道の「み」は「あゆみ」也、「ち」は「つち」也、人のあゆむ土也日本釋名との一説があり、又漢語で道は踏也路露也人所踏而露見釋名とあり、更に路字は「从足从各」と云ふ會意の字であり、道字も亦其の古字が術で人の「首が行く」と云ひ、且其の篆書が然とも然とも書かれ、人が一人でか又は二人雁行で、行くといふ會意の字である等を考へると、道路の發達上萬古の心胸を開拓し得るやうな氣がする。特に又神武天皇御東征の際、紀元前三年、河内より大和へ御越しにならんとした道中が、「皇師勅兵歩趣龍田而其路狹險人不得並行」日本書紀とあつて、一軍の者は僅かに一列で行進し得たのみで、叙上の會意は固より、頂踵相接するの狀を彷彿せしむるに十分ではないか。

次に米國で蹊のことをトレイル(Trail)といふが、それは野牛が往來して踏均らした路と云ふのが本義で、我國でも鹿蹊又は鹿蹊、其の他兎の通ふ兎徑などと云つて、兎鹿の類が往來して踏均らした路筋があるが、此のトレイルと丁度好く似通つた成り立ちのものと思はるゝ。此の牛と鹿とで想起さるゝことは、英國がまだブリテンと呼ばれて居た、西紀前五五年（皇紀六〇六）に、彼の偉大な羅馬の將軍デュリアス・シーザーが、押し渡つて來た當時まで其處に住んで居た、未開の蠻族ブリトン族に關し、同將軍の日記の中に、「鹿のやうに足速やで、野飼の牛のやうに勇敢で、恐るゝ所を知らぬ種族である」と説明して居るが、如何にも野から山、谷から峯へと傳ふ蹊の磐根木根を踏みさくみて、馳驅する狩獵民の捷勁が、能く走る鹿にも逐ひ及び、又其の勇悍が、犇猛な野飼の牛をも手捕りにする習俗の一端を物語る外、鹿と蹊、牛と蹊の聯關が、終には人類の交



通への連鎖となつたことを、示唆するものではなからうか。夫は米國の此の野牛の踏み均らした路筋を人が傳つて行く、夫が詰まる所トレール即ち蹊といふものなることからもさう思へる。夫等の鹿路やトレールから發達した蹊の時代に於ては、是即ち天然路 Natural way or path で自然に「踏み均らした蹊」(Beaten track) に少しも人工が加はつて居らぬ所謂 蹊熟路又踏熟路の儘であつて、道路の極めて原始的の形である。定家卿の歌に

涼みにと道は木の間に踏み馴れて夏をそ迎とる森の下風

とある如く即ち「踏み馴れ路」である。序にいふが此の意味からして Beaten track なる語は「世の常路」「習慣」「慣例」などいふ意味合に轉用せられて居る。又 Beaten track に對して Unbeaten track といふ語も文飾的には用ゐられて居る。之は石高なる若くは苔の蒸した餘り人通りの多くない蹊で、美辭句つていへば徒然草に所謂「苔の細道」にも當るであらう。其の例證は明治十一年に、日光から會津を過ぎ新潟に出で、夫から又山形、秋田、青森を経て函館に渡り、北海道の内地にまで足を入れ、最初の歐洲婦人アイ・エル・バード嬢に由つて書かれた、Unbeaten Track in Japan(私譯、日本紀行警根踏む細道)と云ふ書物を擧ぐることが出来るが、夫は明治維新直後の、我國の風俗より道路の一般状況等まで、凡そ異國人の目に、物珍らしく映つた一切の事共を、見事な挿繪入りで記述した紀行本である。序に云ふ、前述の Beaten track をば「踏み分け道」と云ふ人があるが、多分猿丸太夫の「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の、……」からでも、思ひ付いた譯語でがなあらうが、之では Beaten の意を達して居らぬことを、此處に漸く氣付くであらう。

此の原始的道路がだん／＼進んで來ると、地形を變更して、我々が歩くにしても、或は牛馬を使用するにしても、成るべく疲勞を感じぬやう、又より能く能率を上ぐるために、人工を加へ、或は高低を除き、或は多少の路面固めを行ふて、道路を改良する段取に進むので、即ち築成路 (Made road) へと移り行くのである。徒然草にある「鳥羽の作道」は平安建都の初めに經營されしならん謂はれて居るが、其の作道とあるは英語ソツクリの言葉であるのも面白い。

我國に於ける此の作路は、綏靖天皇第三三年(皇紀一一二二)に始めて山陽道を開くと、皇年代略記や皇年代私記に載つて居る

のが、文献上の初見であつて、我古い言葉では之を治道或は鑿道と呼んで居る。萬葉集卷十四に

「信濃道は今の鑿道刈株に足踏ましなむ履著け我が夫

とあるは即ちそれだ。此の歌から見て當時の道路の造り方は、山野の路筋に當る竹木の類をば、只伐りつ放した計りで、跡をば人馬の踏み均らすに任せられたものなることが、其の歌意から十分讀み取ることが出来る。此の道路は彼の大寶令律が頒たれた大寶二年(皇紀一三六二)十二月に開き始め、十一年目の和銅六年七月に開通することを得た、「美濃信濃兩國之堺、徑路險隘、往還艱難、仍通吉蘇路」續日本記に當るもので、科野御坂とか神御坂或は單に信濃坂と云はれ、後世に御坂古道と云はる、古往還であつて、木曾御坂即ち木曾坂と混亂した歌も間々見受けらるゝ。是等の道路を造るには可成りの土工や其の他の工作物を要した事は其の開始から開通までに、十一年の長年月を要して居る點から十分窺はるゝのであるが、是等工法の實例は之より少し遅れた天平九年(皇紀一三九七)に、宮城縣の多賀城の碑の史實で善く知られて居る。大野朝臣東人將軍が自ら先導して、今の加美(古書賀美)郡から、山形縣の北村山郡(古昔最上郡)に通する、當時の百六十里(今の二十六里餘)からの新道を開いた時、「或尅石伐樹或填澗疏峯」續日本紀と書かれてある通り、岩を割つて取り除くとか、谷の低處を埋め立つるとか、峯の高處を掘り割るとか云ふやうな、可なり大仕掛な地形の變更を行ひ、平夷な道路を造る工法が行はれて居つたことを十分認むることが出来る。此の築成路も初期に於ては單に地形の變更が關の山であつて、路面の問題には未だ深くは觸れて來ぬ。

只人が馬に乗つて歩き、又馬に物を負はせて歩がせると云ふやうな時代は、尙路と云ふ邦語の本義を離れずに、單に踏む用に供するまでのことで、未だ路面に關しては一向問題をなして來ぬのである。序に彼の英語の Road なる語の由來はアングロ・サクソン語の Rādian to fōd(= 騎行する)より來たものと云はれ、此の時代の道路の用法に典據を有して居るのであることを茲に附言して置く。

抑路面の問題の若干考へられるに至つたのは、車輛と云ふものが運輸に利用せられ、特に牛馬で牽引して増々重量物を轉輸するやうになつてからのことである。このやうな大體の順序で進んで、爾後専ら車輛の發達に伴つて、道路は時代々々の要求

に適應するやうに進歩發達を遂げて行くものであつて、是が總括的に見た道路發達の経路である。

## 二

そこで極めて古い所で、文献に残つて居る改良路面としては、所謂羅馬道ラテン道と稱するもので、今から丁度二千二百年前に造られた單用道路で、歩騎兵等の行軍は勿論、戰車の運行に供したものであるが、此の道路が今日にどう云ふ關係を持つて居るかといふに、ズツト傳統的に其の工事方法が、ハッキリと今日に面影を傳へて居るのである。其の羅馬時代に發達した道路を見ると、如何にも當時の羅馬帝國の隆昌強盛なことが偲ばれるものであつて、其の道路の構造は實に豪壯雄大の一語に盡くる。舗裝の厚さが約三尺、丁度東京や大阪邊りで造つて來た、高級舗裝の例に由れば、其の厚さは僅かに七八寸で九寸を越すものは稀であるけれども、羅馬當時のものは厚さが路床から路面迄が三尺を越えたものである。夫には先づ地盤を所要の深さまで掘り下げて、膨軟な表土を取り除いて、搗き固め且石のローラーで挽き均らし、又必要の場合には、丁度家屋の建築の場合に見る彼の地搗きのやうに、石などを突き込んで地固めをして、搗き固められた床面(Beaten floor)を作り、之をPavementum＝(Pavement)と云ひ、路床面を意味したものである。所が今は路面の舗裝をPavementと呼ぶやうになり、通俗には更に轉じて、歩道(Side-walk)をPavementと云ふ言葉で言表はす例になつて居る。能く新聞などに、此の意味で書かれて居るのを見受くるが、之は路面舗裝の發達に依據するので、車道よりも歩道の方が、先に舗裝せられたことを物語るものである、即ち今日でも倫敦郊外の住宅經營地などで、取敢へず車道には我國のやうに砂利を敷き均らし、先づ歩道のみを立派に舗裝して置いて、來住者を招誘する例が多々ある。又我國で舗道と歩道とが同音である關係から、(Side-walk)をば直ちに舗道と書く、知名な文筆家もあるやうであるが、恰も前述のPavementの譯語に當るので、合理性があるやうに思ふ人々もあらんかなれど、併し之は似面非なる偶然の一致であつて、Side walkを指すときは慣用のPavementをも歩道と譯すべきである。

此の羅馬道なるもの、路面工の構造は二様に出來て居つて、最も重要な道路では表面を、四角或は五角、六角、七角位の多

角形の、切石を以て張り上げる。表面の仕上げは中々丁寧なもので、石と石との接際は殆んど線を引いたやうに、一寸見た所では分らぬ位で、専門的に所謂盲目筋めくらとか、絲目筋いとめとも云はるゝ程に完全に仕上げられてある。其の基層をなす部分は今日で云ふ石灰を使った粗石混凝土コンクリートで固めてある。當時は混凝土といふ稱呼はなかつたのであるが、兎も角も石と石灰とで固めた丈夫なもので出來て居る。次に比較的重要でない路面では、今日の混凝土をつくりのものを使つてゐるのである、即ち碎石(Broken Stone)と石灰とを混ぜ合せたもので、是こそ真正銘な混凝土である。以上の切石と碎石混凝土から成る路面舗裝が用ゐられて居つたのであつて、構造上から叙上のPavimentum(路床面)の上に施設せらるゝ基層は三段に各別に構造せられ、之に切石か碎石混凝土かの路面工一層を加へて、舗裝全體は四層より成り、其の厚さが約一米にも達した、實に豪勢なものである。就中道路に碎石を使ふと云ふことは、百五十年前ソコの間、發達したものであるやうに普通考へられて居るのであるが、實は二千二百年前に、羅馬時代から道路に碎石を使ふ方法は、既に行はれてをつたことは、道路史上特に注意に値ひする點である。又此の切石で疊んだ道路を、ヴィア・ストラタ(Via strata)、終には單にストラタと稱した。英語でも尙ストラタの語はあるにはあるが、今日の英語では意味が違ふ。此の舗石道と云ふ意味の、羅馬語のストラタなる言葉から、獨乙語のストラッセ(Strasse)、街道、又英語のストリート(Street)、街路が轉訛して來て居る。更に碎石の石灰混凝土で固めた道路——惟ふに其の碎石にも石灰岩を使つたと見える——を、ヴィア、カルセアタ(Via Calceata)終には單にカルセアタ(Calceata)、又稀にカルシアタ(Calcata)と稱し、其の路面のことを、カルセウム(Calceum)と稱して居つた。是等の語からCauci, Cauchie, Cauchée, Chauchéeと段々言葉が轉訛して來て、佛語のシャッセ(Chaussee)となり、更に之が獨乙に傳入してeの揚音符が落ち、ローツァー(Chaussee)となり、又英國に傳入しては、古佛語のCauchieから、英のCausey(小石で舗裝する意)Causey-wayと轉じ、終にCause-wayとなつて來たのであつて、道路に關する言葉そのものが、皆羅馬帝國に於ける、叙上の二様の路面の仕方々法を起原として、今日まで傳つて來て居るのである。

序にいふが、羅馬道路が如何に豪壯雄大に構築せられたかに就ては、他に澤山の話があるが、單に此の一斑の説明に由つ

ても、略々全貌の想像が付く通り、英語の Causeway には、沼地とか浅い水面を横切つて、高く盛り上げた作道つくみちといふ意味を當然含蓄する。

此の構築上の意味からして、Highroad や Highway などの語が出来て、現今のやうな私道や、作塲道、捷道たつみち、等々の小路から判然區別せられて、公道 (Public thoroughfare) の意に専用せらるゝに至つたものである。又此の Highway が獨乙に輸入せられ、彼のゲーテ (一七四九—一八三二) の有名な詩人は Hochweg と Dammweg とを語を作つて居る。更にゲーテとジャン・パウル (一七六三—一八二五) の滑稽文學者から作り出された、クンスト・ストラッセ (Kunststrasse) といふ語があるが、此の語は人により、天然路に對する築成路の意味に用ゐたのもあれど、余は其の適否を疑ふものである。本來此の語は、羅馬道に於て、平滑な多少入念に、相互にピッタリ接合した石で、路面を被覆すること、即ち路面の舗設をば、先行方式とすることを本義とするものゝやうである。而してカムベ (一七四六—一八一六) の辭書編纂者（其の他の人々）は、上述の Chaussée (石灰岩の碎石で舗装した道路の意) の代りに、此等の Kunststrasse, Hochweg, Dammweg 等を、會て推獎した事例がある。斯かる事由から現行の獨英辭書でも Kunststrasse を High road, Causeway, と譯し、一轉して Turnpike road (賃取道路) と譯した例まである。蓋し Turnpike road とは、其の昔英國に於て、通行税を徴收して維持修繕の費用に充つる一切の公道網、並に蒲鉾形に路面を造つた特定の道路に與へられた名稱であるが、是等賃取道路は、年月を経ると共に、殆んど此の形状を採るを常としたので、一般に斯種のものに Turnpike なる稱呼が通用するやうになつた關係から、上例のやうな譯語にまで進展したものであらう。以上の所説から道路が如何に國際的に發達を遂げて來たかの一斑が略々窺はる、最近の思潮では米國で自動車の通ずる街道 Thoroughfare を次の通り三種に別けて居る。

- 街 路 (Street) 都市及其の隣郊の大範圍内の街路。
- 本街道 (Highway) 市や町を結び又工業地域を連ぬる大幹線道路。
- 脇街道 (Roads) 其の他の街道。

之が又他の國々へ如何に傳入せらるゝか、今後の趨向に目を留めねばならぬ。

最後に我國道路の路面如何を茲に一瞥して筆を擱くことにしやう。

萬葉集卷四廣河女王(奈良朝時代)の歌に

戀草こいぐさを力車ちからくるまに七車ななくるまつみて戀こいふらく吾が心から

とあり、又榮華物語や狭衣物語などにも、此の力車のことが、そこち書かれて居れば、奈良朝より平安朝へかけて、物を載せて人力で曳き行く車が、相當に用ゐられて居り、又平安朝時代に於て、最も盛に行はれたるは牛車(乗用)であつて、其の始めは詳かでないが、奈良朝時代には多く用ゐられなかつたものを、此の時代となりては、高貴は勿論無位の庶民も競うて之に乗り、物詣遊山の際、有福ならぬは人のを借りてまで、出掛くも多かつたといふ程であつた。其の後荷積用の牛車うしぐるまが、京都を中心用ゐらるゝやうになつた時代にも、文献上路面の改良を、知るべき記事は一切見當らぬ。併し有名な大津馬の往來に因る馬ざくりや、力車、牛車等の曲堀れに、砂利を敷込む位いのことは、疾くに實行せられたであらうと、想像する十分な理由はある。

慶長十七年(皇紀二二七二)十月に江戸幕府は

一、大道小路共、馬ざくり候所には、砂に而も石に而も、固まり候様被<sub>レ</sub>仰付道之脇に水やり仕候様尤候事

附 ぬかり候處右同前、砂成共石成共入、固まり候様被<sub>レ</sub>仰付事云々

と汎く下知して居るのを、文献上我國路面工事の初見とする。是より先き天正三年(皇紀二二三五)に、信長が道奉行に

道ノ多ク曲タル所ヲバ見計直ニツケ、石ヲ除、牛馬ノ蹄勞セサルヤウニシテ云々

と命じ、路面の石抜きを行はせては居るが、是は必ずしも路面固めの工法とは見られない。併し今日でも田舎の道に能く見るやうに、大玉の砂利や小石を入れて、却つて所謂石高路いしかみちが出来、其の爲に人馬の歩行が難儀となつて「大玉抜き」の作業を行ふのと同様の關係で、或は當時既に砂礫いかりの類で路面固めが行はれて居つた證左とも一面認められぬこともない。茲に吾々の最も目を惹くことは、古來琵琶湖畔の大津より、京師地方へと輸送せらるゝ物貨、特に米穀は、逢坂山(近江)と日岡峠(山城)の急

坂を通して、牛車と駄馬とで運ばれたものであるが、従つて其の車馬の往來が頻繁となるに連れ、特に牛車の爲に道路は愈々破壊せられ、通行頗る困難を來したことは想像するに難くない。其處で牛車の往來する淀京師間、大津京師間の往還では、疾くに車道と人馬道とを確然區別して居つたのである。大津市の某家に傳はる、元祿八年(皇紀二三三五)十月調製の土地臺帳圖に既に其の起入があり、又其の頃の大津の俳人智月尼の句に

あふ坂や花の梢の車道

とある程のものなれば、世が徳川時代となり、幕府及諸藩の米穀倉庫が大津の湖岸に置かるゝに及んで、京津間の轉輸が益々殷盛を加ふるに至つた際に其の起源を求むべきではなからうか。而して牛車の往還頻繁を加ふるにつれ、車道の破損益甚しく車牛の難澁を見るに忍びずとあつて、木食正彈上人が大慈悲心に催ふされて、車道地普請の大願を起こされ、公許を得て、元元年(皇紀二三九六)正月着手、同三年十一月迄に大津街道日岡峠に總長三百間の坂路の車道に白川石を敷き詰めたのである。又逢坂山の坂路には、文化二年(皇紀二四六五)京都の心學者脇坂義堂が大津八町より京都三條大橋に至る全線三里の間、車道に花崗石を敷いたとある。此等の敷石が即ち車石と稱せらるるもので、昭和六年六月逢坂山道路改修工事中掘出したるものを見るに、長約二尺五六寸以下、幅二尺以下、厚一尺五六寸以下の不同な花崗石を、車輪當りに二通り横列に並べてあり、何れにも深さ七寸許、幅五寸許の齒掘れの溝が出来て居る。尤も社寺の參道の石疊や、長崎市其の他の町の坂路などで、時折り見かくる石坂とか登石の類は、古くから在つたことは明かであるが、本街道筋の路面舗裝の權輿は大津街道の是等の車石である。又彼の人口に膾炙せる箱根舊道の敷石は、文久三年(皇紀二五二三)に十四代將軍御上洛に臨み、丸石を敷き詰めたもので、「箱根八里は馬でも越すが」と語られた、其の上り下りの馬蹄で造られた馬さくり等の泥濘を根絶せんとして爲された仕事で英國で云へば第十八世紀頃の道路の状態とも云へよう。

斯く遅れ勝ちであつた我國の道路も、明治の維新を迎へて以來、人力車、馬車、荷馬車等々より輓近の自動車へと車輛運送は漸次に發展し、特に自動車の目紛るしい發達で、道路の改良も近時長足の進歩をするやうになつたのである。

## 人類の改善と家畜の改良

十五期

駒場農大教授 農學博士

宗

正

雄

農業の定義にはその見方により色々あるが「農業とは生物の生活現象を利用して物質の生産を營む業なり」といふ事も出来る。吾人が作物や家畜を育て居るのは其生活現象を利用して肥料飼料などいふ價值低き物質を乳肉穀物等價值高き物質に變生せしめて居るのである事は言ふまでもない。然るに其變生加工に當らせる機械は生物であるから工業に於ける機械よりも遙かに複雑巧妙である。従て其能率は各種類によつて大差がある。作物家畜も世界創造の初めに神が人類の爲に特に造て與へ賜ふたといふ説は今日は信ぜられない。之も初めは野生の動物であり、山野の雜草に過ぎなかつたものを人の手によつて其先天的性質を改良して此處に至つたものである。現に之等と近縁の生物で其原理と見做されるものが今日も現存して居て之から改良發達した跡が歴然として残つて居るものも少なくない。併し其生産上の能率の差に至つては實に著大なるものがある。例へば鶏では今日産卵の最高記録は年三百五十を越へて居るが其原種である印度の叢鶏は年精々二十位である。而も其大さはちやばの卵にも及ばないが、レグホンの如きは一個十七匁もある卵を三百以上も産むので年五貫から六貫の卵を産む。雌一羽の體重は四百五十匁位であるから、鶏は自己の體重の十倍乃至十三倍程のしかも純蛋白を生産するのである。稻も熱帯には野生稻の色々な種類があるが、何れも穂は全植物體の重量に較べて至つて小さく中には藁が穂の三十倍位になるものがあるが、栽培稻は穂が著しく大きくなり藁は其一倍乃至一倍半に過ぎない程に小さくなつて居る。實に秋の田を見れば穂ばかりが黄金の波を打つて葉や稈は目につかぬ程である。總て農業上の作物家畜がその原種たる野生々物に較べて驚くべく能力の上進して居るの

は顯著な事實である。作物や家畜が斯く優良な能力を發揮して居るのは單によい環境が與へられるからといふのではなく、其先天的性質即ち遺傳質なるものが作り變へられて居て生れつきから違て居るからである。

現にその原種を採て来て如何に親切丁寧に育て、も決して作物家畜に同様の性能を發揮するものではない。人類が此改良をなし遂げた事は實に偉大なる業績である。若し之がなかつたならば恐らく今日の文明は産まれなかつたであらふ。吾人が今日も野獸を以て農業をして居たとしたら幾人の人が狭い土地に住む事が出来るか？。恐らく今日の人々の百分の一も養ひ得ないであらふ。特に今日の作物家畜は小數の人の働によつて極めて多數の人を養ふ事が出来る様になつて居る。

小麦などは大規模の機械農に極めてよく適する様に改良せられて居るので一人の農業者の働でよく數百人分の食料が生産せられるといふ。其爲に多數の人は思索工夫等の時間の餘裕が與へられる事になり、茲に發明ともなり文化生活ともなつて文明が産れたのである。人類が野草野獸で命をつないで居たならば各人が朝から食物の爲に勞役しても歳はよつては尙食物が足らず文明も何もあつたものではないのである。されば作物家畜の改良は文明の母であるといへる。

然らば人類は如何にして此改良をなし遂げたかといへば、之は人が繁殖に干渉して其進化の方向を替へたからである。作物も家畜も一般生物界を通じての法則に支配せられて進化變遷して居る。即ち變異があり是に淘汰が加はつて絶えざる變遷をして居るのである。其淘汰が若し自然其儘であれば野生々物として進むのみであるが茲に所謂人為淘汰が加はり吾人の好む形態性質のものを殘して夫れのみ繁殖を許し、その特性を遺傳させやうと努めて來たからである。生物の現はす形態性質（略して形質といふ）は或る程度まで環境によつて變化される。榮養がよければ大きくなるといふやうな事があるが此環境から來る變異は遺傳しない事になつて居る。昔は之が遺傳すると思つたから生物にうんとよい環境を與へ著しく立派に育て、之を種にするといふ様な事をして品種を改良しようとしたのであるが之は全く無駄な企てである事が今日明瞭に證明せられた。されば一群の生物中に優劣良否の差があつても其の中から良いものを選出して親としても之が環境が良かった爲に良い形質を現はしたものであつた時は其性質は子には遺傳しないので、子は其系統固有の平凡な能力しか示さないものである。

されば一群中どれが遺傳質に於て優れて居るかを鑑定して遺傳質に於て優れたものを選出すれば始めて優良な子孫を得る事が出来る。其に遺傳質の優劣を鑑定するのは環境變異が遺傳しないから生物が現在現はして居る形質によつてのみ鑑定する事は出来ない。之には次代鑑定法と系統鑑定法とがある。植物や小動物では次代鑑定法が最もよいが、大家畜では系統鑑定法が行はれて居る。

歐米各國では毎年盛大な家畜の品評會や共進會がある。その會で一等を取つた馬は實に百萬弗で賣買されたものもある。鶏の雄でも一萬弗はする雌でも千弗以上する。一羽の雌がいくら多く卵を産んでも一生に千弗の卵價は取れぬ。之は良い鳥は又良い子を産んで之が種鶏として高く賣れるからこそ斯様に高い代價を拂ふのである。然るに之が環境が良かった爲に偶然斯る形質を現はして居たに過ぎずしてその良い形質が遺傳しなかつたならばどんなものであらふ。昔は遺傳質の鑑定法を知らなかつたので品評會の審査も一向に信用が出来なかつた。外觀は實に立派な鶏があつて一等を貰つたので高價で買つて歸つてみた處が卵は一つも産まなかつたなどの事さへある。之は卵巢の傷んで居るものは却つて營養がよく外觀立派に見える事があるからである。

今日は各個に就てトラップネストを使つて産卵數は調べて居るが、その多産性は果して遺傳して子孫にも之と同様に多産鶏が出来るか否かは夫れだけでは分らぬ。然るに品評會で一等になれば千弗の金も惜まず買ふ人があるのは今日は遺傳質の鑑定が出来て之なら必ず良い子を産むといふ事が極めて確實であり安心して之を求めても決して損をする事がないからである。其鑑定をするのは所謂系統鑑定法である。

系統鑑定法とは其の祖先に遡つて形質の優劣を総合的に判斷する法である。例へば乳牛であれば組合又は政府で技術者を派遣し各個の牛に就いて一々詳細に體格能力等を測定し之を公の帳簿に登録して置き、毎年之を縮冊單行本として發刊する。今審査しやうと思ふ牛があれば先づ其頁を開てみれば其泌乳量脂肪の含量その他能力は詳細に記載してある。同時にその父と母との番號が書いてあるから其頁を繰つてみれば父と母との體格能力等が夫々詳細に判るから之を一枚の表で書き寫す。次に父

の父母の番號が書いてあるから夫れによつて父方の祖父母の體格能力を此表に書き込み母の方の父と母との能力も書き込む。更に曾祖父母のを夫々書き込むといふ風に祖先に遡つて其系統の總ての個體の體格能力を書き込んだ一枚の表が出来る。之が系統書であつて之を見れば今問題として居る牛の遺傳力如何が判定出来る。例へば甲の方は祖先に良いものもあるが悪いものも幾つもあるといふ事であれば、此系統は能力に關し雜種性であつて劣等なものが分離して出て居る。従つて此個體も今外觀上の形質は申分ないが子孫には良い子が出来るかと保證出来ない。

然るに乙の方は祖先の何れも優良能力であるとすれば此系統は能力の優れて居る點に於て固定純粹であり、従つて此個體は必ず良い子を産むと斷言する事が出来る。従つて品評會の審査では乙の方に一等をつける。求める人も乙ならば高價を惜まないといふ事になる。今日は羊や豚でも皆此系統書を以て優劣を審査し又賣買も之れによつて價が定まり農業者は豚の婿を選ぶのでも決してよい加減の事はせず必ず系統書を作る慎重に審議して定めて婿に取るのである。

然るに人間の婿選び嫁選びは果して如何、人間も一種の生物である。神が創造の初めに力を入れて造り給ふた特別のものではなく、他の生物と同じ祖先から出た生物の一種類であつて總ての他の生物と親戚の間柄である。従つて他の生物と同じ法則即ち變異と淘汰によつて進化變遷して茲に至つたものに過ぎない。唯其變異と淘汰とが他の生物と違つて居たので今日他の生物と少し違つた點を持つて居るに過ぎない。變異の事は暫く別として淘汰には之にも一種の人爲淘汰が働いたのである。即ち人間は自分自身を淘汰して來てその向上發達を續けて來たので今日あるを得たのである。然るに文明の爛熟と共に其人爲淘汰を誤り却つて人類を退化劣變せしめる方向に淘汰が行はれて居る。爲めに年々瘋癲、白痴、低能、不具、虛弱等の數が増してゆきつゝある。英國のフランス・ガルトン氏は此事實を統計表を以て指摘し、若し英國が之を此ま、放任して置いたならば遠からず吾が大英帝國は之等惡質者のみとなるであらふ。之は嘗て未開野蠻の民族から占領される事を恐れたが夫れよりもつと恐ろしい事ではないかと叫んで大に人の注意を喚起した。

人類の之等の惡質は皆遺傳性であつて後天的には何とも致し方がない。今日の進んだ醫學でも精神病は治癒する道がない。

生れつきの低能は教育の仕方もない。これ程極端なものでなくても各人の能力も其素質は皆遺傳する。素質の悪いものを如何に教育してもその良いものと同等には決して伸びない。

馬や犬を調教する人は極めて痛切に生れつきなる事を感じるものである。之等は如何に名人でも性來愚鈍な質のものを名馬に育て名犬に仕立てる事は決して出来ない。傳書場はその遠方まで歸る本能には實に著しい差があるが之が皆天性であつて、生れつき愚なものや教へる道は全くない。人間の場合は教へる事は非常な強い力を持つて居るので往々天性の愚を補ひ得る場合があつて、生れつきなるものを輕視する人があるが之は教育の力に對する一の錯覺に過ぎない。優等な民族になりたければ益々有能強健であつて練達堪能の士となり得るだけの素質を持つものゝみとなるのが最上である。然らば何物がその反對の方向に退化劣變せしめる様な逆淘汰として働いて居るのであるか。

其の第一は結婚方式の變化である。即ち媒酌結婚が廢れて自由結婚に移りつゝある事である。歐米では日本の昔から見る様な意味の完全な媒酌結婚は無かつたが矢張り其父母は相當に子女の結婚には干渉した。干渉といふと悪いが善意のアドバイスと與へて居た。相當の年齢の人が結婚の要件として考へるのは第一にその家系の良否である。名譽ある家柄有能な人を代々出した家系といふ様な事は第一に考へる處である。之は家畜の系統書に當るものであつてその本人の遺傳質の良否を鑑定する主要素である。斯る標準で婿を選び嫁を捜せばその子孫には必ず有能な人が出來て、家門は益々繁榮し引いては人類の素質が向上するのである。然るに米國の如きは個人主義が益々發達して結婚に一切當事者以外のものが口を入れない事になつた。夫で結婚したければ何としても自分でその對手を探す外には道がない。處が自分で探すとなれば實に大なる困難があつて誤りばかり出来る。第一子孫の遺傳的素質などの事まで氣が附かない。先づ自分の生活上の便宜が第一である。従つて相手がお金を持つてゐるか容貌が良いかを第一に考へる。

之では子孫が強健で能力秀でたものになるか否かは分らぬ。彼國では各人が自分でその對手を見出すために各種の社會制度が出來て居る。學校で男女共學をやつて居るのもその一方法である。到る處にダンスホールがあつて盛んにダンスをやつて居

るのも皆そのためである。併し之等は一面からは如何に大なる犠牲があり損失があるものか分らぬ。男女元々その性能が異なるものを一緒に教育する爲に男兒も女兒も共に犠牲になつて居る。殊にダンスに至つては沙汰の限りである。若し我國が彼の糟粕を嘗めて自由結婚にしたならば斯様な厭ふべき制度も其儘に取入れぬ事にはどうにもならぬ。併し其弊害たるや一部都市で既に體驗して居る處であるが、夫よりも最も困るのは結婚は第三者の好意的冷靜な判斷の入る餘地がない爲に優生學的見地から子孫の遺傳質の優れたものを残したいといふ考を基として選擇をするといふ事がなくなつて了ふのである。さもなくとも文明と共に人類の素質の上に行はれる逆淘汰は果てしなく其の惡魔の斧を揮つて居る。今其一二のものを數へてみると。

第一は人口都市集注の問題がある。我國も商工業の利益が大きくなるに従つて人口都市集注の弊も歐米の夫と全く同様に著しい加速度を加へつゝある。今に人口の大部分は十大都市に集つて了ふであらふ。然るに誰が何と言つても都市は人生の墳墓であつて、此處に永く住むものは自然に健康が蝕ばまれて虚弱となるが特に其子孫は弱く繁殖力が著しく減ずる。都市の人口が急激に増すのは全部田舎から移住する者によるのみである。然るに農村を棄て都市に集まるものは概して健康もよく智能も勝れて居るものである。それが都市に行つて次第に死に絶へて行くに反し農村は天然に恵まれて弱いものでもよく天壽を全ふし子孫繁榮するが惜しいかな遺傳的に劣つたものゝみが取殘されて此處に留まつて居るので、此處で増殖繁榮するものは國民中遺傳的に劣つたものゝみであつて、全體として見れば國民的素質が劣つて行く事になる。

第二は醫術の發達である。昔はどしどし死んで行つた様な病人を醫術の發達によつて援けて天壽を全うさせる事は誠に幸福であるが豈計らんや一面から見れば之も逆淘汰として人類を退化させて居るのである。何となれば疾病の中には遺傳的なものが多い。精神病は殆んど悉く遺傳であるが癩結核その他傳染病はそれ自身遺傳病ではないが、之等の病原體に對し感受性が強いといふか抵抗力が弱いといふか兎も角其の素因たるものは遺傳である。昔ならば病弱な素因のものは早く死に、又は子孫を遺す機會がなかつたが醫術の發達により夫等が子孫を残す様になつたので、民族全體として見れば病に羅り易い弱いものが益々増加するといふ事になる。

第三は救貧感化事業等の發達である。之は人類の相互扶助の麗はしき精神の發露であつて誠に結構なことではあるが、一面からは逆淘汰の力として働いて居る。元來貧乏は遺傳病である。封建の時代の様に職業を世襲させられたり住居の自由さへなかつたりした時代は如何に天性優れたものも百姓の家に生まれるれば百姓、乞食の家に生まれるれば乞食で終らなければならなかつたが、今日は左様ではない。強健であり頭腦が良かったならば如何に貧乏人の子でも大臣でも大將にでもなれる。夫れにも係らず尙貧乏で居るのは自分が貧乏が好きであるか又は貧乏であるだけの素質を備へて居るからである。貧乏の要素には色々あるが病弱・薄志弱行・怠惰・放浪性・浪費性・飲酒等々であつて何れも遺傳病である事は今日立派に遺傳學的に證明せられて居る。此遺傳病者を無條件に救濟して生活の出来るやう養つてやるのが今日の救貧事業の全部である。そのお蔭で之等も亦よく子孫を残す事が出来て此の精神上又は肉體上の缺點を持つ子孫が増加して行くのである。

盜癖・賭博・詐偽・其他の反社會性惡徳所有者も環境上餘儀なくなつた後天性のものもあるが、其多くは生れつきであり遺傳性である。感化事業の發達により之等も救はれて多少矯正せられ感化院を出れば夫等同志で結婚して之等の惡質が益々重復するのをさへ見るのである。

第四は刑罰の輕くなつた事である。昔はどの藩でも十兩以上を盜めば打首であり賭博以上輕い盜みでも追島位にはなつて少くとも隔離せられて其繁殖は絶たれたのであるが今日は極めて短い禁錮位であつて幾回も別荘に行く位の氣持で刑務所に入入して居るものが多い状態で、之等もよく子供を産みその反社會性遺傳質を持つ子供が増殖しつゝある。

第五は學問の盛んになつた事と、晩婚の風習である。學問をすれば勢ひ晩婚にならざるを得ないが一般に晩婚者は有産有識の階級である。無産無識の連中は何の保りも顧慮せず年齢が來ればどしどし結婚してどしどし産むので、國民全體から見れば素質の優れたものは産む事が少なくなり劣つたものは益々産むといふやうになつて素質は退化する。特に女子の就學者の増加は著しい。歐米では大學専門の學校にも女子が必ず半数はある。

之等は自然に晩婚になるのは勿論であるが其職業進出と相俟つて結婚しなくなる傾向が著しい。オールドミスになる連中は

寧ろ素質の優れた方に多く力量技能が男子にも優りて立派な職業が與へられるやうなものは結婚などしなくなつて之と反對のものが益々増殖し國民の素質は退化劣變する。女子が高等の學校に入つて餘り激しく勉學をすれば子を産まなくなる。蜜蜂は受精卵とよい蜜をやつて育てれば生殖器は發達して女王になるが蜜が少なく其質が悪いと働蜂となると同様に人間も全身の養ひを腦に集注すれば女にはならず中性の働蜂同様なものになる。斯る人は結婚しても子は産めなくなる。夫れが著しく殖えるので逆淘汰の一因となつて居る。

第六は財産の私有制度である。之は人類に希望を與へ刺戟を與へ益々奮勵努力せしめて富の蓄積を促す一大要素であつて極めて大切な制度であるが一面から見ると之によつて其子孫が永く保護せられ、さもなければ生活もし得ない様な低能な子孫が祖先の恩澤によつて増殖する事になる。

第七は産兒制限問題である。之は其本家は何と曰つてもフランスであるが子を産みたくないといふには色々な理由があるが其一つは彼の法律が財産を子供に平等に分配してやらねばならぬ。財産で生活を立てる事を第一義に考へる彼等には子供が多くて之を分割してはどれも喰へなくなると曰ふのが主な問題で従つて二人以上産むまいとするのは中産階級の事で無産者貧乏人は之と關係なく殖える。然るに貧乏者には遺傳的に劣るものが多く夫れのみ殖えるのでは國民の素質は退化である。今日斯様な悪風の行はれる國々は何れも中産階級以上のみが實行し貧民は平氣で殖えて居るのは事實である。日本にも一時此宣傳が盛んになり鳩山前文相あたりまでが主張するとか聞いた事があるが萬一國民に其風が入つたならば民族退化の外はないのである。

以上は人類素質の退化を來たす主な原因を擧げてみたわけであるが此の問題は國家としても極めて重要であるので今日は世界各國とも大童になつて之が對策を講じて居る。アメリカ等でも全國民をして自覺せしめ優生學的見地に於て結婚の相手を選ぶ様にとあらゆる宣傳をして居る。學校でも中等學校以上には全部必ず優生學的講義をする。一般民衆に對しても活動寫眞その他機會のある限りを利用して此教育をして居る。一方大きな研究所を作り全アメリカ人の各家庭を歴訪せしめて其祖先に遡つ

てまで各人の特性其他を調べて此研究所で之を材料として人類の諸形質の遺傳關係を明らかにすると共に一方では結婚相談所を作り茲で誰でも結婚の相手方の家系を知りたい人にはすぐに此の記録から其二三代前にも遡つて各人の性質體質病氣の有無等あらゆる事を調べて立派な系統書を作つて提示してやる様になつて居る。夫れで結婚したい人はそこに行けばあらゆる調べがすぐに出来る。又一面からは悪質の遺傳を斷つ爲に種々な方法が講ぜられて居る。然るに日本はどうか。まだ此の方面の事はほんの一部の識者間に唱へられるのみで一般は全く考へもしない。然るに古來の良風であつた結婚の様式は急激に變化し家系の事や子孫の遺傳的素質の事は一向に眼中に置かない結婚が益々増加しつゝある。又之を考へても大都會では皆遠國から集つた人ばかりでその家系に遡つて調査したくても仕様のないのが普通である。總てが歐米の糟粕を嘗めて悦んで居るので前に述べた様な逆淘汰の要素は全部歐米以上に備はらんとして居る。然れども思へ。如何に金があつても如何に美人の嫁を迎へても若し其の子に瘋癲・白痴・低能・不具・虛弱・精神病者・其他の悪質者や不良盜癖其他反社會性惡徳者が一人でも産まれたならば一家一門のあらゆる幸福は消え飛んで了ふのである。之に反し如何に貧乏でも如何に容貌が悪くても子供が強健多才頭腦優れ氣概に富み性質温良よく學を好み業を習ひ立身出世をしたならば一家一門の悦びは更なり人生之に優る幸福はないのである。農業者が作物家畜に對して成し遂げた偉大なる功績を考へる時誰れか人類其者の遺傳質を輕視して可ならんやである。吾が國も歐米諸國に劣らず官民共に力を併せて眞劍に之が方策を考へ實行せむ事を望む次第である。

### 劍 舞 禁 止

明治卅年四月廿七日日本日次の嚴禁下る「自今以後左の條件に付きて嚴重に取締候條生徒各自に於て心得、違反無之様可致候

- 一、口笛、放歌、高吟は校舎内に於ては嚴禁す。寄宿舎、運動場に於ても亦猥りに吟詩劍舞すべからず。
- 一、他人の肩により歩行すべからず、廊下を疾走する事を禁ず。
- 一、制服のボタン常に正しく掛け置くべし。ズボンのカクシに手を入るゝ事を嚴禁す。



## 山岳五考

二十二期 日本山岳會員 北田正三

一、登山とは……山は久遠の生命……登山は崇高なる奮闘……登山家の生涯を通じて最も貴重な瞬間は山の巨人と相対して戦を挑んでゐる時でなく、むしろ悪戦苦闘を終つて、すべて事件が過ぎ去つた後、再びベースキャンプに歸つて静かに燃え盛る火を見つめ乍ら回想に耽る時であると信ずる。

私はかゝるタベタベをスイスの氷の山奥で、北部キャネジャンロッキーで又臺灣北部次高尾根シミタの下で、信越の山で又久住の御地の畔で數々の経験を持つてゐる。

荒涼たる磧を前景として黒々と針葉樹林が斜面を掩ふて垂れ下つてゐる、山稜の西には赤黒い峰々が中景としてすぐり立つてゐる。そしてそれ等のピークは刻々に黄昏の帷に掩はれむとする時遙か彼方、寂しくも澄み切つた、空に未知の國、秘密の境なる曠野の果遠く夢の國の連峰が雪の頭をもたげてゐる。そして夕陽は今や天に沖する一團の雲を透して遙か西方に沈まんとし雲の上部を鈍い灰色に染めつゝ其の裾には七彩の焰をとがした音なき流れをみなぎらしてゐる。

山の自然は何等のわだかまりもなく不意に山男等にこうしたタベタベを提供する。私はたゞ薄暗い森かげや、河や泉や、氷雪のほとりにさまよつて暮れ行く不變の夕映を見守つて薪の事も忘れる事がある。

文明の生活は正しく吾々を教養する處が多い。しかし乍ら、人若し野生の自由を経験すれば必ずや其人の考へは異つてくる。夜の冷氣はそくそくと迫る。メラ／＼と音立てる焚火が心地よげに明るい暖さで燃える、若人らは互に肩すり合せて少しで

も火に近づかうと寄り添ふ。皆の顔は焚火に照らし出されて歡喜に輝いてゐる。かゝる時に人の心は一つになる。そして心から打とけ、心から助け合ひ、心から慰め合ふ。花の咲く話しも決して妙な汚れた事には陥らず、吾等果して何をなすべきや、來るべき東亞の問題、かくして情操と國への責任、眞に美しい精神のめがえが此處からつちかはれる。

「山は久遠の生命、登山は崇高なる奮闘」

此の言は長くも 秩父宮殿下 が過ぐる時、日本アルプス穂高御縦走の砌り、吾等山行く者へ御さとし給へる御言葉である事を、改めて申し上げる。

二、登山と健康……近年登山が非常に流行して來て猫も杓子も、山登り、ハイキング、御役人衆までが、颯爽として……など、眞に日本人の身體についての考慮などはせずに金儲一點張りをやつてゐるが、山に登る事はいゝが先づ「山岳ファン」になる事が一番私は嫌いで、眞の山登りは決してそんなものではない事を申し上げたい。自己を顧み自己の健康に及ぼす影響について考へなくてはならない。山登る事はいゝが、山を見ず無我夢中の山好き、山狂ひになる事を恐れる。何事も山をかける、處に山岳家の所謂、心境があるものであらう。

登山と健康、之の研究が充分されてない事も未だ／＼登山界も進んでゐない證據で、私は事々に數年前から専門以外の此の一事に關して一萬尺の高地に於て毎年二週間位は必ず滞在するので研究してゐるが未だ十分の成績をあげることが出來なくて残念である。

元來高山の人體に及ぼす影響は、其の要因は、空氣が稀薄であつて清潔なること、強く且つ長時間の射光、紫外線及びベクエレル氏線の過度、高度の電氣陽現象、及び霧の少なきこと、空氣の乾燥、寒冷、氣壓のひくき事等であつて、これ等のものが相伴ひ生物の上に作用し、其の發育作用、新陳代謝、血液の集成に及ぼすものである。

ラヂウムの發見以來、各所の温泉は申す迄もなく山に於ても其の検査が既に遂げられて、サーケ博士の検査に據れば、高山の空氣は低地のそれよりも、ラヂウム、エマナチンを含むことは平均三倍大であつて極大量は實に低地の五倍大を示すとの

事である。

長く高山に滞在すると種々な影響を受けるものである。概して高山では酸素を攝取することが多くしたがって炭酸を排泄することが多い。故に胸部、ことに呼吸器の弱き者には最も良き場所、ドイツにては早くより高山地帯に此の種のサウナリヤム、が創設されてゐる。

次に心臓の力も強くなる、又脚筋及び軀幹筋をも強くし、皮膚も強壯になる、發汗の作用は實に心神を爽快にする。食慾は亢進して新陳代謝をさかんにし神経系統を活發にする。「登山者は若返る」「山登りを初めて、子供に恵まれた」なんて朗らかな事も数々ある。皆即ち之で、従つて神経衰弱者、胃病者には最もよき健康法であらう。

山高きが故に尊からず、山低きが故に卑しからず、要は、其の山、自己の心、自己の身體、此の三つ綜合和にする。ピュルケル氏に據れば海拔五千三百尺の高地に於ては赤血球五パーセント、血色素量七パーセントを増加し、又はラツケ氏によれば十五日間に赤血球數十五パーセント、血色素量十七パーセントを増加すると言つてゐるが私は五千尺の高地で三週間の間に赤血球十三パーセント、血色素量十四パーセントを増した經驗を有してゐる。かくして高山生活、乃至登山は血の純化、淨化に多大の効果ある事を申し上げて世の識者に一考をうながしたい。

然し乍ら、病弱な人、未だ體力の伴はない人々には無理にすゝめ難い。先づ低き山から初めて、次第に高山に、自分の村の町の近くの山にせつせと登れば遂には大ヒマラヤの高度よりも高く登る事にもなる。私は郷里阿蘇に住し、海拔一千五百尺の住家から更に四千五百尺の阿蘇に登る事既に物心づいて九歳の時から今日まで四百回を越えてゐる。そこに脚力と心神の鍛錬が出来、身體の強壯がすると信じてゐる、私の登山要訣は、これだけである。

- 一、疲れないうちに休む、少しの疲れは少時間で回復する。
- 一、出發時の呼吸脈搏は、いつも最初の出發と同じ状態。
- 一、出來得る文興味を起す、足をいたわる。

三。ア。ル。プ。ス。と。ヒ。マ。ラ。ヤ。……今日、世界の高山を語るものは、先づ第一にヒマラヤ、そしてアルプスに指を屈するであらう。一つは印度國境に一つは歐洲の屋根をなしてゐる山々の總稱である。

事實アルプスと云ふ名稱は單にアルプス山脈を呼ぶに固有名詞として用ひられるのみならず、更にこの固有名詞をはなれて「高山」といふ意味を表はす普通名詞として用ゐられてゐるかの觀がある位だ。

だが世界の高山の内て例へばアルプスに優るもの、アジアに於けるヒマラヤ・コンロンの如き、其の高度に於て、大きさに於てとてもアルプスの山々の遠く及ぶところでない。試にアルプスの最高峰モンブラン（四八一〇米）を以つてヒマラヤの最高峰、エベレスト（八八四〇米）に較べると、漸く其の半ばに達するに過ぎないのである、且つ其の山脈の長大なる點に於ても南にはアンデス、北にはロッキータンとなつてアメリカ大陸に長く連なつてゐるコルチエラ山系の如きはアルプスの數倍の長大と廣さにとぐるを巻いてゐる。かくアルプスは其の高さに於て、大きさに於て、又長さに於て遙かに他の種々の山々に劣つてゐるにも拘はらず、今日、あだかも世界高山の代表者なるかの如き權威を以つて幾多大山脈中に覇を稱へられてゐるのは如何なる理由によつてであらうか。

アルプス山系は其の壯觀實に世界の他の高山に譲るところなく歐洲中央スイスを中心にして雲表に聳え、峨々たる高峯は千古の白雪を戴き、源を其の萬年雪に發して山腹に懸垂する幾多の水河すさまじいばかりの光景と美觀、更に之等の氷雪の溶けて流れる深谷の水は常に澄みかへつた紺碧の湖水に流れ其の中途美しき瀑布を懸け、湖水と映えて展開し、其の偉大なる大自然の風景美、山岳美、崇高雄大なる決して他の山々の匹儔すべきものはないからでもある。

しかも此のアルプス山脈たる其の位する處あだかもヨーロッパ大陸の中央にあるので古來幾代この天地に彷徨せる幾億萬の住民は其の文野の程度如何をとせず、常に之を仰いで其の莊嚴の姿にあこがれ、其の絶對の風光を謳歌したであらうと思はれ、其の民族の興亡の跡と文野の歴史はいかに古きかをも追懷する處に興味が他の山脈のそれよりも多い。

従つてこの山脈はまた多數の人々によつてよく其の名を知られ殊に大自然の秘密を暴露して學界に貢獻してゐることも、決

して尠少ではない。地理學上、地質學上、種々の知識はこの山脈の研究によつて明かにされてゐる。氷河作用の研究の如きは全くアルプスの賜に外ならない。また植物の研究の如きも之によつてされたものが多い。

アルプスの言、名稱は「高山」の代名詞として用ひられてゐるが其の由來を研めると又面白い。一體 *Alps* とか *Alpe* とか云ふ語源はインドゲルマン語で「高山」とか「山」とか或は「岡」又は草の原など云ふ意味に用ひられてゐる。

かのアルプス山脈の *Alps* の語源も、又バルカン半島の山國である *ethania* の如きも其の名稱の由來は皆之れに外ならぬのである。つまり現今のアルプス山脈のアルプスはこれらの語から導かれてゐるので即ち、白雪皚々たる高峯といふ意味を含んだ語であらう、しかも今日に於てはアルプスなる名稱は廣く用ひられて、

一、個有名詞としてヨーロッパのアルプス山脈を指し。

一、之にあやかつて各地方の高山を何々アルプスと稱し。

一、之を脱して一般に高峻峨々たる山への普通名詞となし。

一、名詞のみでなく形容詞に *alpine snow* 高根の雪 *alpine flora* 高山植物 *alpine stock* 登山杖など、高山と云ふ意味にも用ひられてゐる。かくてアルプスの山々は山登りの歴史、即ち登山の發達に於て、全く本場であつた事も昔から有名な所で日本に於ても一度はスイスアルプスの峯に、雪に、氷河に、其の足跡を印せないでは、ハバが利かぬ様にも見られる様にアルプスは有名であり、歐洲遊覽の人士もスイスに遊び、必ずや心ある人は其の雪峯の一つに登るであらうし、又容易に登り得る設備が完成されてゐる。

さり乍ら「世界最高の山は何か」之に對する答へ程容易なものはあるまい、今日ではヒマラヤはそれ程迄で一般的なになつた。そればかりでなく曾つてヒマラヤと云へば非常にかげはなれた神秘境の様に思はれてゐたが、今日では多少ヒマラヤに關する事が種々知られて來ると共に次第に又我々も親しみを持たれる様にもなつて來た。實際、アルプスは今日の處、嶮山ではなく、むしろ觀光遊覽地となりつゝある現状、ヒマラヤに對する、山と云ふ概念も少しは昔のそれを改むべきではなからうか。とは云へ、若し、世界に未踏の山はと問はれるれば、第一に、何人も、ヒマラヤの名が心に浮ぶ、ヒマラヤは全く都會地か

ら非常に離れて高いこと、土地の風俗習慣が現代文明と全くかけ離れてゐることなどが謎のヒマラヤとなり、神秘のヒマラヤとなつてゐる。其の登頂の困難と之に行く遠路、之が準備、多大の費用と時間、西藏住民との關係など幾多の難關が横つてゐる、いよ／＼時は迫りつゝある。明十一年五月には第五回のヒマラヤ遠征隊が攻撃の火蓋を切らむとしてゐる。

ヒマラヤ山脈、二萬四千尺以上の高峯群、七十餘座、雪と氷と岩、とそして幾多の登山者を排撃し、慘死せしめた、印度、西藏に跨がる謎の雪山、全く別の意味で考へられる山々である。

東西千四百哩の大連峯、其の大部分は人跡未踏の處女峯で、最高峯エベレスト、28、500、カンチエンジャンガ、と世界最高の峯々がずらりと肩を並べて世界各國の登山家は血眼になつてゐるが、又英國から四回もエベレスト登山隊が送られてゐるが成功してなく多くの名登山家を犠牲としてゐる。ヒマラヤ登山の困難さの原因の中で最も大きな困難をもたらしものは即ち大ヒマラヤの前方に標高一萬二千尺の小ヒマラヤ山脈が重疊として聳え、何人をも通すまじとしてゐるからである。小ヒマラヤの山麓、シリクリ驛から登山鐵道で七千尺、ダーズリンに着く、カルカツタを夏服で出て登山列車で合服となり、此處で冬服となる、一晝夜で赤道から北極へ旅する様なものである。

ダズリン丘嶺に降りて、頸をあげると、前面のすぐ鼻の先に世界第三の高峯、カンチエンジャンガ、が忽然と立つてゐるのに驚かされる。ヒマラヤ山頂、エベレストは夏は殆んど霧に閉されてゐるので其の時間を待つて瞬間の山容を眺め得るのでよほど幸運の人でない限り御目見得が出来ぬ。

ダズリンのホテルの窓に坐して白煙の様な霧の帷りの一點を、カンチエンジャンガは、このあたりにもあらうと凝視すること數刻、間もなく視線にある雲が晴れるとそこに體々たる一連の白嶺、それカンチエンジャンガだと叫ぶ間もなく又其の上方の雲が晴れると、そこにも亦氷塊の如き峰がある、かくて幾度かカンチエンジャンガと思ひ誤りつゝ、雲が上へ／＼と晴れて行くに従ひ視線は上に其の角度は上向となり最後に眞の目的の山を眺め得た時は殆んど仰向けの姿勢となつてゐる直線距離四十五マイルの所にある、山を斯の如き姿勢で眺めるとは、一體誰が想像したらう、山の神秘に心を奪はれる前に其の高きに驚くのみである。

よくヒマラヤ紀行と書かれてゐる文献を讀まされてゐたが、ダチリンの後方にあるタイガヒルからの眺望であつた、そして皆が眞のヒマラヤヤ、エベレストの雄姿でなく、此のカンチエンジャンガの麗姿をヒマラヤと書いてある事に私は思ふに到つて苦笑した。

タイガヒルより見るカンチエンジャンガの雄大なスケールと荒削りの山容は眞に人間世界のものとは思はれぬ、ツリーストには案内人等が皆一様に、ヒマラヤと説明して聞かせて了ふので山の知識のない人々は、カンチエンジャンガをエベレストと間違えるのである。

アルプスの怪峯、マツターホーンの山頂が青年登山家、ウインバーに依つて征服されて偉大なセンセーションを捲き起した約一昔前の一八五二年に印度政府の三角測量隊の一印度人の助手がある日、時の長官サーアンドリウ、ワウフの事務室に慌たゞしく駆け込んで叫んだ。

「私はたつた今、地球上で一番高い山を發見しました」其時ワウフは冷静に、「も一度外へ出て計算して見ろ」と云つた、幾度見直しても同じで、百哩以上離れた點からなされた數字は二萬九千呎を前後することに變りはなく、此の地球上の最高峯は土人からも名を呼ばれず、印度政府でも只「W」と記されてゐるに過ぎなかつた、ワウフは自分の前任者で且つ有名な測量學者、サーチョーヂ、エヴェレスト氏の名をとつて「マウント、エヴェレスト」と命名した、幾多の異論も出たが結局今日にその名を止めるに至つたのである。

エヴェレストが發見される迄で世界一であつたカンチエンジャンガは、エヴェレスト發見の僅か四年の後遂に其の誇りを第三位にまで轉落させねばならなかつた。即ち一八五六年にはカラコルム山脈中に突如として出現した2K(ケイツウ)に壓倒されたからである、2Kこそは殆んど人界から見ると得なかつた山で、カシミアとトルキスタンの境界タリム盆地を流れるヤルカント河の上流オプラン河と印度平野を流れるインダス河の丁度分水嶺になつてゐる。ヒマラヤ主脈の南方カシミアの一萬六千尺を超える四つの峯の上から見ると、一八五六年印度測量部のモントゴメリーに依つて初めて測量された結果二萬八千二百七十八呎と確められた。ゴメリーはカラコルム山脈の頭字を取つて西から順に1K、2K、3Kといふ風に名づけられた。幾千萬年の間何人にも知られず黙々として發見される、日を待つたであらう。この山が只2Kといふ一個の符號で呼ばれることは餘りに呆氣ない氣がする。何人がこれを征服して眞に其の處女を破り其の名付け親になり得る者ぞ、と若き血はたぎり立つてあらう。

カンチエンジャンガも第三位となつたと云へヒマラヤの最高峯として古くから謳はれて來てゐるので其の肩巾の廣い双兒峯其の側壁を捲ふ巨大なる雪氷の斜面に映ずる、かの有名な朝映、夕映、の美しい變化と共にヒマラヤ見物の代表的、山としてよく知られてゐる二萬四千尺を披

く高峯七十餘の内に於て古くから個々の名を持つ彼女ヒマラヤの女王であらう。其の名稱の起源は不明である。或る人はサンクリットから足を「金の腿」と譯し、又或人は「鬚の大男」と譯してゐる。西藏入國で有名な青木六教氏は「五大雪藏」として西藏遊記に用ひて居る。ダチリン後方のタイガヒルに登りて見た。カンチエンジャンガが未だに私の眼に残つて消えない、そしてエヴェレスト峯を仰ぎ得なかつた人々、又之をエヴェレストと間違える人々も無理はない程に崇高な山姿である事を想ふ。

紫紺色に霞むネパール北境、ヒヤヌーから急に低く下つた鋸齒状の山脈を辿る約八十哩、忽然として高く怪奇なる一群の雪嶺の現出するマカルー、の袂り取つた様な山頂の左肩の白きピラミッドこそ現在世界地上の最高峯、エヴェレストの姿である、マロリー、アーツインの山友を永遠の謎に秘めた彼れ久遠のエヴェレストである。名高い東北山稜を残んの太陽に輝かしてゐた其の山姿を私は今書き乍らも眼をつぶつて想ひ出してゐる。

#### 四、ロツク、クライミング。

氷雪の山、岩稜の山、之が登攀には相當の手段と方法が講ぜられなければならぬ。日本古來の登山は凡てが宗教的意義を有し其の信念にて登られてゐたので其の關係の人々にて山は開かれてゐた。然し西洋では中世以後學術的考察が加味されて來て之に一種の社會的名譽感を加はつて來ていよいよアルプス地方の氷壁に岩崖に、登攀する術が次第に發達されて來た。日本でも城壁の登り下りに忍び者は其の術を練つたもので例の甲賀者、伊賀者などは其頃からすばらしい登攀の術を有してゐた。手摺の近江麻繩を作つて之にて人も又猿にしても攀ぢ得ない様な急崖を上下してゐた。古今東西を問はず、山に登る術は形こそ異れ皆一つの登攀の術が備つてゐたと信ずる。未踏の氷山、處女峰の雪、神秘の岩嶺に攀づるアルピニスト、近世に到つて益々盛んになり、所謂岩登り、ロツク、クライミングの術が一層に論理的に考究され之が實行に依つて不可能とされてゐた峯々も終に登頂出來る様になつた事は近代登山の爲めに喜ばしき限りである。

ロツク、クライミング、岩攀は綱で二人又は三人の身體を結合して行はれるもので、登山の途中多數の人々を綱で引き上げたり、下したりすることは岩攀ではないのである。

岩攀の内で一人が若し墜落した場合は他の二人も當然墜落しなければならぬから之に反對する人もあるが、若し一人が墜落しても他の二人が確保する事に依つて其の生命を救け得る事も出来るわけで、要するに岩攀の綱は人を上げ下しするのではなく萬一墜落する場合の豫防綱で

ある事を了解せられた。

ザイル、ロープ、綱は大筋で作られ、編み綱と撚り綱との二種がある。前者は主として獨逸で用ひられ、後者は英國で用ひられ、古き日本では英國と同じく撚り綱であつた、今も之が登山家の仲間多く用ひられてゐる。尤も氷河では編み綱が靱で使ひやすいので用ひられてゐるが撚り綱の方が強さでは断然優れてゐるので、岩攀りには之が使用されてゐる。英國で出来る物には赤糸が入れてある。我國でも之に劣らない立派なものが出来て、私などは全く國産物を使用してゐる。専門的には四十米が一本が原則であるが三十米、三人が一番理想的であらう。一人が真中で二人が両端に行き間隔は十五米となる、二人の場合は両端では開き過ぎるので捌が悪いから両端に五米餘して間隔を二十米として使用する。

岩攀りには野球のやうに一定の規則や罰則はないが、習慣上一定の不文律が産れてゐる。綱を持つには各人が手を充分上に伸ばして手が自由で動くよう餘裕をとつてのち小さな輪を先頭の人は二つ三つ、中央の人は五つ六つ作つて保持する綱を地上にたらしはてはならぬ。何等から理由で結合された一人が早くなり又緩くなり又は停止した場合は手にもつてゐる手繰り綱の輪を順序よく自動的に手から離して他の人は常に静止しない様になければならぬ。岩攀りに限らず登山に於ても常に同じ調子で動くことが肝腎で、道が樂だからとて無闇に調子をあげ、悪くけわしくなつたからとて急に調子を下げることなく同じ調子で終始、アクションする様に、習練する事が登山の要件の一つでもある。

綱の身體に於ける結び目及綱を持つ手は常に先頭の通りしなければならぬ、岩壁を横に行く場合には綱は岩のある方の手に持つが原則である。綱は手が一本入る位の緩かまで腹に結びつける、初心者には更に胸に結び、ルックを背負ふ場合には初め綱を身體に結び然る後ルックを背負はねばならぬ確保の場合には行動者は手に持つてゐる綱を全部離し、静止者即ち確保者は其の綱を全部繰り上げて置いて行動者の動作に伴つて手繰り又送るのである。

其の足場があれば足を十分踏ん張り行動者に續く綱を右手を経て右肩にとり次で左の手に握る。綱を繰り上ぐるには左右の手を交互に繰り同時に繰つて手から綱を放してはならぬ。其の放して居る時にどんな不幸が生じないとも限らぬ。若し一旦墜ちはじめた場合には其の最初の瞬間に防止しない以上、決して之を防止する事は殆ど不可能である、其の場所が足場がない時は下からの綱を一度岩の角上を滑らして（此の時綱を直接岩角に富らせない様に、帽子其他のもので巻いて保護する）前の姿勢を取る場合と自分の身體を岩や木に括りつけて後、前の姿勢

をとる場合とがある、前の方法をビレイと云ひ、後者をアンカーと云ふ。

又岩を攀る場合、足は岩の掛り目を眞直ぐ下に踏まねばならない。眞直ぐ下に踏まないといふと直ぐ滑つて足掛りにならない。此の爲め手は必ず眼より下につくことが最も肝腎で、手が眼より高い所につくと身體は自ら岩の方にねる事になり足は眞直ぐ下に掛り目を踏まないことになるから滑ることになる。急坂を登る時、ビッケルを上方の木の根などに打ち込んで身體を引き上げてゐる人が往々あるが、されば此の事を心得ぬ人のする事で履すべきである、ビッケルに引かれて多くの場合身體が傾き足を眞直ぐ踏むことが出来ないものである。

掛り目にかけた足は次の足がかかるまで少しも動かないやうにせねばならぬ掛り目が小さいと動いたがために滑り落ちる此の岩の掛り目も練習しないと最初は目につかないが、次第になれると今まで氣付かなかつた掛り目に氣がつくやうになる岩の裂け目は手でそれを突つ張つて攀る。

履物は、草鞋、地下足袋も日本人にはいゝが寒氣の時、又は雪のある山ではやはり靴でなければ駄目である。其の底は周圍にトリコニーがあつて、しかも足の力が直接岩を踏むやうなものがいゝ。絶壁を下る場合には綱を二重として上で確保し上から来る綱をまづ右手に握り次で前方から股の下を通し左の腰から前に出し右肩に取り、さらに左肩にとり前方で左手に保つて交互に手を緩めて次第に下るので足は岩をつゝ張るのである。此の場合眼は必ず下の方を見て綱のために脚が上らないやうにすることが最も大切である。

雪や氷の斜面を上り下りするには、ビッケルでよく足場をきざみつけて一つ／＼確めて之を踏み、且つ確保の時はビッケルを充分雪に差し込んで綱を一卷き捲く事を忘れてはならない。之等ロック、クライミングに於てリーダーの指揮には男らしく服従すること、青年を先に立てる事、自己の力量を知り且つ細心大膽でなければならぬ。

## 五、高山植物

山には色美しき高山植物の限りなき種類が路端に、岩壁に、雪溪のほとりに、喬木林や原始林の下にとり／＼の形を見せて山行く者を待つ。登山のつれ／＼に之等植物に相當の理解をもつたとひそれが植物學上の専門的な知識でなくとも其の名を識り、その常識的な異同をわかきまへ、これをより面白く觀賞することも登山の趣味を豊かにする一助となり且つ科學に對する興味を増すこととなる。

植物など縁遠いと思ふ人は別だが高山植物の培養に力をつくして見やう、然し實地の知識の少ない人は先づ高山植物鑑のような圖を色刷し

た書物、然も小形の物を求めて山に登つたついでに實物と對象すればすぐ呑み込める。又自己の近くの山などを流つて平常から多少自ら作つて見て植物に對する親しみを心得て置く事も必要である。之が保存なども充分考慮されてゐるが一つ／＼自分で分類する事も楽しい事である。生育状態の觀察が之を栽培しようと思ふ人には最も大切である。夏季登山の礫り採取しても餘程上手でなければ其の時持ち歸つたもの、活着は困難である。そこで無益な山荒しは中止して個々の植物の種類に應じて其の生育状態、即ち太陽を受ける程度、地中の湿度、土質の如何等を見てそれらの植物を作る時の参考とすることがどの位賢明な方法かも知れぬ。近年高山植物の採取は多く禁ぜられてゐるがあまりに無理解な山荒しをするからであらう。

高山植物が下界の植物と異つてゐる最も顯著な點はその生活状態である。日本アルプスを標準とするならば高い所の植物即ち海拔二五〇〇米から三〇〇〇米のものは一年のうち約八、九ヶ月は雪の下積となつてそれが六月頃の雪解けの際に漸次厚い雪の衣を脱ぎ、陽光と風、雨、霧に恵まれ、また山肌は雪解の水に間断なく潤されて一時に咲き初める。恰度 七月中ごろから八月ごろが花盛りの最中で九月にはいづれも種子をつけて子孫の繁殖につとめ十月には枯れて山には冬が来るのである。そして高山の冬の恐ろしい寒さも皆雪に掩はれて保護されて此等の植物には害をせぬ、故に高山の上方には雪に掩はれてしまふくらゐの低い丈の灌木か草木より生じないのである。

本當に美しい高山植物は多くこの頂上附近の灌木地帯以上の邊に群生するもので其の重なるものには、コマクサ、ハクサンイチゲ、ミヤマリンドウ、ハクサンコザクラ、タカネツメクサ、ミヤマシホガマ、イハギキョウ、クモマナヅナ、イハイテフ、クロユリ、ミヤマウスユキサウ、ミヤマダイコンサウ、ミヤマキンバイ、ミヤマゴメグサ、シコタンサウ、タカネスミレなどにして、チャウノスケサウ、イハウメ、コマヅツガザクラ、コケモモ、シラタマノキ、チンダルマ、イハカガミ、ツガザクラ、イハヒゲ、ヂムカデ、キバナミヤクナグ、などの矮少な灌木に屬するものにも美しいものが色々あり、ハイマツ、シヤクナグ、白樺、なども高山の景觀には無くてはならないものである。

又之等は砂礫地、岩壁、草地、湿地等を好むで生育するが、之より三百米位も下つて喬木地帯になると全く之等は見當らず、主に野生蘭マヒヅルサウ、ゴゼンタチバナ、コガネイチゴ、シラネアフリ、ミヤマダイモンジサウ、ミヤマタダマキ、ムシトリスミレ、マルハイチヤクサウ、シナノキンバイ、イハテトギリ、などが涼しい谿谷や樹蔭を我物顔に生育してゐる。實に高山植物は山の王冠の寶石として限りなく輝くものである。

—二五九五、六、四 聖山荘にて—

## 地震の時如何なる家屋が如何に壊れるか

三〇期 工業大學教授 工學博士 谷 口 忠

我が國は北は千島列島、北海道から、南は琉球列島臺灣に至る迄過去二千年來、數千回の地震に襲はれ、我國土中「震災の憂は無い」と云ひ得る地方は無いと云ふてもよろしい程の世界第一の地震國であります。我國震害の歴史は日本史始まると共に始まり共に榮ゆるの感あることは誠に憂ふべきことであります。

假に近年記録の明確な今から過去三百五十年間の震害に就いて調べて見まするに、慶長元年閏七月九日、九州豊後灘にあつた直徑約二里半の瓜生島が地震によりて陥没し爲めに死者七百名を出したる地震、及び其の後僅か三日を置いて京都伏見地方に起つた地震、即ち記録に「土裂け、水湧き出し大厦高樓及び民家倒れ、死者二千名洛陽の大佛殿崩れ佛像破壊す」と云ふ地震等から今度の臺灣の地震に至る迄を合せて六十四回の激しい地震が起つて居るのであります。今之を明治以前の二百六十七年間と以後の七十三年間に分けて考へて見ますに、地震の回数に於て丁度半々で三十七回づゝであります。之を死者の數より見ますに慶長元年より明治元年迄の期間に於ては七萬三千名、明治以後に於ては今度の地震を入れて十四萬五千七百三十名となります。家屋の潰壊を見ますれば慶長元年より明治元年迄の間に於て二十六萬六千棟、明治以後に於て九十萬六千棟と云ふ數になります。慶長元年迄とそれ以後とは其の期間に於て四と一との割合でありますに地震の回数に於ては同じく三十七回であり、死者數に於ては約二倍となり、家屋の潰壊に於て約三倍半となつて何れも増加してゐるのであります。之を同一期間としての割合をとりますならば、明治以前の約二百五十年間に於ては、平均七年に一度の大地震があつたのに對し、明治元年以後の約七十三年間には二年に一度の激しい地震が起つて居ります。死者の數より見ますれば前期間には年平均二百八十人の死

者を出して居るのに對し明治以後は年々平均二千人の死者を出して居ることになります。

家屋に就いて申せば前期間に於て年々平均約一千棟の家屋が潰焼して居るに對し、明治以後に於ては實に年々約一萬二千五百棟の家屋が全潰或は全焼して居ります。即ち人に於て約七倍半、家屋に於て十二倍の震害の増加となつて居ります。即ち我國震害の歴史は日本史と共に始まり益々榮ゆるの感があると申したのはこの事實に依つたのであります。

地震の回数は永年月の間には多少變り行くものであるとしても、人口及家屋は年々増加して行くものと考へねばならぬものでありますから、地震に依る損害は年々膨大して行くものと見なければなりません。度々の地震に當局は多額の金を支出し、又は一般の人々も多額の寄附をさせられて居りますが、之れは豫期せざる慘事であるとして震後に多額の金を費すことを繰返すよりも震前に僅かの費用でその災害を軽減することを講ずる方が遙かに得策であるのであります。吾々はこの意味を以て震災害による國民の損害を少しでも軽減せん爲め及ばずながら色々の研究を行つて居るのであります。が然しながら之れは吾々のみが研究致して居りますのみにては、どうしても効果は上らないのであります。之れには一般の人々が我々の研究を利用してられ、以て各人が各人の家屋を震災害に對してそなへることが最も効果的であります。

地震の起る事を防ぐ事は今日の科學の力では不可能の事ではありますが、それに伴ふ震災害を減ずることは今日の科學の力で充分出來得るのであります。即ち各位が各位の家屋を耐震耐火的に考慮されて造られて居りますならば、如何なる地震がありましても少しも恐れる事はないのであります。我國の耐震構造學問としては世界に誇るべき進歩して居るのであります。その普及が充分でないのは遺憾千萬な事であり、その意味に於て家屋耐震上の常識に就いていさゝか申し上げたいと思ふのであります。

家屋は其の構造上より區別して木造、土藏造、土塀造、石造、煉瓦造、木骨石造、木骨煉瓦造、鐵筋煉瓦造、鐵筋ブロック造り、鐵筋コンクリート造、鐵骨煉瓦造、鐵骨鐵筋コンクリート造等があります。土塀造とは臺灣に多い家の造方で池沼の乾涸した際その底の泥を集め之に藁苴又は粗穀を混じ約縦三十三種、横二十二種、高さ十種の大さの木型に入れて打抜いて二ヶ

月程日光に曝し乾燥せしめた塊を煉瓦又は石の場合の様に積み重ねその間に蠣灰を流して以て壁を造り之れに木材を架して床を張り小屋を造り屋根を葺いた家屋であります。

土藏造りは内地に多いから皆様御存知と存じます。壁には同じく川底の粘土分の多い土を用いたものでありますけれども臺灣の土塀造と異なる點は壁内部には木の骨組が組まれ之れに小舞と稱する竹が縦横に組まれて、其の上に幾回となく壁土が塗られたものであります。

石造とは長方形の石を積み重ねて、其の繼目にセメント、或は石灰を砂と混じたモルタルを敷きつめ壁體を造つたもので、多く昔米倉とか水倉に用ひられたもの。木骨石造とは石造壁のみでは危険であるから壁の内側に木材で骨組を造つて之を補強した構造であります。煉瓦造は縦二十一種、横十種、高さ六種の煉瓦をセメントと砂を混ぜたモルタルで積み重ね壁を造つたものであり、壁の内側に木造で補強したものを木骨煉瓦造りと云ひます。鐵筋煉瓦造とは煉瓦造りが地震に弱い所から、其の缺點を補ふ爲め普通煉瓦の形を多少變更したものに且三種程の圓い孔をあけ之を積み鐵の棒徑約十耗から二十耗位のものを（鐵筋と稱する）縦横に挿入して補強して行く構造方法であります。鐵筋コンクリートブロック造とはセメントと砂と砂利に水を混ぜたものを丁度土塀造の場合の如く一定の木型に入れて（この型は色々の形がある）その固まるを待つて木型をはづして一つのコンクリートブロックを造り置き之れを積み重ねその間に鐵筋を縦横に挿入する法であります。鐵骨煉瓦造とは鐵の太い柱、梁を以て骨組を造りその間に煉瓦を積み重ねる方法。鐵筋コンクリート造とは鐵の細い棒十耗から二十耗位のものを組んで籠狀のものを造り之にコンクリートを流し込んでかためたもの。鐵骨鐵筋コンクリート造とは鐵の太い柱と梁とを組んで然る後壁床等に鐵の細い棒を籠狀に組んでコンクリートを流し固めて行く方法であります。

以上の如く色々の構造方法がありますが之を構造理論から區別して見ますならば土塀造、石造、煉瓦造の如く一つの小さい塊を積み重ねて壁を造り、その壁をたよりに床を張り屋根を造る方法と、之に對して木造或は鐵筋コンクリート造、鐵骨造の如く柱と梁の骨組を先づ造り之を頼りに床を張り、壁を造り屋根を張ると云ふ構造法との二つに分類することが出来るのであり

ます。之に對してその兩者の中間の性質を有したものとて木骨石造、木骨煉瓦造、鐵筋煉瓦造、鐵筋ブロック造等出来るのでありますが、これは現在未だ數多くはないのであります。耐震構造上より申しますならば骨組を造つて進む構造が優れて居りますことは關東大震災の時の構造別による震害の程度を調べますと明らかであります。即ち之れによれば石造は八三、五%煉瓦造は八二、一%、木造二一、〇%、鐵筋コンクリート一一、二%、鐵骨造一三、五%の家屋が再び使用に堪えぬ程度の被害を受けたのであります。

次に各種の構造の家屋が地震のとき如何に壊れるかといふ事、換言すれば其等家屋の弱點に就て概略を申し述べます。先づ土塀造、石造煉瓦造に就て申しませう。土塀造、石造煉瓦造は防寒、防暑の目的には適はしいものでありますから、臺灣のみならず滿洲、支那大陸を始め歐米にも少からず存するのであります。我が内地に於ても關東大地震迄は相當數多く存して居つたのでありますが大震災により大多數が姿を消したのであります。それ等は何れも明治初年歐米の直寫模倣時代の作品でありまして地震國には地震無き國の煉瓦構造をその儘模倣する事の危険なるを知らなかつた時代のものであります。煉瓦造の震害は我國では明治廿四年濃尾地震、明治廿七年東京地震、同じく卅年廣島及秋田の地震、大正十一年浦賀水道の地震、大正十二年關東大地震等に於て著しく現はれ、海外に於ても三十八年印度、三十九年桑港、四十二年伊太利地震等に於て、近くは米國サンタバーバラの地方に於てその弱點は明瞭に曝露されたのであります。之れによれば煉瓦造石造の破壊は木造の如く傾き又は倒れるのでは無くして一般に局部的破壊の集合であります、即ち倒潰ではなくして崩潰であります。

而も煉瓦、石造、土塀造は木造、或は鐵筋コンクリート造、鐵骨造が弾性に富んで居るに反してそれが少く寧ろ脆性に富んで居るので、その結果として破壊は急激に起り従つて人畜に害を及ぼす點より見ますれば、甚だ危険千萬な構造方法と言はねばならぬのであります。

今度臺灣に於て多數の死傷者を出したのも之が爲めであります。煉瓦造の最も大きな弱點は切妻壁と稱しまして、外壁が上方に延びて屋根迄達して居るところの三角形をなしてゐる壁の部分であります。之れは内側に並行して小屋組として屋根の瓦を支へて居る木骨部があり之れが地震の時、切妻壁と衝突しますので直ぐに壁に龜裂が入り崩落するのであります。然るに通常其の下方に出入口が設けられてありますので、この墜落は家屋の破壊の外、その家のものが地震を感じて外に逃れ出んとする際に上より煉瓦塊が崩落し多くの壓死者を出すの危険があるのであります。煉瓦造は又かゝる切妻壁を設けない場合でも軒蛇腹けんじばくと稱して軒の上部に色々の水平にも垂直にも突出した裝飾をほどこしてある。之が同じく無用の長物でありまして人殺しの仕掛けをしてある様なものであります。殊にそれは道路に面した部分を裝飾する關係上、多いので通行人を傷けることになるのであります。その他屋上の裝飾塔、煙突等もそれ自身の破壊のみならず、之等の破壊は屋根を壊し、床を破ると云ふ第二次的の震害を及ぼすのであります。

之等不要の突出物たる裝飾は第一に廢除せねばならぬのであります。従つて近年出来る建物は之れが無くなつて來て居るのであります。かくの如く煉瓦造の震害は木造や鐵筋、鐵骨コンクリート造と異つて多く家屋の上部から始まる特色を有して居るのであります。その破損は煉瓦壁の龜裂であり煉瓦壁の龜裂は通常煉瓦と煉瓦との繼目、即ち目地に副つて起るのであります。之は通常煉瓦の強さよりも目地の強さが弱いことによるのでありますから、煉瓦造を耐震的にせんとするには第一に目地にセメントを多く使ふことが必要となるのであります。關東大地震に會して殆んど僅かの龜裂程度で済んで居る純煉瓦造、例へば海軍省、裁判所、司法省その他丸の内にある煉瓦造の貸事務所の如きものは何れも、此の目地に多くのセメントを用ひ丁寧なる施工を行つた結果であります。即ち之等は明治廿四年濃尾の地震の影響を受けてその事を考慮して施工したものであるからであります。臺灣の民家の煉瓦造はこの點より申しますならばセメントを殆んど用ひないで、石灰を用ひたモルタルを使用した煉瓦造が頗る多いのでありますから頗る危険千萬であります。

尙煉瓦造を耐震的にする爲めには壁の長さを減する、之が爲めには適當な直交壁を設けるか、支柱壁を設ける事、然らざれば壁厚を増すこととあります。然し煉瓦造は自重が大きいし、其の強度には自ら限度がありますので木造や鐵筋コンクリート造に遙かに及ばないのであります。



次に木造家屋に就いて申し上げます。在來の和風木造家屋は屋根の重量が甚だ大である割合に柱と梁の接合部が單に頼つて居るものが多いから、一度大地震に會ふとこの柄が折れる爲め、柱梁よりなる家屋の矩形の骨組は歪んで平行四邊形となり屋根重量大なる時は回復するを得ずして遂に屋根が地面に伏すと云ふ順序を辿るのが常であります。

二階建の場合には階下に壁體の特に多いときの外は、一般に階下が歪み、階上は階下のクツションニングの作用により地震力の作用が減少致しますので其の結果歪むこと無く、二階床が地上に降下するの順序を辿るのであります。木造家屋は相當に靱性がありますから、破壊は震源地附近に非ざる限り突然には起らない、随つて地震を感じて破壊迄に戸外に逃出す餘裕が充分ありますからあわてずに逃れるのがよろしい。若し二階に居つた場合にはあわて、二階から逃出す様な事は最も愚な方法であります。又階下にあわて、階段を下つて来るよりも寧ろ二階で靜かにして居つた方が安全であります。即ち激しくなればひとりで二階が一階になりますから、其の危険のない方向に逃れる事が出来るからであります。

木造家屋の震害を受け易い部分を申しますならば、先づ第一に和風、洋風とも内外壁の剝落であります。随つて木造でありながら外觀を飾る爲めにタイル張りとかモルタル塗りにした家屋は其の部の剝落が最も早く起るものであります。之れはその壁の下地となつて居る木部が通風少なき爲め多くは早く腐蝕するからであります。之れと同一の理由で土蔵の軒廻りの壁が落ち易いのであります。又洋風木造で應接室、客間等でストープを用ふる爲めの煙突が屋上に突出して居りますが之が又地震で破損するのであります。之等は地震後直ちに検査を行つて修理して置かないと、冬になつて之れを用ふる時火災を起す原因となるのであります。

更に地震が激しくなりますと長押とか、鴨居が抜け出し、柱と梁との接手がゆるみ家が傾斜する。更に地震が激しくなると土臺が布石からはげ落ち、家屋が移動するか、又は大多數が傾斜すると云ふ事になるのであります。家屋の移動は激しい時は六十種も移動した例があります。

之等の木造家屋を耐震ならしめる根本方針について申述べますならば、第一に震力を軽減する最も有効なる手法として屋根

の重量を軽減することあります。家屋に働く地震の破壊力は家屋の重量に正比例して増大する外に、その重量の存在する高さにも正比例して増大するものでありますから家屋の上部の重量を減することは其の破壊力を著しく減するものであります。我國在來の瓦葺屋根を用ふるときは二階建の場合屋根の部分と二階床部分と一階床部分の家屋のみの重さが五・二・一の割合であります。若し天然スレートとか石綿スレート、又は金屬板を用ひますとその割合は二・二・一となります。之れに住居として家具を二階及び一階に置いた場合の割合をとりましても前者は二・五・一、五・一・一、後者は一・一・一、五・一・一となりますから屋根葺の重量を考へることによつても地震の破壊力を半減することが出来るのであります。

地震の破壊力を半減し得ると云ふ事は實に大きな問題でありまして、木造家屋の全町村の倒潰率と地震の破壊力との關係を調べて見ますに、地震の破壊力が重力の一割乃至二割といふ場合は全町村の二・三%乃至五・六%が全壊するのであります。震力が其の二倍となつて三・五割乃至四割に到りますと、二十%、三十%の全壊家屋が出来る。更に四・五割になりますと五十%乃至九十%と云ふ家屋が全壊するのであります。之れを以て見ますと、只軽い屋根葺材料を撰ぶことによつて一町村家屋の倒潰率を十分の一に減じ得るのでありますから大いに考ふべきことであります。

第二には家屋の撓みを減する方針として、家屋には縦横に、成る可く壁を設けその内部にも成る可く多くの斜材を用ふることであります。之れは力に對して四角形は直ぐに歪むが三角形は變形し難いと云ふ簡単な理屈によつたものであります。家屋の撓みを防ぐ上に最も簡単な方法として斜材を用ひますには多少専門的知識による方が固より効果はありますが單に素人で行つても相當効果は得られるのであります。

同じく撓みを減する目的で柱と梁との接合部は從來の和風構造による柄のみに依らず、羽子板金物と稱して一部は板、一部はポルトとなつて居る鐵物又は箱金物と稱してコ字形になつて居る鐵板、又は隅金物として三角形になつて居る鐵板、又はかすがポルト等を以て充分補強することである。之れは柱と梁との離反を防ぐの外にその兩者のなす直角を飽く迄維持する目的のものであります。之を更に有効にする爲めに方杖と稱する斜材を柱と梁との接合部に入れることがよろしいのであ

り、之れはよく停車場のプラットホームの屋根に使つてあるものであります。之等は適當な方法によりまして室内に露出することを充分防ぎ得るのであります。

以上は木造家屋を耐震的になす上に時と所を問はず極めて簡単に爲し得、且有効である方法を擧げたのであります。之等を爲すことによつて建築費が特に増大する程のことはないものであります。一坪に付て一圓から二圓も増加すれば、出來得るのであります。之れは注文主が家を建築さるゝとき特に大工に御注文なさらないと、舊來の構造方法に慣れた大工には實行せられない場合があるのであります。

尙木造家屋保存上の點に就て要點を申し上げます。家屋の床下は或るべく通風をよくし濕氣を防ぐことが大切であります。臺所湯殿廻り等濕潤なる場所の土臺柱等は、最も腐蝕し易いのでありますから時に防蝕に注意すべきであります。然らざれば平時に故障無くとも地震に會うとき、家の倒潰する原因となることがあります。

又軒廻りとか小屋組とか床の下の日光の當らない部分には白蟻が飛んで來て蕃殖し、外觀には何等の變化も無いのに柱梁の内部を食ひ損じて其の強度を著しく減じて居る事がある、これも時折注意して置かねば地震の害を増すことの一つ因となるであります。

最後に鐵筋コンクリート造とか鐵骨煉瓦造鐵骨鐵筋コンクリート造に就て御説明致します。

之等の構造は木造或は煉瓦造に比較致しますならば遙かに耐震耐火的の構造方法であります。之も絶對的のもので無いことが關東大地震によつて立證せられたのであります。中には全潰して死傷者を出したものとさへあつたのであります。之等の構造の家屋の震害はその特色としては木造の如く最下層でなく、又煉瓦造の如く最上層で無く中間の層に多く起るのであります。更に之を研究して見ますと二階三階に於て最も多く起るのであります。之れは通常構造學を學んだものにとつては當然最下層に於て震害が多かるべき理と反する現象でありましたので、大震後色々の學者がこれを研究致しまして色々の説を建てたのであります。私もこの點に就て研究を致しましたのであります。それ等によつて鐵筋コンクリート又は鐵骨造の家屋は

地震のとき各階の床の相對的移動の最も大なる層に於て起ることが判つたのであります。今その層を最大撓度層と名付けますならば、それは柱と梁の太さの割合又は上の柱と下の柱との太さの割合によりまして左右せられ更に震力によつて左右せられますが、通常の建物では地震力を受けたとき第二第三層附近が最もこの條件になり易いことが判つたのであります。

更に詳しく申せば鐵骨とか鐵筋コンクリート造は彈性に富んだ建物でありますから一定の固有振動週期を有してゐるのであります。地震も亦一定の週期を有してゐるものでありますからその兩者の共鳴を避くるやうに建物を設計し、而もその柱と梁との割合を適當に配合して特に二、三層に弱點を造らぬ様にすることが必要となつてくるのであります。之等の點は専門的になります故省略いたしますが、之等の研究は我國が世界的には最も優れて居りまして先きに太平洋學術會議や萬國工業會議に於て海外の斯道の學者を敬服せしめたのであります。之等の研究は無いのであります。之等の研究は關東震災以後の研究でありまして一般に理解普及せられてゐないために場合によつては危険極まる建物も出來る憂ひがあるのは遺憾千萬なことでありまして。

我國を震災の憂ひから脱せしめ國民をして日夜安住して各自その業務に精進せしむるための社會生活の容器たる建築物は如何なる所と時とを問はず耐震耐火的たる事が第一の必要要件であります。その學問的研究は前述の如く相當に進歩してゐるのであります。要は建築せらるゝ場合その建築主がその點を充分考慮せられて耐震耐火的の建築を造ることを要求せらるゝことでもあります。

之れを以て我國も震災による膨大なる損害より救ひ安住の地とすることが出來ると思ふのであります。之を以て終りとします。

思ひ出五十年目次

五十年前を懐ふ	一五五	櫻井久我	一六六	利光
明治廿二年頃	一五五	今藤	一六六	石丸
在校當時の状況	一五五	佐藤	一六六	浦定
日清戦争前の母校	一五五	山口	一六六	佐魯
回顧五十年	一五五	松尾	一六六	三憲
入學當時の感想	一五五	高橋	一六六	大憲
追懐四十年	一五五	太田	一六六	宮光
母校への追懐と希望	一五五	鳥嶋	一六六	野奈
大中の思い出	一五五	山根	一六六	小雄
大時代と器械體操	一五五	柴山	一六六	宮野
同級親睦旅行記	一五五	山口	一六六	本正
中學時代の回顧	一五五	藤本	一六六	神修
感想二二三	一五五	上城	一六六	本修
忘れ得ぬ「うどん」の味	一五五	堀村	一六六	野憲
三十五年の昔	一五五	宇佐	一六六	宮野
思ひ出す事ども	一五五	朝倉	一六六	野野
四十年前在學當時の回顧片々	一五五	波邊	一六六	安武
中學時代に於ける印象	一五五	小宮	一六六	佐武
二三の思ひ出	一五五	堤宮	一六六	佐武
中學時代の思出	一五五	長野	一六六	安武
昔の運動會	一五五	山野	一六六	佐武
明治二十九年の頃	一五五	長野	一六六	佐武
全國の模範學校	一五五	山野	一六六	佐武
努力	一五五	山野	一六六	佐武
十五回生の思出	一五五	山野	一六六	佐武
猪野山越し三里の通學五年	一五五	山野	一六六	佐武



五十年前を懐ふ

一期 北海水力専務 櫻井久我 治

憶ひ起こす、今より五十年前、明治十八年の夏頃、吾等の母校大分中學校は唯一の縣立中學として生れたのである。當時私は所謂十五の鼻垂れ子僧で、漸く試験に合格して、第一期生百名中の一人となり得たのは子供心に愉快であつた。

爾來春風秋雨幾星霜、爰に創立滿五十年を迎へ母校並に同窓會役員各位の御盡力により、開校五十周年記念式を擧ぐる段取となつた事は洵に悦ばしく、近來の快事である。

當時の校舎は、府内城址にある縣廳の正門に向つて、右側二三の家屋敷續きの平地に建てられたもので、矢張家中屋敷の跡でもあつたか、大玄關の前には大きな蜜柑の木があつたりして趣が異がつて居つた。南隣には師範學校が有つた。

長池の方から荷揚町に至る角地である。大體に校舎は今の田舎の小學校程度のものでしたが、新しいので氣持は良かった。

最初の校長は元郡長をして居られた村上田長先生であつた、其下に秋山正篤、野村成次郎其他の諸先生が有つた。

二代目の校長が録田榮吉先生で、何でも文部省準奏任御用掛と云かふ役目を罷めて來られたそう、其當時では人を吃驚させた高給、月給百圓の校長であつた。今の言葉で謂へば相當のハイカラであつて、當時二十八九の青年であつたが、非常の雄辯で、毎週一回全生徒に修身の講義、大に生徒の心を引附けて居られた様に思ふ、其後文部大臣の時及び樞密顧問官の時四、五度御目に懸つたが、今や即ち亡し、噫、私共の卒業した時の校長は三代目の衣斐鉸太郎先生であつて、明治廿二年の夏であつた。(在學四年で卒業したのは途中學制の改正が有つた時、僥倖して一年得をしたのである)筆の勢で少々鹿爪らしい學校歴史の一斑を書いたが、以下私共在學當時の生活状態、經濟事情、其他に就いて記憶を辿

つて見度いと思ふ。

當時寄宿舎も有つたが、私の郷里は三佐村で學校から二里計りの近距離ではあるし、日曜毎に家に歸りたいと云ふので通學する事になり、同じ村から一緒に入學したKとIとの三人で、北町の小さな土族屋敷の土蔵を借りて自炊する事にした、家賃が驚く勿れ月四十錢であつた。勿論疊も無く、ガタビシヤした床に薄縁を敷いた程度のものであつた、米も味噌も、漬物も土曜日に家に歸つて月曜の朝早く三人で擔いで來たものである。

當時三佐から大分迄二里の俵賃が五錢、歸り車なれば四錢で勤められたが一度も車に乗つた事は無かつた。

何せ米を磨いだ事も、飯を炊いた事も無い少年計りなのでオモヤの小母さんから習つたりしたが飯は随分炊き損つた。副食物としては大概味噌汁に漬物、時には鰯や、腹太ジャコを少し計り煮て喰つた事もある、非常に美味しかつた。一週一度位牛肉(當時一斤五錢)を喰つた、其時は跡が大騒ぎで、井戸端に行つて齒ブラシを使つてスツカリ口の中を掃除したものだ、四足を喰つた儘では神様や佛様を拜がめぬと云ふ子供心からであつた、洵に感慨無量である。

一年足らずコンナ生活をして居る内、Kは父君の死に遇ひ師範に轉校する事になり、Iは市中の下宿屋に行く事になつた。何でも其頃の下宿料が一日六錢位であつたと思ふ。(乍序

學校の寄宿舎は月二圓位だつたと記憶する。)其處で私は中學校の近くで村から出て居る建築請負人の家に一升扶持と云ふ約束で同居した、ツマリ食費として一日米一升の代を拂へばそれで萬事足りるのである。

當時の米價は、白米小賣一升四錢四、五厘であつたから、丸一ヶ月喰つても一圓三四十錢で済むし、御負けに土曜日曜は家へ歸るから、差引き一ヶ月の食費は九十錢内外であつた、今から考へれば嘘の様な話であるが本當だから仕方が無い。

「當時中學では授業料は最初無料で、五年生の時だつたかと思ふ初めて二十錢の授業料を納める様になつた、教科書は大部分學校で貸して呉れた、實に難有いものであつた。」

(以上の次第であるから筆紙墨、制帽、小倉服其他の雜費を加へても、四年間の總學費が百圓内外で済んだと思ふ、今日東京に遊學する贅澤な學生の一ヶ月分の學費である、米價が約十倍になつて居る今日ではあるが思へば昔の書生生活は簡易なものであつた。當時中學生の最大好物は堀川の破れ饅頭であつた、ヨク覺え無いが一錢に四つか五つであつた、二錢喰へば充分であつた、ソレでも月に一度か二度しか喰は無かつた私共である。

大分自分關係の事計り書いたが、少し計り當時の教課の有り様を書いて本稿を終る事にしよう。

吾々の入學した當時は唱歌の爲めのオルガンさへ無かつた、式日等に君か代を合唱する時野村先生と云ふ高師を出た器用の先生が奥さんの琴を持つて來て伴奏したものである、唱歌の時間も皆此琴で調子を取つて「櫻、櫻、彌生の空は」ナント誦つたものである。

當時の兵式體操が又頗る振つて居た、銃は十年戦争(西郷戦争)に使つた先キ込めの鐵砲、石井軍曹と云ふ十年戦争の勇士が活潑に指揮して呉れた、大分川尻の發火演習の時など一度ボン／＼と銃聲がするかと思へば五分十分杜絶へるのである。一發打てば柵杖で銃腔を掃除して又先キ込めをして、ソレから打つからである、昔の戦争のノンキさが窺はれる。まだ書けば色々有るが餘り長くなるから此位にして筆を擱く、誠に取止めも無い事を長々と記述したが何かの参考にもなれば望外の幸である。

## 明治廿二三年頃

五期 今村 孝次

私が高等小學を卒業して中學二年の補缺編入試験を受ける爲に大分に出て來たのは、明治廿二年九月初旬、玖珠の山奥

は朝夕は早や爽涼を覺ゆる頃なのに、大分の街はまだ相當に殘暑がひどかつた。同行は日隈新君朝山又一君、それにその年師範に入學した、今森町の町長をやつて居る得重彌太郎さんの四人連れ、七月の末小學校を出る時、「九月には一緒に行かうよ」と堅く約束して置いた伊東連平——伊東喜八郎君の長兄——と云ふ友達が休暇の間に脚氣か何かで急死したのは寂しかつた。何にせよ、十五歳の小腰で日出生臺、伏魔獄の中腹、猪の瀬戸越と十二里近い難道を歩いて來るのだから、石垣原を通る頃は秋の日はトツブリ暮れ、草叢にすだく蟲の聲々も小憎らしく思ふ位へト／＼に疲れて居た。別府では本町筋の天満屋とか云ふ宿屋に泊つた。旅籠賃は十二三錢であつたと思ふ。翌日は俵で大分に向つたが賃銀をやはり十二三錢位であつた。其後経験した事であるが、足ごしらへをして辻侍の車夫を値切り倒せば七八錢位でも大威張で大分別府間を走らせたものである。

大分では南新地の洗と云ふ家に下宿した。同宿は吾々一行の外、吉村某といふ豊州の記者や、獸醫學校——今の三重農學校の前身——の生徒などが居て仲々賑やかであつた。二三日すると試験が始まつた。二年の受験者總數三十八名、中には長髪を綺麗に分けて粹な柄の背廣を着て居る人もあり、さうかと思ふと黒繻子の袴の掛つた着物を着て、袴は風呂敷に包んで持つて來て、學校で一着に及ぶと云ふ變つた風の人も

あつた。一體に年を取つて身體が大きくよく出来さうで、初日は可なりひげめを覺えた。一年の學科課程を標準にして試験するのだから、國語、英語、算術は勿論の事、國史、日本地理、礦物、圖畫、體操までやらされた様に思ふ。監督に來られる先生方が皆えらさうに見える。服装は瀟洒、意氣は颯爽と云ふ風に感じたものである。中で困つたのは衣斐校長の英語の書取であつた。田舎育ちの事で、譯解には可なりの自信を持つてゐたものゝ、發音と來ては先生からして餘り重きを置いて居なかつたので、校長が妙に口をこねる様にして云はるゝ語句が聞取れ悪くて一寸困つた。

其日々の成績は翌朝になつて掲示板に「左記以外ノ者ハ出頭スルニ及バズ」と云ふ風に發表せられるので、受験者の數は日に日に減少し、最後の體格検査の日まで残つたのは十五名であつた。而かもその内二名が淘汰され結局合格したのは十三名であつた。三十八名中約三分の一の十三名がパスしたのだから競争は可なり烈しかつたと見ねばならぬ。二五〇の募集人員に對して、應募者が百名かそこら超過したからと云つて、直ぐ「受験地獄」だとか、「學級増加を要望す」といふ世間や父兄の態度と比較して見ると、茲にも時代の推移と云ふ事が痛感される。試験日に小學校の受持先生や、父兄母姉などが本人以上に心配さうな顔付でワンサ／＼と學校へ押し掛け、職員をてこずらせるなど云ふ事は、こゝ廿四五年來の

現象で、私などは里程の關係上未明に家を出るので、まだ寝て居る父の枕許に往つて暇乞をした事も度々有つた様に思ふ。我子の旅立を起きて見送つても呉れなかつた父の恩を今しみ／＼と有難く思ふ。

入學したのは十月一日、一緒に入つたのは二年では大津留重君、太田秀雄君、三村保君など、一年では阿部貞夫、金澤末作、河野義男——日露の役大尉で戦死——、日隈新、松尾小三郎、松田良策——この人も大尉で日露の役に戦死した——、三重野與四郎、山口誠一、角喜久治、吉丸一昌、若林清、渡邊長男など云ふ五十餘名の人々であつた。一年もやはり約倍數の志望者の中から選抜されたのであつた。角喜久治君は中津の英才で首席で入學したのであつたが、本來なら當然二年に入學すべき人が何かの都合で受験に間に合はず已む無く一年に入つたので、伎癢の嘆に堪へなかつたのか、間もなく退學して上京した。一高から東大へと順調に進み、柔道も講道館三段の資格を有ち、人物材識の點に於て扇城青年渴仰の標的となつて居たが、惜しい哉大學二年の頃病死した。生徒總數は在來の人々を加へて百三四十名を越えなかつた様に思ふ。

當時は自宅通學生以外は全部寄宿舎に收容するのを原則として居たから、生徒の約半數は寄宿生活をしてゐた。舎は南北二舎に分れ、階上階下各十二室づゝもあつたであらう。六

疊に三人の割で收容された。部長四人は五年生、室長は三四年生から任命された。舎監は圖畫の大矢廣先生、教練の石井辰彦先生、書記の矢野龜太郎先生が兼務された。朝夕、就寝前と一日三回の人員點呼があつたが、新入學生に取り怖ろしかつたのは舎監の先生よりも寧ろ五年生の部長であつた。その内でも竹田の谷岩彦さん——後本縣の郡長を務めて居た——の如きは白哲美髯、島山重忠を聯想する様な風采の持主であつた。さう云ふ人達が號令嚴明に統率するのだから、勢ひ小さくならざるを得なかつた。しかし嚴格なのは規律の上の事で、上級生下級生間の交情は頗る温かで、途中で出逢つて禮をせぬ下級生も無く、せぬからと云つて腕力制裁を加へる上級生も無かつた。一禮生徒間で暴力沙汰に訴へるなど云ふ事は、大分中學には曾て無かつた事で、かう云ふ蠻風を輸入したのは他縣からの轉學生であつた事を明言する。

上級生の事に言及した序に當時の五年生即ち第二回卒業生の印象を再現して見る。谷さんは一年志願制度布かれて初回か二回目位の豫備將校で、師岡と云ふ警部長の拔擢を受け警部からとん／＼拍子に郡長になつた人だ。斗酒敢て辭せざる豪傑であつたが、今は郷里で病を養つて居られるさうだ。學科の方で一二席を争うてゐたのは山田時太、大嶋翼、工藤猪鹿の人々であつた。山田さんは濱脇の人、小柄な勉強家で、藏前の高工を出て何處かに務めて居つたが、まだ手腕を伸ぶ

るに及ばずして早世した。大嶋さんも藏前出で永い間長崎の三菱造船所の技師をして居つた。今も神戸で健在である。豪放活な英語のよく出来る人であつた。工藤氏は近頃まで縣の事務官、商工課長を務めた人、その能吏としての才幹手腕は世間自から定評のある所、兎も角も中學を出た許であすこ迄叩き上げた人だから相當な物と謂はざるを得ぬ。

蒼顔瘦軀、眼光の炯々たる人であつた。碩田交友會の創立に力を盡し、一號から四號迄の編輯を擔任したのもこの人であつた。桑原榮次郎、八千枝兄弟は其頃縣の兵事課長をして居た同苗平八と云ふ人の息男で、平八氏は維新前後多少國事に奔走した人で何かの大衆小説で其名を見かけた事もある。いづれ當時の知事西村亮吉氏が土佐の人であつたので、同郷の關係で引張つて來た者であらうが、見るからに精悍な顔付の人であつた。さう云へば當時大分縣の官界に於ける高知縣人の勢力は仲々のものであつたが、これは初代の森下景端、二代の香川眞一、兩氏が岡山縣人であつたので同縣人が多く入り込んだのと同じ現象で多く怪しむに足らない。そこで桑原兄弟の事であるがこの人達の勇名は入學前から耳にして居た。それは舎監に何か不平を有つて職員室にストームをやり硝子窓などメチャ／＼に破つたと云ふ事件であつた。處が豪傑も病氣には克てず、八千枝さんは其の夏脚氣か何かではかなくなり、私達の入つた時は榮次郎さんだけであつた。この

人も學友會(今の辯論部に相當する)の席上で佛蘭西革命の歴史を一席辯じて氣を吐いたことがあつた。豫備少尉から警部となつて鳥取あたりで務めて居たが、早く故人となつた。

尤も尖端を行つたのは井川源太郎さんであつた。竹田の人で文才もあり書も上手であつたが、得意とする所は政論で、大分新聞あたりに公然筆を執つたのみでなく、明治廿三年夏の初度の總選舉にはやつと卒業した許の中學生上りの癖に、改進黨の候補者箕浦勝人、若林永興等の爲に各地に應援演説をして廻つた者だ。在學中も工藤猪鹿氏と提携し、校内に二三十名の同志を募り、萬壽寺や來迎寺などを會場に借受け政談演説の眞似事をやつた。そして『國民の友』や『蘆花の處女』など英國自由貿易派の政論家の傳記などを購入し、輪番に讀んだものだ。私も二年生の新米であり乍ら會員の一人であつた事を想ふと生意氣な者ではあつた。井川さんは一年志願を終へて實業に志し、廿六年東京に出て布哇渡航の準備中レウマチで急死したのは惜しい事であつた。後陸軍少將まで往つた吉原岩吉氏は西國東高田の人で重厚な人物であつた。計へ上げて見ると僅か十人しか無かつた第二回生も寔に多士濟々一騎當千の士に乏しくなかつた譯だが、何と云つても吾々後進の頭にヒロイツクに響いたのは、本校を中途退學した第一回生組の伊東儀藏、加藤本四郎の二氏であつた。伊東

儀藏氏は今の綾井忠彦さん、本校を三年位で退學されて東京の郵便電信學校——遞信官吏練習所の前身——を優等で卒業し、其後歐米に留學、今日の地位に進んだ人であるが、頭腦明晰な秀才の名は吾々の入學した頃まで喧傳されて居た。

加藤本四郎は森藩の少參事で後には縣會の常置員などをしてゐた加藤茂弘の四男として明治三年四月玖珠郡森町に生れ、大分中學に入る前既に日田の教英中學に學び、故藏相井上準之助氏、故陸軍中將吉田平太郎氏など、俊才の名を齎してゐた。大中には開校當初二年に入學し、三年を修了すると同時に中野省吾、池田宇作等の同級と手を携へて創立勾々の第五高等中學校——今の五高——の豫科三級に移つたのであつた。大分中在學當時の逸話も色々傳はつて居るが、その中でも印象深いのは「加藤は勉強せんでもよく出来る」と云ふ風評が學友間に高かつた事である。實際彼はクソ勉強はしなかつた。散歩が好きで試験前でも何でも瘦軀を飄々と運んで散歩の日課を怠らなかつた。それに彼は家庭でも名題の朝寝坊であつた。彼が中學に入つた直後の感想を私は間接に聞いた事がある。「喇叭の合圖で寝たり起きたりする生活はとてたまらぬ。休日には慾も得もない。親類知人の家に往つて一日中ぐつすり眠り込むのが今の至願だ」と。其頃の生徒達には不斷はいゝ加減傾けて居る癖に、さあ試験となると頭痛鉢巻で頭を水で冷やしたり薄荷を臉に抹つたりして、二晩も三

晩も徹夜して勉強する者さへあつた。加藤は絶対にそんな事はしない、勉強の態度も平素と餘り變りが無い。そこで友人が彼に向つて「君はどうして勉強せず出来るのか」と訊いた。彼の答は平凡であつた。「僕にしても誰にしても勉強せず出来る筈は無い。唯勉強の時間と方法が違ふのみだ。君達は一體教室で何をして居る。先生の講義中は居眠りをして嘔き合つたり外の本を見たりして居るでは無いか。僕はその時間に教はる事はその時間内にはつきり頭に入れる様に努力して居る。それだから試験前だからと云つて別に慌てぬのだ。」と。但しこの答には多少の註解を要する。それは加藤其人が頭のよい人であり、且つ日田の中學校などで可なり素養を積んでゐたので自然他の人よりも學習態度に餘裕があつたわけである。兎も角も彼は私に向つても「勉は可いが強はよくない。勉めるのはよいとして、無理な尿勉強をするのはよくない」と、言つた位餘裕主義者であつた。しかし學科にこそ没頭しなかつたが、彼は讀書家であつて外交官となつて後、暇々には李白、陶淵明の詩集や西洋の小説などをよく見て居た。「詩集をせんでも、詩を誦して詩中の人となり得ればそれは詩人だ」とも云つて居た。

五高の一覽表や卒業生名簿を見る人は、第一期卒業生の首位に加藤本四郎(大分)の名を見出すであらう。方々の高等學校長をして居た武藤虎太氏とか、近頃停年になつた黑板勝美

教授なども彼と同期生と思ふ。同じ法科の出身であり乍ら、五高在學中から「人圓主義」など云ふ哲學めいたものを唱へて香川縣邊の内務部長で官界を退いた藤本充安と云ふ變り種もあつた。龍南會も彼の在學當時に出来たものだ。その以外にも俊秀で眞面目な後輩を網羅した一種の修養團體も率ゐてゐた。その内に東大の村川堅固博士や文理大の友枝高彦教授などの素朴純眞な少年時代の顔が見える。五高を出て帝大法科に入つたのは廿五年の秋であつた。大學での同期は所謂東大——京大はまだ出来て居らぬ、随つて東大と云ふのは妥當を缺ぐが——法科廿八年組の濱口、伊澤等々の大物揃ひである。五高の代表的人物とも謂ふべき加藤が彼等の間に伍して、人格に識見に毫も遜る所無かつたことは多く言ふを用ひぬであらう。日歐交通史の權威と云はれる臺灣大學教授の村上眞次郎博士は加藤と同郷の出身で大學に於ても科こそ違へ同期であつた。暑中休暇など郷里の森で二人が落合つた時には吾等後進の爲に所謂夏季大學を開いて各々專攻の立場から新智識を與へて呉れた者だ。序ながら「夏季大學」の名は別府のそれよりも廿年も前玖珠の山奥で使用してゐたのである、たしか直次郎さんの示唆に依つて——

廿八年の春加藤は脚氣を疾み房州の北條か何處かに轉地した。この間に外交官試験の受験準備は着々進められたものと思ふ。帝大卒業の成績ははつきりしないが首位より十番以内

には相違ない。外交官試験は合格者十餘名の内陸奥外相の長男陸奥廣吉が首位、加藤は第二位であつた。「親の光りは七光り」などの下馬評も無いではなかつた。同時の合格者には落合謙太郎、若松兎三郎（同じ森町出身の）などの名も見えた。十月には京城公使館附の外交官補として赴任する事となつた。當時朝鮮は閔妃暗殺事件の直後で、公使三浦梧樓は召還され、小村壽太郎が辯理公使として赴任する際、日鮮の外交の最も紛糾を極めた時であつた。かう云ふ時機に加藤が沈毅にして鋭敏な小村公使の下に働いた事は彼の將來に取り意義深い者があつたであらう。廿九年の秋には倫敦駐在の領事官補に轉じた。この秋は彼に取つて最も不幸な秋であつた。九月には父を喪ひ葬儀をすまずと直ぐに渡歐の途に就いた。處がその船が三千噸許の傭船か何かで、おまけに船長が英國人の馬鹿に自負心の強い人間であつた爲に、香港を出てから普通航海者の畏怖する暗礁の上を「俺の技術を見よ」とばかり乗切らうとして手も無く坐礁して仕舞つた。今の様に無線電信などの通信機關の無かつた時代に航路を外れた大洋の眞只中に坐礁したのだから、船客や乗組員の狼狽は察するに難くない。少し風浪が高いと浪が甲板を洗ふ。南支那名題の海賊の襲來の恐れもある。彼は後日「坐礁船上二週日の生活は十年の禪學に勝る」と云つて寄越した。こんな風で彼がまだ倫敦に着かぬ内に彼の母も亦父の跡を追うて逝いた。

倫敦に三年居つて蘇州の領事に轉じ、更に香港に移り、日露戦役の前々年三十五年には仁川の領事となつた。外交官としての彼の手腕も漸く油が乗つて来て日露海戦の火蓋を切つた月尾嶋沖の彼我の海戦の際の如き交戦國や中立國の代表者の間に立つて相應に敏活に働いたらしい。統監府時代の理事官を経て三十九年には天津總領事となり、時の直隸總督袁世凱を向うに廻しキビ／＼と事を運んだ。翌四十年には奉天に轉じ、所謂皇國の生命線たる滿洲の地に於て是から大に驥足を伸べようとする時に當り不幸舌痛と云ふ難治の病に罹つて四十一年十一月廿二日三十九の壯齡を以て東京に没した。今全權大使をして居る吉田茂氏——は白杵出身現調査局長官の吉田茂氏とは別人——當時奉天總領事館の領事官補をしてゐた關係上、よく加藤の爲人に親熟してゐて其歿後「東京朝日」に彼の素描を試みてゐる。今それを抄出する。

（加藤は）食事後よく館員の室を廻らうて一杯機嫌に議論を吹掛ける氣焔を吐き付ける。輪座で飲み付ける。「總領事は人を叱り付ける爲に駐在するのだ」と思つて人には其行動悉く意外で大に其膽を寒からしめた。氏は下僚に用事を言付けるにしても萬々己むを得ぬ時の外は決して呼付けて命ずることをしない。態々下僚の事務室に來て依頼すると云ふ風であつた。誰に對しても城府を設けることが嫌ひで、感興到れば酒を呼んで古今の史談や政治論を始める、散會して尙飽くを知らざるが如くであつた。恭謙士に下るの風や書生を愛せらるるは蓋し其の蘊蓄せる漢學の素養に出づ



故加藤本四郎氏

ることであらう。（中略）思ふに氏の頭腦は漢學によりて其基礎を成形せられ其品格は英國流に陶冶せられたやうだ。（下略）氏は如何なる問題に對しても常に必ず一箇の意見を有して居た。其意見は必ずしも奇抜、奇想天外的ではなくして穩健なるものであつた。穩健なる意見を穩健なる手腕に由りて穩健に遂行せんとするは其最も得意とする處である。常に後進の徒の躁急を戒めて「國家百年の國是は炳として明かである、其國是を傷害せざる限は隱忍して機運の熟するを俟つべきである」と云うて居られた。氏は飽迄も手腕の人たるよりは思想家であると思ふ。（中略）氏は猶存と號す。縦横計不成、慷慨志猶存より出たのである。猶存先生自己に關しては頗る呑氣で病の初期にあつて夫人初め其自愛を求めても一向構はない。病患漸く進むに及んで、周圍の切なる勸告に従つて、やうやう大連病院で治療することになつたが、病院では勿論歸朝後病草るに及んでも終始太平樂許り云うて居られて、殆ど身に大患あるを知らざるものゝ如く、餘り元氣がいゝので見舞に行つてもついつりこまれて篤疾である事を忘れて長座してしまふ。然らば公務に於ても爾く亦呑氣なりやと云ふに全く反對で、大連出發の前一日諸事處分を云ひ置かれたが、實に綿密細心にして整然なるものであつた。病中對清政策に關し外務大臣に進言せられたさうだが定めて義理堂々たる者であつたらうことは其平生よりも推測される。（下略）

故濱口雄幸氏が首相當時何かの席上で「吾々の大學同期には加藤本四郎と云ふ傑物が居つて其將來には彼我共に期待をかけたものであつたが、酒豪であつた爲か不幸短命に終つたのは惜しみても餘有る」と追懷談をしたことを聞いて居る。再び話題を入學當初の大分中學に還す。校長は衣斐鉸太郎先生、慶應出の温厚な紳士であつた。月俸はたしか五拾圓と餘計な事乍ら記憶する。翌廿三年紀元節の師範學校との子供らしい衝突から責を引かれて間もなく辭職されたのはお氣の毒であつた。其後永い間樂地の府立中學（今の東京府立第一中學校の前身）に英語を教へて居られたが今は早や故人となつた。教頭は川本清一先生、囑託教授と云ふ名義であつたが俸給は校長以上で、飛ぶ鳥も墜す郡長さんの月給が三十圓か四十圓の時代に八十圓と云ふ巨額の報酬を受けて居られた。先生は其前大學豫備門（今の高等學校）の教授をして居られた古い英學者で、五十前後の金縁眼鏡をかけた高雅な老紳士であつた。其頃五年の教科書であつたスチュアートの物理學の譯書は清野勉と云ふ人が譯者として名を出して居たが、實は川本先生の初譯に手を入れたものとの事であつた。受持は倫理、物理、英語などで、物理は理論には精通されて居た事であらうが、實驗は餘りお得意で無かつたので、そこを附目の頑童どもが、「先生實驗をして下さい」とせがんで、其時間を有耶無耶に過すもくろみをやつたものだ。倫理は自筆の譯稿

に依つて口授された。いづれ英國の經驗學派あたりの倫理書に據られた者と想はれ、譯文は翻譯臭を脱せず可なり艱澁な者であつたが、流石に理路井然として居て理論好きの生徒を納得せしむる者があつた。第一期の櫻井久我治氏は先生の女婿と聞いて居る。英語の發音、綴字、讀方、會話等はウエンライト先生御夫婦、その前年あたり新婚日々日本にやつて來られもので、吾々はもう四十位の中年の人とばかり見受けて居たのに、生年廿四歳大學の専攻は化學と聞いて一驚を喫した事である。勿論自由に對話が出来るわけではなし、深くその人となりは分らなかつたが、随分野蠻粗糲なデリカシーを缺いた當時の生徒にも始終温顔で接し、何となし人を引着ける性格を具へて居られた。ウエンライト先生の白哲長身に對照して物理化學の中村元保先生は短軀肥胖の人であつた。口の悪い生徒が次の様な對句を作つて一時傳誦された。

温菜六尺雲擁腰。 元保三尺草拂面。

漢籍や作文は石川總弘先生。天保二年十一月、森藩宮野伯翁の五男に生れ、日出の石川家に入贅し、帆足萬里先生及米良東嶠翁に從學し、旁ら槍術魔法を學んだ。藩政の頃生命を帯びて鹿兒嶋に使した事もあり、町奉行や職斷方なども務め、致道館助教兼學務總管、訓導兼權大屬に累進し、慶應義塾後は私塾を開いて子弟を教育したり、日出其他諸所の戸長や、郡書記、宇佐中學校教諭などをして居られたが、廿一年十一月吾校に教鞭を執られる事となつたのである。鶴髮瘦顔、當時既に六十に近い老翁であつたが、流石に學識は確かなものであつた。クーン、クーンと鼻を鳴らさ

れる癖があり、鼻の尖に老眼鏡を懸け眼鏡越しに生徒の方を見られたので、例の茶目達は少し授業に倦怠して來ると矢鱈にクーン、クーンと奇聲を發したり、又

石川や鼻の眼鏡は落つるとも世に漢學の種子は盡きせじと、奇怪にも先生と同苗何右衛門とやらんの辭世の歌をもちつたりしていたが、振を發揮した者だ。しかし先生はそんな事は何處を風が吹くかと許り超然として講義を續けられたのであつた。それから十餘年の後私は支那の學校に聘せられて、彼地の生徒に日本語を教へたのであるが、私の書く漢文がどうやら教授の間に合つたのは、小學校時代には郷里の老儒園田朝弼先生、中學では石川先生から復文(和文漢譯)の練習をやらされたお蔭である。先生は在職七ヶ年、廿八年十一月に長逝せられた。享年六十五であつた。國語は大學古典科出の鈴木重尙先生、數學は中津出身の數田傳吾先生、釣のお好きな方で、日曜など新川あたりを散歩すると、よく先生が尻端折か何かで淺洲に下立ち輪を垂れて居る姿を見掛けたものだ。しかし釣上げた所は拜見したことが無い。例の口善惡ない生徒の内には先生は「釣竿の角度と垂直に垂れた輪の長さに依つて由布や鶴見の高さを測つて居られるのだ」とひやかす者もあつた。圖書は大矢廣先生、兵式教練は西南戰爭生残りの古猛者石井辰彦先生、木強剛直な性格と、金屬性の凛とした運動場の際々まで徹り亘る號令とが印象深い普通體操は塚本と云ふ先生が師範學校と掛持ちで、啞鈴や球竿や棍棒などを揮らされた。劍道囃託は縣警察部の柴江運八郎先生、六尺豊かの偉丈夫で、軽く打たれる竹刀が腦天に觸るとブーンときなき、臭ひを感じたことを思ひ出す。神道無念流の奥秘を窮めた達人で、世が世であれば吾々風情の棒振劍術の對手をせらるべき人では無いので、肥前の大村

の藩祖を祭つた社には、維新頃先生と後の渡邊昇子爵とが獻納された大木大刀の見事な額が今も掛つて居ることと思ふ。渡邊子は維新後ダン／＼立身して會計検査院長子爵にまで經上つたのに、肩を並べた柴江先生は拾五圓かそこらの薄給で、警察部の師範で口を糊して居られる。運勢と云ふ奴一寸分らぬ者だ。後渡邊子爵が初代の大日本武徳會長となつた時、早速柴江先生を引き上げて劍道範士と云ふ最高地位に薦めた。昔の友達はやはりよい者だと思つた事である。其他英語に中川一耶先生、書記に矢野、兒玉の兩氏があつた。矢野龜太郎先生は近年まで健在で、別府に旅館を經營したり、游泳所を開いたり、晩年には書道の先生となられたり誠に多藝多能の人であつたが今はもう故人となられた。其他の諸先生もウエンライト氏御夫婦を除いては多く他界されたことであらう。思へば懐かしい昔ではある。

次に少し二年當時の學科の事を述べよう。倫理の事は既に言つた。國語は書名は忘れたが春海、千蔭あたりの擬古文を編輯したもの、漢文は「近古史談」、是等は今の中學校と大差無いとして、英語はナショナルの三を終つてウイルソンの三に移つた。神が七日の間に世界を造つたとか、アダム、イヴが禁斷の木果を食つたとか、ノアの函舟とかアグラハム、モーゼ、ダヴィッド、ソロモン、まるで創世紀の抄本である。それはよいとして歴史の教科書がパーリーの萬國史をコックスと志賀重昂氏とが改竄した原書、世界地理もミツチエルの舶來本、挿繪の銅版の鮮明であつたのは今も目に残つて居

る。内容は兩者とも高尚でも難解でも無かつたが、何せよ對手が横文字と來て居るので試験前僅かの時間に頭に詰め込むのが大變である。そこは又都合よく出來て居て、パーリーにせよミツチエルにせよ直譯風の譯書が有つたので、それを奪ひ合ふ様にして短時間に暗記した者である。歴史地理の受持教師が英語の中川先生であつた事も何等怪しむに足らない。算術は田中矢徳等二氏の共著に係る「算術教科書」代數も同前後チャールス、スミスの「大代數學」に換つた。物理は「物理小學」。まづ大體そんなものであつた。教科書全部は學校から貸して呉れる。授業料は月參拾錢、寄宿舎の食費が日七錢の月貳圓拾錢、別に入浴料が月五錢、計金貳圓四拾五錢也、家庭から月參圓の仕送りをして貰へば、残る五拾五錢の内から紙やノートや筆、鉛筆、木炭、石油の代を支拂つても、月に二度や三度は堀川饅頭を食ひに行く餘裕は有つた。

二年から三年、四年、五年、環境も心境も變つて行く。ウエンライト先生に代つて來たジョージ・ブラオンと云ふ水夫上のり英國人——恐らくはアイリッシュでは無かつたかと思ふ、頭でフットボールを蹴る(?)ことの上手な、グラムマアは知らなくても英語は出來ると公言して憚らぬ無邪氣な先生何だか自然派の短篇小説の主人公にでもありさうな人であつた。違つた意味に於て終生忘れ得ない室伏力次郎、佐野友三郎兩先生の事、嚴格で短氣で餘り人望は無かつたが、大分中



學の學科課程なり規則なりに教育的の組織を興へ、上野ヶ丘新校舍建築の豫算を取り設計を立て基礎工事に着手した。伊達(行平)校長の事、友人としては保永廉、水嶋平次郎、朝山幸作、吉丸一昌など苗にして秀でず、秀で、實らず、志業を齎らして早く世を去つた人々の事、思出は盡きぬがこゝらで筆を擱く。

## 在校當時の状況

五期 中央氣象臺技師 佐藤 順一

大分縣に唯一校。私どもの中學時代には大分縣尋常中學校と稱し唯一校しかなかつた。それで縣下の優秀と云へないまでも將來縣の代表ともなるべき少年はこの一校に集るといつた風であつた。これで豊州の自然と從來その山川に育成された偉人が、人格を涵養する上に非常に有利で土地の親しみも亦全縣下に廣く互つた。中等教育普及の結果已むを得ない事であらふが、この點に於て私どもは現今の大分中學校の將來はこの特異性を失つたといふ外ない。しかし大分が從來の歴史上大分縣の中堅となつて行くことを切望してやまない。第五回卒業同期生。私どもの卒業したのは明治二十六年九

月で我校開設以來の多數二十六名であつたが、これは丁度三回の入學者を併合した結果であつた。明治五十年には同期生が大會を開いて互に祝福するといふ約束もあつたが、爾來四十有二年離散して幽明境を異にする者も尠からず、今生残つて居るのは名簿の上は十三名である様にみえるが、東京に居るのは僅に四名で度々會合するのは大津留重君と吉田道夫君と三人位である。今村孝次君とは通信を絶たないが、田邊密藏君と溝口親種君と時々消息を傳へ聞く位である。他は音信不通で了つて居る。

校長と教授をうけた先生方。校長は衣斐鉸太郎先生であつたが、美しい眞黒の鬚のある温好の紳士型でモーニングを常用服にする方であつたが、教授は全然なさらなかつた。時々參觀に来てウエンライト先生など説明に窮して居られる時、英語で對話をなされて説明して下さることを四五回きいた。

この先生の時代に川本清一先生といふ古い博學の老先生が教頭として在職された。何時もいろのく英書を翻譯して淳々として難解の講義をされて居た。倫理學等でも地文學でも物理學でも講義をなさる方であつたが發音はまことに舊式であつた。次の伊達行平校長は倫理學や地文學を教授されたが只間ちがひのない講義に力められた。數學を教つた敷田傳吾先生、圖畫を教つた大矢廣先生、博物學を教つた中村元保

先生、化學専門の工學士山寺容磨先生、出色の史家兼崎茂樹先生は面白い史論に通じた方で英文法などの講義も手に入つたものであつた。國語には鈴木重尙先生と室伏力次郎先生、石川總弘先生の漢學、中川一郎先生の英語、地理、歴史等も早口の歴然たる講義であつた。今も在京される金子銓太郎校長は血氣盛りの法學士で倫理を講義された。金田樺太郎先生は理學士の教頭格、地文の先生で天文學にも通ぜられて興味多い話をされた。岡村猪之助先生、今關常次郎先生ともに農學士で前後に農業と生理學英語等を教授された。岡村先生は今は大日本農會に居られると聞いて居る、今關先生は學位を有せられ多年西ヶ原農事試験場、高等蠶絲學校などに居られた。度々在京大中會に御出でになるので御目にかゝる機會が多い。ウエンライト兩先生は昨年米本國に歸國されたが、申すまでもなく英語音讀の先生で、ミッセス先生は會話の方で、赤いウイソン會話書をローマ綴りの片言交りによんで居られた。ジョウジ・ブラウン先生は臺詞風によむ亂暴な方で酒と女に失敗された。體操には石井辰彦先生が兵式で、普通の方は塚本米次郎先生であつた。尤も出色のあつた英語の佐野友三郎先生は「ヴィヤーオプ・ウエクフキルド」を巧に講義され、私ども英文學を味はひ、又例の「イチオム」を始めて開發されたので英語教育に一時期を劃いた感があつた。石田清輔先生に唱歌を教はつたのも極めて短い間ではあり中學四

年頃に小學唱歌といふ有様でもしるくなかつた。書記の矢野龜太郎先生、兒玉鉞夫先生は共に今は逝去されたと聞く、矢野先生は特に長い間の乳母役で、私ども一方ならず御世話をおかけた。

荷揚町時代の校舍。今日から見ると小學校程度で平屋の三教室と二階建の棟は階下が職員室、小使室、階段式の化學教室、階上が二教室と標本室であつたが、外に師範學校と共用の雨天體操場があつた。寄宿舎は二階建てで表に棟、裏に棟、食堂が平屋で棟あつたが、名物は脚氣で年々五月から六月頃になると流行性といふのか、一時に五名六名二十名と殖えて来るので、幾人かの學友は脚氣衝心の爲めに斃れたのである。それで休校となる。今日からかかんがへると學期試験の爲めの過勞とビタミンの不足であつたらうが、當時は一般に埋立濕地の關係といはれて居た。それが現在のの上野丘に移轉した主なる理由であつた。しかし移轉した跡には、女子師範など出來たが脚氣の猖獗を逞しうした話は聞かなかつた。何だか迷信であつたかのやうにもある。

## 日清戦争前の母校

六期 阪神鐵工所事務 山口 誠 一

私が大分中學に入學したのは第一回の卒業生が出た年で、即ち憲法發布の年であつた、入學の翌年には教育勅語の御下附、帝國議會の開設等歴史的大事件があつた、今在校中の思ひ出若干を列べて見よう。

碩田交友會。卒業生と在學生との連絡機關として設立せられた會で、主として在校生が幹事となり一年數回雜誌を發行した、第一號その他二三を紛失したけれども第二號以下手許に残つたものを今回の式典に送つて御覽を願つた。

青線新聞。荷揚町の舊校舍の寄宿舎で私は三年生か四年生の頃、青線新聞と言ふものを編輯し、その論説に廢唱論(唱歌廢止論)を書いて、職員室にも配つたため、取消を命ぜられた事があつた。

舊校舍。明治二十七年五月までは校舍が荷揚町の當時の師範學校の隣にあつて、雨天體操場と寄宿舎の溜場とは兩校共用であつた。又中學の寄宿舎は南北兩舎に分かれ、北舎は上野に移轉前第一に取除かれた。

洪水。南舎時代(明治二十六年の秋か)大洪水に見舞はれて

寄宿舎も階段が三四段水に浸されながら、市内の東新町、長池等からの避難者を收容したけれども、賄所に浸水のため炊事が出来ず、風のため吹き飛ばされて流れて来るザボンを泳上手の連中が反古籠に拾ひ取つて一時の食料にした記憶がある、翌日水の減いた後、市中に出た留守中に本館に小火騒ぎがあつた。

自炊制度。明治二十七年の四月頃、賄方に對する不平から寄宿舎の自炊制度が生れた、(それまでは請負)、當時の食費一日七錢か八錢であつた、寄宿舎のなくなつた今日では比較も連想も起らぬけれども、上野移轉後其制度は續いた筈だ。私は第一週の當番委員であつた、當時同制度の創設に大功のあつた舎監家永泰吉郎先生も私と相當番であつた板井碧君も共に故人となられて心淋しい。

上野移轉。荷揚町から上野に移轉する時は、生徒が理科器械標本等を各自手に持つて何度も通ふたものである、移轉後一般市民に校舍を參觀させ、理科の實驗などした事があつた、寄宿舎が自習室と寢室とに分れて洋行氣分になつたと笑つた。

開校式。校内だけの新築開校式は明治二十七年六月一日に舉げられたが、對外の盛大な開校式は翌月我々第六回卒業生の卒業式當日に催された、縣知事その他多數官民の祝辭に次で私も第六回卒業生總代として祝詞を讀んだ、その祝詞

が三行餘り(雜誌の活字では一行)に過ぎず、短かいので問題となつたが、何十年後の今日となつては、こんな短い祝辭朗讀は少しも珍しくない世の中となつた。

横書の幾何教科書。私が二年生か三年生の頃、菊池大麓先生の平面幾何學教科書が用ひられ、初めて教科書の横書き印刷を見て非常に珍しく感じたものである。數學教科書の横書を珍しがつたとは今日の學生諸君に解し難い所であらうが併し當時に於ては確に珍しかつたのである。今日私達が左横書カタカナの分かち書きを主張するのを珍しく思ふ人達も二三十年経てば、この純日本式、純國語的、最能率的の文字を昔の人は何故補助文字扱ひに卑しめたかと怪しむ若人を見るに相違ない。

## 回顧五十年

六期 松尾小三郎

松尾氏は商船學校を出て英國に派遣され同國の帆船で世界一周を行ひ、港灣に關する造詣が特に深い。

五十年と言へば人間一代である、然るに創立正に五十周年の大分中學校に於て、第六回目の入學生であつた。自分は願

みて既に年不足なき老境に在ることを驚く。そしてそんな筈があるかと頭張つて見ても、今更追付く話ではない。唯學校の存在の永久なるべきに思ひを寄せて、既往を追懷すれば限りなき感懷ぞ湧く。それも風濤の間に、長い懷疑の人生を體驗し來つた自分として、殊に在校當時ウブな學生々活の希望に充ちた無邪氣さが懐かしい。無論これは自分限りの感懷ではあるが、而し五十周年と言ふことに因縁も淺からねば、せめて老生相應の憂さ晴しに、一通り思ひの儘を言はして貰ひましよう。

正直な所、かく申す自分さへも、一廉の偉らい人間になる積りで、當時人並みに輝かしい未來を持つて居つたことは事實である。寧ろ乃公出でずんば蒼生を如何にせんやと、誰も彼も眼中に無かつた程、霸氣か稗氣かの滿々たるものがあつた。

その頃佐野友三郎先生は、自分を評して、學者になれば一人前の哲學者にもなれやうが、船乗りになれば、海賊位は遣り兼ねまいと謂つたことがある。事實張り切つたこの少年學生の熱血は、御苦勞にも、炎熱燒くが如き夏の日を裸かに釣舟にて新川より日出港迄豊後灣を漕ぎ渡り、以て所謂豊後灣論の氣焔をその灣心に叩き付けさせたのである。當時室伏力次郎先生と富米野蕪氏と三人して、釣舟諸共行方不明の騒ぎを巻き起したとて、春日浦頭に歸著の午前二時頃、眼の出

る程家兄に叱られたことは、今以てこの老生に忘れ兼ねて居る出来事である。

其後海上の生活に入つたが、幸か不幸か海賊衆に迄は出世出来ずに、却つて哲學者じみた心境に鍛はれ、その日暮らした浪人生活にも、環境満悦の自己反省を樂みて、往年の人間振りを一気に附し得る好々爺となつた。そして上も下も無い、雲濤天を捲しこの懷疑の世界に見出し得たものは、唯一つ不變不動の現象たる、水天の交界を劃して上下の別を正し、明暗の相違を明かにせる横一文字の水準圏である。それこそ永遠意識の對象であつて、實に人間として動かざる終局の理想であり、犬猫の動物性と異なる悟性の内在を意味し、人格完成の實在の目標であることを知つた。そして可い加減の學問や智識は、却つてこの環境對象の水準圏を見誤らしめ、以て上下の懷疑に自己を強調して、その専攻分科の弊に人間叡智の世界を抹殺せしむることを痛感した。

試に海上に漂ひ始めて、船の影のいと淋しく、唯天空と海水とをのみ持つ世界に於て、而かも眼に映する凡ての物が、雲や波と共に悉く浮動せる現象中に於て、何一つ固着安定せるものなき境地に立つて見れば如何。天は仰ぐ程益々不可解の事許りであり、海は眺むる程益々以て不可思議の事許り湧く。斯くて走雲は疑怖を誘ひ、怒濤は恐怖を伴ひ、風濤相軋る聲は抑も幽現何れよりか來る。この瞬間猶神や佛を頼

む餘裕あるべきか。泣くも既に及ばず、叫ぶも早や叶はず、偉いと觀せし自己はいつしか吹き飛ばされて、淺猿しくも人間の動物性のみ、犬猫同格にその生を争ふ。この間に自己を反省し、自己の永遠性を水準線に意識して、尊き神人一致の心境に生き得る者幾人あらうか。又この場合人生の半面を犬猫同格に見切つて、専攻分科の現代式學問の習癖より解脱しそこに天地一元、萬物同化の心境を開拓して、眞の自由と平等とに日本固有の文化を會得する者幾人あらうか。

この船の外には自己の立場も無く、その船諸共大自然の制約に拘束され居ることを知る瞬間に、意識される自己が現實に生存せる人間ではないか、それが環境善處にそこに本能的に生きんとする時、衣を棄て帯を解き、小智に身がためせし凡ての粉飾を脱ぎ棄て、裸一貫となつて見ても、猶未だ依然たる人間動物である。この上叡智の世界に自己を削り、自我を剝ぎ出して、眞我を水準圏上に持出せしむるでなければ、我らはれたる明朗の天海を意識することは出来ぬ。

この水準線は仰いで求むべからず、俯して見る能はず、唯有りの儘に正しく環境を直視する者にのみ認められるものである。この故に邪念なき嬰兒の正しき視野か、又は自然の對象に自己を持出して、一切の懷疑より解脱せる達人の正眼には當然これを展望しこれを意識し得るものである。然るに教育ある者程上下に俯仰すること甚しく、古來人間生活の幸福

を求めて先哲の言行を検討し、その淵源を希臘思想や羅馬思想に遡つて、獨逸學派や英國學派に體系の全貌を究めながら、益々紛叫を加へ、結局左傾右傾の兩極端に、互に深刻なる論争を惹き起して居る。蓋し人間社會の平和や幸福が、空や海の上下に在る筈もなく、又共產主義や「フワツシヨ」主義の左や右に在る譯もない。矢張り、一定不變に絶對的永遠性を有する、その水準圏に凡ての基調を持たなければ、到底懷疑の不安生活から脱することは出来まい。又實在の現象として、彼岸を示す燈光も、彼方の水準線上に八方を照らして居り、母在ます懐しい郷土は、その水準線を越えて横はり、更に神集ふ高天が原も、花の如き神の樂園も、乃至西方佛陀の淨土も、皆その水準線上に永遠に並んで居るのである。又これが遠近の相違も、言はゞ各自意識の程度の相違で、自己を差別的に高く持するもの程彼岸の水準線は遠く、若し低く近く無差別に自己の正眼を水面上に浮ぶれば、即ち直ちに水準圏を點在化して、萬目無碍の境地に入るのである。これが人間としての現想であり、永遠性であり、又終局ではあるまいか。左れば一旦この境地に入れば、如何なる暴風怒濤にも微動だにせぬ、全人格が完成せられる譯で、平和や幸福などは言ふ迄もなく、常に天海明朗の水準線上に安住して、天空開豁の環境満悦に人生を樂しむことが出来るのである。

嘗て西人の言に、哲人は必ず上を見るか下を見ると。蓋し

これは自己の力に生んとする大陸學徒の謂であつて、先哲の片言雙句を金科玉條とし、以て自らその思想體系内に正視も直視も出来ないものである。結局そうしてそこに峙いた左右兩極端の論理をさへ、自ら之を收拾し得ざる窮境に陥つて居る。然るに直接叡智の世界に洗練された、この眞我の永遠意識に發祥せる日本文化を辨へずして、天皇機關説の如く、却て西歐文化の思想體系にこれを當てはめんとするに至つては、寧ろ學問の有害無用を思はざるを得ないのである。

今や人は忠孝を論ずるにさへ、遠く支那の經典にその淵源を求め、以て態々學說學派の正否を争ふて居る。而かも忠孝そのものは此れを學ぶと學ばざるとに論なく、人間生活の基本行為として、何人にも實踐を要し、又何人にも犬猫ならざる限り、それを實踐して居るのである。更にこれを日本文化の根元より考ふれば、寧ろ人の一言一行が、皆悉く忠孝そのものであらねばならぬ筈で、別に區々たる末節の、形式的解説や論議を要する迄もないことである。即ち動物的制約を超越して自己反省の眞我に剝ぎ出された國民性には、始よりそんな形式的學問は要らないのではあるまいか。

萬卷の書に短き人間一代の大半を傾け、又古人の賢愚に人間の目的を聞かんとするよりも、一度びザンプと海中に飛込むが早道である。彼の僅かの豊後灣に於てさへ、その灣心に立つては新川や日出の煩しき世態さへ抹殺されて、一も二も

なく煙霞の間に葬り去られ、そして獨り天空快濶の境地が見出されるのである。この場合誰も彼も既に眼中に無く、唯天高くして鳥の飛ぶに任せ、海深ふして魚の躍るに任せながら、凡て是れ環境満悦の人たることを得るのである。

左れば此上希ふ所は、上下の懷疑に誘惑されることなく、嬰兒となつて常に正眼に視野を展べ、有りの儘に自然の現象を觀じて、以て不動の水準圖を見失はぬことである。老幼は問はず、毀譽は語らず、獨り彼岸の燈光を望んで、眞の人間の目的に終始し度いものである。茲に五十年一代の航跡を追懐するに際し、若き同窓の子弟に一言を呈し、先づ物を正眼に視ることを努めよと勸める。これが人間としての眞の學問であることを、長き體驗の結論として心から推稱し、以て學校の生命と共に永遠なるべき諸君に依つて、日本文化の眞價が發揚されんことを期待する。終り焉。

## 入學當時の感想

七期 東大醫學士 高橋文六

私の投書は入學當時の感想と申すよりは寧ろ回顧録と申す方が適當かと思はれます。

當時中學校は大分縣に只一ツ大分町に在りし丈にて地方

邊陲の青年は中學校に入學するか遠く東京に行くか其の他の都市にも學校は存在して居つたに相違は無いが其の名前も知らず。先づ前の橋から渡ると云ふ漸進主義で私共は既に十七歳でありしも一應は是非共中學校を出なければならぬと考へた。中學の入學試験の日に初めて大分町に出で様子を見ると地方より出て來て居る青年は種々ある。若いのもあれば案外年長けたのもあり十七歳の私にも年齢負けがして斯くの如き兄貴連との競争にはトテも勝つ見込がない。又々一方十五六年の若い書生を見ると是は何んだか出來そうな英雄らしい。其の上に衣服も吾輩の如き田舎者らしくなく一見して俊才らしく見える、彼は思ひ比ぶれば自分の入學は六ヶ敷いと考ふる時は善い氣持は仕ない、さりとて書物も石盤も持つては居らず大分の城址のお濠の周圍を散歩したり明日の試験場(中學は當時荷揚町にありて師範學校と隣立せり)の門の前に行つたりして當今の學生が明日の試験を扣へて徹夜で勉強する様な事は出來もせずまた思ひもせず一夜は明けていよ／＼試験となり。數學、地理、歴史、漢文等々あり何れも適宜に答案を書いて宿屋に歸りました。

此の宿屋は南新地の姫野とか云ふ下宿にて大野郡より來て居る堀吉彦君(今の堀少將)等と試験の話をしたり又々蒼盤を借りて五目列べをしたりして明日試験場の廊下の掲示を見た

時に私の名前が出て居ない、サテコソ落第と大に落膽して早速歸へり仕度に取りかゝらんものと考へ込んだ時に堀君は同じく名前が出て居ないけれども至極ほがらかに見えて居る。

委細を聞けば、彼の掲示の終末に右の諸君は明日より受験に及ばずと書いてありしとの事なり、ソコで私も自分の粗忽を思ひ當り然らばと明日又々堀君と一緒に受験に出て行き習字の試験を受けて歸へり翌日か翌々日にいよ／＼及第入學と判て大に氣を好くした次第です。

此の年は大分縣(關西)にコレラ病流行ありて私の郷里姫島は大流行地なりし故新學期に登校する事が出來ず一ヶ月以上も缺席のまゝで私は孤島で氣を揉んで居りましたが、二ヶ月も経過すると第一學期の試験が來る故早やく出席せよと堀君や神島徳男君(津市長、今は故人)より手紙が來る故何とかして登校せんと考へて居る内にコレラ病も終息して第一學期の試験の数日前にヤット初登校して事情を述べて受験は許されてドーヤラ眞實中學生に成れたる次第であります。此の出席日數に關せず受験を許したと云ふ事は實に私には今日まで感謝して居ります。

是から少し感想的な事を申上ます。

前述の通り年齢服装等より考へて合格不能と諦らめた私が僥倖にても合格し、且つ又々新學期間に數句缺席しても受験の恩典に頂かり年々進級して行けば青年の理想も希望も漸次

向せし事と思はれます。

サテ己れの未來は如何になるか、縣知事(岩崎小次郎)に成るか伊藤博文に成るか陸軍(原口大佐)に成るか海軍(河村豊洲)になるか良相たらずんば良醫となると云ふ考へから醫學士(鳥瀉恒吉)となり進んで北里、青山の如く世界的の醫學者となるべしと熊本の五高の三部に入學する決心を極めました、決して大富豪に成ると云ふ事は考へ及ばなかつた。當時の入學試験は今日の如く酷では無く中學校の成績参考で易々樂々と入學が出來ました。

今一つ思ひ起す事は日清戦争にて三國干渉の爲め遼東半島を返還した事である當時の國民の無念さ口惜さを記念する爲め大中の校庭に松を植ゑたる一事である、此の記事は今も學校に残りてあるべし、又々彼松樹も今は定めて大木となり蒼々然鬱々然(石川總弘先生の植松記中に存する句)として今年には日露戦役三十年記念及び滿洲國皇帝の訪日等の催しを見聞して上野丘上に繁茂して居るならん。

## 追憶四十年

八期 滋賀縣醫師會副會長 太田守

四十年の追憶沈念默思幾多の活劇映畫は眼前に現はれる

「入學試験合格発表呼名時の嬉しさ」「寄宿舎入學」「學校より教科書の貸與」「兼崎茂樹先生の恐ろしかったこと」「國語教師室伏力次郎先生の器械體操」「體操教師石井辰彦先生の詩吟」「現今我國の道路王牧彦七先輩が夏期寄宿舎夕食後のフットボールに浴衣尻からげの怪裝の爲め後方より罌丸がブラ／＼隠見する大事件」「佐藤庄市先輩が夜中寄宿舎北舎の二階南側より墜落」「英語教師ジョージ・ブラウン先生が兎狩りに獲物を逸せられしを豪傑菊村敏夫先輩が罵倒せし滑稽劇」「ストライキ第一日午前十時我二年生寄宿舎生の脱出」「張本阿部龜彦君が鶴川河原に於て知事宛建白書起草執筆」「伊達行平校長先生教頭山寺容磨先生唱歌教師石田清輔先生に御榮轉希望強要」「佐野友三郎先生が我級ストライキ團への慰撫」「ストライキ生徒處罰謹慎」「大出水に際し金田橋太郎先生の活動」「和田國太郎先輩入神の劍舞」「蓮池健一郎君が巡查へ暴行終には裁判沙汰」「嘉納治五郎先生歡迎武術試合」「山田小太郎先生が生徒十名餘を引き具して春日浦海岸樹陰砂上に牛肉すき焼壯語の一幕」「野村一也先輩と桐田繁君との大角力」「彫刻王渡邊長男先輩が右中指頭瘰癧にて三ヶ月苦シマレタ事」「熊本修學旅行」「石垣原演習」「佐賀の關海上和船日杵修學旅行」等々々夫れから夫れへとフェルムは盡きない聖賢遺訓の感想は抜きにして同窓生が餘り筆にせぬ様な異彩二三を摘録して見よう。

金子銓太郎校長指揮刀一下。金子先生は明治二十二年東法科御卒業一年志願御任官間もなく吾校長に御就任遊ばされたのだ。  
國東宇佐修學旅行中牛一頭を屠りて生徒の食膳に供し呉れいやが上にも信賴歡呼を浴びた吾校長金子先生は少尉軍服姿勇ましく歸校の途立石街頭に立ち勵聲一番「今より鹿鳴越の嶮を突破せんとするの勇士は我指揮刀下に集まれ」と立どころに百數十名を算す。少數の弱蟲組は平々坦々たる迂廻順路をとぼ／＼と行進するの慘めさを想像せられたし。

唱歌採點。唱歌採點には幾多の氣鋭の少年共も惱まされた我クラスナンバーワン安田碩藏君は九十點と言ふので羨望怨嗟の的となつて居つた。聲帶最劣悪者に谷國彦、高倉精吾の兩君あり六十點を死守す。六十三點組に友成貞、宇都宮行雄、太田信昌、富米野薫、矢野忠一、永田佐一郎、青山茂の諸君あり七十點以下には鳥瀉隆三、佐藤春吉、山内榮藤澤英猛、伊東榮、吉武新吉、小野英彦、長屋政勝、保永康、秦太熊、櫻井起平、手島政美、麻生克巳、甲斐泰丸、窪田謙太郎の諸君と拙者の面々あり。茲に稍奇なるは唱歌點の少きものに比較的生存者多し聲帶機能不全と長壽と何等かの關係あるにあらざるか學位論文の價値あり。  
奇術師松旭齋天一來分。共樂館に二度も三度も見物に行つ

た。こんな事に小器用な茶目公山口龍吉君が教場休み時間に「ハンケチ」を竹棒の先きにつけ「春は三月胡蝶の舞」を真似たり。ハンケチ焼奇術の最後の場面「巾を水裏に投じて焼いて灰となす、器中繋ぎ出だす恰も絲の如し」と天一奇術師の語句を朗吟しつゝ手眞似面白くやつたり。比較的謹嚴の評ある阿部龜彦君が腕紐抜きの小奇術を手際よくやつて大喝采を博するなど稚氣満々天下太平なりき。

後訛り歌。作者不明なるも片多靜逸先輩？  
頃ハ三月彌生ノ半バ追々羅生門ヘト近ツケバ雲ンエーカラナントンカントン知レン化ケモンガ髯ゲジュー差シデーチ綱ン胃ンシコルーグワシトツコーダラ、綱ナコリヤタマランチヌウチ腰イセータ一尺八寸ノ刀ヲゾタビキニージ鬼ノ手ヲチヨクタント切ツタラ綱ナワリヤ覺ビーチヨレ、髯キユ一取ツチ見スルチ言ヒヨツタガ三日ンタタンウチー綱ン叔母ベー化ケチ裏ラン木戸ロカラ高下駄トーコロコンコロンイワセチキチ綱ナワリヤエレー手柄ローシタノーイーヤオリヤー知ラチ言ヒヨツタガ綱グトウトウ古リー古櫃ノ中カラ鬼ノ手ヲデーチ見セタ處ガ鬼ハ之レヲ見ツ、眺メツコレコソ我手ナリト煙リ出シニュー蹴フイジ雲ヲ霞ト逃ゲニケリ生徒相互散髮。上野丘に移轉當時は市中迄散髮に行くのは大變だと言ふので學校から寄宿舎生に散髮のバリカンを買つて呉れた。三年生だつた拙者はイの一番に稽古臺となつて

散髮をして貰ふことゝなつた。理髮師は萬事〇五の朝山幸作君だ。バリカンが毛を挟むので痛ひこと夥しい泣け相だ。ふと後ろを顧みれば金子校長先生が莞爾として傍觀して居られる泣くに泣けぬ縮顏涙を呑むこと十數分。悲惨は更に續く剃刀痕十四ヶ所併し其日曜日彼朝山は堀川饅頭屋の一室に拙者を正座に慰安して呉れた。彼今泉下に微苦笑してゐるだろう。

四。十年來の身長較べ。明治二十六年六月佐野先生送別、金子校長歡迎、第五回卒業記念寫眞。此回記念式當日參考室にあり六月一日大分新聞紙上に登載。につき拙者に一大恨事あり。拙者より身長短かゝりし山口龍吉君は體操整列時常に拙者より一二伍下位なりしに拘らず寫眞にては拙者より稍高し。同級生皆怪訝の瞳を注げり。是れ全く彼が奇智を弄して煉瓦を一個人知らず持ち入れ踏み臺とせるによるものなり。此回母校五十周年記念式參列春日亭の宴終り竹町ぶらを試み山口君を大分驕頭に見送くるの時好機逸す可らずとて公平なる手島政美君の監視と濃厚なる矢野忠さんの審判とにより身長を計りしに、拙者矢張二仙米高かりしも名アソパイヤーはドロンゲームの宣言芽出度し芽出度し。  
同級生物故者の冥福を祈ると共に生存者の健康多幸とを念じつゝ筆を擱く。

## 母校への追憶と希望

八期 京都帝國大學教授 鳥 瀉 隆 三

昭和十年六月二日午前八時半、「母校創立五十周年を祝し堅實なる發展を祈る」と打電して、さて机に向ひ此の稿を書きはじめました。今日は日曜日です。

自分等の時代にも矢張り「入學試験」といふものがあつて、其時は佐藤春吉君が一番、自分は二番でした。矢野さんといふ事務員が大きな巻紙に及第者の姓名を記したのを持って、一々姓名を呼んだものでした。此時いち早く、小生の名が記されてあるのを見出して、まだ呼び出されぬ以前に、「鳥瀉々々、お前通つたぞ」と知らせて呉れた友達があり、其時の喜ばしさは忘れられぬものでした。講堂に呼び入れられた人数の中に二十人許りは別にされて、其の子供達に向つて、校長先生が「君達は及第點を取つたのであるが、併し入學の定員があるので、誠にお氣の毒ながら順番に當らぬので、本年は入學させる譯にゆかぬ云々」と訓して居りました。小生は此時、實際氣の毒だあと考へ、非常に同情に堪えませんでした。其時の光景は今日と雖あり／＼と眼底に残つて居ります。これは今から四十四、五年も前の事です。

近年では入學試験の競争は餘程ひどいであるかと考へられます。例へば本年三月東京市の某公立中學の入學の際には子供に向つて、「家の財産は何程あるとか、何をして生計の路を立てゝゐるのかとか、その様な事を試問したそうですが、母校でも矢張り、此の様な試問を入學志願の子供に課する事になつて居りますか。當人が健康で、學科の試験が優秀であつたら、それで入學を許可して然るべきものではありますまいか。母校に限り入學志願者の家の財産調べなどはせぬ筈であると確信します。

自分は一年級から二年級に進級した時に「特待生」といふものになつて、それが揭示されて、とても嬉しかつたです。「特待生」を置くといふ様な制度は以前には無く、此年にはじめて其の制度が出来て、それではじめて小生が（他にも誰かあつた様です）特待生にあげられたのでした。前以て何の豫想もせず、それを目標として勉強したでも無しに、全く餘念の無い子供であつたので、神様からでも賞められた様な氣がしました。

今でも特待生といふ制度がありますか、此の制度も古くなら種々な弊害がそれに伴ふらしく思はれますが、出来る事ならば時々變つた方法で、「何等の邪念も雜念も無く、無心で勉強して無心で優秀である様な生徒」を表彰することが出来たらば、さぞよかるふと考へます。學業試験で一番になつ

てゐる人、いつも特待生になつてゐる人、それが成長して必ず有用な人間になるとは限らぬ事はわかりきつた話です。

「修身」にはどの様な事が説き教へられて居りますか。吾々の生徒であつた頃には、修身の教科書の様なものがあつて、「人間の目的は有道にして幸福の人たるにあり」といふ様な事が教へられました。此年になつて考へて見ると、實につまらぬ事でした。三年級であつたか、四年級であつたかの頃に、修身の教科書として、「中庸」が選ばれ、これは全巻を通じて詳細に説き聽かされました。此時私ははじめて心の眼が多少開けられた様な氣がしました。それから「孟子」の一章「王何ぞ必ずしも利と曰はんや、また仁義ある而止矣」といふのが教へられました。これはたしかに西村謙三先生から教へられました。これがすつかり私の心を捕へ、此章などは今日でも全部暗誦する事が出来ます。それに興味を覚え、私は講義録を購つて、「孟子」を大方讀みました。

修身には矢張り古聖賢の遺書、遺言がよく、それを講ずる先生は、むしろ世の中に名が聞えて居らず、自らを持する事の堅い、多年の試練を経て、相當の年齢に達してゐる、品格のよい人を御願ひしたがよいと考へます。今の時世には六つかしい註文かも知れませんが、求めて無い事はないと考へます。

小生等の生徒の頃には漢籍に力を入れさせられたもので

す。先生は加藤總弘先生でした。よい先生でした。今でも感謝して居ります。近來母校ではどの程度に漢文を教へて居りますか。多分しつかりやつてゐる事でありませぬ。

これに就て私は少々意見がありますが、色々な断片的の漢文を集めた、所謂「漢文讀本」といふものは、あまりよくないと考へます。あれからは大した印象は殆りません。矢張り純正本格的なクラシカルなものを、片つばしから讀破させる様にした方がよかるふかと考へます。

誰か此際大分に漢學塾を創立し、生徒の然るべきものを塾生に採用する様にでもして呉れたならば、さぞかしよいであろうふ、それがまた母校發展には有力な勢力になるであろうふと考へます。「建物」は死物で歳月と共に破損するばかりであるが、「塾」の様なもののは活きた物で、仕方によりては歳月と共にどの様に強大になるか測り知る事の出来ぬものであります。

活きた物と言へば、自分等が四年級の時であつたか、日清戦争が終了した時の記念に松を植えました。今關先生といふ農學士の先生が、「これなら立派に成長する」といふ松の樹を見立て、加藤總弘先生が「松を植るの記」を誦まれて、それから小生がまだ生徒總代か何かで、「松」に向つて何か讀んで式が終つたのであるが、年を経る事殆んど四十年、今頃は立派な記念樹として校庭を飾つてゐるであらう。周圍に垣か

何かしてあるであらう。松は根を陥むと弱るものであるから。

國文や作文の先生は室伏力次郎先生であつた。此の先生には随分とよく教はつた。日本文法などは實によく教つた。自分が第一高等學校へ入學した時に、一年級で矢張り日本文法があつた。芳賀矢一博士が先生であつたが、その當時「くれなゐ」が「吳の藍」の意味である事を生徒中で知つてゐた者は小生たつた一人だけであつた。「そんな事は乃公は中學の一年生の時から教つてゐる。高等學校でそんな事をまた復習するなんぞは實にあきれた幼稚な事である」と自分は考へざるを得なかつた位である。

室伏先生はまた時間毎に二、三首づゝ和歌を教へてくれました。それは今でも覚えてゐる。一生涯の友として頭の中に同居して居る。五年生の時には「古事記」を讀んでよく暗記してゐた。今でも所々覚えてゐる。悉く室伏先生の御蔭である。

今でもであるが、小生等の生徒の時には、文章を作ることに獎勵されてゐた。仲間同志で、「上野の花」といふ雑誌を出して居つた。勿論發行部数は其の都度たゞ一部だけで、廻覽で、印刷代に全部筆寫であつた。あの雑誌が今一部でも残存してゐると面白いのであるが、或は手島政美君が知つてゐる。

るかも知れぬ。自分はそれに單文、今様謡曲などを書いたものである。

高等學校でも二年間作文があつたが、時間は一時間で、其の都度先生が任意に、「友」とか、「衛生」とか、「脳」とか、「夢」とかいふ様な課題を與へたものである。他の人は草稿をかき、辭書の様なものを二、三冊側に置いて呻吟して居るが、自分は十分か十五分復稿して、あとは一氣に書き下ろしで、それを出したものである。大抵はそれが「校友會雜誌掲載」といふ事で、先生から歸へつて來た。つまり自分には中學卒業と共に、文章を書く一人前の素養が授けられてゐたのである。

自分は大學四年の時に萬朝報の懸賞に應じて、新體詩を出して、それが二等に當選した。これも高等學校の二年頃に出來て居たものである。自分は室伏先生を心の底で拜む程に感謝して居る。中學母校に謝してゐるのは勿論である。眞の基礎は中學五年間の教育で與へられたものである。

いつもながら科學の研究といふ事が八釜しく言はれてゐるが、それによりて發明發見をさせて、運よくば何の國にも無い様な強い武器とか火薬とかをも作らせ、また自分共を保護しつつ、敵方だけを絶滅させ得る様な細菌でも發見せよかしと考へる様な軍人の政治家が、各國に一人位宛居るかも知れぬ。何れにしても發明や發見を獎勵する爲には、その手始めと

して、先づ文學的創作を獎勵するがよいと小生は愚考します。自然科學と、文學哲學とは兩立せぬかの様に考へるのは間違ひで、此の二方面は、何れも「創造創作」といふ方面の腦の作用で、畢竟同じ道であります。大文豪、大哲學者は同時に大自然科学者であり、また大なる發明發見者は、同時に大なる詩人、哲人、宗教家、美術家の素質を持つてゐるものと考へてよいと存じます。現はれた結果は異なる様に見えるが、現はれるに至る迄の頭腦の働き方の機轉は何れも同一轍であります。

上に述べた様な意味で、中學時代の教育でも、「創作」を獎勵するがよいと信じます。生徒に對する先生の指導の仕方如何と、生徒の素質と相待つて、それが出來ると存じます。

西村謙三先生には「英語」、その中でも英文法を殆んど完全に修得しました。自分が第一高等學校の試験を受けた時に、英語の試験もありましたが、答案は全部英文で書いてやりました(尤も誤りの無かつた事は保證出来ません)。自分は五年級の寒中休みに、スタンレーの亞弗利加探險記を一人で讀ましたのですが、「ラセラス」などよりはズット容易に讀めて、その讀めたといふ事それ自身が非常に愉快でした。全く西村先生はじめ山田小太郎先生などの御蔭であります。

數學は堺野昇二郎先生でしたが、第一高等學校入學試験の時には一問題を除く以外はみな出來ました。「彈丸を最大の

距離に射るには何度の角度にすればよいか」といふ問題もありましたが、式を立て、計算して行くと、 $\frac{1}{2}$ となり、此時は實に嬉しかつたのであります。

今から考へると母校中學校を卒業した小生は、いきなり第一高等學校に入學し得る十分なる實力を授けられて居つたものであります。母校に感謝せずには居られぬ次第であります。

近來母校では、運動やスポーツといふ様な事が、どうなつて居りますか。自分等の頃には、柔道や劍道はありました、兵式體操もあり、泊りがけの行軍もあり、また實彈射撃もありました。號令は喇叭で、行軍の時の喇叭の譜などは、誰でも口笛で眞似をして居りました。併し現今往々ある様に、他校と「ベースボール」の試合などをやる事はありませんでした。

此の種の試合といふ事は自分は氣に入りません。全國中學校野球大會とか何んとか申して、新聞社に利用されて出かけて行くなどは、大した名譽の様にも感じません。此の様な事をして、學校の名を新聞に書いて貰はねばならぬ事はないと思ひます。人々の觀る所によりて見解に相違があるであらうが、中學生を率ゐて野球試合の見世物の様な事をさせぬがよかるふと存じます。但し母校はどうしてゐるか、小生は一向知らぬのであります。

自分は併し母校で、一年か二年位、柔道を習つて居つたお蔭で、危い所を助かつた事があります。それは一九一三年（約二十年前）第一回目の洋行で、ポーランドの首府ワルサウにて醫學的視察をしてゐた時の事ですが、日露戦争の直後であるので、日本人を非常に尊敬し、一寸した食堂に行つても、握手をしない人多く、土地の新聞や雑誌は、小生の肖像を掲載して、日本から學者が来てゐると報告した程でした。

此の様な評判で、或る時にナルブットといふ貴族未亡人（ポーランドには貴族が掃く程あります。御承知の通り貴族過多で一旦滅亡した國です）から晩餐に招待されました。客は十四、五人で、其中に亞米利加人が一人居つて、食事中に主人に向つて、「私は日本人から柔道を習ひました」と述べたので、主人は小生に向つて、「それならば食事が済んだならば二人で柔道をして見せてくれ」と申します。これは困つた事になりよつた。「柔道には柔道衣といふものが必要であるのに、それが無いから出来ぬ」と申しても、女主人は一向聞き容れません。他の來客一同も是非やつて見せてくれと申し、食事がすむかすまぬに、テーブル椅子を片づけ始め、中央に廣い床を残し、一同は圓陣を作りました。

此の様な場合にはいつでも日本人は、日本帝國の代表者の様に考へられ、自分もまた、自己一身の事では無いといふ強い自覺になります。向ふの相手は自分よりも三、四寸位高い

男です。小生はそこで度胸を据ゑて、「まゝよ、やつつけてやれ」と考へまして、向ひ合つて接近するや否や、先方の襟の下を左手で捕へ、柔道の型で覺えのある、「後山蔭」といふので、物の見事に相手を仰向けに床の上へ投げてやりました。一同が果して拍手喝采したかどうか、その様な事は最早や覺えて居りませんが、危い所で國辱を免かれたといふ一種の感で一ぱいでありました。今日から當時の事を考へても、「あの時はよく助つたなあ」と感慨を禁じ得ません。

野球や、「ラグビー」とか申すものや、其他に負けたとしても、大した事は無いですが、柔道や、劍道などで、外人に、しかも外國で負けたのでは面白くありません。

以上の様な見方からして、中學時代には、日本固有の武術の練習には時日と努力とをかけて、其他の「雑仕合」の爲に、過度の運動、過度の時間つぶしなどを奨励せぬ方針を取つた方がよくは無いかと愚考する次第であります。幸にして母校が新聞社などに動かされて、興行的野球などに乗り出して居らぬならば實に結構であります。

自分共の生徒の時には「ストライキ」といふ事が流行しました。これは實に悪い事です。今でも「ストライキ」などがあるならば、或は少しでもそれに類似の事があるならば、嚴罰に處したがいと考へます。

自分等の時の張本人は桐田繁でした。大抵は勉強して居らぬので試験前になると、「ストライキ」を思ひ立つのであります。二年級の時にそれをやり、小生は級長で、一同退校願を纏めて事務に行かされたり、室伏先生から意見をされたりしたものです。桐田は自分等よりは二、三年も年長でいつも「ストライキ」で牛耳を探つて居りました。或時は唱歌の先生が教場へ這入れぬ様に締め出しを喰はせたりして、騒いで居りました。

桐田も醫師になつて間も無く肝臓病で永眠しましたが、此男の「ストライキ」には實際困却しました。併し桐田は小生を柔道へ引き入れた人でもあります。國辱から免かれ得たのは桐田の御蔭とも考へられますから、差引き功罪相償ひ、功の方が多いのであります。桐田も今日まで健康であつて呉れたらよかつたと思ひます。

「ストライキ」に關聯して、「カンニング」といふ事も自分の知る限りでは一回ありました。幾何の試験の時に、先生が一寸教場を出たあとで、後の方がざわ／＼するので見ると、二、三の人が大急ぎで本を開いて見て居りました。小生には「そんな卑怯な事は武士の爲すべき事ではない」といふ自覺が強烈でありました。兼崎先生の歴史の試験の時に、誰であつたか一人、いきなり答案を取り上げられ、引き裂かれ、棄てられて、教場から追ひ出された人がありました。今でも此の

様なことをする生徒がおりますか。卑怯未練な精神が子孫に遺傳すると悪いですから、嚴重に戒めた方がよろしい。

一寸愛嬌のあつたのは阿部龜彦です。用器畫の試験の時に小生の隣の席に座つて居りましたが、問題を見るや否や、何か思ひ出した様にして、机の口から取り出した物とは見れば、大根と庖丁とです。何をするのかと思つてゐると、その大根を色々に截つて、用器畫の問題の解答に考へて居るのでした。これは無論「カンニング」に屬せぬことで、大矢先生（？）も別に咎めもせずすみませした様ですが、一寸變つた風景でありました。

阿部龜彦と小生とは随分と好い議論友達でありました。議論が決定せず、その裁判をして貰ふ爲に、教員室へ出掛けたり、或は室伏先生へ手紙で問ひ合せ、「また阿部と議論でもなされしや、阿部も健在なりや」などの返書を受けたりしたものでした。

その阿部君が知事になつたあとで、難病に取りつかれて、當時滞歐勉強中の小生を頼りにして、令夫人から問ひ合せの手紙などがあり、歸朝まで生きてゐて呉れと心に念願してゐた甲斐も無く、永眠になつたのは惜しい事でありました。今頃生きて居てくれたならば、よい相談相手であるべき人であります。

以上の様な追憶に耽けつて、本日は午前、午後を全部それ



れに費し、祝賀會の様態などを想像して、山口龍吉も、太田守も、太田信昌も、手島政美も櫻井起平も、其他の人々も出席してゐる事と思ふにつけ、母校の養成で實力をつけて貰つて、幸ひに健康で、今日まで来てゐる自分等は先づ幸福な部類に屬する者と考へねばなりません。母校の空を眺めて感謝の意を捧げ、またその健全なる發展を祈る次第であります。

(昭和十年六月二日午後五時稿了)

## 大中の思出

八期 耶職電役 山口 龍吉

(一)

中學時代の思出と聞かれて誰の記憶にもまざりと蘇るものは寮生活の朝夕であろう。荷揚町時代の寄宿舎は南舎と北舎となつて各一人宛の部長があり、其の上に舎監の先生があつて交替に宿直された。舎監が提灯をつけて夜中廊下を巡視するのは毎夜の事であり、舎監の差支のある晩に部長が代理で廻る事も異例では無いがあの晩の牧(彦七、北舎部長)さんの巡視一行は聊か大が、りのものであつたに相違ない。僕等も俄に明るく成つた障子の外を押廻はる大勢の話聲を聞

いた時は一寸吃驚して飛起きたものだが、二階の南側の室に居た佐藤(庄市)君が夢現に火事と思つて無中で二階の窓から運動場に飛降りて其儘氣絶したのは敢て無理では無い。

不思議に運のよかつた事は運動場に面した階下の一室に其眞夜中たつた一人起きて陸士の入學準備に勉強してゐた人があつた、しかしそれが柔道家の堀野(晋吉)さんだつたので窓の眞下に起つた異様な響に障子を開けて見たら人が倒れて居ると云ふ始末、其儘飛降りて引き起こして見たら佐藤君だつたので早速活を入れて佐藤君は息を吹き返へした。

堀野さんの叫聲に三浦喇叭手が飛んで来る、皆も運動場に集まつた、誰も氣付かなかつた事ではあるし、朝まで知らなかつた場合の佐藤君の運命はと考へた時には覺えず皆身慄ひした。ホツト安心した中で一番うれしかつたのが牧さんだつた事は云ふ迄も無い。

北舎の北側は板塀の外が竹藪に成つて居て能く板塀の破れ目をくゞつては寒竹の筍を掘りに行つたものだ。追々馴れて來ると笥位では冒險心が満足されずそれに技巧も進歩して來るし遂には隣家の梨や杏にまで手を出す様になつた。或夜手島(政美)が梨の木に登つて居ると庭先に怪しい物音をたよりに樹下に忍び寄つた家人が大喝一聲「誰か」と誰何したので手島はビツクリして飛降りたが敢て組付いて來る氣配も無く、こちらを透かしながら「手島さんか」と云つたのは家人

は家人でも下級生の生地(純一)だつたので、手島は懐の梨を落とさぬ様に要心しながらホツと胸をなでおろした。其の生地も日露戰役、旅順包圍の激戰に二龍山の花と散つて春風秋雨正に三十年、思へば懐かしいのは少年の日である。

(二)

南舎は師範の寄宿舎と相對して居た關係上、能く白眼合つては喧嘩したものだ。誰の發明した言葉か知らんが師範の生徒に對しては二言目には「何を此の地方税が」と言つたものだ。今日と異つて學校間の對抗競技と云ふものゝ行なはれなかつた時代だから師範と中學とが競技に力を角する機會は殆どなかつたが、松榮山の招魂祭には參拜した後で兩校が各別に行ふ一齊射撃こそは唯一つの競技の機會であつた。中學が先きにやつてうまく行くと實際又うまくもあつた。喊聲を揚げて喜び次に師範の射撃が不揃でもあらうものなら手を打つて喜んだものだ。ある年例の通り師範の不手際を散々罵倒した後で誰か「さま見よ地方税」とやつたので之には流石に謹嚴聖者の如き石川(總弘)老先生までも「地方税とは」と苦笑せられたものである。

南舎の二階の南側の連中は夜、雨戸を開けて能く小便をしたものだ。今日の言葉を以て云へば「寮雨」だ、之に對抗して階下の連中が押入れの床に穴を開けて小便をやり出したのは

甚だよろしく無い。二階の小便は便所に遠いと云ふ正當(?)の理由もあり、且つ何となく陽性だが床下の小便は甚しく陰氣だ。何よりも押入れの中が臭くなつたのに閉口して此の流行は間も無く止んだ。

(三)

下宿屋の中にも學校の公認に類するものがあつた南新地の姫野の如きは其の一つであつたと思ふ。此等の下宿には公認の代償として稍、寄宿舎に準ずる規則が課せられて居た、起床午前何時、外出何時限、就床午後何時、までは無理だが末頃の注意書に「起床前に町を散歩すべからず」と云ふのがあつた。明かに「起床時間前に」の誤りであるが「朝、起けん前に町が歩るるかや」と云ふて谷(國彦)が振ち込んで來たのは閉口した。

(四)

上野に移轉したのは明治二十七年の初夏で當時上野の附近には下宿屋と云ふものは一軒も無く、小野(英彦)伊東(榮)等によつて開拓せられた新道の「太一やん」方が恐らく下宿屋の嚆矢であつたらう。

寄宿舎のあつたお蔭で下宿屋の發達は遅かつたが運動場の西南隅、金棒や木馬のあつた邊の外側に蕎麥屋の出來たのは移轉後間も無くであつた。夜間、それでも最初は正直に裏門

からコツソリ抜け出して皆通つたが村上(巧兒)達が土手  
を乗り越す便法を發明してから誰れも三角形の二邊を行くも  
のは無くなつた。

お蔭で生垣には穴があいて、土手の芝草はテラ／＼に禿げ  
て仕舞つた。僕は今でも村上の前額を見る度に土手を聯想し  
て、あの頭に向ふ側に蕎麥屋がありそうな氣がして仕様が無  
5。

(五)

僕も五年の半頃まで寄宿舎に居て其後は三年の中根(貞彦)  
梅田(三郎)佐野(透)、昨年亡くなつた首藤(正壽、二年)の  
諸豪と丘南(國府村の岡部と云ふ家に下宿して卒業までそこ  
に居た。此頃は學校でも文學熱が盛で回覽雜誌を作つたり、  
創作物を持寄つたり、型の如き少年時代の流行に僕等も御多  
分に漏れぬ方だつた、帝國文學の出た年で創刊號の巻頭を飾  
つた太町桂月の「病院」などは「雲間を走る片割月」のあた  
りから能く暗誦したものだつた。暗誦と云へば矢張その頃評  
判だつた高山樗牛の「瀧口入道」の中に館を抜け出した横笛  
が時頼の庵室を訪ねて嵯峨野の露に濡れながら一夜を柴折門  
の外に泣き明かす條に「こゝ明け玉へ瀧口殿、つれなきのみ  
が佛者かは」と云ふ有名な句がある、後段、時頼が横笛の墓  
を弔ふて「形はよしや冷土の中に埋れ玉はんとも魂は定か

に三尺の上に聞こし召されん」と云ふ一節と共に編中のクラ  
イマツクスをなすもので、その「つれなきのみが佛者かは」  
をつい、うツかり「つれなきも」が佛者かは」と讀んで「こ  
ゝではのみと云ふ二字に千鈞の重味があるのじや無いか、そ  
れをも」と讀んでお前、意味がわかつて居るのか」と末(祐  
十郎)が恐ろしく中根(貞彦)に叱られた事もほゞ笑ましい思  
ひ出である。

(六)

明治二十九年の七月に卒業式が済んで、再び此處を訪れる  
のは果して何時だろうかと考へながら、住み馴れた學校を見  
かへり／＼上野の丘を下つたが、昭和八年九月二十三日に再  
び學校を訪ふ機會を得るまでに三十七年の長い歲月が流れ去  
ろうとは夢にも思はなかつた。故郷に歸つた浦島の様で飄然  
と正門の前に現はれた僕には舊知の先生も在りませぬ。昔を語  
る友も無く、目の前に聳えるものは昔の儘の本館ながら、其  
の以後に出來た建物や植込は在りし日の幻想を滅茶々々に打  
こわして大中の昔の姿がどうしてもピツタリと來ない。だが  
僕には共に昔を語り得る唯一つの友が残こされて居る筈だ。  
日清戦争の講和記念に植ゑた松がそれだ。池永(興彦)先生達  
が柞原の山の中で選定して、皆で大八車を曳いて迎へ行つた  
あの小松も今は定めし亭々として天を摩する様に成つて居る

だろう。唯之に逢つて心ゆくまでに愛撫したいのが此の日母  
校を訪れた最重要な目的で、もあつたのである。だが、松が見  
當らない。確かに此の邊だつたと思ふのだがどうしても見  
付からぬ。生きてあるべき唯一人の「舊友」にも逢へず。尋  
ねあぐんだ末に悄然として正門を出て行つた僕の姿は世にも  
淋しいものであつたに相違無い。

あとで藤本(恕一郎)から聞けばあの松は疾の昔に伐り倒ほ  
されたのだそうだ。記念樹にまで手を出す程だから餘程材木  
拂底の年だつたに相違無いが洵に惜しい事だ。鳥潟(隆三)が  
前に同じ失望の苦杯を嘗めさせられた話や、亡き野上(菊太  
郎)が火の様に成つて憤つたと云ふ話も其の時聞いた、野上  
の憤るのも尤の次第、鳥潟は植樹式の時に四年の總代として  
祝辭を讀んだ、かゝる場合戦捷の餘威を美辭麗句に盛ると云  
つた様な、あり來りの祝辭の型を破つて、淡々水の如き「松  
よ、なれは」と云ふあの名文を讀み出して、並居る三百の生  
徒の度膽を抜いた鳥潟としては、深い因縁を持つ記念樹丈け  
に其の失望も亦一入だつたらうと思はれる。

(七)

逝く水の岸に立ちて靜に觀すれば晝夜をわかたざる「時」  
の力は彼の昂奮も此の哀樂も流れに漂ふ泡沫の如く洗ひ去り  
て限り無き追憶も今將四十年の昔となりぬ。

純眞の心と感激の情と、それは中學時代の若人のみが涵り得  
る絶對境にはあらざるか。偽多き浮世の波にもまれつゝ。數  
ふれば幾夜枕に通ひけん少年の日の懐かしき夢よ。臂を把り  
て語るは同窓の友。手を携へて馳驅するは上野ヶ丘。耳に聽  
く松籟は、必松坂社頭の梢に起り、目に見る野の花は常に寶  
戒寺畔の叢に咲く。  
忽として白髮の我に還へる覺めての後の淋しさを思へば我  
を抱く美はしの夢の、嗚呼、願ふらくは永久に覺めざれとこ  
そ。

大中時代と器械體操

九期 廣島女專校長 柴山 槐郎

僕は明治二十五年九月入學、同卅年三月卒業、大中第九回  
の卒業生である。卒業と同時に現在の柴山姓に變つたが、在  
學中は淵野で通つてゐた。一年以上級に僕の實兄で淵野旭子(鹿  
兒島高農名譽教授)が居た。僕は附屬小學の出身で、前年  
に高等科三年から(當時は尋常科四年、高等科四年であつた)  
大勢で受験したが、藤田精一君一人合格して他は皆失敗し  
た。

その翌年の廿五年から採用人員が倍加せられて八十名になつた。受験科目は英漢數と理科が主であつた。校長は伊達行平氏試験の時によく不正を發く、兼崎といふ坊主頭の歴史の先生、數田傳吾といふ算術の先生、元日出藩の儒者石川聰弘氏なども居た。習字は「山間之明月湖上之清風」これを眞行書に書けといふのであつた。入學試験の結果は十五番で合格した。僕の隣席が松尾百サシ(後に商船學校に轉)で板井、柴田、渡邊有利サンなど皆僕より上席であつた。

其頃の太分中學は今の縣立高女の敷地内寄宿舎のある邊であつて正門が縣廳通りにあつた。正門を入ると右手に寄宿舎あり左手に平屋建の五學級の教室があり正門の眞正面に雨天體操場その左に又寄宿舎があつて、その中間の二百坪の空地があつて其處に鞦韆や器械體操が並んでゐた。僕は附屬出身の關係と先輩知人の多かつた、め六回以後の先輩は大概覺えてゐる。

大中を去つて廿三年目大正八年の十二月に太分中學校長を拜命して、久し振りで母校の校門を入つた時、正面校舎は依然として昔の儘であるが、四隣の松杉は森々と生ひ茂つてスク／＼と伸びた母校の姿を眺めて、全く感慨に耐へないものがあつた。着任の翌日、園田書記に九回頃の成績表を出してくれと頼んで面喰はせた。一時間程して塵だらけの表を持つて來た。母校に行つて昔日の成績表を見る。誰かの小説にあ

つたと思ふが、人は皆このやうな氣持を持つてゐるものと思ふ。

〔入學當初、九十名許りあつたクラス、之が四年の始めに中津分校から廿名ばかりの生徒を入れて、卒業の際は五十餘名となつて居た。中途退學も可成り多かつた時代である。缺席課の一番多いのが板井勘兵衛君で百何回今時なら出席日數二分の一に充たざる廢で會議者である、次に僕で八十回許りには全く恐縮した。成績表には武田校長の印やら、尾田、境野、印牧、峰原、鶴などの認印が捺印してあるのも懐しかつた。〕

大中校長時代に就て腦裡に残るものは澤山あるが、特に忘れられないものに器械體操がある。當時陸上競技擡頭時代で猫も杓子も百米だ何だと騒いでゐた時、大中の器械體操は斷然群を抜いて光つてゐた。全國の中學校中屈指のものであると思つた。形式に就ては尙改良すべき點が澤山あるが質と量とでは或は第一ではあるまいと思つた。そこで僕は或時修身の時間に、大中器械體操草創について話したことがある。大中の器械體操の先驅をなすものは、僕等の時代、僕等のクラスであつたのである。一つこれについて話してみよう。

僕が附屬の生徒時代——夫れは明治廿三、四年の頃である。勿論今日のやうに野球や庭球があつたでなし、劍道、柔道

は有りはあつたが劍術、柔術と呼ばれてそれも今のやうに流行してゐなかつた。そこで新奇な可なり冒險的である(?)器械體操は、實に子供心を魅するに十分であつた。當時附屬は今の縣立高女の所でその左が師範であつた。師範の器械體操は、仲屋の前に少し許り空地のあつたところに鐵棒と柵があり、縣廳通り正面正門の左側に木馬があつた。僕は其處へ能くやりに行つたものだ。「器械體操袖が引かゝるツウニー」といふ唄があつたほど、毎日袖を千切つて歸つて母に叱られたものである。教生の北村先生が、木馬の縦飛びで倒立中抜けの放れ業など子供心に鬼神の妙技とさへ思つた。

大中入學後、器械體操を一年生でやるものは、附屬出身の僕等許りで郡部から來た者は一名もなかつた。井上伊一君、僕などが斷然光つてゐた。僕は井上君と附屬以來竹馬の友であつた。斷つて置くが僕等は一番年少者で體軀も倭少、體操の時の背順で井上君がビリ、僕が尻から二番目であつた。一年の時、時の知事か誰かの巡視があつて、生徒の器械體操をやつて見せたことがあつた。桐田、富米野、小野、太田等の先輩が出た。僕の兄も選手の中にゐた。そのうちに竹内某といふ三年の無法者が居た。これが鐵棒に腰かけて、「後にそりて脚かけ轉廻」で降りて觀衆をアツと云はせた。

體操教師は塚本、石井といふ兩先生で有つた。石井先生は生徒間に、「呑天」といふ綽名で通つてゐたビール樽見たやう

な人であつた。二年になると伊達校長が去り新校長金子銻太郎先生が見へた新進氣鋭の士で職員の大更迭が行はれた、我が體操教師僕の所謂大中器械體操の創立者平川袈裟吉先生が來任されたのも其時の事である。何でも戸山學校からきたのださうで、この人を迎へて大中の器械體操は全く一變した。氏の水際立つた妙技は、木馬に柵に鐵棒に、全く一新紀元を劃したものであつた。フォームが美しかつた。一例をとると柵の倒立の如き、米つきバツタのやうに何度も／＼も繰返して漸く起上つてゐたものが、たつた一回でピツタリと倒立する。

その要領を先生の口調をかりて云ふと、「そも／＼倒立の要領は、第一が首、次に肩、腕の關接と兩手の指先で調節を計らねばならぬ。」又、一度で倒立して、左右何れの轉廻でも思ふ存分に右、又は左手を振り出して體が柵とすれ／＼に平行して落ちるやうに、降りたものだ。以前のやうな棒倒しの如きねぢれた下り方とは違つて、實に綺麗なフォームであつた。木馬については、横共に遠くで踏切つて、そして足を伸ばして開脚、閉脚とも自由に跳ばれた。殊に先生の木馬のたて跳びには何とも云へない妙味があつた。

僕は鐵棒が一番得意だつた。大車輪、逆車輪、大和魂からいろ／＼の轉廻やら、殆ど先生の妙技を殘らず受け繼いだと云つてもいい。井上伊一君は跳躍がよかつた。僕のクラスは井上君と二人でもつたやうなものであつた。

三年の時に上野の新校舎が出来た。建築は當時全國一、器械體操場も、木馬、鐵棒、棚、平行棒といふ順序で、南側の寄宿舎の裏手にズラリと出来揃つた。落成式當日には華々しく此の大中獨特の妙技を一般の觀覽に供したものだその時の選手中一級上の安田碩君が井上君と共に木馬に妙技を振つたのを覚えてゐる。

此の平川斐吉と云ふ先生は惜しい事に其後間もなく出征されて臺灣で戦死された相だ。僕は僅の間であつたが先生から受けた印象極めて深いものがある。

僕の器械體操は五高に入つて趣味が弓に變つたため、全く忘れた様に遠のいてしまつた。然し今日迄の健康は全くこのお蔭である事を信じてゐる。幸に由緒あるこの大中特有の妙技——器械體操を培つて根を枯らさぬ様に後進諸君に御願する。

## 同級親睦旅行記

十期 三和銀行頭取 中根 貞彦

(筆者の同意を得て明治三十年の日誌より寫記)

二月廿六日の一部(旅行前記)

印牧先生のいはるゝ様、明日より四年級親睦旅行を行ふことに付、午後の課業を休まんと校長に願ひ出でしに、快く承諾せられたり。就ては其人員の多寡によりては、又取消をなさざるべからずとおもへば、其人數を知りたしといふに四十人計にして病人の外悉く従行すと答ふ。

二月廿七日 晴天、夜に入りて曇る、戸次泊。

今日は午後可及的迅速に發足せんと決定しぬ。朝、業の始まる以前に、藤本氏と印牧先生に召喚せらる、行くに「おのれは最初の時間を終りて歸宅し旅装して案内者と共に午後富岡の橋端に待たむ」といふ。

宿りの爲先發せしものは、大津、吉田(秀)、姫野、三浦、龜井の五君なりき。一時前七分、橋端に揃ひしもの。

印牧先生、田村守衛、田仲忠良、鈴木四朗、梅田三郎、安東多嘉喜、吉田茂、木戸三郎、小幡利彦、小野喜作、馬場岬、小川達也、植山八郎、桑折直、吉村秀作、齋藤一清、野村靜夫、建部健之助、野依辰治、熊谷道直、渡邊純治、村上安治、藤本恕一郎、田口眞二、城内衛、佐野透、司城元義、志村朋來、田北團九郎、荻本治三郎、柳井幸弘、及餘。案内者、園田唐吉、總計四拾人。

田北君の一隊例によりて落付き給ひ、途中に追つかる。大分河原にては、豊府、瀧尾、二村聯合の消防演習あり。十三

組に分れポンプの數十七を有すといふ。同じさましたる壯なる若者の先を争ひて立働くさまいとたのもし。

一時前七分こゝを出發して、戸次に向ふ。先生の發議にて近きわたりの山にて、一狩試みむといふに、左に折れて錨山を狩らむとす。よき所を探びて、綱を張れば、吉村君衆を勵まして、兎の居るを見たり。必ず獲べし。といふに嘘言と思ひしに、そはまことなりけり。安東君の携えたる石炭ガラ、グワン／＼となりひゞけば、三十餘名の吶喊の聲と共に一匹の兎は虚空に擲られたり。うれしくて手の舞ひ足の踏む所をしらず、しばしはよろこびの聲どよめきたれり。先生のとくより用意し給ひたる綱にて、その四足を縛り、意氣揚々と肩にして下るさま、たとへんやうなし。「今日はいとよき吉相なり。」此さまにて行かば五匹を得んことはいとたやすき事なり、「などいひあへり。盛岡山にて大きやかなる山を追ふて獲ず。追ふこと二度なりしもまた獲る所なく。今日は日も西に沈まむとすれば行く手を急ぎて、餘力を養はばや、といふものさへ出来たり。されど日暮に近きも、まだ遲きにあらす。いかで今一山二山追ひ見ばや、と案内者に従ひて行く。晴れわたる空、仰げばいつしかに曇りて、夕陽の斜に村落を射りたるいとめづらかなる心地してなむ。

疲れたる追人、幾人ありとも甲斐あらむや、二山を追ひしも遂に無効に屬せしかば今はとて、夕闇に包まれたる山の細

路辿りつめ薄暮頃白瀧の波に達す。

七時頃戸次驛常春樓に着すれば先發隊の諸君子等まちわび給ひ、周旋至らざるなし。幾度か道に立出でとまちしものを、影さへ見えねばそれのみ心懸れり、などいふ。初めに一匹を得しかば、今一つをと、籠を得て蜀を望みかくも、おそなはりつるなり、なごうれしげにこたふ。すべてたのしきさまならぬはなし。草鞋解きて尻打据えつゝ足立たぬといふ弱武者あらば、かゝる時には大利ありとはきたる靴ぬぐとひとしく足あらはぬをほこりがほに、かけ上る男兒あり。坐につけば大鉢を擁して、かしこに四人、こゝに六人と打群れて語るときけば種痘してこの汚れたるからだを湯に入られぬをかこつあり。腹には何物もなし。何よりも夕食こそまづほしけれ、と叫ぶものあり。あすは五匹を獲べしとはやり打祝ふもあり。明日は雨なるべし、いかに憎き天よとつぶやくもあり。すべて何れに向ふも、笑顔ならざるはなし、いともよき親睦會なるかも。

膳運ばるれば飯なきに茶碗打たゞく子供らしき人もあり、いふとはなくてはやく持て來よがしに、給仕女を打睨らむもあり。山の如く盛りたる飯粒も忽ちに影なく、かなたこなたより突き出す碗は雷の後にふり來る篠つく雨の如く戰場にすきまなく飛び來る矢の如く、給仕女の忙はしきことたとへんやうなし。年の數に越えたり、といふあれば、今日の里數の